

巻頭言

『湘南科学史懇話会通信』第 14 号を刊行します。

今号は、いいだ・もも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店、2005 年 11 月 30 日）をめぐる「特集号」です。戦前・戦後・現在と、一貫して政治思想の大転換を迫る執筆活動の最前線で活躍されている思想家のいいだ・ももさん（藤沢市在住）が、これまで膨大に連発されてきた作品と同様、今回もまた、全 2655 頁もの大著を刊行されました。本書は既刊の書物の内容とは大きく趣を変え、主に、旧来の古典古代ギリシア哲学および古典古代東洋哲学を詳細に分析・考察・解体・溶融し、長い間の執筆と発言の体験からにじみ出る〈念力〉を縦横無尽に駆使し、独自に東西の古典古代哲学を再構築したものです。結論的に表現すれば、〈八千年の人類文明史〉の思想的構築的作品です。

わたしは、本書が刊行されるやいなや、心底から覚悟を決めて本書の読書に専念・集中することにした。しかし、その読書の営みと理解のほどは「至難の業」であり、全生活と全精神を集中せざるを得ませんでした。その読書途上、わたしごときひとりの〈読書力〉だけでは、とうてい納得・理解・感得できるものではないと思うようになりました。そこで構想したのが、著者とパネラーを含む多数の方々に登場・発言していただき、参加者とともに、大いに討論しつつ理解を深めようと考えました。こうして実現したのが、この「連続懇談」（全 4 回）です。当初、このような全くわたくし個人の趣旨と目的を、著者にお伝えをお願いをしたところ、著者はすぐさまに快諾されました。この快諾によって、わたくしのその後、一年間の全世活のすべてが決まりました。〈一瞬〉の出来事でした。

毎回のパネラーの選定にあたっては、かなり熟考しましたが、結果的には、片桐薫さん（政治学者）、針生一郎さん（美術評論家）、近藤節也さん（映画監督、作家）、三木亘さん（イスラム学者）、なだ・いなださん（作家、精神科医）、そして金子務さん（科学史家）の 6 名の方々に御願いました。これらの方々もまた、ほとんど快諾してくださったが、よくもわたくしの無理難題を受けてくださったものと今になって思います。何しろ、あの厩大な「枕本」を読んで所感を聞きたい、というのですから、大変な仕事であったと思います。詳細は本『通信』で明らかですが、それぞれの方々がそれぞれ独自の読み方・所感をお話してくださいました。たいへんに興味尽きない内容となりました。

この「連続懇談」（全 4 回）には、多数の一般の参加者と発言者がありました（毎回、40 名強）。地元の神奈川県湘南地域を始め、関東周辺、遠くは名古屋、新潟から、かけつ

けてくださった方もおられます。これらの方々の参加なくして「連続懇談」は成立しませんでした。また、当日、発言する機会を失った方々からも後日、激励や所感をいただきましたことを、特記しておきたいと思います。

最後に、この「連続懇談」に参加されたすべての方々の発言内容は、忠実に再現しました。じっくりとお読みいただければ幸いです。知的思想の内容は、元来、秘密・密室の産物であってはいけなし、すべてを公開のもとで論じなければなりません。読者各位の御所感と御支援をいただければ幸いです。(猪野修治)

目次

巻頭言	001
今日における主体の危機と主体再生の展望について メルロ・ポンティ、ミッシェル・フーコーの提起	003
古典古代ギリシア文明とは何であったのか？ その人類文明史的位位置価	044
地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか？ 線文字B文書の発見によるクレタ島文化とギリシア文化の連続化 (それによる人類文明の地中海世界史的連続性)	091
古代ローマ世界帝国の興隆と没落 ギボンの総括以来の〈古代ローマ興亡論〉の西洋世界史的意味 今日のパクス・アメリカナの前途は？	145
編集後記	187

第 45 回*2006 年 5 月 7 日

パネラー：片桐薫

針生一郎

リプライ講演：いいだもも

今日における主体の危機と主体再生の展望について
—メルロ・ポンティ、ミッシェル・フーコーの提起

はじめに

猪野修治 連休の最後の日に、皆さん、遠い所をありがとうございました。そもそも湘南科学史懇話会とはどういう会なのか、何者がやっているのかということ、ちょっと申し上げます。

この会は、私に関心のある講師の方をお呼びして勉強したい、と同時に地元の藤沢市民の皆さんとともに勉強したいという思いから始めました。1998 年 5 月に第 1 回目の懇話会を開きまして、今回で 45 回目、9 年目に入ります。これまでやってこられたのも皆さんのご支援のおかげです。とかく東京がメインの舞台になりがちですけれども、ここ藤沢を根拠地として皆さんとともに学問や政治運動を展開することにこだわっていきたくております。

いいださんのお名前は皆さんご存じかと思えます。カッシーラーというドイツのユダヤ系の哲学者は、ナチスの迫害を逃れて亡命し、晩年はニューヨークに行きそこで亡くなりましたが、カッシーラーがニューヨークにいるというだけで、アメリカの哲学界が緊張したという有名な話がありますが、私は大和市に住んでおまして、藤沢市周辺をうろうろしておりますけれども、常に藤沢にはいいだももがいるということを意識していました。遠い存在でしたが、私がいいださんと初めてお会いしたのは 1972 年、物理学者の梅林宏道さんがやっておられた米軍基地反対闘争でだったと思います。そのころ一度講演をお聞きしたことがございますが、その後ご縁があって、数年前にいいださんに講演をお願いいたしました。

私自身はアカデミズム批判、つまり大学人批判をやっておまして、2、3 年前からギリシアの哲学者プラトンの書物を素人なりに読んでいたのですが、その矢先にいいださんの“枕本”3 巻が刊行されました。在野の一思想家が、ギリシア哲学に遡って 21 世紀をどう見るかという壮大な試みをされておまして、それで私はこの本をテキストにするしかないと思ひ立ち、このところずっと苦しみの読書が続けていたのですが、皆さんご承知ようにこれはそんなに簡単に読めるものではございません。

そうこうするうち、作家の入江曜子さんが組織されて、2 月 26 日に江ノ島の岩本楼で地

元の方々を中心に「出版を祝う会」が開かれました。そこに出席させていただいた折りにこの本の読書会をしようと提案いたしまして、これは4回くらいやらないとわからないなあと思ひまして、それでこの連続懇談会を設けたしだいです。たいへん恐縮ですけれども、ぜひ皆さん4回ともご参加いただきたいと思います。この本はたいへん難しいので、いいださんの思想を平たくわかりやすくお聞きしたいというのが私の本音でして、知のあり方を一般の人にもっと解放してほしいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

始める前にもうひとつ、ここ藤沢の地でステラ研究所を主催しておられる新戸雅章さんから事務的な連絡をお願ひいたします。

新戸雅章 新戸と申します。お配りしたチラシをご覧になっていただければおわかりになると思ひますので、のちほど懇談会のときにでもお話しさせていただきます。

猪野 私がこの連続懇談会をやるきっかけを実質的につくってくださった入江先生、一言お願ひいたします。

入江曜子 入江曜子です。先ほど（「出版を祝う会」を）私が主催したとおっしゃいましたが、実は私はこの会では雇われマダムでして、主催なさったのは「釣飲会」といって、片瀬江ノ島で釣りをして飲むというグループです。いいださんもそのメンバーの一人です。その会の人たちが、この本は（難しくて）とても読めないの、いいださんを中心に楽しみながらその読み方のノウハウをうかがおうではないかというところから、どうも始まったようです。メンバーがみな男性なものですから、私が司会を仰せつかってしまいました。

最初はそんなに大きな会になるとは思わなかったんですが、当日は雨と嵐のたいへんな日だったにもかかわらず、86人という大勢の方たちがお集まりになりました。これはやはりいいださんの人脈の広さによるもので、たくさんの人にお話をお聞きしたいので、20人くらいの方に5分ずつスピーチをお願いしたのですが、それはいいださんに対する多種多様な期待の表明だったと思ひます。暗く出先の見えない、思想にしても政治にしてもどこへ漂流してしまうのかわからない世の中に、1本の灯台として、私のイメージとしては江ノ島の灯台なのですが、江ノ島の灯台の光が日本の暗黒を照らす新しい光になる、と同時に、いいださんが発するこの大著が持っている光だけではなくて、それに私たち一人一人がそれぞれに持っている光を添えていくことで、世界を変える原動力になりはしないかという、たいへん厚かましくもおこがましい期待を込めながらの盛会でございました。

これから4回にわたって、この有意義な研究会がある。私も毎回出席して勉強させていただきたいと思ひます。僭越ですが一言申し上げました。

猪野 ありがとうございます。今日はまず片桐薫さんと針生一郎さんにこの本に関するコメントをいただきたいと思います。ご存知のように片桐さんはグラムシ研究者であり、藤沢の図書館にも勤務され地元にも縁のある方です。針生さんは、文学・美術評論、新日本文学の編集長とさまざまなご活躍をされております。お二人に 30 分ずつ講演していただいて、そのあといいださんからリプライ講演を 90 分していただく予定です。最後に会場からの発言と討論とさせていただきます。

いいだも『〈主体〉の世界遍歴』を読んで
片桐薫

1 年齢、仕事、気概

最近、自分の年齢のせいもあってか、高齢で目立った仕事をした人々とその気概が、たいそう気になるようになりました。いいださんたちの機関紙『未来』への寄稿「いいだも『〈主体〉の世界遍歴』一私はこう読む」でもふれましたが、幕末から明治・大正を生きた最後の文人画家富岡鉄齋は、当時の「知識人」のほとんどが西洋文明へとなびいていくなかで、それに見向きすることなく、漢学や国学を学んで学者として生涯（88 歳）をおくりました。私の興味をひくのは画家としての鉄齋で、南画や大和絵などを広く吸収し、また書もよくしました。それは 60 歳頃から目立ちはじめ、70 歳半ばにはその線はいつそう力強さをまし、80 歳代の最晩年になってもその筆勢は衰えるどころか、ますますさえ、画境を一段と深めていき、「万巻の書を読み、千里の道を行くは、古来文人画家の理想なり」と喝破しました。

今日はもうひとり、「赤富士」や「神奈川冲浪裏」などで知られる江戸後期の浮世絵画家、葛飾北斎にふれたいと思います。彼の生涯は刻苦精励の連続で、73 歳の「富岳三六景」で名声を決定的なものとししました。それは広く親しまれていた富士をまったく新しい視角でとらえ、従来の浮世絵の江戸という枠を超える芸術でした。ところが、それを追いかけるように 37 歳年下の安藤広重が「東海道五十三次」を発表し、浮世絵による風景画の競争時代が始まりました。しかし北斎の造形的な厳しい景観に対し、広重の詩的情趣に満ちた景観に人気が集まり、北斎は心中おだやかでなかったと推察します。それ以上に北斎の心を満していなかったのは、浮世絵における版元での絵師・彫り師・摺り師による製作過程や限定された大きさの画面でした。「富岳百景」を発表した後、ようやく鳥獣の骨格を悟るようになったと自認する頃、こう書いています。

「八十歳にして益々進み、九十歳にしてなおその奥義を極め、一百歳にして正に神妙ならんか、百有十歳にしては一点一画生くるが如くあらん。願わくば長寿の君子、予が言の妄ならざるを見給うべし」（76 歳）

彼はその後、肉筆画による天井画や屏風絵に新境地を開拓していきました。その多くは

海外に流出し、とくにボストン美術館に収蔵されて、長い間、門外不出とされてきました。その価値がこの十年ほどの調査で明らかになり、目下、神戸市立博物館で公開されています。なかでも北斎の「鳳凰図屏風」は、金を主体とした背景に赤、緑、青の鮮やかな鳳凰が豪快に屏風から飛び立たんばかりに描かれており、先の彼の言葉はけっしてはったりではなかったことを示しています。

私がここで申し上げたいのは、年老いてから大きな仕事をする人は、いずれも余人の及ばない「気概」があったということで、大著をものされた、いいださんの「気概」を今回の「連続懇談会」でうかがうことができるのを楽しみにしています。

2 歴史を書くということ＝「歴史とはつねに現代である」

先に申しました『未来』への寄稿でも、何人かの歴史家を並べましたが、ここでは、司馬遷『史記』、N.マキアヴェッリ『ローマ史論』『君主論』、そしていいださんの『〈主体〉の世界遍歴』を考えてみたいと思います。

ご承知のように、司馬遷（前145～86頃）は前漢時代の人で、歴史家である父の遺志を継いで通史の編纂に従事していました。たまたま漢の将軍李陵が匈奴と戦って敗れ、捕虜となる事件が起きました。李陵の処分を決める席上、李一家皆殺しの意見が大勢を占めるなか、独り司馬遷は将軍の忠節と勇猛をたたえ弁護したため、武帝の怒りをかけて宮刑に処せられ、投獄されたのです。数年後、出獄、復官し、宮刑という辱めにも屈せず、『史記』130巻を完成しました。そこで紀伝体という新しい歴史記述の方法（列伝）、つまり事実の正確な検討を通じた総合的な価値判断による人間の歴史学を確立しました。いいださんもこの本で書いているように、司馬遷にとって「“史”とは志であり、詩であり、誌（記録）」であり、歴史に対する情熱だったのです。

ご承知のように、マキアヴェッリ（1469～1527）は後期ルネサンスの人で、フィレンツェ共和政庁の書記官に採用され、その後、外交問題や軍事を取り扱う「10人委員会」の秘書官として活躍しました。しかしその共和政体が倒れ、彼は14年間勤めた地位を免職になり、さらに新体制への陰謀のかどで投獄、拷問のすえ釈放され、フィレンツェ郊外の山荘に家族とともに閉じこもることとなりました。以後、かねてから感銘を受けていた古代ローマの歴史家ティトウ・リヴィウス『ローマ史』（140巻）を読み、ローマ共和政時代の諸事実と自ら経験したルネサンスの政治とを重ね合わせながら、『ローマ史論（政略論）』の著作に専念し、またそれを中断して『君主論』などを書きました。それは16世紀の天文学におけるガリレイと同様、政治を教えられたとおりの理想像によってではなく、あるがままの姿に描くことを選びました。つまり倫理的な政治観を打破して、現実的な近代政治思想を確立したのです。

さて、いいだもさんの『〈主体〉の世界遍歴』の特徴です。私はごく大雑把に以下のように読みました。①人類文明史・人類精神史の根本的吟味という基本路線にたって、へー

ゲルのヨーロッパ中心主義史観の呪縛から脱却し、マルクスの世界史論に欠けていたものを補うことによって、歴史の複合的・重層的な場における主体的胎動をさぐること。②現代哲学の核心的課題としての言語批判＝言語哲学を、21世紀へと向かう現代思想の主眼として提起し、しかもそこでヴィトゲンシュタイン（永遠の沈黙）vsメルロ・ポンティ（見えざる世界の探求）の対比を主軸に、現代哲学の根底にあるものをさぐること。しかもヴィトゲンシュタインの「沈黙」と釈迦牟尼の「黙寂」、および「フラクタルな混沌」と「荘子の混沌」との対比によって、東西文明の比較・対照することであり、その視線は、東大寺正倉院にまでおよぶ。

もちろん、この三者の歴史著述における対象および目標は異なりますが、共通するのは、現実の政治において不遇だったことであり、それをバネにして「仕事」に取り組み、そして古代の歴史に学びながら、それぞれの時代状況への示唆を学び取ろうとしている点だと考えます。

3 歴史と人間における人間精神の主体的能動性の尊重

先に見たマキアヴェッリ『君主論』『ローマ史論』には、〈fortunato（宿命、運）〉〈virtù（力量、徳）〉という言葉がひんばんに登場しますが、それは彼の歴史観・政治観を表現する二項式となっています。つまり、歴史というものは神の意に左右されるとされてきたキリスト教的史観を捨てて、君主に成功の機会を与えたり奪ったりするのは、「運命」によることが多いと見たのです。同時に、「運命」そのものも人間の習慣や意思や徳に左右されうるとして、「神聖史観」を世俗的歴史のレベルに引き下げて考え、古代ギリシア人が信じていたような絶対的運命を否定して、運命を左右するのは人間の意思、能力だと信じました。

こうした近代政治思想のいわば開祖であるマキアヴェッリを、現代政治思想の立場からとらえたのが、アントニオ・グラムシでした。彼はマキアヴェッリの〈運命、宿命〉と〈力量、徳〉といった言葉を、〈知の悲観主義〉と〈意志の楽観主義〉という表現で置き換えました。グラムシにとって、獄中における二重・三重の孤独の重圧と絶望的に悪化していく健康状態に耐えながら、自らの思想的・理論的錬成を続けることは、強靱な意思の力によってはじめて可能だったのです。「客観的に与えられているものを主観的たらしめること」を目指していた彼の思想と行動の最終目標は、「意志の楽観主義」、つまり「主体の奪還」でした。

いいださんはこの本で、グラムシの「知の悲観主義、意志の楽観主義」を念頭に、〈主体〉の問題と関連して「認識のペシミズムと行動のオプティミズム」（21頁）と表現しています。しかも注目したいのは、本書の書き出しで、「21世紀は希望の世紀か？ しかり、希望の世紀だ。21世紀は希望の世紀でなければならない。私たちがそうしなければならない」と強調していることです。いいださんは、しばしば誤って指摘されるような「世紀末

論者」ではないことを、この表現で、しかもこの大著で示している、と私は考えます。

以上のような三者の表現を、私の言葉でいいかえると、「歴史は線路の上を走るように、あらかじめ決められた未来に向かって進むわけではない。そこには人間の力が入り込む余地もまたある」ということであり、それは人間精神の主体的能動性の問題だと考えます。

最後に、我田引水的で恐縮ですが、質問します。先に述べたように、いいさんは「ヴィトゲンシュタイン（永遠の沈黙）vs メルロ・ポンティ（見えざる世界の探求）」という構図で論じていますが、ヴィトゲンシュタインとズラッファおよびグラムシとの関係については「第6章」の「3 転換の禅機—ズラッファ」と「4 ピエロ・ズラッファとアントニオ・グラムシ」で言及されるだけで、詳しくは『ポスト・モダン思想の解説』（社会評論社）に譲っています。

そうした上に、質問の第一は、P.ズラッファのヴィトゲンシュタインへの協力をどう見るかという問題です。ケンブリッジ大学で、9歳上の哲学者ヴィトゲンシュタインと経済学者ズラッファを結びつけたものは、ともに招聘外国人教員で、ともにユダヤ系の血をひく関係だったと推定します。しかも、ヴィトゲンシュタインの『論稿』を題材に毎週木曜日に長期間（1946年まで）にわたって論議を交わしただけでなく、1938年、ナチ・ドイツがヴィトゲンシュタインの母国オーストリアを併合し、ヒトラーがウィーンに凱旋示威行進したとき、帰国すべきかどうかで迷った政治音痴のヴィトゲンシュタインから、助言を求められたズラッファは、きわめて適切な助言をしています。いいさんはこうした事実をどう見るか、うかがいたい。

もう一つの質問は、グラムシの最後の「ノート」29「文法研究入門のための覚え書き」に関連して、です。この「ノート」29には、短い数本の覚え書きがふくまれているが、それは、名指しこそしていないが、ズラッファを介して聞いたグラムシのヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」＝「独我論」への批判だったというのが、わたしの〈仮説〉です。つまりグラムシにとって言語問題は、近代国家成立との不可分な関係においてとらえられており、したがって政治およびヘゲモニーとの関わりでとらえられており、それは彼の知識人問題への発想と同様なものだったからです。それと関連していいさんのお考えをうかがいたいのは、こうしたグラムシの言語論とメルロ・ポンティその他の反ヴィトゲンシュタイン的立場の諸々の言語論との関係をどう見るかという点です。グラムシの言語論には、ノーム・チョムスキーの「生成文法」やスティーブン・ピンカー『言語を生み出す本能』に見られるような、人間の無意識な領域までには論じいたっていないように、思われるので、その点もいいさんのお考えをうかがいたい。

* * *

猪野 どうもありがとうございました。グラムシ研究者としての一貫したこれまでの作品に裏付けられたコメントだと思います。私が今まで目にしたこの本の書評では、第I巻のヴィトゲンシュタインに対するいいださんの痛烈な批判と、メルロ・ポンティ、フッサールについてのお話が大部分でしたけれども、片桐さんのグラムシ研究の視点からその3つに関する質問は非常に的確で、いいださんのリプライ講演が楽しみです。

いいださんたちが出しております『未来』という機関紙に、片桐さんが「『〈主体〉の世界遍歴』を私はこう読む」というコメントを書いております。ここに持ってきていますので、この前の「出版を祝う会」に参加されなかった方は、ぜひお読みください。

では、針生さん、待たせしました。どうぞ、よろしく申し上げます。

超枕本は世界の哲学思想の見取り図

針生一郎

1 ものすごい筆力

いいださんのこの本は、80歳になった記念としてライフワークをまとめられたということですが、「野間宏の会」というのがありまして、私はこの会の幹事をやっております。その会の相談があって、去年の12月に本の発行元である藤原書店に集まった折りに、藤原良雄社長に聞いたんですね。いいださんのあの歴大な本を、出版社としてはどういうメリットがあって出したのか、どういう層に読ませようと思うのかと。

なにしろ藤原書店というのは、野間宏が『世界』に連載した狭山裁判の記事を、裁判を逐一批判したもので難解で長いせいもあってか、岩波書店がなかなか出さないでいたのを引き受けて、箱入りで3巻本で出して（『完本 狭山裁判』）たちまち売り切ったんです。同じ野間宏の『作家の戦中日記』も売り切った。少人数の出版社ですので、かなり過酷な労働を強いていると思いますけれど（笑）、とにかく売り切るんですよ。そこが非常にえらい。

それで、はっきりとした答えはなかったんですが、社長の話では、いいださんから本の構想を聞いて、かなり読み応えのあるものになるだろうと思って承諾したら、3ヶ月後に大きなダンボール箱いっぱい原稿が届いて、あれにはびっくりしました、と（笑）。あれだけのものを3ヶ月で書いたのか、と。

私も前から藤原書店からそろそろ書き下ろしをと頼まれていたんですが、いいださんの本の話のおかげでそのテーマが決まりました。若干ヴィトゲンシュタインなんかにも関係があります。ウィーンとミュンヘンが源流らしいのですが、スイス東南端のマジョレー湖の北岸に19世紀末から20世紀前半にかけて、資本主義の商品として爛熟した文化を否定

して対抗文化、つまり自然と最も単純な生活の中からそれと直結した文化・芸術をつくりだすことを唱えて、社会主義者、アナーキスト、ユートピアン、オカルティスト、ヌーディスト、フェミニスト、各種の文学者、芸術家が集まって、ヨーロッパで一番大きなコロニーができた。

当時そういうコロニーがいくつもあった。私はその歴史を 30 年くらい調べ上げてきたんですが、それをいいださんの本に関する質問のついでに、実はこういうテーマがあるんだがといたら、ぜひやりましょう、と。で、どのくらいで書けるのかと藤原良男さんが聞くから、いいださんみたいな筆力はないから、最低半年かかるなあ。それからもう半年経ちそうなんですけれども、まだ買って読んでなかった原書の文献を読んでいる状態で、序章だけ書きました。筆力では段違いの差があるなあ、と思ったしだいです。

2 いいださんの怪物性

いいだももを、“怪物”と感じるのは私だけじゃないと思うのですが、その怪物感というのはどこから来るのか。今までのいいださんとの付き合いを少し振り返ってみます。

いいだももという人と知り合ったのは、敗戦直後、1948 年です。花田清輝、岡本太郎、野間宏、佐々木基一らがやっていた「夜の会」というのがありまして、月に 2 回定例会があつて、それに参加していた。私は東北大学で国文学をやったんですが、大学として一番だし親にとってもよいのは、東大の大学院に入ることだといって、それを口実に東京に出てきた。下宿が東中野で、「夜の会」の会場だった喫茶店「モナミ」に近いので、常連として出ているうちに、安部公房、関根弘、中田耕治、それから美術家がたくさんいましたけれども、そういう連中と知り合つて、彼ら若手常連たちと一緒に「世紀の会」というのをつくった。

東北大学の一年先輩で小川徹という人がいまして、『映画芸術』という雑誌に映画評を書いている、のちにその経営者になった人ですが、彼があるとき、同じ年頃で『世代』という雑誌を出しているグループがあるから行ってみないかと、その雑誌を出している目黒書店という出版社に私を連れていきました。そこで会ったのが最初だと思います。

そのころ、いいださんは盛んに『世代』に書いていたんですが、飯田桃という本名ではなくて、宮本治という、宮本百合子と太宰治を合わせたペンネーム（笑）でした。それを彼自身はマルクス主義とリベラリズムの二正面作戦とか二重戦略といっていました、そういうつもりで付けたんだ、と。

石原裕次郎がスターになって、彼が主演した映画がいくつも封切られて話題を集めていたころ、私を『世代』グループに引き合わせた小川徹が、『映画芸術』の編集者として「石原裕次郎論」を書けと依頼してきた。だけど私は裕次郎の出演した映画なんてひとつも観てない。すると、映画なんて観てなくていいんだ、と（笑）。やっぱり観なくちゃ書けないと断ったんですが、それがいいださんの方に行つたんですね。それを讀むと、彼も裕次

郎の映画をたぶんひとつも観ていないことがわかるんです。石原裕次郎というのは単なる刺身のつまみというか、ダシみたいなもので、だけどそれでも野球でいえばホームランとまでは行かないまでも、ヒットになるような論文を書くわけです。これはどういう才能なんだろうかと、思ったことがあります。

また、新日本文学会が、共産主義には反対じゃないんだけど、共産党が私物化し支配しようとはばかりするから、逆に対立せざるを得ない状況だったときに、いいさんに文化政策の問題について原稿を頼んだことがあります。私は（新日本文学会の）編集委員でしたが、直接頼んだのは武井昭夫だったと思います。そのころいいさんは結核療養中に患者たちの組織をしていて、共産党に入って細胞のキャップをやっていた。それから水戸にも行って、共産党の専従ですかね、梅本克己などの影響を受けながら農民運動にもかなり関わっていた時期でしたが、いいさんは承知したとあって、水戸から東京までの汽車の中で半分くらい書いてしまって、残りを新日本文学会の事務所に来て、いろんな人と雑談しながら書き上げた。30枚くらいで、しかもこちらの注文を全部満たすような、適切な論文でした。これまたどういう才能なんだ、と驚嘆したんですが。

それからだいぶ後になりますが、広島・長崎でアジア文学者広島会議というのをやりました。小田実や伊藤成彦が中心になって組織したものですけれども、私も最初から関わって、寄付金集めや私がアジア・アフリカ文化作家会議で知っていた人たちを呼んだりして協力したのですが。そのときはプロの同時通訳のおばさんたちが5人くらいで通訳してくれたんですが、雑談中に誰の話がいちばん通訳しにくいかと聞いてみると、口々にいいさんだと言うんです。なぜかという、ものすごく観念的、哲学的な言葉から、とつぜん俗談平話に急降下してくる。かと、思うとまた、哲学的なほうに行くと、また降りてくるからだ、と。なるほどそういうものかなと思いました。その点では、今度の本はあまり下世話なほうに降りてこない、思想や論だけを扱っているから、たいへん読みやすいんじゃないでしょうか。

もうひとつ、これは私が『新日本文学』誌が終刊する前に書いたことですが、いま和光大学でカルチュラル・スタディーズやマスコミ論を教えている浅見克彦という人が、当時は北海道大学の助教授か何かで、北海道で彼に会って原稿を頼んだときに聞いた話から思ったことです。

浅見氏がいうには、左翼がよく政府側の情報操作のことをいうけれども、情報操作というのは日本でもアメリカでもあまりない、と。むしろ、イラク戦争の前に、大量破壊兵器を温存しているかどうかの査察をすべきだという国連安保理の決議が何度か出て、実際に査察が行なわれて、その段階でもう、イラクを攻撃していいか、いやもう一度安保理の決議を待って攻撃すべきか、という論議が起こった。つまり、現代のマスコミは情報が何者かによって操作されているというよりも、あれかこれかというゲームの構造を必ず抱え込む。だから情報の操作を批判するだけではすまないんだ、というわけです。

『アホでマヌケなアメリカ白人』という本や「華氏 911」という映画で話題になったマイケル・ムーアという人は、「華氏 911」でゴールデン・ラズベリー賞（ラジー賞）を受賞したときに、受賞者の弁で、「恥を知れブッシュ、恥を知れ」とそれだけいって壇上を降りたというエピソードがありますが、ああいうふうには、ブーイングも起こるけれども拍手もかなりくるといふ計算のもとに、あれかこれかと選んでみようとしてみても、選択肢が足りない。一番肝心の、イラクを攻撃しないという選択肢が、そこには抜けている。ゲームの構造に乗っかって遊ぶような恰好で選ぶ場合には、選択肢そのものが揃っていないので、あれかこれかと選択する行為自体が成り立っていないということを実感しなければならぬ、というのが浅見氏の論、なんです。

それを受けて思いましたのは、情報の操作そのものがなくなったわけではない。例えば拉致問題ひとつとっても、拉致被害者家族の会の前事務局長の蓮池薫さんが、もう北朝鮮に経済制裁をするしかないという方向にもっていかうとしたことは明らかで、それが情報操作だということは歴然としている。浅見氏のいうような、ゲームの構造に乗ったうえで、その選択肢が足りないということを指摘するような批判の仕方ができるのは、わが（新日本文学会の）会員ではいいだ氏くらいしかいないだろうなと思ひました。でも、どうもいいださんについては、根はマルクス主義の公式だから、途中でそれが透けて見えるので白けるという声をあちこちで聞くので、マイケル・ムーアほどにはうまく行かないのかもしれないというようなことを、書いた覚えがあります。

3 マルクス主義とリベラリズムの二正面作戦

本の話にもどしますが、さきほどマルクス主義とリベラリズムの二正面作戦の話をしてきましたが、その二正面作戦が今度の本にも続いているなというのが、この本の第一の感想です。

最初にこの 3 冊の本が届いたときの印象としては、「世界の哲学思想の見取り図」としては非常に読みやすいし、恰好の入門書になるなと思ひました。だけど、その見取り図を東西にわたって学ぼうとする人がはたしてどれくらいいるのかな、と。でも読み始めてみたら、見取り図どころじゃないですね。ヴィトゲンシュタインとメルロ・ポンティという 20 世紀の 2 人の思想家をとりあげて外史的に論じて、そして現代の問題をかなり克明に取り出しながら、マルクスが論じなかった「8000 年の文明史」を論じている。

例えば、ギリシア・ローマがアジアから影響を受けて、それを切り捨てて、というか、それを遮断することによって西洋を、オリエントに対するオクシデントというものの原型をつくりあげたこと。そしてローマ帝国がいかんにして崩壊するか。それから、東洋の思想は、宗教に関しては東洋は無神論、正しくは汎神論ですが、直感の把握という点でははるかに優れていると随所に書かれています。

そして現代から遠い古代へ、そしてまた現代へというふうに戻ってきて、全体が円環的

な構造になっている。しかもその間に、ヴィトゲンシュタイン、メルロ・ポンティについて、彼らの原典のみならず、それについての研究論文、伝記のようなものを読んで、それを論証する。だから非常に説得力がある。序論風に輪郭だけを述べておいたものを、だんだん深く具体的に解説して、そしてひとつひとつ論証していくわけです。見取り図どころか各論にもなっている。それには感心しました。

そういう点から見て、今度のこの本は、ヴィトゲンシュタインとメルロ・ポンティの対比が見事なものです。ただ、私自身が現象学とソシユールの言語学の影響から出発したとすれば、メルロ・ポンティはたしかに重要なんですけども、私が一番注目しているのはロマン・インガルデン (Roman Ingarden) です。マルクス主義とのつながりという意味でも。インガルデンはポーランドの大学者ですが、私が東大の美学の研究室に6年いて一番感心したのがこの人です。

彼の著作はひとつだけ『文学的芸術作品』という本が、60年代に勁草書房から翻訳されて出ていますが、この本で彼は、芸術作品の構造を伝統的に形式と内容という二元論でとらえようとするのは不十分だとし、どんな芸術のジャンルでもマテリアルがなければ成立しないのだから、物理的、有機的、心理的、精神的、形而上学的という最低5つの層の重層的な構造としてとらえるべきだといっています。そして上の層に行くほど下の層に支えられて自由度が増す。ただこの形而上学的というのは実は世界観なんですけど、作品ではそれが明確なメッセージとして出される必要はない、気分みたいなものでいい。気分と化した世界観—この分析は非常に見事だと思いました。

フッサールは、自分の正統的な弟子はハイデッガーではなくインガルデンだといって、彼を引き立てようとした。しかし私は、研究室にいるときは、インガルデンはポーランド人なので、ナチスの時代にドイツの大学からポーランドに帰ったということしか知らなかった。のちに、ポーランド大使館から送られてくる『ポーランド』という日本語のPR雑誌で、インガルデンはクラクフの大学に帰ってからも、スターリン主義にあくまでも抵抗して、現象学の立場を守り、文学以外のジャンルの芸術作品を講じたこと、また美学、文学、哲学についても書いていること、それからクラクフ周辺にインガルデン学派というものが残ったということを知りました。

それで私は彼の著作を読もうと思ったんですが、ポーランド語は読めないし、ドイツ語か英語に訳された著作もあまり手に入らないので、彼についての研究書をいろいろ調べようと思った。しかし、東大の美学教授から、評論家を続けるならもう美学なんかやる必要はない、と破門されて (笑)、それで私に講師を頼んでくれる大学では美学を講じて、そのためにこの本も読みましたけれども、まだインガルデンのことを書いたことはありません。

ともかく、いいださんのいう「マルクス vs マルクス」というのは、マルクス以後の哲学的諸学の展開をもふまえていて、そしてマルクスが論じなかった原始古代からの、東西

の思想と歴史を振り返るといのは、これはたいへんなことです。藤原書店のPR誌『機』で、いいださんはこの本を“超枕本”と自称しています。今までも『20世紀の社会主義は何であったのか』や『日本共産党はどこへ行く？』のような厚い本を書かれて枕本と称していますが、枕本というのはすぐには読まれないかもしれないという自覚は多少あるんでしょうね（笑）。だけど枕本といってもお経が書いてあるわけではありませんから、意味はわかります。だから、同時代に生きている私たちはこの素晴らしい本をすぐに読み解いて、わからないところがあればどんどん質問すればよいと思います。

わたしは都合で先日江ノ島であった出版記念会に出席できなかったものですから、今日は喜んでうかがいました。

* * *

猪野 いいださんの怪物性に関するいくつかの指摘と、芸術的立場からのコメントをありがとうございました。針生さんは、この本はそんなに難しい本ではないとおっしゃられましたけれども、そう思われた方はおそらく皆無じゃないかと思います（笑）。なにしろ私自身も4ヶ月この本に集中しました。たいへんに疲れましたし、たいへんに勉強になりました。したがって、先日、いいださんのお宅にお邪魔したさい生意気にも、この会は専門家集団相手の研究会ではない、いいださんの思想をだれにでも、わかるような方法で話をさせていただきたいと、強く申し上げました。いいださんにも快諾いただきましたので、そういう話をうかがえればと思います。

リプライ講演

〈主体〉の再生がなぜ必要か

いいだもも

1 針生さんの怪物性

批評では天下第一等の針生さんがせつかくこの本は非常に易しい、とタイコ判を押しにくださったので、この本の普及にとってはいいなと思ったら、猪野修治さんがまた司会の特権を利用して、そんなに読みやすい本ではない、とわざわざおっしゃるので（笑）、どうも猪野さんはこの研究会を妨害するためにやっているのではないか、と思うんですが（笑）、針生さんのおっしゃるように、こんなに読みやすい本はありませんから、安心して読んでいただきたい、と思います。

でも、針生さんがいいだももの“怪物性”についてお話ししていただきましたが、怪物の本はなかなか読みやすいとはいえませんが、わたしからいわせてもらえば、針生さん自身が天下に比類のない怪物ですから、その極めつけの怪物にいいだももは怪物だといわれ

ちやうと非常に困るんですが（笑）。私もまだ多少の娑婆気がありますから、そういわれてまんざらではないんですが、同時にもう 82 歳ですから、良かれ悪しかれ娑婆っ気がない。だから有り体に申しますと、そういうふうにいわれて特別嬉しいということもありません。娑婆っ気がなくなると、物事をつくるうえにおいては善し悪しがありまして、娑婆っ気がだんだん抜けちやうと碌なことにはならない、という反面の自戒もありますけど、そのところはごく普通に淡々と受け止めるということになると思います。

針生さんが、思想家としていかに純潔で大怪物であるかということについて、ちょっとお話しします。つまり、針生さんは私と同じで戦中・戦後をたっぶり目一杯生きてきていますが、共に戦後のマルクス主義者ですから、そこを皆さんに説明しないと、ちょっとわかりにくいところがあると思います。

戦争中に景山正治に率いられた「大東塾」という右翼の政治的集団がありましたが、「大東塾」の人たちは戦後になってほとんど代々木で腹を切って自決しましたから、思想的な純潔性という点では純粹右翼です。わたしは思想で生きている人間ですが、思想の方向性についてはあまり厳密には問わない面を持っています。しかし、事柄の思想的純潔性というものからして、彼らは命を賭けて「大東亜戦争」をやったわけですから、戦争に負けたあとも生きている右翼というのは、そんなものは右翼でも何でもない、とわたしは思いますから、戦後において何ら信ずるに足りないですよ。やっぱりそのときに腹を切った「大東塾」の連中は、それなりに思想的に事柄を全うしていると思っています。

わたしは戦争中からまったくのマルクス主義者で反戦主義者でしたから、針生さんとその点では同じ「暗い谷間」に生きた十代の少年としても違いがあるんですが、「大東塾」の名のある歌人の一人に針生一郎という少年がいるということは、わたしは戦争中から知っていました。だから、その針生氏が戦後、先鋭なマルクス主義者になって現われて、「夜の会」とか「世紀の会」とか「世代」とかでわたしと交流をもって、それから後はずっと一緒に同じ道を歩むことになったので、その思想的な変転が針生さんの怪物性ということだと思って、非常に興味をもっています。

戦争に負けたときに、8・15 ですけども、わたしたちは単純に言ってその 8・15 転換のおかげで生き延びたわけですから「バンザイ」しかないんですけど、針生さんはそのときに「徹底抗戦派」に属していて、仙台におられたんですが、仙台の山ん中に入ってアメリカ占領軍に対してゲリラ戦をやろうとしていた。だから、ほとんどの「大東塾」の塾生が腹をかつさばいて死ぬのと同じことを、それ以上に苛烈な覚悟をもって山に入られた、と思うんですね。

戦後になって灯火管制がなくなりますから、明かりがつかますね。針生さんはきっと、山の中から明かりのついた仙台の街を見た、と思うんです。で、明かりがつくとやっぱり、コーヒーなんか飲みたいくなりますからね（笑）。それで徹底抗戦をやめたってことになるんですよ。これはわたしの想像ですが、だけど針生さんはそういうたいへんな怪物性を

持った方でして（笑）。

だから針生さんにとっては、思想の純潔性ということでは、戦争中のシグナルはウルトラ・ナショナリストであったんでしょうけれど、戦後の、ナショナリズムを超えるマルクス主義というのでも或る種のウルトラ・マキシアリストですから、左へ転じた方向でもって首尾一貫して既成左翼をもさらに左へ超えてゆくスターリン主義批判を続けて、今日まで我々と一緒に生きてきている。そういう方だと思っんです。

転換は転換ですから、針生さんは戦後うじうじとなった経過も多少は一時期あったらうと思うけれども、或る時期からはわたしと同じで実に恬淡とされていて、そのことについてはしょっちゅうお話しになっている。針生さんの怪物性というのは、思想的純潔のテーゼにおいては思想のレベルを超えてますからね、そういう意味で非常に有名な方です。そういう方がこの本を易しいとおっしゃってくれた。ですから皆さん、これは極めつけに易しい本だってことを宣伝しましょう（笑）。

2 「神妙の域」に近づく努力

さて、ここからリプライに入りたい、と思います。

まず片桐薫さんは、前半は葛飾北斎と富岡鉄斎の話、後半は片桐さんお得意のアントニオ・グラムシの話で、どちらもわたしはたいへん面白かった。わたしはどうてい葛飾北斎という大画伯と比べられるような人間じゃありませんが、わたしなりに北斎のことは非常に大好きでして、どういうところが好きかという、彼はだいたい自分の70代までの仕事というのはまったく仕事になっていない、と言っているんですよ。あらゆる偉い人はそうだと思いますがね。で、80歳になって多少はものになってきたという自覚で生きているんです。そのとき北斎は判子をつくって、それは一百という字を崩した非常にいい判子でして、わたしも実は同じようなのをつくりたいとかねがね思っているんですけれども、百を自分の生きる目標にした。100歳になれば「神妙の域」に入る。まあ、画境とか文化というものはそういうものだろう、と思います。

最期のところは「富岳百景」の赤富士とか、怒濤の向こうに見える富士山だとか、ああいう傑作は古今東西絶後のものだろう、と感心しますけれども、北斎にとってはまだその先に期するところがあって、「神妙の域」に入れば俺の絵はこんなものじゃない、という気持ちはあったと思います。あまり欲張ったらだめですけども、わたしも「神妙の域」に近づきたいな、と。つまり、わたしはまだまだ「神妙の域」にはなっていないですが、この超枕本の3冊がいくらかは八十歳の気が出ていれうまいな、と思っているんです。

富岡鉄斎も非常に好きな絵描きでして、これは単なるわたしの好みですけども、わたしの場合には、はじめに中国の官画壇の免許皆伝を得た雪舟ときて、それから絵画史上では画期的な桃山時代に狩野探幽、長谷川等伯、その流れの尾形光琳が出て、それから片桐薫さんがおっしゃった葛飾北斎、富岡鉄斎ときて、あとは日本にろくな絵描きはいない

(笑)。現代では日本一の目利きである針生一郎さんを前にして、口はばったいい言い方になりますけれども、だいたいわたしのそういう目利きで日本人の絵というものを鑑賞しています。わたしは鉄斎や北斎には及びもつかないけれども、及ぼうと思ってこういう仕事をしているつもりです。

3 オリエントとオクシデントの転換

この本のⅠ部では現代思想を扱っており、先ほど片桐薫さんと針生一郎さんが言及してくださったように、「ヴィトゲンシュタイン vs メルロ・ポンティ」として、現代における思想の対立の問題として世界と日本においてどういうことが第一の主題になっているのか、つまり、21世紀を仮りに人類が生き抜こうとするならば、何を解かなければいけないのか、解くべき主題として何が提出されるのかということ論じています。

Ⅱ部とⅢ部は歴史編ですが、主題を読み解くためには8000年分の歴史が必要であるとしています。古典古代ギリシアは紀元前6世紀頃のことですから、たかだか2500～2600年です。わたしはそれでは足りないと思っています。

まず、ヘロドトスの『歴史』と司馬遷の『史記』が東西にあって、これから「歴史」が始まるんですね。わたしはそのことは認めたいので、第2次世界大戦後のさまざまな発掘の成果を考慮する必要があり、そうすると歴史は訂正されてもっと遡るとして、それを「8000年の助走」と書いたわけです。

わたしが戦争中にいちばん影響を受けた本は、ヘロドトスの『歴史』ですが、「生活社」という今はもうない、戦争向きじゃないよい本をたくさん出していた出版社から、ヘロドトスの『歴史』とツキュディデスの『歴史』が出まして、それを読んだのが16歳のときです。当時は20歳になれば戦争に引っぱられて死ぬわけですから、あと4年だなどと思って、自分の短い人生はどういう世界史の中に位置づけられているのかということが知りたくて、この2冊を読んだんです。それから、ヘロドトスの『歴史』は、何回読んだかわからないくらいのわたしの人生にとっての愛読書になりました。

それにはどういうことが書いてあるかということ、オリエント（東洋）とオクシデント（西洋）がどこで入れ替わったかという、世界史的転機についてなんです。いうまでもなく、オリエントを代表していたのはペルシア帝国です。ダレイオス1世とかクセルクセス1世などの偉大な王がいたペルシア大帝国が、輝かしいオリエントの代表としてあった。「光は東から」なんです。世界史の始原は。

そのペルシア帝国がいよいよ「西」へ食指を動かして、その手ははじめに地中海を制圧しようと思って乗り込んだときに、それを迎え撃ったのが、地中海の眇たるアテネを中心とした数十カ国からなる諸ポリス国家の連合です。これが、マラトンの陸戦、サラミスの海戦で有名なペルシア戦争です。ポリス連合軍はペルシア軍を打ち破り、今から2600年前に世界史はそこで大転換を遂げて、現在のような西洋中心主義的な図式になったわけです。

この構図をたどるといふことと、現在の位置を確かめるといふことは非常に大事なことで、ペルシア戦争のあとポリス国家が地中海に進出し、それ以来現在まで、オリエントを放逐したオクシデント中心の、古典古代ギリシアから発祥したいわゆるヌース（nous）といわれている「理性」の文明が、グローバルに世界を覆うことになって、今日のインターネット資本主義によるグローバリズムの世界ができあがったわけです。この世界が我々にとって満ち足りたものであるならば、それでいいんですけども、わたしは一から十まで満足していないものですから、これを覆すということ自分の人生の生き甲斐にしています。ですから、そのどこに歴史の転換の根本的な転倒があったのか、ということ明らかにしなければいけない、そういう気持ちでヘロドトスの『歴史（ヒストリアリ）』を16歳の時に読んだわけです。

4 地中海世界史の終焉と西洋文明の始まり

この本でわたしが全体の5分の1くらいの精力を費やして書いているのは、第2次世界大戦前後にクレタ島でいわゆるクノッソス文書が発掘された、という問題についてです。これは考古学的な新発見ですから、これによって第1次世界大戦までの歴史書は全部書き換えられないといけないのですが、皆さんが高校や大学で学ばれた歴史書というのは、相変わらず古いままです。わたしはそれが先ずもって気にいらなくて、この大部な三部作のかなりな部分を費やして書いたわけです。今の歴史学は、ヘロドトスと司馬遷以来の歴史書をそのままに信じて、それで成立していますから、全部インチキですよ。まったく間尺に合わない。神武天皇の昔ほど古くはないですが、だいたいそれと似たようなものです。そんなものをいくら読んでいても、世界史の本当のところはわからないし、ましてや、これから後の世界史がどうなるのかなんて、わからない。

イギリスのエヴァンズという考古学者が、第2次世界大戦前から始めて、戦後までかけてクレタ島の文書を発掘しました。これが「クノッソス文書」です。エヴァンズは、アルファベット以前の或る種の文字を発見したと信じていたんですが、新しい発見をした人は、どうしても自分の発見に拘束されてしまうんですね。だから、学問の研究は或るところまでは行くんですけども、本当の意味で根本的に展開するためには、その拘束が研究にとって逆にマイナスの環境になってしまう面が出てきてしまう。

どういう理屈かという、かれエヴァンズは、クレタ島を中心に考えていましたから、アテネとかの古典古代ギリシア文明は、クレタ文明の第2次的な派生物だと考えてしまう。それで、エヴァンズという人は、たいへんに優れた学者でしたが、門下生らが手掛けているさまざまな歴史的発掘でも、自分の論を覆すようなものは権力でもって押さえ込んだ。すぐれた門下生の新しい創発的な研究の考古学的発展も、押さえつけて遅らせてしまいました。

ところが、第二次世界大戦後の今日の時代の或る時点で、ヴェントリスという考古学者

が、アメリカの有名な言語学者チャドウィックの協力を得て、この「クノッソス文書」を解読したんです。そうしたら驚くべきことに、これはアルファベットとは違うギリシア文字であったことが判明した。線文字文書Bの解読で、Aの方はまだ解読されていません。

ここでわたしが何を言いたいかというと、地中海文明の後期というのは、クレタ文化も含めた城塞国家の文明なんです。これは、アテネを中心としたエーゲ海上のポリス国家とはタイプが違う、それ以前の、マルクス主義用語でいうと家産制であって貢納制であった時代の文明です。クノッソスの線文字Bが解読されたことで、そういうことが判った。ここでは各島に王家があって城塞を構えていて、王家ごとに文書があった。それは歴史書というよりは、そこの王家の家計簿みたいなもので、羊が何頭いて牛が何頭いたとかいう家産の明細なんですね。それが解読されたということは、歴史にとっては決定的なことなんです。なぜかというと、エンゲルスがいつているように、記録されてから後が歴史なのですから。これは千古の名言で、わたしはマルクスとの対比でエンゲルスはあまり買いませんけれど、そのかぎりではエンゲルスのこの指摘は正しいんです。

クレタ島の「クノッソス文書」が解読されて、それがギリシア文明のギリシア文字による出納録であったことがはっきりして、歴史はひとつ遡ったわけです。さきほど、この第二次大戦後の考古学的発掘の成果を考慮しない歴史はインチキだと申し上げましたが、これに 8000 年の昔から地中海文明があることが文字の証拠を残してちゃんと書いてある。2500～2600 年前くらいからポリス国家文明になりますが、それ以前の地中海史というのは城塞文明で、家産制で貢納制の文明で、しかも母権制国家でした。そういう文明がトロイ世界戦争で転撤したことが判ってきて、歴史がそこで不連続になってしまったので、欧米の学者は処理に困ってその時代を「暗黒の時代 (Dark Age)」と呼んでいた。ヨーロッパでは中世のことを「暗黒の時代」と呼んでいたから、その連想でもって古代地中海世界史における「暗黒の時代」としたわけです。

ところが、その「暗黒の時代」の手前にホメロスの偉大なる「英雄叙事詩時代」があります。これは口承で語り伝えられた時代ですけれども、最後のころにはアルファベットが出現しますから、口承叙事詩はすでに文字化されていたことも確かなんです。ですから、「ホメロスの時代」から「歴史」はもう始まっているんですね。ヘレニズム時代にかけてのヨーロッパの考証学というのは、そのほとんどがホメロスの『イリアス』『オデッセイ』の諸ヴァリエーション文書の比較考証と言っていいものです。

ホメロスの「英雄叙事詩」には、トロイ戦争のことが専ら書かれていますが、このトロイ戦争こそが地中海世界史の古代史を終焉させた「世界戦争」ではないか、ということ、人々は早くから感じていろいろなことを説話にしてきた。学者からはなかなか肯定的で積極的な論が提示されなかったのですが、それを決定的に明らかにしてしまったのが、有名なシュリーマンによる「トロイの発掘」なんです。この発掘は第1次世界大戦前後ですか

ら、20世紀になってからのことです。発掘の結果、トロイの遺跡は8層にわたっていたということが判明しましたから、トロイ戦争が世界戦争であるならば、8回の世界戦争が二百年にわたってくりかえしあって、トロイは戦争のたびに滅びては復活し、滅びては復活し、を繰り返したのではないか。それが歴史的事実であることが、シュリーマンによって明らかにされたのです。

シュリーマンという人は、いろいろ悪口を言われることも多いですが、わたしは実に偉いなあとと思います。子供のころにホメロスの叙事詩を読んでトロイ戦争のことを知って胸を躍らせ、これこそ歴史的事実だと信じた。それを学者にいわせればまったくもって頭が弱いということになるんですが、頭が弱いのは学者のほうなのでして、シュリーマンのほうが正しかった。かれの考古学的発掘がなければ、トロイ戦争の实在そのものが証明できなかったわけですから。

シュリーマンのおかげで、「暗黒の時代」といわれた時代にはトロイ戦争という世界戦争が200年にわたって荒れ狂い、これによってさしものミノア・ミュケーネ文明としての地中海世界史が滅んだ、ということが明らかになった。それからポリス国家の黎明があった、と。だから、オリエントが滅んだのはトロイ戦争が原因だったんで、決してオリエントがバカだったから滅んだわけではない。そして、その世界戦争がもたらした暗黒時代の後でエーゲ海を中心に新たに興った200くらいの小さなポリス国家が一アテネのような大きいところでも数万人の規模ですが一彗星のごとくに抬頭してきて、あっという間に2500年のこんにちの世界の形ができたという話です。

5 東アジア世界史

西における歴史が、ヘロドトスの『歴史』で始まったように、司馬遷の『史記』から、中華王朝を中心とした東アジア世界史も生まれたわけです。それは、匈奴や突厥による遊牧共同体と、中華文明の根幹である農耕共同体の文明との絶えざる抗争の歴史でありました。秦の始皇帝が「万里の長城」を築くことによって、襲来する遊牧共同体と農耕共同体による中華王朝国家の識別がそこで可能になった。つまり、区切り線がはっきりすることによって「歴史」が始まったわけです。歴史とは概念分割（ベギリア）なんです。

しかし、その後、近頃になって、ご承知のように、「甲骨文」というのが出てきました。発見されたのは20世紀になってからですが、そのいきさつは、北京近郊の薬屋さんが古い骨を削ったものを薬として売っていたのですが、その骨に文字が書かれていた。調べてみると、それは殷の国家が占いに使っていたもので、占いの文言が亀の骨に彫られている。それを解読する学問は、20世紀に非常に発達しまして、清の時代から一羅振玉ですが一日本における東洋史の大家というのも、貝塚茂樹さんはじめの、その流れを汲む専門家です。そのあとまた、「金石文」という金物や石に彫った文書が発掘されましたが、これらは司馬遷が読み解いた、竹冊という竹の簀に書かれた文字とは違った系統のものだった。甲骨

文、金石文が解読されてからあとの東洋史の進歩はものすごく、それは現在でも続いています。

例えば、殷の前の夏という国は伝説だといわれていましたが、トロイ戦争と同じことで、実在していたことが、第二次世界大戦後の今日になってわかってきました。不思議なもので文字の読解力が出てきて、書かれてあることに従って掘ってみると、実際にいろいろと出土してくる。あの兵馬俑なんかは、『史記』を読んでいるかぎりでは出てこないですからね。今は夏以前にも、さらに古い王朝があったといわれています。

すると、中華王朝国家も、そのはじめの時は農耕文明ではなくて、遊牧民だった「商」などの民族の共同体であったことがはっきりするわけです。やっとならば秦の始皇帝にいたって中原のほうに文明の中心が移ってくるわけで、中国史の源流という点では秦国家は支流なんです。これは、オリエントのペルシア帝国が滅びたあとに、「地中海のポリス国家の叡智の文明」が出てきたということに、似た面があります。こういうことを考慮していない西洋史や東洋史、世界史はもう一度申し上げれば全部インチキですから、そういうものを頭から払いのけて歴史の真相を見なければ、これからの歴史のことはわからない。

これらの歴史については、この本の第Ⅱ巻、Ⅲ巻で取り上げていますが、やはり第1次世界大戦後のトロイ遺跡の発掘と、第2次世界大戦後の「クノッソス文書」の発掘以後では、世界史における在来の通俗的な理解を改めなければならない。そうすると、「人類文明史」というからには、文字があるわけですから、文字が綴る範囲でいってやはり地中海世界史というのは8000年の歴史をもっているといえる。トロイ戦争があって、そのあとポリス国家が地中海世界の東のほうのエゲ海から出てきて、それから2500年の、わたしにいわせればごく最近の歴史が始まって今日にいたっていると、そういうふうに世界史を読み解く必要があるというのが、わたしの先ずもってこの本で言いたいことです。

6 フッサールの現象学

次に、ヴィトゲンシュタイン vs メルロ・ポンティという構図についてですが、片桐さんのヴィトゲンシュタインについてのご質問に答えることも含めての話になります。

わたしは現代思想を第Ⅰ巻で扱いましたが、そこでいいたかったことは、20世紀的現代になってから、思想の第一線では何がいちばん問題になっているかということです。日本でもバカバカしい哲学者はたくさんいて、いふなればぜんぶ田舎哲学でして、そういう人たちがいろいろいっていることは哲学とか思想とかに何の関係もない。ただ頭でいっているだけの話で、大学でそういう講義を聞いて真に受けている学生たちは気の毒だと思います。

針生さんがおっしゃったロマン・インガルデンという、わたしも非常に珍重しているポーランドの大学者の説にもつながるんですが、要するに20世紀にはいってから哲学というのは、エドモンド・フッサールが始めた現象学（フェノメノロジー）に集約される。

それ以外の哲学はないんです。日本の哲学者たちはあるようなふりをしていますが、それは商売上のネタだからです。フッサールを読めば、そのことは明々白々です。1938年に出た『ヨーロッパにおける諸学の危機と超越論的現象学』で20世紀の哲学は決定するんです。まだ読んでいない方はぜひ読んでいただきたい。ヨーロッパの諸学は哲学も含めて、フッサールによってその時点で死亡宣告を受けてしまっているのです。それをまだ生きていると思ってお喋りしている専門家たちはヤブ医者です。

フッサールは、ヨーロッパの諸学はすべて滅びてしまったということの確認をまず行なっているんです。これは非常に大事なことです。日本は常に後発的で、ずっと西欧的近代に追いつこうとしていますが、その近代、いわゆる西欧の中心でフッサールがヨーロッパの諸学は終わったと知っている。そして、その危機を超えるにはどうしたらいいかと考えて「超越的な現象学」ということをいったわけです。それで現象学的還元ということをして、生活世界から出発した。「エポケー」が必要になってくるのも、既成の雑念を全部追っ払ってしまわなければならないからです。

さっき針生さんが、わたしの話は観念的・思想的な高見から世俗的なほうに急降下して、また高見に上昇していくのを繰り返すとおっしゃいましたが、生活世界から出発したというフッサールの文章は超越境に舞い上がったきりの文章で、それはたいへんなものです。現象学的還元ですから、生活世界から出発するんですが、そこにおける世俗的なことは全部括弧に入れてしまって、そのところはエポケー（思考停止）してしまうわけです。そして根本的な概念を組み立てるところから設定をしないかぎり、いくら世俗的な生活のところであれこれいってみても、誰だって世間のことはわかりきっているわけですから、何の役にも立たないわけです。

20世紀初頭に、エドモンド・フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』が出ます。これで19世紀までの全哲学が、パラダイム・チェンジして、旧哲学はぜんぶがお払い箱になるわけです。

フッサールの本を読んで、もうこれからは現象学（フェノメノロジー）しかないんだということで、そこから出発した人は、それ以外のことをやっても虚しいと思っているわけです。そこをいくら突っついて実際には何ひとつ新しいものは出てきませんから。そのところは先ずもって第一に押さえておいていただきたい。わたしはマルクス主義者ですけど、「現象学マルクス主義者」だとずっと言い続けているのはそういうわけであって、20世紀的現代においては、現象学としてのマルクス主義以外にはマルクス主義哲学もないんです。現象学以外の哲学というのはないだろうということは、インガルデン自身をみれば非常に明白です。かれも「現象学マルクス主義者」ですから、わたしや針生さんと同じような考えでやっていんだと思います。

7 人類文明の危機と〈主体〉の再生

ヴィトゲンシュタインに接近するうえでもうひとつ、片桐薫さんがおっしゃったように「言語哲学」の問題があります。現象学を考えるうえでもこのことは重要です。ちょっと脇道にそれますが、大事なことなのでお話しいたします。「言語哲学」というのは、わたしの言葉に言い換えれば「言語批判」ということです。20世紀の哲学・思想を考える場合に、大きな勘どころが二つありまして、ひとつは「言語批判」を媒介にしているかどうかということ。今さら言うのも変ですが、20世紀の思想のメルクマールのひとつは「言語批判」なんです。リングィスティック・ターンつまり「言語論的展開」ということです。これをくぐっていない哲学や学問は、そんなものでおよそ物の役には立ちません。

先ほど針生一郎さんがおっしゃった、ウィーンとかプラーハとかミュンヘンとかベルリンとか、という場所を頭に置いてください。20世紀のヨーロッパ文化の中心はウィーンでした。それはつまり、ハプスブルグ王朝の首都のことです。ハプスブルグ帝国（オーストリア＝ハンガリー二重帝国）は、第一次大戦の敗北で滅びてしまいましたが、ヨーロッパの近代文化はみんなここから出ています。

19世紀末にウィーンでどういう風習が起きたかという、ホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』という本がありますが、岩波文庫から出ていますからぜひお読みいただきたいのですが、これが当時のヨーロッパ文化に与えた影響は決定的なものでした。これを経過したかどうかでもって、ヨーロッパの思想家なり文学者なりが現代の文脈に耐えうるかどうかが決まると思います。

わたしは、ヨーロッパの現代文学としてはフランツ・カフカとジェイムス・ジョイス、それにベルト・フォン・ムジールしか認めていません。それ以外は、たとえ19世紀の文学者であったとしても現代の文学者ではないくらいに思っています。ジョイスは、ダブリン生まれのアイランド人です。カフカは、いうまでもなくチェコスロバキアの人であって、ユダヤ人です。ムジールはやはりユダヤ人で、「特性のない男」です。二人とも正統的な白系白人文化に属していない。19世紀まではヨーロッパでは正統的な白人文化が威張っていましたが、それはどこに行ってしまったのか。ヨーロッパ人は正統的な白人文化の発展がいやになったのか、そこから逸れて「オリエンタリズム」になってきた。サイドの言う通りです。白人文化の王道がナチス・ドイツのヒトラー文化です。白色系であるからには、あれ以外にあり得ないんです。「アーリア人種絶対」なんですから。ユダヤ人であろうと、ジプシーであろうと、「非アーリア」はすべて絶滅させなければいけなかったわけです。「血の純潔」という生物学的プリンシプルです。ユダヤ人とジプシーは、実際にほナチス・ヒトラーのヨーロッパ支配下にほとんど絶滅されかけたじゃないですか。そこで生き残ったのが、例えばフランツ・カフカの文学です。カフカは、両親も3人の愛する妹たちも親族も、全部アウシュヴィッツで死んでいます。カフカ自身はたまたま体が肺病で弱かったから、ナチスに捕まる前に死んでしまって、文学だけが生き残った。そう

いう苛烈さを抜きにして、20世紀の現代文学を語ることはできません。

20世紀におけるオデュッセウス（ユリシーズ）は、いかなる放浪＝世界遍歴を余儀なくさせられるか、ということ、半日の出来事として書いたのが、ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』ですが（わたしの本のタイトルの「ユリシーズ」はいうまでもなくかれのこの本からとりました）、ジョイスの『ユリシイズ』は、お茶らけで書いているように一見、見えるけれども、20世紀の日常的危機を描いた傑作です。現代は日常性において危機が充満しているので、人間は完全に「非人間」として変形せざるを得ないということを書いているわけです。

古代の世界における最初の「個性」の出現であるオデュッセウスの世界遍歴は現代で万人に普遍化されてしまっていて、ロベルト・フォン・ムージルが書いた「特性のない男」として、完全に「無個性」として現われるわけです。この大作品自体が結局、未完成のまま終わってしまうわけですが。だから、『ユリシーズ』に危機感が描かれていることがわからない人は、これを読む資格はないのです。

20世紀の恐るべきところは、日常の生活の中で人間がとことんまで疎外されて、つまり人間ではなくなってしまうという由々しき事態の普遍化のことであって、そこから人間性をどう取りもどすかということが、わたしのこの超枕本の主題です。

現在は〈主体〉というものが、グローバリズムのために剥奪されて無くなってしまったわけですが、〈主体〉が再生できなければ、人類もこれで終わりだと思います。そういう問題意識です。だから、このまま行けば、21世紀の半ば頃で人類の文明は終わるんじゃないか、少なくともわたしはそう思っています。しかしだからこそ、片桐薫さんがご指摘くださいましたように、この本の第1頁目に「21世紀とは希望の世紀である。希望の世紀にしなければならぬ」と書きました。

「希望の世紀」に21世紀をするためには、〈主体〉を再生しなければいけない。逆に再生されなかったらどうなるのか、という問いも、当然そこに含まれています。〈主体〉を再生するためには、8000年という歴史の助走を跳ばなければならぬ。ヴィトゲンシュタインの方法ではなくて、メルロ・ポンティの方法で跳べば、再生できる可能性がわずかに残されている。だからわれわれはそこを決死の勢いで跳ばなければならぬということ、全3巻にわたって言っているわけです。跳べなかった場合には、21世紀の半ばに人類は地球と一緒に滅びるんだ、と。そういうことをわたしは六十年というもの言ってきましたが、ちっとも反響がないことが不思議なくらいです。またあのバカが大風呂敷を広げて「滅びる、滅びる」と御託宣している、と世間が思うんですね。

だけど、本当に〈主体〉を再生しなければ、21世紀半ばで人類は滅びます。例えば、いまブッシュの下でわれわれが死力を尽くして戦っているイラク戦争の泥沼化ということが現にありますが、わたしの「大風呂敷」の先見によれば、サマーワからの日本自衛隊の撤収はもう至近うちにやってこざるをえない。年内にブッシュの米軍も撤収に追い込まれ

ざるをえないでしょう。さらにもっと深刻なこととして、イラク戦争の泥沼化が孕んでいるアメリカの赤字国家財政と原油高とドル危機の問題がありますが、わたしは 2、3 年の時限で切って確言していいですが、いまのドル本位制の変動相場制は近いうちにパンクして世界的規模で没落します。ドル本位制のなくなり去った資本主義はもう資本主義とはいえませんが、どうなるかということが一から問われるわけですね。そういうところに現にいま来ているわけですから、それを乗り越える構想力をわれわれが起こさなければ、やはり世界史、人類文明史は終わりです。われわれが〈主体〉を再生しなければならないという問題の不可避性、それも緊急性が現にあるわけですから、それに成功しなければ、エコロジカル・クライシスで地球もろとも人類文明が崩壊してしまわざるをえない。

今度は地中海世界史のように或る地域に限定された文明ではなく、グローバリゼーションの極のところまで来て、西暦 2006 年になっているわけですから、もう外がないんです。これで滅びれば、本当に終わっちゃうんです。地中海世界史は滅びても外の世界（中世のヨーロッパ）があったけれども、今度は地球の外には出られませんから、完全に終わりです。そういう意識でもって、この本を書いています。そこで、ヴィトゲンシュタインです。

8 沈黙してはならない

日本はだいたい十年遅れで欧米の流行思想を取り入れて、それで学者連中もひとしきり飯を食うというけっこう、かつけたいな国ですが、十年遅れていまヴィトゲンシュタインが日本でも流行りだしているようです。欧米では第 2 次世界大戦後にヴィトゲンシュタイン一色でした。亜流の学者がごまんといて、ファンもたくさんいた。欧米の学生たちはみんなヴィトゲンシュタインのファンでした。欧米の学生はみんな頭が弱いですから、中身なんか理解する能力がないからいろんな仕草を真似するんです。そういうのも流行った。日本でもいまの大学生たちは頭が弱いですからね、これから大流行するんじゃないですか。学者もヴィトゲンシュタインの本をどんどん書いて、くだらないものばかりですが、片桐薫さんは、もちろん批判的観点からですが、すこし、そういう本を読みすぎたんじゃないですか（笑）。

ヴィトゲンシュタイン哲学は、前期と後期に分けられ、前期ヴィトゲンシュタインは世界的によく読まれています。そのうち、『論理哲学論考』は批判的に読み進めてみる価値はあります。『論理哲学論考』というのは、或る意味で 20 世紀において滅びざるを得ない大きな論理哲学です。それは要するに、論理的な原子論の経典です。「論理的な原子論」というのは、世界も、世界を認識する認識も、全部要素からできあがっていて、要素の集合体として世界はあり、認識の枠組みがある、という考え方で、ひとつの論理的命題から演繹して七十いくつの論理的な思考形式を満たしていく。最後に有名なテーゼがあって、わたしは、それがヴィトゲンシュタインの上品に言ってあげれば「白鳥の歌」、鳥の死なんとするやその声は哀しいですが、有り体に言ってそれは白鳥の歌の終わりの無惨な自己

破綻であると判断しています。わたしは、ヴィトゲンシュタインを読んだという人は、本当は読んでいないか、読み通せなかったのではないかと、いつも思うんですが。読み通せば最後に、ヴィトゲンシュタインに梯子を外されて宙ぶらりんになってしまいます。必ずそうなります。その最後のテーゼというのが、「言表できない世界については沈黙しなければいけない」です。

これはたいへんなテーゼです。そこでハタと行き止まりになってしまっただけでは、思考はもうそれ以上には進みようがありませんからね。そこをどう突破するかということが、20世紀の現象学に問われている最大の問題なんです。世界があっても、世界を言表することができない、という論理的現象というところまで、ヴィトゲンシュタインがそこを詰め切っているわけです。言表できない世界があっても、それ自体を言表できないんだから沈黙しなければいけない、と。

わたしは、そうじゃない、という気がするんです。ヴィトゲンシュタインの言い分は、一見もっともだと思うでしょう？ でも、わたしはそこからしか、つまりヴィトゲンシュタインのそういうことに対する批判的な眼差しからしか、20世紀の現象学の発展はできないと思います。

これは、ごく単純な問いかけなんじゃないか、と思うんです。ヴィトゲンシュタインが生きていたら、聞いたかったですね。あなたはそういうことを言うけれども、あなたの言葉自体は言葉なんですか、沈黙なんですか、と。言表できない世界については沈黙しなければいけないというのなら、あなたは沈黙していきやそれでいいじゃないですか。なぜ人前にノコノコ出てきて麗々しくそんなことを言表する必要があるんですか。麗々しく言う以上は、あなたの言っているのは、あなたの言葉なのか、沈黙なのか、どっちなんだ、と。

確信しますが、わたしにそう反論されたら、定めしかれば立ち往生ですよ。本来、そこからしか思考というものは始まらないということなんです。メルロ・ポンティというのは、生涯そのことを主張した人です。「言語批判」がなぜ重要なのかというと、そういう問題なんですよ。

9 見えるものと見えないもの

ホフマンスタールの話に戻ります。世紀末のウィーンです。ホフマンスタールは『チャンドス卿の手紙』を書きました。それは、カフカも含めてヨーロッパのあらゆる知的な人々に絶対的な影響を与えました。『チャンドス卿の手紙』はどう言っているのか。言葉というものは現代では、それを発する自分の舌の上でボロボロと崩れていって完全に跡を留めなくなってしまう。あとには苦い味しか残らない、と。これは現代人の言語感覚です。この言語感覚を持たない詩人の言うことは、このアウシュヴィッツ以後、ヒロシマ以後の時代では何ひとつ信じることはできません。アドルノが「アウシュヴィッツ以後に詩を書くのは野蛮（バーベリズム）である」と言っている通りです。

さて、ホフマンスタール自身は、そのうえで詩や小説を書いた。でも、どうしたら書けるのか。これが問題です。ヴィトゲンシュタインのように、だから沈黙するほかない、ということにはならない。みんな何らかの意味でそのところを経過して、さまざまな言語表現をやっているんです。だから、20世紀の言語表現とは「言語批判」というものを濾過したうえでのものであり、それ以外のものは全部旧世紀のものなんです。言葉は舌の上で崩れないと信用できないというのは、わかりにくい表現ではありますが、逆に崩れない言葉は20世紀においてはぜんぜん意味がないわけです。20世紀には世界は木っ端みじんに崩れるわけですから、そのままでは表現できなくなりました。毎日そういう世界に相對していて、人格そのものも砕かれつつある。そんなことがわたしたちの日常経験になっている。

メルロ・ポンティの遺作に『見えるものと見えないもの』という未完成の論考がありますが、わたしはここでの彼の遺志を継がなければならない、と思っています。ヴィトゲンシュタインに言わせれば、見えるものについては言表できるから言葉で言えるけれども、見えないものについては言表できないから沈黙しなければいけない、それで終わりなんです。

メルロ・ポンティは、古典古代ギリシア以来の文明というのは可触的・可視的であると言っています。なぜかおわかりでしょうか。地中海にはきらめくような陽の光が絶えず降りそそいで、青い海に青い空がある。そこに彫塑のようなくっきりとした像があつて、それは目で見ることが出来る＝可視的で、手で触れる＝可触的なものです。要するに、彫塑的な文明がそこにできた。これがヌース（叡智、理性）の文明なんです。それが現在まで続いている。わたしのこの三部作の「古典古代ギリシア文明」は、そのことを勘所として押さえて書かれているのです。

われわれの文明のあり方というのは、そういうものとされてきた。それを疑うにいたったのが、それから2600年たった現在なんです。いまわれわれは、本当に真理に触れられるなんて思っていないし、目で見える形象力があるものはことごとく崩れ落ちる時代に生きているわけですから。

では、どうしたらそういう形象的なものを復活させることができるか、ということが、われわれの切実な問いなんですね。三木清風に言えば「構想力の論理」の自己形成の問題です。わたしはカフカが好きですから、それを例にとりますが、カフカは現代においては「実存的不安」というものが普遍的になったんだ、というところから出発しています。自分自身が実存的不安で、実存の根底、自分の足元が不安なんです。そこでどうすれば何かを形象することができるのか。それは非常に謎であるし、難しい。カフカの作品を読めば、それはおわかりのことと思います。

『城』という作品がありますが、北のほうの丘の上に青い空に映えてお城が見えている。一人の男がそのお城を目指すのですが、なかなか辿りつけけない話です。男は測量技師で、その城主から測りたいものがあるので城まで来てくれ、という書状をもらって、そこで

この麓の町に来ている。麓から小道をたどるんですが、いつまでも行き着くことができない。遠くなるかと思うと近くなり、近くなるかと思うと遠くなる。どういうことか、わかった方はいらっしゃいますか？ わかろうと思って行くんだけど、わかるところに行き着けない文学なんです。つまりそれは「プロセス」を書いているんですね。だから、カフカの実生活は、わたしは実際に見たわけではありませんが、なにしろ同時代なので手にとるようにわかる。

人間はなぜ生きるのかということ、生まれた以上は考えますが、考えたところで結論は出ない。どこまでも生きていくしかない。まだ若い時期は、歩いている以上は目標があるんだ、そのうちどこか目的地に着くと思っている。わたしのマルクス主義に喩えれば、共産主義ということが目標であるとするならば、資本主義が実在のときに社会主義をめざしてゆく。そういう子どもの時期の夢は、当然すぐに卒業してゆかざるをえないんですよ。六十年も歩き続ければ、目標なんか、どこにもない、死以外に待ち受けているものなんかないということ、がわかる。目的地に永久にたどりつかないように、人生の歴史の構図はできている。どこまでも歩いていく「プロセス」があるだけなんです。そこでどういう結末があるかといえば、それがカフカの『審判』という作品です。「審判」はチェコ語でいうと「プロテス」、英語だと「プロセス」です。「訴訟」であり「過程」です。

『審判』には終わりがあります。どこで終わるかということ、ヨーゼフ・K というのが主人公の名前ですが（K というのはカフカの K です）、最後に自分も正体を知らない二人の男にいきなり連れだされて、押さえつけられて喉をかつきられて、自分は犬ころのように恥辱の中で死んでいく。これが『審判』の最後です。まったく同時代のわたし自身が遅まきながら影響を受けたことによって、『審判』が 20 世紀のあらゆる作家たち、読者たちに決定的な影響を与えたと思わざるをえませんでした。つまり、自分がかき消されてしまうということでもって、そのことの自己証明をつくっていくこと以外に、存在証明の方法がないんです。

戦後になってオーソン・ウェルズ監督が『審判』を映画にしましたが、かれがどういふふうに 20 世紀の戦後的形象にしたかということ、最後にヨーゼフ・K が殺されると、そのときにきのこ雲がパーッと広がるんです。とても印象的で今でもよく覚えています。つまりずっと殺す側の人間が生きていくんですが、最後はきのこ雲で終わるんですね。これは広島の子雲です。どう思われますか？

広島・長崎である部分的経験を得て、そこから「ヒロシマ以後」という時代のカテゴリーをつくって、広島以後は終わっていないんだというふうにして、われわれは今まで生きてきましたが、第 3 回目の広島・長崎があったらどうなりますかね？ イラク戦争で核兵器が使われるかもしれないし、北朝鮮がミサイルをぶっ放すと瀬戸際外交をやっているし、イランに懲罰するとブッシュが喚いているし、そこでそういうことが実際に起きたらどうなりますか？ これで人類が消滅しますから、そこには白い雲が立つだけで、それを記録

する者がいませんので、これで地球文明は終わりなんです。

ですから、地球文明が終わるということは決して架空のことではなくて、蓋然性としては高いものと考えなければいけない。それを制止するためには、そういうものを制約するわれわれの〈主体〉というものが必要なわけです。ブッシュなり小泉なりをどうやって押さえるか。もっと身近な話として、たとえばゴミ処理の問題もある。水の問題もある。そのためには〈主体〉をつくっていくしかないんです。ブッシュ政権もけっこう押さえ込まれていて、持ってあと2、3年でしょう。そのところに希望が置けるから、わたしは21世紀は「希望の世紀である」と書いたわけです。ヴィトゲンシュタインとメルロ・ポンティと、どちらの方向を選択しちゃいけないのか、しなければならぬのか。いろいろとヴィトゲンシュタインの提示にも何か取るところがあるんじゃないか、といったたぐいの話ではないわけです。

10 ヴィトゲンシュタインの論理破綻

さて、片桐薫さんのご質問にあった、ズラッファとヴィトゲンシュタインについてですが、二人はイギリスの大学で関係がありましたから、そこで惑わされるんですが、わたしが申し上げたいのは、ズラッファはヴィトゲンシュタインに対してまったく剣もほろろであった、という事実です。このところを、片桐さんは軽視なさないほうがよい、と思います。

ピエロ・ズラッファは、アントニオ・グラムシの盟友であり、わたしの尊敬している「リカード全集」をメナード・ケインズから頼まれ編集公刊した経済学者ですが、ユダヤ人であると同時に生粋のナポリナーです。これはこの本にも書きましたが、あるとき学生がかれにヴィトゲンシュタインについて尋ねました。ヴィトゲンシュタインといえば超有名人ですから、学生としてはぜひとも話を聞きたいところです。すると、ズラッファがどうしたかというと、ナポリ人は人を小バカにするときに顎髭を撫であげる癖があるんですが、そのときズラッファは黙ったまま顎髭を撫であげた、というエピソードがあります。これはズラッファのヴィトゲンシュタインに対する痛烈な批判です。

本当にヴィトゲンシュタインというのはくだらない男なんですが、そのエピソードをもうひとつ。なぜかというと、すくなくとも後期のヴィトゲンシュタインについて、非常に評価する人が今でも多いからです。前期のヴィトゲンシュタインの著作をみんなが評価しましたが、特に世紀末ウィーンで「論理実証主義」というものが発達して、この集団はのちにアメリカに行って非常によい仕事をするんですが、かれらはヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』を自分たちのバイブルとみなしていて、実証主義哲学の「ウィーン学派」をつくったわけです。しかし、わたしはこの本にも書きましたが、これはまったくの誤解なんです。実は移り気なヴィトゲンシュタイン自身がもう論理実証主義を放棄してしまっていたときに、それが誤読・誤解に基づいて「論理実証主義」のバイブルになったんです。

ヴィトゲンシュタインは何度も論理実証主義の集会に呼ばれたんですが、『論理哲学論考』が自己破綻してしまったヴィトゲンシュタインは、すでに自分の「論理実証主義」は破綻してしまって、自分で自分の梯子を取り外さざるをえなかったと思ってますから、なかなか招待に応じては行かなかった。第1回目だけ無理に仲介する人がいて出かけたんですが、そこでかれはアンデルセンか何かの童話の話をして問題を逸らしてしまって、ウィーンの実証主義者集団の話の中に入ろうとしなかった。だから、ヴィトゲンシュタインの論は少なくとも論理実証主義に反するようなものはなかったのですが、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』がそのバイブルであるというのは、まったく一方的な思い入れの話です。歴史にはそういうことはよくありますけれども。

それでは、後期のヴィトゲンシュタインは何かというと、言語についてのドッジボール論です。かれは、言語というものは言表できないから沈黙しなければいけない、と割り切ったことを言ってしまって、そのこと自体の中に言語矛盾が含まれていますから、自分でも破綻してしまったわけです。それからあとは、言語はドッジボールのようなもので、言葉をやりとりするなかでその文法（グラマー）が構成されていくということを言った。これは非常に正しい命題で、片桐さんが引いてくださったノーム・チョムスキーの「生成文法」もそうですが、生得的な観念で言語があるというふうに論を立てた人は必ず、言語の文法なり規則はどこから出てくるのかということにぶつかる。それは「use」からだというわけです。言語は使用（use）することによってつくられる。言語とは用いることによってその文脈ができてきて、そして文法ができて意味が出てくる。クライン以来、わたしたちはみなその考えに従っています。

そうでないかぎり、針生さんの言われたド・ソシュールの「言語批判」というのは、現代における知の出発点ですが、言語を音として見るならばまったく恣意的なもので、音というのは恣意的な連合をつくって、そのどこからか意味が出てくる。たしかに、言語ははじめは意味のない音だけですが、それが使われてお互いにやりとりするなかで文法ができて、意味が形成されてくる。ですから、歴史に意味があるかどうかというのは、歴史は言語学といえるかどうか、ということですね。

歴史に意味があるかどうか、ということが、言語によってしか保証できないのなら、その言語は保証するに耐えなもいのだという「言語批判」が20世紀に出てきた。だったら歴史には意味がないじゃないか、人生や世界史にも意味がないということになってしまうわけです。ですから、これは非常に重大な問題なんです。歴史に意味があるのは言語によって意味付けられているからだということを復権させることが、20世紀にとって最大の問題なわけです。この「言語論的展開」という問題は、くりかえし申し上げるように、現代の唯一の哲学であって「現象学」に致命的な問題なのです。その過程で、およそ思想家に値する人たちは、ずいぶん悪戦苦闘してきたわけです。

また、後期ヴィトゲンシュタインの話に戻ります。言語についてヴィトゲンシュタインはドッジボール論を言ってやるんですが、かれは骨の髄まで「独我論」の人でして、自分がやっていること以外のことは信じていることができないんです。これは、イギリスの哲学者でデイヴィッド・ヒュームという、われわれがたいへん尊敬している人の懐疑論に近いんです。ヒュームの懐疑論というのは、どこまで行っても疑うわけです。デカルトは、どこまでも疑えるかもしれないが、疑う自分がいるということは疑えないじゃないか、ということで、この懐疑論の問題を「方法的懐疑」に仕立てて、「身心二元論」でもって解決することで〈近代の知〉をつくった。だけど、20世紀現代ではそのデカルト的な「身心二元論」も、言語が死んでも実体の延長であるという形で身心論が分離していたのでは、世界の收拾がつかず、パンクしているわけですから、それ以前のところへ戻らなければならない。

言語のドッジボールが「独我論」ではだめだというのは、独我論は結局「我あり」だけであって、他者がいないからです。ところが、社会というものはそうではないにきまっています。自分があるということは対照性がありますよ。ということは、他者も同じように対照性を持っているということになる。自他が交通することで社会ができる、という単純明快なところに立ち戻る必要がある。自他の交通（フェケール）によって初めて社会が構成され、意味が生じてくるんです。つまり、他者というものを前提にしないような自我というものは、自我ではないんです。自他の交通がない社会の中で、幽霊的な自我というのはどうやっても生きようがないんですから。ですから、これは、ヴィトゲンシュタインという特異な人の頭の中だけにある自己妄想的仮説なんですね。

ヴィトゲンシュタインの悪口をいうときりがありませんが、かれはウィーンの大富豪の息子なんです。ほんとに途方もない大金持ちです。かれの名誉のためにいっておきますが、受け継いだ財産にはまったくかれは執着がなかった。だから中学校の先生なんかをやって暮らしていたんですが、大金持ちの息子らしく世間のことはまったく知らなかった。政治音痴もいいところで、第1次世界大戦に行くと捕虜になって、収容所で『論理哲学論考』の原稿を書いて、それをバートランド・ラッセルに送って、それで『論理哲学論考』は世間に出た。最後は、ラッセルはヴィトゲンシュタインに手ひどく裏切られるんですけども、ラッセルはヴィトゲンシュタインと付き合ったために、論理学から哲学のほうに行ってしまいました。それから哲学もやめてしまって政治の方へと、どんどん行ってしましまして、最後は運命論者になり、アインシュタインさんと一緒に核兵器廃絶運動なんかをやって、一生を終わっちゃたんですね。ヴィトゲンシュタインのおかげで、偉大な人物のラッセルは人生のコースを逸らされてしまった、と言えます。

「独我論」の話に戻りますが、相手がいて会話が通じるからその中で言語のドッジボールができるんです。ヴィトゲンシュタインの場合は、自分の頭の中で言語のドッジボールだっただけで、実際にはかれの相手がいないんです。だから、ヴィトゲンシュ

タイムのボールは、どこまで行っても競技場に転がったきりです。転がっているだけで使えないですから、文法も意味も生じない。これで終わりなんです。それはよく「チェス」のことも例に出しますが、このプレイでも指す相手が居なければ、駒も動きようがない。同じことです。

後期のヴィトゲンシュタインは「独我論」を脱して「言語ゲーム論」になりました、と。言語ゲームないしは言語プレイは、非常に精妙な言語批判をするわけです。しかし、後期ヴィトゲンシュタインの場合には見えそうに見えてもけっしてそうじゃない。かれの本質である「独我論」では、どこまでいっても意味が生じない。それはつまり、一人遊びですよ。そういう一人遊びになってしまって、そして最後には、対象世界は全部消えてしまおうし、自分も消えてしまって、それで終わりになる。前期の『論理哲学論考』と同じことで、結局は最後には、自分が自分の昇ってきた梯子を外してしまう。たいへんな空中曲芸ですが、上空で自分で自分の梯子を外してしまったら、どうなりますか？墜落死亡をとげる以外にないですよ。ですからわたしは、20世紀的現代で最大の流行思想であるヴィトゲンシュタイン思想は、自己墜落思想だと評するのです。

実際、晩年のヴィトゲンシュタインは、自分の「言語ゲーム論」にもかかわらず、それも成り立たなくなってしまうものですから、最後には自分の原稿を焼き捨てるようにお釈迦さんに命じて学問的生命を自ら絶ってしまいます。死ぬ前の晩まで、消したり書いたり消したり書いたりして、そのことで悩んでいた。最期はほとんど発狂死じゃないですかね。毎回、自分の論が立てるそばから足元から崩れていく。結局最後は、その問題を自分で解けないで、投げ出して死んでしまった。わたしは、ヴィトゲンシュタインの方向には現代哲学の出路をとうとう感じることはできませんでした。このことはわたしなりにこの本の第一巻で細かく書きましたので、皆さんどうぞ読んでください。あれだけ欧米で流行したのに、そこには何も無いんだということが、おわかりいただけると思います。わたしは一周遅れでこれから日本でヴィトゲンシュタイン・ブームを起こさないように、願っています。

11 見えないものの言表化

それでは、メルロ・ポンティの方向性のほうに、話を引き戻したいと思います。

メルロ・ポンティの『見えるものと見えないもの』は、戦後哲学で最大のものですから、ぜひ読んでいただきたいのですが、古典古代ギリシア文明のように「見えるものの文明」ではない、意識と下意識、意識と無意識なら、無意識のほうが世界との認識において占める割合が大きいということですね。これは、シグモント・フロイトという精神分析医が言っていたことですが、わたしは非常に真理だと思います。意識の下には、歴大な無意識の層がある。

無意識だから無規則・無法則かという、そうではない。無意識ほど、フロイトはそれを精神分析において言語化したわけですが、フロイトが病者を治すことができたのはそのためです。無意識の世界にその人の幼児のころの傷（トラウマ）があって、そのためにヒステリーなどのトラブルが起きてくる。そのことが言語化されて解けた場合に、無意識界のことが構造化される。これによってその病者は治るんです。この無意識の分析領域は、精神分析としてはジャック・ラカンが開拓して発展させましたが、もっと広く、いわゆる「構造主義」という形で、人間的自己了解の問題としてレヴィ・ストロースが親族や神話の分析として方法化した。わたしはマルクスの「経済学批判」とフロイトの「精神分析」とレヴィ・ストロースの「神話分析」は、同じ本質をもっている、社会の無意識の領域の法則的探求である、と思っている。

精神分析に対しては、スターリン主義としてのマルクス主義が非常に敵視していた時期があったんですが、フロイトの精神分析は、わたしに言わせれば、マルクスの経済学批判とまったく同じ言語論的な方法論をとっている。いわゆる物象化論ですね。それは無意識界をいかに言表化を通して構造化できるか、ということなのですが、その場合は、無意識界のいうのは或る種の厳密な構造域の法則性に則っているんだ、ということがわかってきて、意識界での構造化よりももっと深いところで構造の規則性を現わすということですが、これはマルクスが資本主義の分析で言っていることとまったく同じなんです。つまり、資本家が自分の利潤欲望を追求して、自由意思に基づいて「諸資本の自由競争」を通じてやっていることが、無意識的な構造化となって資本主義の法則性として現われる、それは資本家＝ブルジュアジーにも強制的な法則として拘束することとなる、ということ、『資本論』で分析して見せた。その端的な現われが、〈恐慌〉です。わたしが近刊する『恐慌論』をぜひお読みください。

資本とは何であるか、ということを一言で答えるということ、何度も試みた人がおりますが、わたしはそんなことはできないと思います。資本主義とはなんぞや、と問う朴念仁がいたら、マルクスはきっと『資本論』全3巻を読んでくれというでしょう。それくらい『資本論』は解析しきって、しかもそれを方法論的に完全に意識化しているんです。だけど、資本家にとっては、解析の必要はないんです。利潤を追求するという自分の自由動機にしたがってやっているだけのことです。つまり、無意識でやっていることが、そういう法則性であるということは、マルクスが対象を分析することによって明らかにした「物象化論」の心髄ですね。つまり、ヴィトゲンシュタインは先に「見えないもの」に注目するんですが、「見えないもの」を浮上させる原理の作用については、沈黙する以外にないとして、その言表を拒否してしまいますから、そこから先は前には一歩も進めなくなってしまう。つまり、浮上させる術をもたない。ゆえに、メルロ・ポンティ的な立場でいえば、「見えないもの」の言表による構造化こそが、20世紀の現象学だということになり

ます。それが〈主体〉の再生の端緒である、とわたしは思います。

12 価値の転換—ニーチェとフーコー

その先の問題で、もう少しお話しします。ひとつは、わたしの本の第一巻で採っているミッシェル・フーコーのことです。フーコーの問題は、メルロ・ポンティの問題と同じくらいに大事です。どういうことかといいますと、20世紀的な現代の認識はどこから始まったかということ、それはいうまでもなく、フリードリッヒ・ニーチェからなんです。ニーチェは20世紀の頭のところで死んだ人ですが、そのかれが20世紀の運命を予言しました。そのあとに続くのが、わたしに言わせればフーコーです。

『悲劇の誕生』を読まればわかると思いますが、ニーチェはもともと卓越したギリシア学者で、古典古代ギリシアについての専門家でした。かれほどギリシアをよく知っていた学者はいない、とわたしなどは思います。他のギリシア学者はかれを小バカにしていました。要するに皆、ギリシア一辺倒ななかで、ニーチェだけは批判的な目を持っていたということです。

どういうことかという、ニーチェは、ギリシア文明は本当は目の文明ではなくて、音楽（ミュージック）の文明だということです。古典古代ギリシアの表現様式に即していえば、「音楽の精神」や「悲劇の誕生」によって確立された文明なんだというわけです。悲劇が悲劇たる特性はどこにあるかという、その本分がそれまでのギリシア文明の本分といわれているアポロンではなくて、ディオニューソスにあるところにある、と。ディオニューソスというのは、いうまでもなく、葡萄酒で酔っぱらって女と一緒に山野を荒れ狂っている神様です。

これまで古典古代ギリシア文明は「見える文明」「ヌース（叡智）の文明」とされてきましたが、研究が進めば進むほどそんなことはインチキなギリシア学者のいっていることだとわかってきます。古代ギリシア文明は、奴隷制文明ですが、これはつまり家父長的で、今と同じ男権文明です。そこには半分女性がいるわけですが、驚くべきことにポリス国家においては女性は市民ではありません。奴隷以下の存在なんです。地中海の母系制文明がエンゲルスのいう世界史的な敗北を被って、ギリシア文明になったわけです。それ以前の母権制の地中海文明を保持しているのは、アテネの一般家庭にいる女性たちなんです。

フェミニズムの問題を考えるとわかりますが、それは人類文明にとって重荷になっている。つまりいまだに解けていないんですね。障害物になっている。古代アテナイに即して解けていないものがあると、どうなるかという、冬の寒いとある時期に突如としてディオニューソスの呼ばわる声が聞こえるんです。これは共同幻想・共同幻聴ですから、一斉にアテネの女の人の耳に届きます。すると、亭主と家族を打ち捨てて、アテネ中の女たちが全部原野に走るんです。そこで女だけで、跳ねたり踊ったりして、出くわしたものは片っ端から殺してむさぼり食ってしまう。自分の子供も殺してしまうし、雄牛なども打ち殺し

て生肉を食らう。これが「ヌースの文明」といわれたポリス国家の実態だったわけです。そうやってやっと蘇生をして、女たちはまたポリス国家のアテネの都へと戻ってくる。

ですから、ニーチェが洞察したことはまったく正しいわけで、ディオニューソスの「酔っぱらいの文明」「舞踏の文明」によって絶えず活性化させられることで、ようやく文明として蘇生しているというのが、この古代ギリシア文明の本質なんです。そういうところに着目したことが、ニーチェの偉大なところで、古典古代ギリシア文明以来の価値の転換をしなければ人類は滅びてしまうと思ったわけです。実際にそのとおりになっていますから、ニーチェが「神は死んだ」という言葉に託した重い意味がそこにある、と思います。

そこからわたしがどこに話をつなげたいかというところ、第二次世界大戦後にニーチェに続く重大な問題として、ミシェル・フーコーによって「人間は死んだ」として人間の死亡宣告が出されたことに注目したい。『監獄の誕生』とかはフーコー研究者によって珍重されていますが、これはわたしからみれば大したことはありません。これは前期フーコーの「パノプティコン」でありまして、監房がそれを一望しているどこかから見られることによって、すべてを支配される、という仕組みです。

戦後の資本主義支配にはそういうところが一時期ありましたが、戦後資本主義の高度成長によって消費文明が出てきてからあとの今日の高度資本主義文明には、そんなものはもうないですね。われわれは、誰からも管理されずに自由だと錯覚しながら、消費して暮らしているわけですが、そういうなかでいかにしてわたしたちが資本によって操作されているかということがあります。これは「パノプティコン」の監視の文明ではないんです。管理文明です。

後期のフーコーは、「性の欲望」というところから読み解いていこうと試みています。かれの『性の歴史』は四巻ありますが、「性の欲望」をキーワードとして解いていく。そしてその中でしか資本制文明は批判的に分析されない。人間は欲望に従って生きている。人間は完全に終焉した。非常に美しい言葉ですが、渚のほとりに人間の死体が横たわっているというところの確認からしか、われわれはこれからは存在しない、とフーコーは言います。これはニーチェの「神の死」にひきつづく「人間の死」として、画期的なこと。わたしの言葉でいえば、〈主体〉はグローバル資本主義のなかで死にました、と。お互いにそのことを確認してから、再出発しようということです。

フーコーは〈主体〉が死んだということを宣告して、それを放り投げたままあの世に行ってしまう、われわれには絶望だけを残していったわけです。しかしかれは、『性の歴史』の最後のところでもう一度〈主体〉の再生をしなければならない、と言って〈主体〉の悦楽というところから問題を解いていこうとします。それはつまり、高度消費文明に回収されないような性の欲望、人間の欲望の根元のところに、どういう前に進むモチーフがあるのかというところから、問題を再建しようとしたわけです。

ですから、フーコーは、メルロ・ポンティと別な意味で〈主体〉が壊滅したと思われる

ところから再出発して〈主体〉の再生を志して、それをわれわれに託して死んだのだと思います。わたしたちはメルロ・ポンティとフーコーが残していった課題を解かなければならないのです。〈主体〉再生の問題はもうないだと思っている人たちに、わたしなりに警鐘を鳴らしたい。〈主体〉再生の問題はまだ根本問題として現存しているんで。何度も繰り返しますが、それはロマン・インガルデンの問題意識とひとつのことなのだ、と思います。

この3巻本では、第I巻では今いったような、現代思想の第一線でどのような問題が提出されていて、それらが解けているかのごとくわたしたちはごまかして生きているが、しかしまだその核心問題が解けていないし、それを解けなければこの世は終わりですよ、ということをわたしは言いたいわけです。だいたい第二次世界大戦後の思想的問題状況、われわれのごく身近なところに凝縮されている問題を取り上げています。第II巻、III巻は、8000年の人類文明史についてですが、その8000年の歴史と、ここわずか50～60年くらいのエッセンスとが、どういう対応関係にあるのかということが、この本のいちばん大事な点です。わたしはそれについてはある程度見当をつけたつもりですけど、本当にその対応関係が歴史編と思想編という形で巧くついているかどうかは、十二分な自信はありません。

ただひとつ確信を持っているのは、戦後六十年というところに凝縮されている、メルロ・ポンティ vs ヴィトゲンシュタインという現代思想の第一線の問題の決定的意義についてです。古典古代ギリシア文明の延長上に現代の西洋中心主義の世界があるわけですから、それはギリシア・ローマ文明に対するニーチェの批判の域をも超えて、もっと遡源して、地中海世界の生い立ちのところから人類文明史を見直していかなければならない。

西洋中心主義の世界とは、言い換えれば、可視的でヌース（叡智）がすべてを支配できると信じた合理主義的な文明です。その文明が世界合理化とその極での世界の非合理化、というマックス・ウェーバー的問題として今日では露呈してきた。つまり、現代合理主義文明はもう破産した、という立場に立って、今日のわたしたちはこの致命的問題を解かなければならない。そのためには、8000年前の地中海文明、つまり古典古代ギリシア文明、奴隷制文明が出てくる以前の、何らかの意味で家産制的で母権的で貢納制的な原初の文明の抱えていた問題点に還らなければいけない、ということも含まれるのです。

この研究会の2回目以降は歴史編に入ります。人類文明史というのは、8000年前の地中海世界史以降を言いますが、人類史の最初というのは、いわゆる原始共産制社会ですから、そこからすると、ヘロドトス以前の歴史は或る種の逸脱なんです。貢納制から奴隷制へと、そしてオリエントからオクシデントへと、世界史が逸脱してから2500～2600年たったわけで、今ようやくまたその世界史的逸脱を許す大転換期がきている。

資本主義社会になって、ゲマインシャフトの社会ではなくゲゼルシャフトの社会になってから、わずか500年だけの話ですから、8000年の歴史から見ればまったく一つのエピソード

ドです。こんな奇々怪々なゲゼルシャフトの歴史なんて、本来の人類文明にはないんです。これはあと2、3年で終わりです、と。これから後はまたゲマインシャフトの社会になる。義理と人情のわかりやすい世界ですね。歴史編では、折り目折り目でそういうところに触れていきたいと思います。

今日のグローバリゼーションによって剥奪された〈主体〉を再生する用意ができていなければ、どんなに臍負目に見ても人類文明史は、これで終わりです。ジタバタしてもだめなんで、以て瞑すべしです。でも、あまり悟りきったことを言うのも嘘っぽいですから、わたしなんかは定めし最後はギャーッとかチキシウメとか言いながら死んでいくと思いますけど（笑）。

だいぶ長くなりましたけれど、これに懲りずに第2回もお付き合いください。どうぞよろしくお願いいたします。

討論

猪野 いいださんの講演は、パネラーである片桐薫さんと針生一郎さんのご質問に沿った明快なリプライでした。これに対してパネラーの方から、さらにおっしゃりたいことがあればお願いいたします。

針生 ヴィトゲンシュタインについては、わたしはあまり知らないのですが、いいださんが書かれたことを読んで、また特に先ほどの、社会との関係を切り捨てた或る種の独我論で言語というものをとらえられるわけがないという話を聞いて、思い出したのは、ヴィトゲンシュタインとは吉本隆明そのものだなということです（笑）。吉本氏のほうがわたしより1つ年上で、ほとんど同世代ですので、初期にはかなり共感もして、かれは『言語にとって美とは何か』を、マルクス主義にも表現論が必要だという考えで書いたということですが、その意図には賛成だった。わたし自身もそんなふうに思っていました。

その本は、時枝誠記さんの言語学を手がかりとしているんですが、ソシユールの言語記号でデノタシオンとコノタシオンというがありまして、デノタシオンとは指し示すことで、言語の一つの対象や観念を指示する作用があります。コノタシオンとは、何か対象を示さなくても、記号としての言語が持っている表情のようなもので、或る感情や意思を伝えること、普通は「含意」という日本語にしていると思いますが、それが吉本氏の『言語にとって美とは何か』では「指示表出」と「自己表出」となっている。

つまり、表出至上主義になっている。そして、言語の究極は動物の“叫び”のようなもので、本能的に深いところから出てくるもので意味が伝わらなくてもいいとしている。それを読んでわたしはまったく失望して、これではマルクス主義ではなくなるし、かれは理論的なものはだめだなと思いました。しかし世間的には60年安保闘争の直後だったこと

もあって、この本は学生に非常に受け入れられて、テクニカル・タームを口まねするような者も多かった。

あの当時、わたしは「第3次政治と文学論争」でかれと論争していて、そのさなかでもわたしが文学学校の教務主任だったこともあって、かれに講義を頼むと、来てくれる。帰りにわたしが一緒に並んで駅まで行くと、論敵とは私語を交わさないという意志を示すために、夜の9時過ぎで真っ暗で読めないのに、岩波文庫か何かを目の前に差し出して歩いているという状態でした(笑)。その吉本くんが、娘たちの影響なんだそうだけれども、『マス・イメージ論』を書いてから、マスコミで取り上げられているものは皆それなりに大衆の支持がある、意味があるんだというふうになってきた。かれ自身がコムデ・ギャルソンなんかを着て、或るところで会ったら、かなり遠くから「やあしばらく。お変わりないですか？ お変わりないですね」なんて話しかけてきて、彼の方が変われば変わるものだと思いますが、独我論のところはあまり変わっていないんじゃないかなと思います。そんなことを思い出しましたので、補足いたします。

片桐 ヴィトゲンシュタインは、いいださんに言わせればくだらない男で、理論的にもだめなんだということですが、そのことはわたしも本を読ませていただいてよくわかったんですが、わたしがお聞きしたかったのは、いいださんも尊敬しておられるズラフファが、なぜ十何年間も毎週木曜日にヴィトゲンシュタインに付き合っていたのか。またウィーンにヒトラーが入城するがどうすればいいかと聞かれて、適切な答えをしてやっている。それは何故なのかということです。もうひとつは、グラムシの最後の「ノート」29 ですが、これは反ヴィトゲンシュタイン論ではないか、ということをお願いしたかった。

これらのことについては、先ほどの休憩時間にいいださんとお話ししてもう済んでしまいましたし、リプライでも答えていただきましたので、これ以上は特にごさいません。

猪野 それでは、今度は、会場からのご発言をお願いいたします。

中山茂 中山茂と申します。科学史家です。先ほどのいいださんのお話の中で、これからヴィトゲンシュタインは流行るとおっしゃったのが、ぼくにはよくわからなかったのです。ヴィトゲンシュタインの伝記なんかはいくつか出ていますが、それは非常に面白い。奇行というのか、ちょっと普通の人と価値観が違う人で、例えば小学校の先生のほうが大学の教授よりもいい仕事だと思っていて、まじめにやりすぎて、子供を殴ってしまって追い出されたなんていうエピソードがあります。しかし、かれの論が始めになったという「論理実証主義」なんてこれから流行るのかしらという気がします。

戦後、「実存主義」と「マルクス主義」と「論理実証主義」の3つが日本に入ってきましたが、論理実証主義はいちばん面白くなかった。ぼくら理科系の者にとっては、あんな

もの当たり前のことでバカバカしい。それが戦後のアメリカ哲学界でヘゲモニーを持ったというのは、それをやらないと、マッカーシーのレッド・ページに引っ掛かるからなんです。最後にはシンボリック・ロジックが出てくる。要するに、「論理実証主義」を戦前の連中がありがたがったのは、対抗馬としてナチス科学があったり、唯物弁証論があったりして、その中から純粋な西洋の伝統を守ろうというようなところがあって、それはアメリカ哲学界はもとより、左翼にも、バナールやニーダムのような連中にも、それからロバートソンみたいな社会学者にもみんなありました。ぼくらの世代は、そういうふうに感じます。

ぼくの師匠だったトーマス・クーンなんかは、ぼくより六つくらい上ですけども、かれらも戦争末期に動員に引っ張りだされて、それから最後に原爆をつくったりしたわけですけども、そうなるともう守るべきものという感覚はないわけですよ。だから、その中心にあった「論理実証主義」がありがたいものだという感じはしないんです。そういう論がこれから日本で流行るようになるというのはどういうことか、と思ったのですが。

いいだ 中山茂さんはわたしの長年の友人ですが、今回もわざわざ御出席と御討論をいただいて、ありがとうございます。中山さんはどなたもご承知のごとく、トーマス・クーンの『科学革命の構造（科学パラダイム論）』を正確な日本語に翻訳して紹介し、その意義を敷衍した日本で最初の方です。戦後のいわゆる科学的思考のパラダイム・チェンジでは、中山さんが師事したクーンのパラダイム論は、非常に大事なんですね。

普遍的な時間的過程でいうと、科学というのはいつもなだらかに平和的進化しつづけるようなものであるということ、実はその中にいわば通常科学の時代と革命的科学の時代があって、革命的科学というパラダイム・チェンジを大きくやってこれまでの科学通念をぶっ壊したから、前進をとげてきているのが実情である。そのあとに違った高いレベルで新たな通常科学がずっとなだらかに続く。わたしは、まさにそのとおりで思って中山翻訳を読みましたが、日本の科学者自身にとってそのことが生産的に使われていないということは、非常におかしなことだと思います。わたしはなにせ革命家のはしくれとして戦後六十年間やってきていますが、トーマス・クーン＝中山茂の「科学革命」が一番ピタリときます（笑）。

中山さんはおっしゃいませんが、世界の科学史にとっても日本の科学史にとっても、ニーダムの仕事を包括して超えるような仕事が、これからも中山さんのお仕事としてどんどん出てくるとは思いますけど、科学というのはそういうものなんで、その科学についての物の考え方は、今日お話しした思想についてのわたしの考え方と非常に密接に関係してるので、とても大事だなと思います。

それから「論理実証主義」については、これから日本で流行るということではなくて、欧米ではかつてヴィトゲンシュタインが大流行して、現在でも流行ってますよ、というこ

とを言いたかったんで、中山さんのアメリカ哲学に対する評価については、わたしもだいたい同感です。ただ、アメリカ哲学にも素晴らしいところはあり、それはやはりジェームズとデューイの「プラグマティズム」の普遍性ですね。

プラグマティズムに影響されたといえ、例えばわたしの何人かの師匠のうちの偉大な一人である鶴見俊輔さんがそうですが、鶴見さんの骨格をつくっているのはプラグマティズムであることははっきりしています。こういう思想がこれから日本に普及して根付くかどうかということは、プラグマティズムの戦後の受け入れ方に関係すると思います。

これもまた、わたしたち左翼とのあいだには長い歴史があつて、ジェームソンがスターリン主義としての自称左翼からさんざんやられたときの憤りに似たものがいまだに残念ながら残っていると思います。

戦後すぐのときの日本のマルクス主義哲学者は、わたしの師匠である梅本克己などを除けば、反代々木派の唯物論哲学者であっても、鶴見俊輔はアメリカ帰りでプラグマティズムであった、だから、「思想の科学」はプラグマティズムだ、これはマルクス主義的左翼にとっては最大の敵である、という論理でした。今でもわたしと一緒に仕事をしている大阪の哲学の巨匠、山本晴義さんは、若いときはその先頭に立って、アメリカ・プラグマティズムを現代イデオロギーの代表として徹底的に批判していました。今は自己批判してその不毛な批判は止めてしまいましたが、鶴見さんの方は批判を止めてからの山本さんとは付き合いがないから、山本氏はあの時こんなことを言ったけれどそのあと近頃は何をやっているんだと、ときどき聞かれます、困りますよ（笑）。当然、ジェームソンと同じことでこだわりは残りますよ。

ですから、プラグマティズムに関しては、われわれマルクス主義者は必ずしもいい役割を果たしていなかった。現在的には、それはスターリン主義の問題だということは、山本晴義さんもふくめてわたしたち自身の問題としてはっきりしています。スターリン主義はそういう思考方法であるといえる、と思います。

中山 いいださんは今回この3巻本を書き上げましたが、どうですか、死ぬまで書き続けませんか（笑）。先ほど話が出たニーダムも『中国の科学と文明』という大著を書いている途中で亡くなりました。翻訳は十何冊出てます。

僕がニーダムに会ったときに言ったのは、あなたは計画がどんどん広がって行って永久に済みそうもない。だから済ませなくてもいいんじゃないか。ずっと未完成交響曲を奏でていれば長生きできてよろしい、と（笑）。すると、かれも、そう思う、といった。自分は道教の徒だから終わるか終わらないかなんて考えない、と（笑）。だから110歳くらいは生きると思っていました、パーキンソン氏病に罹って、94歳で死んでしまったんです。ぼくはかれの仕事の続きを日本でやろうと思ひまして、その話をぼくの主治医だった川上武にしましたら、そういうのをずいぶん見てきてるけれども、みんな最後まで完成しない、

死ぬときはみんな往生際が悪く非常に苦しむ、あういうのは見ちゃおられないから、早く仕事をまとめて心安らかに死んでくれ、といわれました（笑）。医者としてはもっともな意見だと思います。でも、医者の言うことなど気にせず、「生ける験」として書き続けてください。あの調子で書くと、これから十数冊書かないと、完結しないはずです。それから自伝も書いてください。

それで、いいださんにこれから先、自伝も含めてずっと書いてもらえないかなと思うのは、テッサ・モリス・鈴木というイギリス人の女性がいますが、彼女が昭和に生きた三人の人物の半生記を書いていて、その一人がいいだももなんです。それを読むと他にもいろいろと知りたくなりますので、やはりご自身が書いて残してほしい、と思います。

いいだ テッサは私のところに2回くらい取材で来ていました。だから日本語で書いたんですよ。当時無名の若者に毛の生えたものでしかなかったわたしを、かのじよは「昭和期を代表する日本の三人の大思想家の一人がいいだももです」と、本当に書いているんですが、別に恋人関係でも何でもありませんが（笑）、本当にかのじよはどう勘違いをしたんですかね（笑）。

白鳥紀一 この本のボリュームと今のお話に圧倒されて、自分より一回り上の先輩がどうしてこんなに元気なのかと思って、何も申し上げる気力がない、というのが本音です。でも最後の方のお話は、物理屋としても関心があります。いろいろないい方が出来ると思いますが、主観主義というか、自分の外に世界が見えない、ということだと思っんです。

たとえば、この頃プロ野球で打者走者が一塁に滑り込みますね。滑ると抵抗が大きいのですぐ止まります。他の塁だとタッチプレイですからタッチを避ける意味もあるけれども、その塁に止まらなければならないという制約があるから、滑り込みは理にかなっています。一塁ではそうではないので、走り抜ける方が早い。大リーグでは滑りこまないそうです。あれは、早く一塁につきたいという意志の表明をしているので、客観的に早くつく努力をしているわけではないのですね。それが受ける。そういえば、この頃は球場全体が次の一球を息を呑んで見守る、といった風景はなくなりました。観客は観客で騒いでいる。プロ野球としては勝ち負けよりも観客の喝采を受ける方がいい、というのはあり得るわけですが、本当にどうかよりもどう思われるかの方が大事だということになると、物理は出来なくなります。政治もそうでしょう。必勝の信念を頼りに戦争をすれば負けます。それでも、戦争をして相手をやっつけようとあおる方が、負けるまでは人気を集める。この頃がそうですし、戦前もそうだったんでしょう。武谷三男さんが「自由とは必然性の洞察である」とヘーゲルを振り回したのも、主観主義が気に入らなかったからではないでしょうか。

一塁ベースの滑り込みは、大学一年の力学の試験に出したことがあるんです。答はほぼ半々でした。その中に、物理学はわからないけれど中学以来野球をやって来た経験から

いって、絶対走り抜ける方が早い、という答案があって、これは物理としてはいいんだけど、物理学の答案としてどういう点をつけるべきか、大分迷いました。

外の世界、自分たちがどう思うかとは独立な世界があるのでなければ力比べで、力の強い奴のいうことが通ることになります。こっちに物理的な力がないときに、それを止めさせるにはどうしたらいいか。まあそれは、実際にやってしくじってみるしかないんですよ。上でいった野球部の学生のように。そうすると、世界は滅びるしかない、といういいださんの話にあってしまうんですが、失敗してからその先に、もう一度やってみるチャンスがないと困る、という気もするんです。

もう一つ気になっているのは、この主観主義の瀰漫というのが系譜的には「70年」につながっていると思われることです。吉本隆明の話も出ましたが、これは70年の運動と敗北の質につながるのではないかと。これはどうも大変に辛いのですけれども。

いいだ つまんないよね、折角、身養生して胃癌だというのに八十二歳でこうやって頑張って生きてきたというのに、ほんとうに今度はもう一度やれるチャンスはないんだから（笑）。さっきの針生一郎さんの吉本隆明論はすごく面白いので、何かそれに書かれたほうがいいと思うんですよ。わたしも実はまったく同感で、本人がいない席で言うのは良くない面もあると思うけれども、針生さんのおっしゃるとおり、吉本氏の『言語にとって美とは何か』は「表出」の一点張りなんですね。わたしに言わせれば、表現論と意味論がないんです。そんなことで、言語にとって美とは何か言えるはずがない。言えそうに見えるのは、言語にとって詩とは何であるか、意味があるのかのみであり、美であるから、それは先ほどの白鳥さんの発言でいえば「主観的情緒」の問題ですから（実際には速く滑り込めなくても、そのほうが速いと思っている）。言語論一般にとっては、そんなことは表現にも意味にもならない、と思うんです。

どうして「表出」の一点張りではだめかという、針生さんの巧みな比喻でいうと、吉本氏は人間の言語というのは動物の叫びと同じだと、実際に言っている。つまり、小鳥がチッチと鳴いているのと同じだということです。動物の鳴き声や叫び声も確かに「表出」ですが、それは人間の言語の表現・表出とはまったく別のものであることは自明なことです。人間と動物をどこで分けるかという、人間は言語を語っているのであって、動物は永久に言語は語ることはできない。どこで人間と動物を分ける必要があるかということがわからなくなると、動物も人間も同じように叫ぶから表出であって、表出論でやれるということになってしまい、識別がないんですよ。「万里の長城」の概念分割がない。

針生さんの状況論的な説明を聞いてなるほどと思いましたが、いかに60年安保が敗北に終わったからといって、あそこで三べん国会を回っただけで挫折してしまったと称するのもよほどチンケな学生なんだろうけれど、そういう状況だからだといって「派」を唱えるのはどうも解せないところがあります。そういうチンケな連中を相手に商売してみたっ

て、どうということにはなりっこない。言葉の正当性のためにも、天下国家のためにも、そういうくだらない話は一日も早く、針生さんによって一鉄槌を食らったほうがいいんじゃないか、と思いました。便乗の言です。

猪野 ありがとうございます。今日の大先輩方のお話をお聞きしながら、わたしはなんと贅沢な立場にいるんだろうと思いました。連休の最終日にたくさんの方にもお出かけいただきまして、本当にありがとうございました。最初に申し上げましたように、湘南科学史懇話会も九年目に入りましたが、四回連続でやるというのは初めての試みです。この先どうなるのかわかりませんが、書物を繙きながらひとつひとつ勉強させていただきたい、と思います。できれば最後までご参加ください。また宣伝もよろしく願います。(終)

第46回*2006年6月4日

パネラー：近藤節也

リプライ講演：いいだもも

古典古代ギリシア文明とは何であったのか？

—その人類文明史的位位置価

はじめに

猪野修治 みなさん、こんにちは。連続懇談の第2回目を始めます。お忙しいところをご参加いただき、ありがとうございます。今日は、ちょっと時間も押し迫っておりますので、私のほうから簡単な話をさせていただきます。

なぜ4回連続懇談を催すことになったのか、繰り返しになりますが申し上げます。昨年の11月頃に、いいださんから、この『〈主体〉の世界遍歴』を送っていただきました。これまでも、著書を刊行されるたび、そのつど、たくさんの著書をお送りいただいて、叱咤激励を受けてきました。しかし、なにしろ公務やらなにやらの諸事情があり、なかなか読めないでいました。しかし、今回の本ばかりは例外でして、六〇年間の長きにわたり活動家・思想家の最前線におられる、いいだももさんが、壮大な地球文明史を書いておられることを知り、身震いするような思いをいたしました。わたしも含めた二一世紀の若者たちが、どういうふうな世界観をもって生きていくか、を考えるとときに、これまでの地球人類文明史を批判的に総括され、それをもって、現代社会にたいする新しい思想・世界観を構築しよう、というまさに“主体的”な試みに対して深く感銘いたしました。

そこで、わたしは、ぜひとも、懇話会でお話をしていただこうと思いましたが、わたしのこれまでの体験上、1回や2回の懇談では収まらないだろうと思っていました。その後、江ノ島の「岩本楼」で、地元の人たちによる「出版を祝う会」がございました。90名近くの参加者があり、わたしも参加させていただきました。そこで、わたしは本書をめぐって4回の連続懇談をやりましょう、ということ、その出版記念会の席で、いいださんと参加者に申し上げ、有言実行で始めたわけです。今日はその第2回目であります。読めば読むほど深い本だと思います。皆さんもおっしゃっておりますが、「事典」代わりに、あるいは、自らの学問的・思想的な世界観を作るさいのひとつの道標として、この本を参考にし、活用すべきだと思いました。

前回（第1回）は、グラムシ研究者の片桐薫さん、美術評論家の針生一郎さんから、コメントをいただきました。そのあと、リプライ講演として、いいださんにお話をさせていただきました。それらの講演内容は全部、記録にとってありますので、いずれ、この懇談会の記録・報告は『湘南科学史懇話会通信』にきちんと掲載する予定であります。

いいださんの長年の同志であります片桐薫さんからは、グラムシ研究者の立場から、この本に対する忌憚のないご意見をいただきました。まずはじめに、年齢と仕事ということについて語られ、80歳を過ぎられている、いいださんが、このような実証的でかつ学問的レベルの高い大著を書かれたことに敬意を表されました。それから、歴史と現代の問題を照らし合わせながら、その意味を問われました。とりわけヴィトゲンシュタイン、メルロ・ポンティ、フッサール、という二〇世紀の代表的な哲学者たちの認識論的展開に対する独自の視点を明確に示されている、ことについての所感を述べられました。さらに、イタリアの思想家ズラッファとドイツの哲学者ヴィトゲンシュタインの関係から質問をされました。片桐さんの真摯な読み込みからのご発言に感銘したしだいです。

もう一人の発言者の針生一郎さんは、実に味わいのある独特な話をされまして、前回の懇談会のあとに、多くの参加者の方々から、さまざまな好意的な反応がありました。針生さんは、藤原書店の社長から、いいださんがこの本を3ヶ月で書かれたことをお聞きして非常に驚かれたこと、また、この本がきっかけになって、針生さんご自身がお書きになる本のテーマが決まったこと、などを話されました。それは、1930年代に社会主義者、アナキスト、ユートピアン、オカルティスト、ヌーディスト、フェミニスト、という文学者・芸術家が集まってできた「コロニーの歴史」ということでした。それから、針生さんはいいださんとは同世代で、戦後は、いろいろ一緒にやってこられました。学生時代からのいいださんとの関わりの中から、いくつかのエピソードを紹介され、いかに、いいだももさんが「怪物」であるか、を語られました。

片桐さん、針生さんの貴重なコメントのあと、いいださんにリプライ講演をいただきました。この3巻本がどういう構造になっているかということの説明をいただき、二〇世紀の認識論的世界に対していいださんの独自な見解を改めて示されました。そして、今回は、ギリシアに戻って、「古典古代ギリシア文明とは何であったか」というテーマでお話しいただくことになっております。

さて、今日のパネラーの近藤節也さんをご紹介します。わざわざ東京からご夫妻でお出かけいただきました。ほんとうにありがとうございます。江ノ島の出版記念会のときに、いいださんからいただいたメモに、近藤さんは、この本のすべてをお読みになった最初の完読者である、と紹介されておりました。刊行された早々に、最後までお読みになった方とはどういう方なのか、と興味を持ちまして、本日のパネラーにお願いしたしだいです。近藤さんは東京大学美学美術史学科を卒業後、東映映画(株)に入社され映画監督をされました。その後フランス・フロニユ社(現・フロンティア)の日本会長を務め、現在はアメリカ・イオンド大学の名誉芸術学博士ということでした。

パネラーをお願いした直後に、近藤さんから著書『美と芸術のプロムナード』(近代文芸社、2003年)という本を送っていただきまして、丹念に読ませていただきました。いいださんの本との関係から感想を申し上げますと、近藤さんの本には、いいださんの今回の

厩大な本のエッセンスのようなものが、各所に書かれておりまして、そのところをもう少し深く掘り下げたら、いいださんの大著と同じような大著になるな、と直感しました。今、ご本人に確認いたしましたら、そのとおりだということです。近藤さんの本には芸術、文学、詩、思想などなど、ありとあらゆるものが、びっしり高密度につまっておりますが、基本的スタンスは文学・芸術・思想等々における「美の有様」の問題であるとお察しします。これから小説もお書きになりたいとおっしゃっておられます。ぜひ、そのへんも合わせてお話を伺えたらと思います。近藤先生、どうぞよろしく願いいたします。長くなりまして恐縮です。

〈主体〉をめぐる諸感想

近藤節也

ご紹介いただきました近藤です。ちょっとのどの調子が悪いので、お聞き取りにくいところがあるかもしれませんが、あらかじめお許しいただきたいと思います。

『〈主体〉の世界遍歴（ユリシーズ）』について何かいえ、とのご要望を受けて、本日東京より参上しました。30分、何でもいいから話せということでしたが、どれだけのことが話せるかわかりません。話し方次第で30分は長すぎもするし、短すぎるともいえるのです。

わたしの日常の周辺ではいいださんのことを、ももさん、もも先生、（大学の）先輩、パチンカー、大殿、などいろいろの名で呼んでいるので、話の中で若干の不統一があるかもしれません。あらかじめご了承くださいます。また、『〈主体〉の世界遍歴』といちいちいうのは煩雑なので、以下『ユリシーズ』といわせていただきます。

1 『ユリシーズ』の瑕疵

2年前、もも先生から「ギリシア」を扱った著述をされているということを知りました。わたし自身かねがね、オリエント文明に関心をもっていたので、それと不可分のものとしての「ギリシア」ができあがるのを楽しみにしていたのですが、昨年末、目の前に現れたのがこの大作でした。

主として文学の領域でいわれることですが、源氏物語、里見八犬伝、大菩薩峠を抜きにすれば、日本人作家には長い作品が少ない。また構成力が乏しい。そのことは、一般的に言って、思惟的であるよりは直感的である、したがってあまり論理行為に適していない日本人の体質にかかわっているようにも思えます。国会議員の下手な議論を聞いていると、その思いを深くします。また、それは肉食よりは菜食を伝統とする日本の食生活にも関係があるでしょう。そうした点で、今回のような巨編をものした、いいださんの能力はほとんど、わたしなどの日本人に対する通念を超えたもので、汎世界的で、化け物的な巨人と

も思えます。

むろん文芸にかぎらず、映画においてもそうですが、ものごとは長いだけが良いわけではない。映画の世界などでは虚しい大作、愚劣な超大作というものがしばしば見受けられます。しかし、『ユリシーズ』には、その内容の精密、高度の知識、その他で、「知のエンサイクロペディア」ともいうべき質的充実があります。ただ内容の高さに応じて大衆性からはなれるのはやむを得ないことで、読書の対象としては、いわば高段者向きの著作であることは確かで、ここに書かれていることすべてを理解できる読者を探すのはなかなか難しいと思われまます。

ところで、およそ何事についても、人が何かを真剣に語る時、その人がどのようなアイデンティティに基づいてものをいっているのか、ということが求められます。いわばその人の身分証明書ともいうべきものが必要とされるのです。今、そのことを自分にあてはめて、いささか自己紹介をさせてもらおうと、わたしは本質的には映画監督ですが、作家、評論家であり、また芸術学、人文学にも多少かかわっています。

わたしが今回、『ユリシーズ』について関心をもち、読ませていただいて驚倒したのは、新左翼の巨星と思われるいいださんの人文学的超人部分でした。その反面、映画監督あるいは作家としての立場からいって、読む者にとって『ユリシーズ』にもしいささかの瑕疵があるとするとするなら、(わたしは本作品を一個の芸術作品として見たいからというのですが)それは作品構成についての意識不在のような気がします。

およそ、映画でも文学でも、実作にあたってわたしなどが悩むのは、全体の構成や造形と語り口の問題です。起承転結といたり、序破急といたり、それは時に芸術作品における美学上の要請になっていますが、『ユリシーズ』は比較的そうしたものに無関心で、そのことが部分的にもものすごい内容をはらんでいながら、その素晴らしい内容を順序だてて物語り、首尾一貫した概観を、読む者の頭にきちんと残すという結果を招きにくくしているような気がします。わたしは『ユリシーズ』を、単なる知の宝庫としてではなく、「芸術作品」と位置づけたいので、あえてこんなことを言わせてもらいます。

2 ギリシアは西欧文明の根幹

ところで、本作品についての出版社の謳い文句の中に、「8000年の人類文明はどこへ行くのか」というのがあります。

グリプトリス人の残した石の記録によれば、人類は恐竜の時代にすでに存在し、高度のテクノロジーを駆使してこれと共棲していたもようですが、今、それはさておいて、公認されている西洋美術史の観点からいえば、今から3万年前のオーリニャック期、2万5000年前のソリュトレ期、1万年前のマドレーヌ期の旧石器時代に、美術行為として現代に残る文化作業が行なわれていますが、その代表とされるフランスのラスコーやスペインのアルタミラの洞窟絵画をもって文明と呼ぶには無理があります。

わが国の場合でも、アシカビ朝、から、ツクリヌシ朝、ヒミイヌシ朝、アメミナカタヌシ朝、タカミムスビ朝、クニトコタチ朝、イザナギ朝、アマテラス朝、オシホミミ朝、ニニギ朝、ホホデミ朝、ウガヤ朝、神倭朝（天の朝）まで 8800 年の歴史があるとされていますが、真に文明と呼べるものはいつごろからなのか、考証は困難です。

『ユリシーズ』のⅢ巻 1954 頁を読むと、アレクサンダー大王の東方遠征時を境として、1663 年プラス 5000 年または 6000 年と書かれているのですが、それは中石器時代になります。人類文明発祥地点をどこに置かれているのか、わたしにはよくつかめないので、同じ箇所でも述べられている哲学の出発をギリシアでなくエジプトの神官に求めておられるのは、わたしには新たな学説でした。

とはいっても、西欧文明の根幹がギリシアにあることは誰にとっても明らかなことで、例えば、ユダヤに発したキリスト教にしても、マタイ、マルコ、ルカなどの、福音書のはじめはローマ帝国の第二公用語としてのギリシア語を通じてヨーロッパ全体にひろめられたのです。しかし、そのわりには、ギリシアは意外にわかりにくい。

オリンポスに立てこもり、12 神を束ねて勝手放題な振る舞いをして、それでも神々の長と畏怖されたゼウスはジュピターとして、のちのローマ帝国やモーツァルトの 41 番シンフォニーにも名を残していますが、これは多分ホメロスが書いている、ミュケーナイから先史ギリシア暗黒時代にかけて北方から侵入した鉄器民族の指導者だったのではないか。具体的にいえば、小アジアのコーカサスあたりにいたアーリア人種のケルト人が南下して古代ギリシア人になり、ペラスギ人とも呼ばれました。ゼウスの父とか祖父とかいわれるウラノスやクロノスという名前はのちに述べるフェニキア文明の英雄ですが、それに変わって、後発のゼウスがギリシアを篡奪したのではなかったか。ウラノスやクロノスはギリシアの先文明の英雄ではなかったか、とわたしは思います。

ゼウスは弟の海神ポセイドン（これもフェニキア由来の神で、さらにいえばアトランティス由来の皇帝の名前）、冥界の神ハデスと世界を 3 分割し、自らは雷電を武器として地上世界に君臨しました。その子といわれ、デルフォイ神殿を乗っ取って主祭神におさまった太陽と芸術の神アポロンや、愛と美の女神アフロディテー（ローマ名のヴェニウス）、商売と通信の神で泥棒の神でもあり、今では馬具屋あがりのファッション・ブランドとしてもはやされているヘルメス（これもフェニキア由来で、文字の発明者）、葡萄と酒の神ディオニューソス、大地と穀物の女神デメテルも、オリュンポスのビッグ・ネームです。

特殊な存在として、神に逆らって人間に火を教えたプロメテウスは古代無神論の元祖かもしれません。ゼウスの従兄弟だったともいわれますが、それは嘘で、被征服、先住民族、先文明-フェニキア、さらにいえばアトランティスにさかのぼる超有力者だったのは確かです。かれが人間に教えた「火」は象徴であって、のちの言葉でいえば「レジスタンス」と「実存主義」なのだといわたしは理解しています。

プロメテウスというのはそもそも「先に考える人」という意味で、その弟はエピメテウ

ス(後に考える人)といます。たまたまパンドラという女がプロメテウスのところに行ったとき、かれが留守でエピメテウスと仲良くなってしまった。そのとき、彼女がもっていた箱を無思慮にあけたら、数々の悪徳があつという間に逃げてしまい、あとに残ったのはのろまな「希望」だったとはよく知られた話です。

ともあれ、のちに古代無神論の代表者といわれるエピキュロスを先導する、すべての超越者をこの世から追放しようとする無神論をプロメテウス主義といます。カール・マルクスはプロメテウスを借りて「端的に言えば、すべての神々をわたしは憎む」といい、さらに「人間の自己意識を最高の神性とは認めない、すべての地上および天上の神々に対する哲学自身の宣言である」と自己の無神論的立場を著書の序文で述べています。

また、こうした存在とは別にギリシアには特有の英雄像があり、それは例えば、オイディプス、アガ멤ノン、アキレウス、テセウス、ヘラクレスから、トロイ戦争の英雄で今回のいいださんの著書の主人公オデッセイウス(ラテン語でユリッセウス、英語でユリシーズ)その他があります。

余談ですが、アイルランドの主都ダブリンの1日を「意識の流れ」という近代文学の手法で書いた、ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』は有名です。そしてわが国の古事記についてもいえることですが、かつて歴史書と思われていたホメロスの『オデッセイア』や『イリアス』は古代からの口承伝説を詩的空想と推理で肉づけした古代屈指の文学作品だったといえます。それは『ユリシーズ』に書かれているように、古代海洋民族フェニキアに発したアルファベットのギリシアへの導入のおかげです。

フランス革命以前、ディドロが編纂した百科事典では紀元前2000年頃、サンチョニアソンという人が人類文明の根源的記録である『フェニキア史』を書いている、3世紀になるとこの書をめぐって、教会の父といわれたエウセビオスとギリシアの哲学者ポルピュリオスの間に真贋論争が起きたりします。ポルピュリオスはのちのモーセ旧約は『フェニキア史』の複写だと主張しました。これはユダヤ教に基礎を置くキリスト教には困ったことですが、この史書のはじめの部分(具合の悪いところ)をエウセビオスが複写しなかったため、古代の真実は永久に不明になりました。エウセビオスは非常に神学には熱心な人だったけれども、ときどきインチキをする。ポルピュリオスのほうは正直な人なので、どうもこの人がいったことのほうが正しいのではないかともいわれています。

この文書については、のちにギリシアのヘシオドスやホメロスがこれらを換骨奪胎して自分たちの神々や巨人のギリシア的説話を勝手に作り上げてしまった(ロベール・シャール)という意見もあります。個人的にはわたしはこの意見に賛成です。

そもそも世界四大文明といわれているものに、エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明などがありますが、文学作品と評価されるもので、ホメロス以前のものとしてこれに匹敵するものは、BC3000年に楔形文字で書かれたメソポタミア神話の英雄叙事詩「ギルガメシュ」とエジプトの「死者の書」しかないのではないのでしょうか。

3 現代西欧のあらゆる主題が見出されるギリシア

先史時代、アルカイック時代、古典時代、ヘレニズム期と続くギリシア史でギリシア哲学や芸術文化が最高点に達したのは、紀元前 480 年、490 年と 2 度のペルシア戦争を、アテネを中心にしたギリシア連合軍が乗り越えてから、ペリクレスを擁したアテネが民主制の頂点に向かった時期でした。

対ペルシア戦争にあっては、マラソンの走者の逸話で知られる第 1 回ペルシア戦争の英雄王ダレウス、ヘンデルのオペラでも名高いペルシア王クセルクセス、大平洋戦争においてアッツ島で全滅した日本軍の祖形のごとく、300 人のスパルタ兵とともにテルモピュライ峠で玉砕したスパルタ王レオニダス（今その名はチョコレートになっている）、わが幕末の小栗上野介のごとく将来を見据えて平時から海軍力を養い、サラミスでペルシア艦隊を撃破した智謀の英傑、テミストクレスなどが有名です。

小栗上野介という人は、幕末に将来を見越して横須賀の海軍基地の礎をつくった人で、のちに東郷元帥が「日露戦争で勝てたのは小栗上野介のおかげだ」といったという話が残っています。この人は時の徳川幕府一番の英才でしたが、維新に際して粗暴な官軍薩長兵士に斬首されます。同じようにテミストクレスは、平時から海軍力を蓄えてサラミス海戦を戦い抜き、それほどまでに国家と国民に尽くしながら、戦争が終わると貝殻追放であっさり追放されてしまいます。当時のギリシアでは民衆が気に入らない人物を貝殻に名前を書いて投票し、追放してしまうシステムがありました。それでテミストクレスが戦った相手国のペルシアに亡命をすると、それをまたクセルクセスというテミストクレスにさんざんひどい目に遭ったペルシアの王が快く受け入れたという話があります。

また、ギリシアには、実質的に世界哲学の原点ともいえるタレス、ゼノン、バルメニデス、ヘラクレイトス、デモクリトス、エンペドクレス、エピキュロス、ルクレティウスなどの自然哲学者たちや、後世に知識人の原点ともいわれるソフィストたち、哲学の主題を世界解釈から人間実存の解明にもちこんだソクラテス、プラトン、アリストテレスなどの哲学者がおり、そこには唯物論、存在論、無神論、ストア学説、弁証法、原子論、快樂説、唯心論、実存主義、その他、後世西欧哲学が扱ったあらゆる主題が見出されています。

理想主義哲学者で貴族政治を信奉したプラトンについては当然、いいさんはお嫌いなのですが、超越価値を個体に優先させるその哲学はのちに来るキリスト教にとって、神を頂点にこの世界を説明しようとする点で有効で、ローマの神学者アウグスティヌスたちによって採用され、中世キリスト教の基礎的主張になります。それをめぐって有名な普遍論争を引き起こします。これを唯名論と実在論の争いといいます。簡単にいうと、この世界にはプラトンの言うように「花の美しさ一般」というものがある、という立場[唯名論]に対して、「いやそんなものはない、この世には美しい個々の花があるだけだというのが[実在論]です。それは中世にさんざん論争されたことですが、後に来る実在主義にも関

連して、決して結論が出ない論争です。

同じ時期に詩や絵画や彫刻も栄えましたが、何ととってもギリシア悲劇といわれる演劇はアイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの3人に代表され、西欧演劇の祖形を形づくりました。小説という文学形式ははるか後世に属するのですが、20世紀にはカザンザキスの「その男、ゾルバ」「キリスト、最後の試み」があります。最近「ダ・ヴィンチ」という映画がキリスト教会と問題を起こしていますが、カザンザキスはそのアンティ・キリスト的作品によって死後もその墓に糞尿をかけられているといえます。

時代ははなれますが、映画監督ではジュールズ・ダッシン、アンゲロブロスなどがよく知られています。ジュールズ・ダッシンという人、格調の高い作風で、後にハリウッドへ行き、ギリシア悲劇「フェードル」を創りました。「旅芸人の記録」「アレクサンダー大王」はアンゲロブロスです。「アレクサンダー大王」は実際の王の話ではなく、革命家を主人公にしたものです。それから、クレオパトラ・ロータという女優が「春のしらべ」というきれいな映画を作った。「突然炎のごとく」（フランス語の原題は「ジュールとジム」）の原作は73歳で処女作を発表したというアンリ・ピエール・ロシェでした。オイディプス主題の「アポロンの地獄」（パゾリーニ）や、「エレクトラ」（ダッシン）もありました。

詩についてはレスボス島の女流詩人サフォーが有名です。「サフォーの死するや、なんぞ早かりき」といわれてその死を悼まれた人ですが、美人といわれていますが実際はそうでもなかったらしい。19世紀フランスの文人ピエール・ルイスは、古代詩の翻訳といって自作の『ビリティスの歌』を発表して、社会を騒然とさせました。ドビュッシーがこれを作曲しています。

余談ですが、芥川龍之介が、ある古文書が読者から贈られてきたということを作品の中で書いたら、その道の専門家たちがその内容に愕然として大騒ぎになったことがありました。それはピエール・ルイスがやっていたことだったのです。芥川龍之介は古典は勿論、フランスや英国の作家をよく読んでいて、「河童」などはアナトール・フランスを踏襲したものです。「ビリティスの歌」はわたしが映画化したいと早くから考えていたものですが、それから二十年くらいたってフランスで誰かが実現しました。

絵画では幾何学文様時代というのが美術史上にあります。ギリシアの陶器画において、はるか後代にピカソが使用した多視点描法の原型とも思われる画法がすでに行なわれています。多視点描法というのは、絵を描くときに普通はひとつの方向から見て描きますが、別の方向から見たものも同時に描くことをいいます。美術史的な説明は抜きで、ギリシア時代にそれがあった。

このころ詩や音楽はあまり重んじられていなかった。それは、幾何学とか天文学とかの知識にくらべてこれらに理論性が希薄だったとされたのが理由ですが、のちに哲学者のピタゴラスが音楽を、アリストテレスが詩学を理論化したことでその地位が高められ、14～15世紀の西欧ルネッサンスの時代になると「自由学芸」と呼ばれて、絵画も含めて社会全

体からハイリー・アプリーシーエイト（高評価）されるようになり、さらにのちには芸術や芸術家というものの社会認知を受けて、18～19世紀に西欧文学、絵画、音楽の全盛を迎えることとなります。

政治上の制度においても、王政、共和制、寡頭政治、僭主制、専制主義、民主主義など、人類が経験したすべての政治制度をすでに経験しています。法曹の世界では弁護士という商売ができたのもギリシアにおいてです。

4 人類文明史のトピックスにあふれた『ユリシーズ』

古代文化国家、都市国家としてそのように最盛を誇ったアテネも、やがて軍事国家スパルタとペロポネソス戦争を起こして敗れて斜陽を迎え、さらに北方マケドニアでアレクサンダー大王が興隆し、その攻撃にカイロネイアの戦いで屈服します。それが紀元前338年のことで、それをもって古代ギリシアの生命はつきて、その文化文明は後進のローマ帝国に引き継がれますが、キリスト教がその国教となつてからは、キリスト教にとって異端の部分は圧殺されて、12世紀、アリストテレス哲学が東方アラビアから逆輸入されるまで、初期キリスト教最高の思想家アウグスティヌスの神学が、中世ヨーロッパを支配することになっていきます。

世界歴史の中でかくも燦然とした業績を残したギリシア国家は、あたかもその歴史使命を終えたかのごとく、のちにオスマン帝国の支配下に置かれるのですが、19世紀半ばになると独立戦争を起こし、成功します。英国の詩人、バイロンが義勇軍に参加したのはこのときです。

ギリシア文明の消長について、いいださんの『ユリシーズ』は比類ない精密さで述べていますが、同時期に先行、平行したエーゲ文明、例えばキクラデス文明、クレタ文明、オリエントにおけるエジプト文明、シュメール、メソポタミア文明にも仔細な筆を運んでいます。英国の学者、エヴァンズが発見したクノッソス宮殿の構築、線文字A・Bや、シュメールの発明になる楔形文字、その他、単に娯乐的にみても面白いトピックスであふれています。余談ですが、もう亡くなりましたが、黛敏郎という音楽家が24～25歳のときに「楔形文字」という作品で音楽賞をとり、彼はそれがきっかけで音楽家として認められるようになりました。

わたしは文字のことはぜんぜんわかりませんが、中国にも、ひいては日本にも影響しているのかもしれませんが、これはいいださんに伺ってみたいと思います。例えば、いまではイスラム教に場を譲ってしまった世界最初の大宗教、ゾロアスター教はニーチェの『アルゾー・シュプラッハ・ツアラトウストラ（ツアラトウストラはかく語りき）』が有名です。また、この宗教の影響は日本にも及んで、今日でも各地に残る火祭りは明らかに拝火教（ゾロアスター教）の名残りです。火炎を負って立つ不動明王の故郷はもちろんですが、聖徳太子を模した法隆寺の救世観音が火炎を背負っているのは、その人の由来を物語って象徴

的な事柄です。

マニ教は二元的で、すなわちキリスト教のように世界が単一の神の支配になるものではなく、この世は悪に満ちた苦の世界と見ることでキリスト教とも対立し、直接の関係は証明されていませんが、たぶん 11 世紀の有名な異端カタリ派に影響を与えたと考えられています。グノーシスはギリシア語で「知識」という意味ですが、これも初期キリスト教には二元思想として、つまり神以外の価値を認めるということで、目の上のタンコブ的な異端思想だった。

また、アポロンとディオニューソスといえ、わたしには人間精神における静と動、保守と革新を往復する 2 つの型であって、時代の流行が繰り返すのも、人々の趣味、好尚の変転もみなこの原理に従っているように思われます。すなわち「人類の歴史は秩序と破壊による弁証法的展開」ということになりませんが、これらが神であり、人でもあった存在の由来についても、『ユリシーズ』では詳細に書かれていて素晴らしいと思うのです。

ということで、縷々述べましたが、大半は皆さんご存じのことを、時系列にしたがって平面的に表面だけをなでさすったことになりました。

しかし、単に非凡な歴史叙述、知識の集積への讃嘆とは別に、マルクス高弟としてのいいださんを現代の視点でどういうふうに取り取るか、位置づけるか、ということになると、それはわたしの能力外になります。わたしとても、マルクスについて経済中心史観、実践的主体論、構造論をはじめ、唯物弁証法、唯物史観などに触れたことはありますが、わたしはどうも唯物論者ではないようなので、今回はメルロ・ポンティもアルチュセールもヴィトゲンシュタインも敬して遠ざけることにしました。

聞くと、マルクス自身は「わたしはマルクス主義者ではない」といったとのことですが、マルクス主義が実践を重んじていたことは確かで、その援用によりソヴィエト革命を成功させたレーニン、これを悪用して 20 世紀最悪のオートクラトル（専制君主）であり、マルクスが嫌悪した神、それも地上最悪の神になったスターリンをマルクス主義が生んだのも歴史の皮肉ですが、いずれにせよ、マルクスは「人類がもっとも美しく花咲いた人類の歴史上の子供時代……永遠の魅力……ギリシア」といって古代ギリシアを憧憬しているので、その極東の高弟を名乗るいいだももさんが本書を捧げるべきは、同じユダヤ人、キリストとともにこの 2000 年間の人類世界にもっとも広大な精神的影響を与えたヘル（＝ミスター）・マルクスではないかと思うのです。

ご静聴ありがとうございました。

質疑・応答

猪野 どうもありがとうございました。近藤さんのレジュメを読ませていただきながら思いましたのは、この大著の書評のことなんです。最近、この本に関する書評や論評は出て

いるのでしょうか？ あまり見ないものですから、1ヶ月ほど前にも、藤原書店に問い合わせしてみたところ、ほとんどなかったのです。わたしはこの本の本格的な論評を読みたいですし、いずれはそれを集約して皆さんに公表したいと思っています。そういう意味で、先に、ご紹介しました近藤さんのレジュメの文章は、本当に貴重なものでして、その一行一行に込められた思いをなんとか普遍化したいと思っています。

わたしが最初に読んだ書評は、京都大学名誉教授の山本美彦さんが、いいださんたちのグループが出されている『未来』という機関紙に書かれたものです。「さあ、立とう、恐れるな、のメッセージを聴く」という文章で、二一世紀を生きる若者に対して訴えています。なによりも、わたしが関心を持ったのは、本山さんが、「何よりもこの大著の中には、若い芽を育てようとする強烈な意志が存在している。若い人を誰ひとりとして叩きつぶしてはいない」と書いていらっしゃる事です。わたしも、山本先生がおっしゃっているような感想をもちました。内外の多数の著者の見解を論評しながら、それらに全面的に賛同するわけでもなく、どんどん論理を展開し、いいださん独自の新たな思想の地平に持っていく。おそらく、具体名は述べませんが、いいださんに本書で考察・論評された著者の方々は勇気をいただいたんじゃないかと思います。

片桐さんの前回のお話、および『未来』に書かれた書評のなかで、この大著の「読み方」についてご指摘をなさっています。針生さんや近藤さんのお話もそうですが、第三者による真摯な論評をこの研究会でまとめて、皆さんが読めるような形にしたいと思っています。そこでお願いですが、この本の書評がございましたら、あるいは見かけましたら、コピーをわたしにお送りいただけないでしょうか。

では、リプライ講演の前に、近藤さんのコメントに関して何か質問がございましたら、お願いいたします。感想でもけっこうです。……いらっしゃらないようなので、わたしが近藤さんにお聞きしたいことがあるんですが、よろしいでしょうか？

こういう学問集会は講師の先生を絶賛して終わることが多いんですが、わたしは、いいださんの前では、それはやっではいけないと思っています。もう少し全体の構造が目に見えるかたちで書いていただきたかったと思っています。近藤さんのレジュメに、『ユリシーズ』は比較的そうしたものに無関心で、そのことが部分的にもものすごい内容をはらんでいながら、その素晴らしい内容を順序だてて物語り、首尾一貫した概観を、読む者の頭にきちんと残すという結果を招きにくくしているような気がします。わたしは『ユリシーズ』を、単なる知の宝庫としてではなく、『芸術作品』と位置づけたいので、あえてこんなことを言わせてもらいます」と書いてありますが、僭越ながら、そのとおりだと思いました。ですから、近藤さんには、この大著をお読みになった動機が、どのへんにあったのか、伺いたいです。

近藤 動機というよりも、いいださんとは、お付き合いが深いから、また、わたしも物を

書く立場として、いい加減な読み方はできないわけですが、とにかく、そういう感想を持ったんです。それから、わたしなんか接したことのない単語が非常に多かったので、ちょっと付き合いにくいなと思ったところもあります。それはしかし、わたしが無知なんで、この本は高段者向きですから、わたしがそこに達していないことがあるわけですから、ヴィトゲンシュタインやメルロ・ポンティが、全体の中でどういう位置を占めるのかということが、わたしにはよくわからなかった。

猪野さんが映画監督といってくださいるけれども、わたしだって一字一句全部読んだわけではないんです。しかし、真剣に書かれたものは、こちらも最大限の状態を読む、というのがわたしのやり方ですから、読んでポイッと捨ててしまうようなものなら、流し読みでもいいですけども、やっぱりこれは時間がかかります。

わたしは、自分が知らない単語があったら書き抜いておこうと思っていたんですが、最初のうちはやっていたんだけど、多すぎるから途中で辞めちゃったんですよ（笑）。それは、わたしがマルクス主義とかに無知だからなのか、それとも、そういう単語がごく自然に使われているのに、わたしが知らないだけなのか、わかりませんが、わたしもこれまで相当いろんな単語にぶつかっているはずだから、そのわたしがわからないということは、かなり難しいということです。時には誤植もありましたしね。

ただ、いいださんは自分を 100%出すことが先にあって、読む人全部に、わからそうと思って書いているわけではないんです。わたしは、最初に東映の時代劇で、助監督になったんですが、そのころの時代劇の監督は、とにかく観る人間にわかりやすく撮れと、そればかりをいうんです。ストーリーが飛躍するとわからないから、子供でもわかるように作れというわけです。そういうことが非常に大事だった。そんな癖がついてしまったものから、わたしの書くものは、わかりやすくしようがないんです。しかし、わかりやすく書くことも匙加減が難しい。ここに漢字を使いたいと思っても、使わないで仮名にしてみましたりするので、最近のつまらない文章はみんな仮名ばかりです。

わたしはすぐ妥協して下に降りていってしまいますが、もも先生は、全然、人のことなんかかまわない。俺様の書くものは、わかってもわからなくても、おまえたちが読むのは当たり前だ（笑）と、こういう立場です。わたしはつまらないところで気が弱いものから、この字は今流行っていないだろうとか思って、わかりやすくしてしまう。最近ではそれでも難しいといわれます。今の若い人たちに合わせるということは、作品をつくるのか書くとかということとは、別の苦勞がいろいろあります。

猪野 ありがとうございます。近藤さんのコメント、皆さん、いかがでしたでしょうか。わたしは本当に胸のすく思いがしました。なかなか怪物のいいださんに、こんなことは言えないですから。

前回の録音テープを聞いていて気づいたのですが、わたしは無駄な発言をして、いいだ

さんに叱られていました。針生さんがこの本をととても読みやすいとおっしゃったのに、わたしは難しいと言っているようで、その後に、いいださんが、おまえはこの研究会をぶち壊すためにやっているのかと発言されています（笑）。

そんなつもりは毛頭ありません。それとはまったく逆でして、わたし自身がもっと勉強したいと思いましたが、さらに、できれば、なんびとにも開かれた場所で、みなさんとともに勉強しようというのが、この連続懇談の目的です。一般の市民が、いかに重厚な書物でも、気楽に読みかつ語れるような、「作家と市民の繋ぎの役」を果たすことが、わたしに課せられた任務であり、また、懇話会の重要な趣旨でもあります。ですから、いいださんに楯突くような言い方をしているようにも見えますけれども、そうでありませんので、ご理解いただきたいと思います。

それでも、近藤さんのお話を伺って、わたしははっきりわかりました。いいださんは人がわかろうがわかるまいが、どんどんお書きになっていて、おまえたち、本気になって読め、それ以外にないんだということです（笑）。この膨大な著作を前にして、著者と読者と参加者が、相互に自由闊達な議論できるようにすることが、わたしの仕事だと自覚しております。非常に申し上げにくいことを申し上げまして、スカッとしたところで休憩にしたいと思います。

リプライ講演

歴史の根本を問い直すこと

いいだもも

本日のような素晴らしい好天気の日で、こんなにたくさん、お出かけいただきまして、まことに恐縮しております。特に近藤節也さんには、長いご縁もございまして、東京からご夫婦でいらしていただいて、こんな8頁ものレジュメまで作っていただきました。近藤さんには、コメントも含めて克明にこの本に異のあるところをご報告していただきましたので、もうほとんどこれで終わりではないんじゃないか、と思います（笑）。ですから逆に、これから2時間弱、近藤さんがコメントされたことについて、わたしのほうから付け足しをさせていただこう、と思っております。

1 なぜ〈三部作〉の次に続いて『恐慌論』を書いたか

今日は日曜日ですから、NHKで「素人のど自慢」をやっていますが、これはNHKの番組の中でわたしの最も好きなものの一つです。世間では、わたしはいわゆる高尚なことばかりやっているとあるいは誤解されているかも知れませんが（笑）、実はわたしは非常に下司な男でして、だいたい「素人のど自慢」クラスで日頃満足して暮らしております（笑）。今日もそれを観ておりまして、本日は京都府の福知山市というところからの中継で、トリ

は前川清さんで、とても面白かったです。今日は「ラブ・ミー・テンダー」を歌った男の人が、賞を取ったんですが、これがまた非常に素晴らしかった。ああいう素晴らしい人がこの世にいるということは、わたしにとっては励ましになりました。

要するに申し上げたいことは、この本を猪野修治さんが深読みなさって、いろいろと難かしくしちゃうんだけど（笑）、まあこれは一種の素人のど自慢なんですよ。わたしはまったく歴史家じゃありませんから、歴史についてはド素人もいいところで、だから勝手に好きなことを書けるわけです。ですから、この研究会も「素人のど自慢」的にやればいいんです。皆さんの琴線に触れるようにうまく歌えているかどうかは、人様の判断に委ねる以外ないわけですが、本人としてはやたらにいい気持ちなんです（笑）。要するにカラオケですから、他人には多少響感を買うかもしれませんが、本人はこんなにいい歌はないと思って気持ちよく書いているので、この気持ちが大事なんです。

今日、猪野修治さんが司会の中で、いいだももはもうじき八十歳になるんだとおっしゃいましたが、それだったらわたしはまだ前途春秋に富んでるんだけど（笑）、実はもうとっくに八十歳を超えちゃったんです。もう八十一歳も超えてしまいましたから、今年の終わりくらいに、非常に残念ながらこの世をご辞退申し上げる以外にないところにまで来ているわけで、それでこんな厩大なものを書きまして、その上こんなものの次に、わたしのライフ・ワークとして『恐慌論』という本を、書きました。専門のことを申し上げれば、わたしはマルクスの衣鉢を継いでいるマルクス経済学者ですが、マルクス経済学とは要するに「恐慌論」なんです。もうすぐ論創社という本屋さんから出る予定ですが、こんなに厚くありませんから、ぜひ買って読んでください。わずか1400頁です（笑）。この本の3分の1です。いい本ですよ。本屋さんの予定では、来年、新年のめでたい初荷として全国の本屋に出廻ります。

近藤節也さんが、この『ユリシーズ』を芸術作品として読んだ、とおっしゃってくださいましたが、マルクスの『資本論』もやはり3冊ですが、マルクスも自分の『資本論』を「一個の芸術作品」だと主張していたんです。同じ3巻本でも、わたしのはまるで序破急になっていない、構成力がなっていない、と近藤さんがおっしゃいましたし、芸術作品になっているかどうかでいえば、なっていないと見たほうがいいとおっしゃったわけですが、自分自身ではマルクスにあやかって、この3巻本も何とか芸術作品に仕上げたい、と思いましたし、それに少しでも近づくことができれば、とひとえに思っています。

『恐慌論』は、暇だから書いたわけではありません。何度も言いますが、マルクスの『資本論』の真髄中の真髄は恐慌論なんです。だけど、かれは、わたしみたいに八十二歳まで生きませんでしたから、かれマルクスには生理的な持ち時間の限度があったんです。『資本論』は「剰余価値学説史」を含めると、本当は全4巻なんですけど、それはかろうじて完成して、人類文明史にとって決定的な労作になりましたが、にもかかわらず、恐慌論については、その基本的規定を方々にバラバラに書き散らかしたきりで、それを自分で整理し

て集大成して1冊の体系のあるものにまとめる時間が持てないまま、死んでしまった。かれは机に向かったまま死んだんですけれども、涙を呑んでいたにちがいない、と思います。

この衣鉢を二〇世紀的現代において継いだのが、わたしの先生である宇野弘蔵さんという世界的なマルクス経済学者です。マルクスが完成できなかった恐慌論を完成させることが、自覚的に宇野さんの一生の仕事になったわけです。人間が一生の仕事を決めるときには、何らかの動機が必ずあるんでしょうけれども、世の中にはきわめて殊勝な変わった人もいるもので、宇野さんは一生をかけて『恐慌論』を書いたんです。これは20世紀における最大の経済学の本で、誰がなんと言おうと、この本には消しがたい人間史的な意味がありますが、これが最後にはならなくて、わたしみたいにそれにまた1400頁の注釈を書く者が出てくるのはなぜなのか、と申しますと、宇野さんの『恐慌論』には実は根本的に無理があるからです。つまり、本当には、マルクスの遺志をたしかに継承したものの、まだ本当にはそれを完結させていないということです。完結していれば、その本を読んでいるといいんですから。なにが完結していないかは、ぜひわたしの『恐慌論』をお読みいただきたいのですが、わたしどもがやっている政治グループの機関紙『未来』の最新号のいちばん後ろに、新刊案内で告知されていますので、今日それを持参しまして何部かありますから、興味のある方はお持ちください。

わたしがなぜ『恐慌論』を書いたのか、三部作『ユリシーズ』のつづきのつもりで、簡単にコマーシャルをします。宇野弘蔵さんは、『経済原論』と『恐慌論』という2冊の主著を書きました。宇野さんはたくさんいい本を書いていますけれども、その中で一番大事なのは、この2冊です。この2冊の本は、全世界的に言って、マルクス経済学の最高峰です。例えば、わたしにとっては文明史論としてこの3部作と、次に出す『恐慌論』が大事です。それは、わたしがまもなく死ぬと思っているからで、ライフワークとして書いているからですが、それと同様に、宇野さんにとっても、その2冊はライフワークだったんです。

宇野博士の論理でいうと、マルクスは資本論体系を完成して、これを経済学原理論といいますが、資本主義分析のために決定的な原理論を作りあげることができた。だけれどもマルクスは、先ほど申し上げたように、恐慌論を自分ではついにまとめることができずに、恨みをのんで死んでいった。宇野さんは、その恐慌論を二〇世紀になってから、自分で書いたというわけです。けれど、宇野さんは、先に申しましたように、『経済原論』と『恐慌論』の2冊を書きました。なぜ2冊に分かれてしまったのか？ わたしだったらそういうことはしない。経済学原理論、つまりマルクスに即していえば『資本論』として、一本です。これが、わたしと宇野さんとの間の違いの発端です。

「資本論」体系というのは、どんなに補充して完成したとしても、基本的にそれはマルクスが構成した1冊なんです。その1冊のしめくくりのところに、恐慌論がくる。それを書き終わらないで死んでしまったわけですから、それを仕上げるのなら、『経済原論』と

いうのは恐慌論で終わらなければならない。ところが、宇野さんの場合にはそうならなかった。「経済原理論」の方は『経済原論』として一九七一年に公刊し、続けてその翌年に『恐慌論』を出した。これで、宇野博士の基本的な体系は、いわば二元論的に完成したんです。しかし、マルクスは一元論でなければだめなんです。それはどうしてかということ、今度わたしは自分の『恐慌論』で明らかにしています。よって、資本主義分析に関する最大の問題は、今日のわたしをもって解決したと自負しているわけです。

2 宇野「経済原論」のアポリア（難点）

それはどういうことかということ、これは少し専門的な話になりますが、大切なことなので、ちょっとだけ本日その基本のところを説明しておきます。

マルクスの『資本論』の中で、商品・貨幣・資本と上向していくポイントのところの「貨幣論」の命というか概念中の核心というのは、「貨幣としての貨幣」、つまり「世界貨幣」なんです。簡単にいえば、金です。資本主義は、金という貨幣を裏打ちにして、全体として用を足しているわけですから、わたしたちは、「金」、すなわち「世界貨幣」なしでは、一刻たりとも成り立たない。商品を買えないわけです。だから、一九世紀中葉の最先進資本主義イギリスを核として、産業資本的蓄積様式を基本軸として形成された〈パクス・ブリタニカ〉世界秩序は、「国際金本位制」として形成化された。

これは一元的・形式的な商品形態によって総括された、或る意味でものすごく単純化された合理的な仕組みなのですが、単純なことというのは、考えれば考えるほど深い問題になってきます。みんな毎日スーパーに行って買い物しているわけですが、そのことの意味をわからずにやっている。人はその為すことを知らざればなり、です。そのことの意味や仕組みを考え始めると、マルクスになり、宇野弘蔵になり、わたしみたいになってしまう（笑）。

わたしのみるところ、宇野さんの最大の欠陥は、「世界貨幣」を自分の経済原論から放逐してしまったことです。なぜこんな、マルクス「資本論」体系の基軸規範である「貨幣としての貨幣」を、その体系から排除するような異常事態が、宇野体系に起きることとなったのか？

それはなぜかということ、宇野博士は、経済学原理論をマルクス『資本論』を純化した体系として完成することを、自分の全生涯の使命にしている、マルクスにおける経済学原理論にそぐわないところをすっかり完全に純化しようとして——一九世紀中葉のイギリス資本主義が、かれにとって一番純化された資本主義なんです——それから「純粹資本主義のモデル像」をつくって、これに純化されない規範・概念については全部自分の「経済原論」から排除し放逐してしまった。それは無理だ、とわたしとしては思うわけです。

一九世紀のイギリスを、わたしはものすごく尊重し感心してます。例えば、自国で作った工業製品を売って、世界中から綿花でも小麦粉でも買えますから、そうやって「農業問

題」をそれなりに解決しました。実は資本主義においては農業問題は難点中の難点であって、けっして解決されてはいません。二〇世紀になって、みなさんだれしもお存知のように、世界の農業問題は戦間期以来決定的なものになっていますし、戦後の今日では「南北問題」になっている。後発の後進国であった日本や中国の農業が、近代化の下でどうなっているかということを考えてみれば、そのことの大事さはすぐわかります。

わたしの考える現代マルクス主義が新しい合意形成上どうしても解かなければならない問題の根幹は、農業問題の解決です。農業が基礎でなければ、人類は生きていけない。単純明快なことです。そのためには、資本主義を根底からひっくり返さなければだめなんです。これは世界革命の一つの重要な構成部分です。わたしどもの古い定式化では、「農業基礎・工業先導」です。戦間期の日本の言い方でいえば、「都市解体、農業復権、農工両全」です。

それから、一九世紀のイギリスで恐慌がくりかえしくりかえし—といってもほぼ十年毎に都合五回ですが一起きますが、その時、イングランド銀行は最終的には金を国外へ流出させて、最後にこれで決済をして世界市場恐慌を収束させます。金の流出で問題なのは、中心国のイギリスの資本主義が、それによって儲かることが全然ないということです。

つまり、資本主義においていちばん肝心な問題が、論理的な言葉でいうとそこでは「捨象」されて、〈宇野理論〉のモデルで言えば「純粋資本主義モデル」的に純化されてしまうわけです。捨象されて、不純なものは全部そこで捨てられてしまうんですから、純化されるのは当然です。「純化された資本主義像」というのは、一九世紀中葉のイギリス資本主義の商品の純化力にして基礎をもっていると言っても「純粋資本主義モデル像」というのは、宇野さんが頭の中で勝手につくりあげているものなのであって、それは現実的な資本主義ではないんです。

そういうことで宇野さんは、「世界貨幣」というものを不純であって、原理論には要らないものであるとして、それを捨象して資本主義体系を構築してしまった。「世界貨幣」がなければ、当然「世界市場」もありません。世界市場はマルクス『資本論』の第1頁に出てきます。このアンファンク（最初）に出てくる概念自体がなくなってしまうわけですから、つまり資本論体系のいちばん核心の部分が最初からなくなってしまうわけですから、こんな面妖なものは、わたしに言わせれば、どこまで行ったらって経済原理論とはなりえません。だからだめなんです。恐慌というものは「世界市場恐慌」ですから、世界貨幣と世界市場なしに恐慌論ができあがるわけがない。宇野さんの『恐慌論』は、非常に独創的な本ですが、それでもそれは、わたしから言えば、根本的に無理があります。

わたしの『恐慌論』は、胸をお借りした御礼もあり、宇野さんの霊に捧げておりますが、わたしが何十年もかけてこの本を書き上げた今日は、残念ながら宇野さんはもうこの世におられませんでしたから—わたしは、あの世というのは、信じていませんが—もうじきどこか遠い所でもしもお会いできる機会に恵まれれば、宇野先生にこのことを申し上げて、

反論をいただいて激論を交わしたい、ととても楽しみにしております。そうすればまた、皆さんを喜ばしかつ悩ます新しい思索項目が、三個くらいできるんじゃないか、と思います（笑）。

3 100年後には超ベスト・セラー

猪野修治さんが最初におっしゃったように、この3部作ができたのは2005年11月30日、昨年末なんです、それを受けて今年2月26日の日曜日に、地元でということで、江ノ島の岩本楼で、わたしの釣り仲間たちが「出版をお祝いする会」を開いてくださいました。漁師筆頭の小菅文雄さんという方が代表、わたしの『〈主体〉のユリシーズ』について最初のコメントをしてくださったんですが、メルロ・ポンティとヴィトゲンシュタインのことを「漁師」である小菅さんが、淡々と論じてくださったのです。

さっき近藤節也さんは、自分は唯物論者じゃないから、そのへんのことは話すのを止めると言われ逃げました（笑）が、海で魚を獲っている人が、この本に書かれてある今日の哲学の最前線での核心の問題を、ぴたりと言い当てました。だから、この本は本当はものすごく易しい本なんです（笑）。漁師でさえ、というのは差別的な言い方になりますけれど、わたしも近藤さんも、たまたま大学は出ていますが、目に一丁字があるかどうかでずいぶん違うわけで、漁師の小菅さんは見事にそこの高次の哲学問題を、今日的に読み解いたんです。或る意味ではこの本は、その程度の本なんです。部厚いからと畏れをなすことは、まったくありません（笑）。

「出版記念会」と当日の江ノ島「岩本楼」には、驚いたことに、八十六名もの方々が集まってくださったんですが、わたしは戦後六十年間、社会運動をやってきましたが、わたしのこういう本の固定読者というのは決まっています、全国で五百名なんです。六十年間やって五百というのが、割がいいかどうかというと、わたしとしては割がすこぶるいいと思っています。マルクスの『資本論』は、出した時売れたのは十部ですからね。1世紀以上たった今では、世界中で1億冊以上出ています。だから、わたしの本のことも、あまり馬鹿にしないでほしいです（笑）。あと1世紀以上たったら、わたしの本も1億冊ですから、わたしの遺族はその頃にはもう、何の生活上の心配も要らないことにたぶんなるでしょう（笑）。

猪野修治さんが、この本は若い人のために書かれているんだ、とおっしゃってくださいましたが、本当にそのとおりで、わたしは若い人のために書いているんですが、1世紀たてば若い人も110歳くらいになってしまいます（笑）。そのときに、いいだももという人間がちゃんとしたことを書いているかがわかることになる、と思います。人類文明史八千年ということを書いた本ですから、そこに地元でやる意味が成り立つかどうかわかりませんが、岩本楼にそれだけの人が集まってくださって、わたしは六十年間やってきた甲斐があった、とその時つくづくと思いました。

この本を出してくださった藤原書店で、毎月「小難しい本を読む会」という小さな会がありまして、藤原良雄さんが会社の会議室で開いているものなのですが、3月18日のやはり日曜日にその会があったときに、驚くべきことに、四十人くらいが集まってこられ、超満員で会議室に入りきれなかった。2次会にも皆さん参加されて、とてもレベルの高い議論になったんです。わたしは、そこで教えられることがたくさんありました。猪野修治さんもこれに参加されていましたが、今度は猪野さんが地元藤沢でも4回にわたってこのような懇談会をやってくださることになった。今日はその2回目ですが、第1回が5月7日であって、その時も四十五名の方々が参加して下さって、2次会を駅近くの「庄屋」でやりましたが、こちらにも二十名くらい参加して下さった。コメンテーターの針生一郎さんや片桐薫さんも参加されて、普通の飲み会ではなく、引き続き高度な議論が沸騰して、たいへん調子がよかった。

あと二回ありますが、猪野さんのおっしゃっているように、この記録はこうしてちゃんとしてありますから、それをもとにまたぜひ1冊の小冊子として出したいと、社会評論社の松田健二さんがおっしゃってくれています。これは、コメンテーターのみならず出席して下さった地元の方々の発言が、全部収録されている、非常に生き生きとした記録になることは間違いありません。またこれで少し行けるんじゃないかな。もう少し行けば、藤原書店は驚くなかれ、この3部作を1000冊作ってくれたんですが、売り切れになっちゃうんじゃないですか（笑）。だから、これ、今月中に売れちゃうよ（笑）。日本文明史的にはものすごいことだけれど。……そういうふうにはわたしは、希望と期待をこめてこの三部作の行くえを思っているんです。

4 人類文明を八千年を遡る根拠

さて、前回から何度も「八千年の歴史」と申し上げていますが、八千年を遡って歴史を考究するのは、遡る根拠が〈いまここ〉にあるからです。もっといえば〈いまここ〉に全世界的な“危機”があるからです。わたしにとってそれは、イラク戦争が泥沼化していることです。今朝がた、小泉純一郎首相は、イギリス軍とオーストラリア軍のイラク撤兵を受けて、自衛隊をサマワから撤収させたいと、アメリカに告げました。米日国安保同盟があるので仁義を切ったわけですね。それをアメリカの国防長官が了承したわけですから、これは近頃最大のニュースです。これで間違いなく、アメリカ軍はこの年内にイラクから撤収しますよ。わたしは、今年早くから、そうなると言いつづけてきましたが、その時にはだれも笑って、わたしの予言をちっとも相手にしてくれなかった、けどまたまた、わたしの洞察は大当たりしたじゃないですか。これで誰も征服者の軍隊はイラクからいなくなってしまうわけです。

ブッシュと小泉の完全な敗北によって、これ以降、近頃わたしが提示している「反転攻勢」が、世界的にも日本的にも本格的に開始されることとなります。これはヴェトナム戦争の

時と同じことで、完全にアメリカ帝国主義の大敗北です。これで歴史はまた変わるわけです。〈パクス・アメリカナ〉という現代資本主義世界システムが崩壊へと向かうことになるわけです。わたしの予測では、天下は大動乱を迎えつつあります。そのときにこの本がどれくらい爆発的に売れるか（笑）、ひそかに楽しみにしておりますが。

それで、〈いまここ〉にある世界的危機の由来を考えると、どうしても歴史を遡らざるを得ないんです。一部の方は誉めてくださるつもりで、この本を、「いいだももが古典古代ギリシア以来の歴史を書いた大著作である」というふうにおっしゃっていますが、その誉め言葉は厳格に言えば間違いです。古典古代ギリシアでは紀元前 600 年ですから、せいぜい 2500～2600 年くらいしか遡れない。それでは、〈いまここ〉になぜこんな危機があるのか、その歴史的な根元はわからない、ということをお願いしているわけです。古典古代ギリシア文明からの 2500～2600 年からの歴史は、わたしたちが学んできた西洋史の常識です。それは実は嘘なんだということを、わたしはこの本で、実証的に言いたいわけです。

古典古代ギリシア文明は、約 2600 年前に、地中海世界文明の中で「原幾何学紋様」というのができたときから始まります。そこから、地中海世界に、アテネ・デモクラシーをはじめとする百二十ものポリス国家が興ります。そして、ヘロドトスの『歴史』を読むとおわかりのように、ペルシア戦争という世界戦争で古代オリエントを制していたペルシア大帝国が、その眇たるポリス都市国家の連合軍に敗れて、当時の地中海世界のヘゲモニーが変わった。

東の大世界帝国ペルシアが西の眇たるアテネ・ポリス国家に敗れて、世界史が東から西へと大きく方向転換したわけです。つまり、エーゲ海の西端に興ったアテネやスパルタをはじめとする百二十ほどの眇たるポリス国家群が、ペルシア大帝国を打ち破ったことで、地中海世界の歴史が大転換した。それから後は、ご存知のように、今日の西欧中心主義的な世界ができあがってくるわけです。資本主義に即していえば、グローバリゼーションということですが、グローバルな、一元的な、〈パクス・アメリカナ〉的な現在の世界が、その末にできた。それは 2600 年前のペルシア戦争の帰趨から来ている。

では、なぜ古典古代ギリシア文明から歴史を見てはいけないかというと、この本が書いているように、それ以前に地中海には「ミノア・ミュケーナイ文明」があるからです。人類文明史という範囲でいうならば、その起源、つまり、地中海世界史の始まりは古典古代ギリシア文明からだ、という西洋史の常識は嘘で、本当は「ミノア・ミュケーナイ文明」が源なんだ、とこの本でわたしは言ってるんです。なぜミノア・ミュケーナイ文明が人類文明史の起源かというと、近藤節也さんが本日おっしゃったように、ひとつにはそれが「中石器時代」だということです。エジプト文明、メソポタミア文明も、みんな同じです。ですから、2500 年前の古典古代ギリシア文明からが人類文明史だというのはまったくのインチキで、それ以前に実に 5500 年にわたる先史があったのだ、とわたしは書いたわけです。

ミノア・ミュケーナイ文明は、マルクスの概念でいえば「貢納制」の文明です。古典古代ギリシア文明というのは、民主的な文明であったわけですが、同時にマルクスの概念でいえば「奴隷制」文明です。それは、ペルシア戦争でペルシア帝国が負けてしまったから、そういうめぐりあわせになってきたんです。

ペルシア帝国は非常に優秀な古代世界文明を持っていて、けっしてギリシア以降の、わたしから言わせればチンケな奴隷制文明とは違います。オリエン特文明が奴隷制だというのは間違った考えです。古代オリエン特ではなくて、アテネ民主主義こそが奴隷制社会に直結していたわけですから。オリエン特にももちろん、奴隷は存在してはおりましたけれども、その存在は各々の家内奴隷であって、それはけっして社会を構成しているような中心的存在ではなく、副次的な存在でした。

後期の古典古代ギリシア以降からが、奴隷制文明時代の開始です。奴隷制世界は、世界的に言えば、ポリス民主主義文明に伴って、この世に出現したわけですから。古典古代のポリス民主主義の文明は、同時に、奴隷制文明かつ家父長制文明であって、その基本的概念性格は、古代ローマ帝国に至るまでそうです。奴隷制時代が終わるのは、古代ローマ帝国が「野蛮人」と呼んでいたゲルマンの「バルバロイ」に滅ぼされて、それにとってかわって、中世ヨーロッパの農奴制社会ができてからです。宗教でいえば、その新しい世界の支配イデオロギーがキリスト教なわけですが、社会構成体としては、その中世のキリスト文明は「農奴制」なんですね。そこで初めて、奴隷制がなくなるんです。

5 女性の世界的敗北によってもたらされたもの

歴史は、ペルシア戦争で、ペルシヤ世界大帝国が敗北を喫して、西の諸ポリス都市国家が勝ったために、いうならば大きくひん曲がるんです。歴史から見れば、「貢納制」社会のほうがもともとの正道なんです。この正道であった紀元前 500 年以前の地中海社会は、「母系制」なんです。歴史が曲がったことによって最初に起きたのは、母系制の崩壊です。だから、母系制社会がなくなってから、「フェミニズム」の問題が起きてくるのは、今日では非常によくわかります。

母系制社会では、海も陸も女神が全部統御していた。女神は豊饒の神様であると同時に、冥界の神様でもあった。近藤節也さんが今日おっしゃった、ハデイス（地下の世界）を治める神様です。穀物は冬になると枯れて死に、また春に種を蒔くと芽が出てくる。これは二柱の神ですから母親と娘であって、母親が地上を、娘が地下（冥界）を御しているという、非常に正確な体系が宇宙論とともにできあがっていた。

それが、ペルシア戦争で諸ポリス国家が勝利したことによって、崩壊してしまった。これは、エンゲルスの言葉で言えば、女性の「世界的な敗北」だといえます。ですから、もしこれから天下大動乱が起きれば、かつての母系制社会にあった女性の位置が復元されるであろうことは、間違いない、とわたしは思っています。女性の「復讐戦」の時代にな

るわけです。

このことは、わたしの本では「ディオニューソスの問題」として、3分の1に近いスペースを使ってえんえんと書いています。古典古代ギリシア文明は、ヌース（叡智、理性）の文明であり、アポロン神のごとく光輝く、くっきりとした形を描く可視・可触の文明です。今日のわたしたちも爾来その文化の栄光に浴してきたわけですが、現在はその「ヌースの文明」のなれの果て、つまりは、合理化を追求してトコトン追求した極みに現れ出てきた「非合理の世界」にきているわけです。そのことを20世紀の初めに言ったのが、この本でも繰り返し触れているフリードリッヒ・ニーチェなんです。

ニーチェは、今日の人間には根本的な価値転換が必要であり、それを主体的に担うことができなければ人間はもう終わりだ、と二〇世紀の開幕期の初頭で言っています。かれは気が狂って死にましたけれども、そういうことを世界でただひとり先んじて考えていて、正気でいられることは難かしいんじゃないでしょうか。

ニーチェの話のポイントが、ディオニューソスです。御承知のごとく、かれはニーチェは、古典古代ギリシアについては誰よりもよく知っている俊敏・博学な古典学者でした。そういう人が『悲劇の誕生』で、学会でのそれまでの定説とは違った異様な異説を唱えたために、古典学会から排斥され、ついに狂死してしまった。『悲劇の誕生』は何度読み返しても素晴らしい本ですが、最初に付けられたタイトルは、「音楽の精神としての悲劇の誕生」というものでした。

「目の文明」には、耳はありません。ですから、先ほど近藤節也さんがおっしゃったように、詩と音楽についてはギリシア哲学は論ずるところはなかったわけです。近藤さんのご指摘によれば、それはアリストテレスの『詩学』でわずかに論じられているだけです。わたしがニーチェの『悲劇の誕生』が深いと思うのは、ギリシア哲学によってギリシア文明の根拠を説明するには、その一元論的「目の文明」の限界に災いされて難がある、と書いているところです。

アリストテレスは、ソフォクレスやエウリピデスの悲劇はもちろんのこと、アリストファネスの喜劇も、ともに音楽精神、歌から出てくると言ってるんですが、かれの場合ではどうしてもその音楽からのギリシア悲劇の誕生の脈絡が二元論的になってしまって、そのことの一元論的な証明が最後までできなかった。これがアリストテレス哲学の限界です。そこをニーチェが突いた。

ですから、ニーチェは、古典古代ギリシアでは、本当はミューズ、つまり音楽が決定的なものであって、それは悲劇であって、ギリシア精神の根元は合理的な「理性の文明」にあるんじゃないくて、古代ギリシア以外の音楽精神から生まれた〈悲劇〉にあるんだ、と喝破したわけです。これが当時のヨーロッパの古典学会にとっていかに異端の説であったかを考えると、ニーチェが狂死せざるを得ないところまで追い込まれたことも、よくわかります。

合理主義の神であるアポロンがデルフォイ神殿に鎮座ましまして、「汝自身を知れ」という神託を出したところから世界ができあがったと言われ、わたしたちのすべてがずっとそのように物事を間違っ、少なくとも一面的に教えられてきて、世界中がいまこのように惨憺たる内的腐蝕の極みにまで来てしまっています。だけれども、デルフォイの神殿には、アポロンだけがいたんじゃなくて、そこにはアポロンとディオニューソスの両方が祀られていた。たとえば、デルフォイの神殿の中には小屋掛けがしてあって、その主はディオニューソスです。考証の示すところによれば、ディオニューソスのほうが先にデルフォイにやってきて、アポロンはその後から到着したと言われていています。

その後先を問わず大事なことは、アポロンもディオニューソスも、もともとは小アジアの奥地からやってきたオリエントの神様だということです。2500年前から後は、デルフォイの神殿はアポロンの神殿であり、それはゼウスを先頭にしたギリシア神話文明でして、それから人類文明史は西洋文明史に繋がってくるわけですが、それより昔の5500年前に、オリエントの方からギリシア人とドリア人の南下にともなっているいろいろな神様が渡ってきたわけです。だから、アポロンも、当然ディオニューソスも、ギリシア側の価値判断からいけば「バルバロイ」の神様です。それが小アジアの奥地からエーゲ海までやってきて、デルフォイに流れ着いた。それでもって、合理主義文明がつくられたわけです。それより以前の古い文明のほうに、或る意味では合理主義文明が切り捨ててしまった豊かさがあつた。

アポロン自身も変な神様で、リラという豎琴を持っているんですが、リラはもともとはギリシアにあった楽器ではありません。オリエントのもので、しかもフルートと共存・競合関係にあつて、アポロンのリラがフルートを圧迫して横笛の方を追い出してしまった。アポロンが音楽を司るとされるのは、フルートを打ち負かして絃楽器リラの音楽をつくったからです。これは、古代ギリシアの「視覚的な文明」とはまったく関係ないし、アポロンはもともと「耳のいい神様」だった。耳がいいか悪いかは、文明にとっては非常に決定的な意味を持っていまして、耳が悪いとどうしたって目の文化になる。だから文字でせつせと記録したりする。目の文明などというものは、そういうふうには称する本人が耳が悪いからです。でも、もともとは耳がよかったアポロンは、デルフォイの神殿に鎮座ましましてからは、自らのオリエント由来の音楽の神であることを忘れ果てて、視覚的なギリシア文明の象徴となった。

ディオニューソスに話を戻しますと、ディオニューソスの文明というのは全然合理的なものではなかった。繰り返して言いますが、それがアテネの女たちの話からわかります。冬になると、季節のはやり病みたいなことが、アテネの女たちに一斉に起こります。なぜなら、ポリス国家は民主主義だといわれますが、それはこの本で繰り返し確認しているように完全に家父長社会でした。母権制を打ち倒して奴隷制を確立させたわけです。市民による民主主義だといいますが、その市民というのは成人の男だけなんです。女は市民では

ない。女は、奴隷制社会においては、奴隷以下なんです。でも、奴隷以下にされて甘んじている人間はいませんから、何かの拍子に溜まっていたものが噴出して来る。

それで、冬が近づくと、アテネ中の女たちの耳にどこからかディオニューソスの呼ばれる声が聞こえてくる。これは共同幻想ですから、一斉に聞こえるわけです。そうすると女たちはみんな、亭主と子供をほったらかして、自分の家と家族から飛び出して、山へ走っていく。そこで、ディオニューソスの踊りを踊り始める。耳の人が脚にくることがあって、そうすると踊りだすんです。踊らない文明はだめです。世界中のあらゆる文明は“踊り”ですから。踊ると今度は食欲が増しますから、そこで出会った生き物は子供でも何でも、手当たり次第に捕まえて、全部殺して食べてしまう。この本にも詳しく書きましたが、四肢をバラバラにして生肉のまま貪り食ってしまう。これで、女たちは蘇生するわけです。いかにストレスが溜まっているか、ということですね。

このように女たちが山野を彷徨することが書いてあるのが、ギリシア三大悲劇の一つで「バックス」という劇です。バックス、つまりディオニューソスに扈従した女は全部同じです。要するに、これは女の世界史的な反乱なんです。つまり、ディオニューソスの文明反乱は、ペルシア戦争でポリス国家が勝ったことによって女が世界史的な敗北を喫し、地中海世界の貢納制＝母系制社会が奴隷制＝家父長制社会に転換したために起こった復讐劇、敗者復活戦の反乱なんです。

バックスはまたの名を「マイナス」といいますが、マイナスというのは、踊り狂うバックスの信女のことですから、このような女の社会的集団が絶えず反乱を起こすということが、人類文明史の基本にはあるわけです。それは数世紀にわたってあったことですから、どんなに合理化して歴史をそれなしに書こうとしても、それはとても隠し通せない。バックスとマイナスの問題は、文明史にとって非常に大事なことで、もしアポロンの古典古代ギリシア文明を文明史の起源だとすると、この先史のことがすっぽりと落ちてしまうわけです。総じていえば、それはミノア・ミュケーナイ文明だけではなくて、オリエント文明がみんな抜け落ちてしまう、ということなんです。

6 文明の分割とアイデンティティー

或る事柄を世界史的に比較するためには、ヨーロッパの基準だけではだめです。必ずミノア文明、中国文明やインド文明やエジプト文明も、視野に入れておかなければなりません。そしてこれらはいずれも、ヨーロッパ文明とは比較にならないくらい古くて豊かなものです。わたしたちは、その中で暮らしているのですから、そんなことはわかっているはずなんです。小学校から大学までずっと教育されつづけ（脅されつづけ）たために、だんだんコンプレックスが高じてきて、西洋文明がこの世で唯一のものだと思ってしまう。わたしが絶えず中国文明を引き合いに出すのは、それは全地球的には違うんだということを言いたいからなんです。

先ほど近藤節也さんが、楔形文字は中国や日本にも影響しているのかどうかと尋ねられました。わたしもよくわからないのですが、一つはっきりしているのは、楔形文字といわれている東地中海から発祥したオリエント文明の文字は、エジプトのヒエログリフやアルファベットのもとになったフェニキア文字と関係がありますが、それには甲骨文字以来の中国の漢字とは全く関係ないということです。

漢字が使われだしたのは、いうまでもなく秦の始皇帝の時代からでして、漢字によって西のヘロドトスの『歴史』に匹敵する司馬遷の『史記』が書かれました。『史記』が書かれた時代はどういうものであったかという、前回のときにも申し上げましたが、秦の始皇帝が「万里の長城」を築きます。万里の長城とは“概念”です。概念とはつまり“自己分割”です。概念をつくらなければ、文明の中核（アイデンティティ）ができない。なぜかという、概念によって自己分割しないかぎり、自分と他者との区別ができないからです。

「万里の長城」という目に見えるかたちの城壁ができたことで、中華の民は自己分割ができるようになった。なぜなら、その城壁の外側には、草原を疾駆する牧畜の民、すなわち匈奴がいたからです。匈奴のあとには突厥が続き、やがてモンゴル人が大蒙古帝国を興して中央アジアに一大帝国を築き上げます。チンギス・ハーンを太祖とする偉大なる大広域の専制君主制国家です。

かれら遊牧民ノマドの牧畜文明とのあいだに一線を画することによって、中華文明の型がはっきりしてきたわけです。中華王国は農耕民族ですから、農業中心の中央集権型の王朝国家ができあがった。その冊封体制といわれる東アジア世界秩序の中に、天皇制国家の日本は所属し、漢字文化圏、儒教文化圏の一員として今日まできている。このことはとても重要です。そういうふうな文明論というのを見ていくと、漢字文化圏のわたしたちが区別してきたのは、西洋文明ではなくて、むしろユーラシア大陸の草原を駆けていた匈奴以来の牧畜民族とのあいだに、自分たちの文明との根本的な相違をつくってきたことになります。わが列島弧で、この二つの文明がぶつかりあったのが、「蒙古襲来」の元寇です。漢字以降の中華王朝は、ヨーロッパの自分たちが世界の中心だと考えたのと同じように、自分たちの農耕文明が世界の中心だと考えていました。

ところが、清朝末になって漢字以前の文字である甲骨文が発見されました。北京の薬屋さんが古い骨を削ったものを風邪薬として売っていて、よく治ると評判になっていた。羅振玉という偉い考古学者が、自分の奥さんがその風邪薬を買ってきて飲んでいてのを見て怪しみ、その元を調べてみた。するとそれは、お百姓さんが畑で拾って薬屋に売りつけたものだということが、わかってきました。羅振玉が現場に行ってみると、そこらへんからいくらかでも出てくる。その骨に文字が彫られていた。これが、漢字の元になった甲骨文字です。殷の文明が甲骨を焼いて占い、天下の大事をその占卜の読み取りで決してい

た。本質的には、楔形文字がアルファベットの元になったのと、同じことですね。

中国の甲骨文字は、エジプトのヒエログリフと同じように占いに使われていた神聖文字です。近代は合理主義文明になってその意義がわからなくなってしまいました。あらゆる文明は最初はみな共同体社会、つまり宗教社会でした。その根本にあるのはト占で、ト占によって物事はすべて決されました。中国では亀の甲や獣骨を焼いて入ったひび（文様）を見て、国王と国王付きの御用学者が、近く雨がくるとか、外国が攻めてくるとかいて、社会全般のことを占トしていた。占われた言葉は、その骨に刻まれました。それが甲骨文字といわれているものです。殷という国で使われていました。そのころの学問はすべて判じ方の研究ですから、占いの結果が行動選択の価値基準になり、社会は進退していました。

殷は自らを「商」と言っていたようですが、だんだん発掘が進んでいろんなことが明らかになってきています。殷は農耕文化ではなくて、もともとは外側のバルバロイである牧畜文化に属していた。それがいみじくも「商」という名前に象徴されていますが、牧畜文化というのは必ず商業文化なんです。なぜかというと、牧畜は動産、つまり動く財産です。動産というのはとても便利な商品でもあって、西部劇を見ているとよくわかりますが、牛でも羊でも自分でとっとこ歩いてくれる。それを、群れとして歩いていった先で相手に売って、お金や米に替えて帰ってこれる。そういうふうにして社会が成り立っているわけです。殷がなぜ「商」と自称していたかということ、かれらが遊牧民族であり商業民族だったからなんですね。商業は、農耕社会から自立的に出てくるものではありません。

司馬遷の『史記』に話をもどしますと、『史記』の書かれた漢王朝は、農耕を中心とする中央集権社会です。また、『史記』は、漢字で書かれていますから、当然、司馬遷は、甲骨文字のことはまったく知らないわけです。先にも申し上げましたが、甲骨文字は、清王朝末期に羅振玉によって発見され、研究・解説が進んだ。羅振玉が辛亥革命で日本に亡命してからは、甲骨文の研究は京都大学の学者たちの協力を得て、続けられました。だから、日本では甲骨文や金石文の研究が非常に発達しているんですね。その輝かしい成果は、この三部作に吸収されています。

この甲骨文や金石文は、『史記』以前のもので、漢字ではありません。エンゲルスが言うように歴史は記録だということにもどれば、漢字以前、ギリシア文字以前に記録があるのに、歴史の教科書では東洋史でも西洋史でもそれについてちっとも触れていない。それはインチキな歴史なのに、わたしたちはそれ以外の歴史を教わった試しがないんです。だからわたしはこの本を書いたわけです。『史記』以前に甲骨文、金石文があるということは、歴史が殷のさらにその以前にまで、「殷周革命」を介して遡るということです。そのことの解明が、この本の一つのミソです。

7 文字の発見で遡る歴史

ヘロドトスは、アルファベット（ギリシア文字）でもって『歴史』を書きましたが、第

二次大戦前後にイギリスのエヴァンズという考古学者が、クレタ島でこれより古い文字（クノッソス文書）を発見しました。それが線文字 A、B と呼ばれているものです。線文字 A はまだ解読されていませんが、線文字 B はごく最近、1952 年になってヴェントリスという考古学者とチャドウィックという言語学者によって解読され、それが古いギリシア文字の一種であることが判明しました。チャドウィックの著書『線文字 B の解読』にも書かれていますが、これは本当に驚くべきことでした。

考古学的な発見者であるエヴァンズは、線文字 B を解読することはできなかった。エヴァンズは、楔形文字からの連想でクレタ文字はエジプト文字で、一種の絵文字であろうと考えて、その生涯を終えました。偉大なる学者に多く起こる悲劇がかれにも生じたんです。エヴァンズは、イギリスの考古学者でいちばん偉い人でした。偉い人というのは、学会を牛耳ってしまいますから、だんだん権力者になるんです。かれはクレタ島で文字を発見したので、クレタ島が東地中海文明の中心である、と決めこんでしまった。そして、クレタの文明の歴史に当てはめて、「古代史の暦」をつくってしまったんです。ところが不思議なもので、或るときにはそういう古代史モデルというものはそれなりに説明がつくんです。だからそれでしばらくは行けちゃうわけです。

藤原書店からマーティン・バナールという人が書いた『黒いアテナ』という本が、上下二巻で出ています。これは、わたしのこの三部作の種本の一つになった本ですが、非常によい本ですのでぜひお読みください。バナールは、たいへん優秀な学者ですが、西洋の歴史学者からは排斥されています。なぜかというと、かれは『黒いアテナ』の中で、古典古代ギリシア文明の中心にいたのはエチオピア人であって、エチオピア人は「黒い」と言った。これが白人学者たちの気に障ったんです。

2500 年の歴史を真っ白に塗りつぶしてきて、日本の女の人だってみんな真っ白に化粧している。そこまで長年かけて折角頑張ってきたのに、その大本のギリシア文明の中心が「黒いエチオピア人」だなんて言われたら、せっかくつくりあげた偽物の摩天楼がガラガラと崩れ落ちてしまう。だから必死になってバナールを排斥するわけです。しかし、エチオピアはコプト教で、それがキリスト教の初期の形態をいちばんよく保存していることは、すでによく知られています。歴史を遡れば、そういうこともどんどんわかってくる。

バナールは「改定古代史モデル表」というのをつくりました。これが西洋の歴史学者にとっては目障りでしかたがない。自分たちがつくった古代史モデル表が完全に覆されてしまうからです。ここ十年くらい「火山学」が非常に発達してきまして、火山学者から新しい資料が出てくる。それによると、トロイ戦争の起こった原因の一つは、火山の爆発だということがわかる。プラトンの書物に出てくる伝説的な大陸「アトランティス」も、じつは実在していて、古代における火山の大噴火によってアトランティス大陸そのものが、プラトンがその所在を記し置いたように無なくなってしまうこともわかってきた。そうになると、バナールの言っていることは明らかなんですね。そういう事実を認めないような歴

史学者は、歴史学者という資格はない、とわたしは思います。バナールの「改定古代史モデル表」に即して考えると、ミノア・ミュケーナイ文明は、トロイ戦争を軸にして考えざるを得なくなってくる。今日では真の歴史学は円満具足的にそうした真相を明らかにしてきている。そこでドイツのシュリーマンの話になります。

第一次世界大戦前後のドイツのシュリーマンによるトロイ遺跡の発掘と、第二次世界大戦後のヴェントリスとチャドウィックによる線文字Bの解読によって、今までの西洋史は新しく書き換える必要が出てきました。しかし誰も書き換えてはいません。現にいまだに旧態依然のたためな歴史書が通用している。この奇々怪々な現象に、わたしは義憤を感じるものですから、つい言葉を費やしてしまうのですが、今のアカデミズムがわたしの本などを書評するはずがありません。それは、バナールやニーチェが西洋の学会から無視されたのと同じことです。自分たちの商売に差し支えますから。かれらはインチキな歴史を書いて、その原稿料や印税で暮らしているわけですから、ほんとに詐欺みたいなものです。しかし、このことは、歴史学の根本に関することです。

シュリーマンは無学な人でした。企業家として成功してお金を貯めて、五十歳を過ぎてから念願のトロイの発掘を行った。有名な話ですが、かれは少年のころにホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』を読んで感動して、トロイ戦争は本当にあったと信じ、いつかその遺跡を発掘したいものと夢見ていました。わたしも『イリアス』と『オデュッセイア』が好きで、それに関する文献を何冊読んだかわかりませんが、西洋の学者についてわたしが頭にくるのは、『イリアス』と『オデュッセイア』はかれらの歴史にとって大本であるのに、それがトロイ戦争の話だということについて絶対と断言していいくらい触れないことなんです。不思議ですねえ。トロイ戦争はなかったと、ついこのあいだまで言っていました。トロイの遺跡が発掘—それもシュリーマンによって七層も発掘されて日の目を見ると、かれら頑迷固陋な旧学者も不承不承トロイ戦争は無かったとはあまり言わなくなりました。もし、シュリーマンが少年のころの夢を大切に思ってこの発掘をしなかったら、いったい、どうなっていたんでしょうね。

シュリーマンのあともトロイ遺跡の発掘は続いて、じつに七層にわたって遺跡が見つかっています。それによって、戦争で滅んだ街が火山の噴火か何かで埋まってしまって、その上にまた街がつくられて、戦争でまた滅んで、というのを繰り返して、二百年くらいのあいだに七回にわたって世界戦争が続いたことが、確固として証明された。それは地中海世界における世界戦争だったんです。だから、われわれは、地中海世界における世界戦争は、トロイ戦争とペルシャ戦争と二回あった、と考えなければならないと思います。これがヘロドトスのいわゆる「歴史」の始原に横たわっている二つの大事件、大問題です。

第一回目は、トロイ戦争です。これによって東地中海のミノア・ミュケーナイ文明という優れた文明が完膚なきまで滅びました。第二次世界大戦が七回あったようなものですか

ら、どんな文明でも、そりゃあ無くなってしまいますよ。第二回目は、ペルシア大帝国がギリシアに敗れたペルシア戦争です。しかし、マラトンとサラミスではペルシア軍のほんの先遣隊が打ち負かされたにすぎません。そのあとの地中海世界を制覇して、アテネやスパルタなどの諸ポリス国家のそれぞれをうまく操って、ペロポネソス戦争のようなギリシアの内戦を引き起こしたのは、ペルシアです。さらにペルシアは、その内戦でたくさん出てきたギリシア人傭兵を雇って、エジプトを攻略しました。

では、ペルシア帝国はいつ滅びたのか。それは、マケドニアのアレクサンドロス大王の東征によってです。アレクサンドロス大王の東征は、ペルシア帝国との次なる世界戦争でした。アレクサンドロス大王の軍隊は、簡単にペルシア軍を打ち破れたわけではありません。戦いは三回にも及び、それは両軍とも数十万の軍勢を擁した大戦争でした。地中海世界の偉大なる支配者だったオリエントのペルシア帝国は、ついにアレクサンドロス大王の前に屈したのです。アテネやスパルタなどは、すでにアレクサンドロスの東征の初陣で血祭りに上げられました。

アレクサンドロス大王の築いたヘレニズム時代は、古代ギリシア文明と古代ローマ帝国のあいだに挟まってサンドウィッチのハムのように譬えられ、薄っぺらな歴史だと論じられてきていましたが、それはとんでもない話で、こちらのほうが大事なんです。ポリス国家を滅ぼし、そしてペルシア帝国をも滅ぼしたマケドニアは、その領土を地中海からオリエントの彼方まで広げた大帝国になり、国際色豊かなヘレニズム文化がそこに花開いたわけです。しかし、マケドニア大帝国は、アレクサンドロス大王の急死とともに、三分解してしまいます。その一つが、古代ローマ帝国になるんです。この古代史の中心的謎を、従来の「高校生向きの歴史教科書」のインチキを突いて、明らかにして記したのも、この三部作の第三巻のミソです。

このように世界史は推移していきます。歴史の個々の小さなエピソードだったら後からいくらでも補充していけばいいんですが、根本的なところで全部インチキなんですから、そこから歴史を総括し直さなければ、二一世紀の世界史の見方を誤る恐れが多分にある。例えばイラク戦争一つとっても、先ずもってイラクという国の由緒が、ブッシュ風情には全くわかっていない。これからイラクがどうなるのかと考えたときに、バグダードも知らない始末です。ブッシュも小泉もそういう無恥かつ無知蒙昧のやからです。メソポタミア文明も知りませんでは、打つ手を間違うに決まっているんです。そういう危機感から、わたしはこの本を書いたわけです。

8 ノミナリズムと実存主義

古代ローマ帝国については次回で詳しく触れますが、その前に、プラトンについてお話しします。先ほど近藤節也さんが、「いいだももさんはプラトンがお嫌いなのだ」とおっしゃいましたが、まさにその通りでして、わたしは、プラトンは「古代のスターリン主義

者である」といつも意思表示しています。そんなふうには言っているのは戦後ではわたしくらいのもので、それでこれまでずいぶんと孤立をかこっていたのですが（笑）、今では国内外の大多数のまじめな学者は、そう考えはじめているとわたしは思います。たとえば、東大の佐々木毅さんという大学者は、きわめて実証的な大学者でして、別にわたしのようにはマルクス主義者でも、ましてや左翼でさえもありませんが、プラトンがいかにインチキな男だったかを、きわめて説得的に書かれています。

どだい「個物」というものを、プラトンはいっさい認めません。何を認めるかということ、「アイデア」です。これは認めるものにもない、洞窟に映った影、なんですから。影を見詰めたプラトンは、ソクラテス曰く、と書き出して、十数回にわたって「アイデア」について書きに書いていますが、「アイデア」とは要するにプラトンの頭の中にある妄想です。

中世の終わりに、「オッカムの剃刀」というかたちで「ノミナリズム」というものが出てきました。この考えは、日本ではあまりよく理解されていないのですが、近藤節也さんがおっしゃるように、これは「実在論」に関係する非常に重要な問題で、現在でも論争が続いています。ノミナリズムは「唯名論」と訳されますが、本質、つまりアイデアがあるのではなくて、個々の個物が実在としてあるだけなんだ、という考えです。わたしは、まったくそのとおりだと思います。

わたしは、第二次世界大戦で辛うじて生き延びましたが、戦争が終わって戦後の廃墟の地上に這い上がってみると、ジャン・ポール・サルトルの『嘔吐』という小説が、出ていました。その小説の主人公は、マロニエの木の根っこを見ると吐き気をもよおして、せつかく食ったモノを全部吐いてしまうんです。なぜかという、マロニエの根っこはグロテスクな「個物」です。アイデア的なことで頭がいかれちゃっている人は、個物の力が怖いからです、それをアイデアでくるんでしまおうとしますが、わかった気にならなくて何かがぐーっと迫ってくるわけです。それで吐いてしまう。この吐いた経験から、サルトルは有名な『存在と無』を書きました。そこにあるのは「実存は本質に先行する」という命題です。わたしは戦後すぐの二十歳のときにそれを読んで、これだと思いました。本質とかアイデアは存在しないんですよ。実存するのは個物ですから、これが唯一無二なんです。唯一無二なるものから、「アイデア」のような形式的な普遍概念をつくるわけにはいかない。

ヘーゲルは、唯一無二なるものを包括して「具体的普遍」と言いました。「具体的普遍概念」によって、本質に先行する実存と個物を具体的に位置づけることができるようになった。この肝心の点において、デカルトはだめだと思うんです。デカルトは「身心二元論」ですから。デカルトの「われ思う、故にわれ在り」の近代哲学原理は、一方から言えば、スコラ哲学の「われ在り、故にわれ思う」に戻らなければなりませんし、他方から言えば、今日の現象学が言うように、「かれらに在り、故にわれ在り」の社会的共同体へと出てゆかなければなりません。

このデカルトの「身心二元論」を超えたのが、ライプニッツとスピノザです。このことを

わたしは何度も言っているんですが、ヨーロッパ近代哲学史の通説は、みなデカルトから始めますし、わたしの説は、なかなか哲学界の常識にはなりません。

ライブニッツは、宇宙のいたるところが中心である、と言っていますが、まったくそのとおりだとわたしは思います。一中心ではなくて、多中心なんです。ヨーロッパが中心であるとか、漢（中国）が中心であるとかというのは、ぜんぶ嘘です。空回りですよ。それだったら、プラトンの「スターリン主義」と同じことです。一つの中心があると、その他はそこにぜんぶ服属しなければならない。そういうのは、イデアの専制、スターリン主義なんです。そんなことでは、これからの世界はうまく行くはずがありません。第一よくちゃんと見えてこない、世界が。

それから、スピノザですが、スピノザは現在最高の哲学者として再解釈されるにいたっている、といえます。今日、アントニオ・ネグリをはじめとする現代の優れた哲学者たち・思想家たちは、みなスピノザの方を向いています。スピノザは「神の啓示」でいろいろ書いているのですが、『エチカ』を読んでもわかるように、かれの考えでは神様は自然ですから、神の名において語ってはいても、かれが言っていることは「自然」なんです。だから、スピノザ哲学は完全な唯物論です。要するに、自然でもって宇宙論を展開するわけで、ゆえに『エチカ』はとても素晴らしい本です。つまり、多様性の一元論という問題です。

多中心で、多元的で、多様性を許容するということができれば、ヘーゲルの言う「具体的普遍」概念はできないと思います。ですから、先ほど言ったノミナリズム（唯名論）が今でも問題になっている。「ノミナリズム」は、イデアに一元化させるプラトンの考え方とは正反対です。実存＝唯一無二のものは、たくさんあるわけですから、キリスト教的な、一元論的な、カトリック的な普遍概念は成り立ちようがない、と考えます。何だか哲学論争をやっているみたいですが、こういう方法論を発見しないかぎり、これからの世界は絶対に具体化して安定することができないことは、はっきりしています。

もうおわかりだと思いますが、アメリカが中心だとか、スターリンのソ連邦が中心だとか言っていたら、それはイラク戦争にならざるを得ないんです。ドルを中心にして通貨を一つにしようとしたって、そんなことは長期にわたってできっこない。現にユーロができて、人民元ができて、少なくとも世界には今でもすでに通貨が三つある。もうじきドル本位変動相場制も崩壊する、とわたしは思います。そうなったら、管理通貨なき国際通貨体制は、新しい通貨をつくらなければなりません。今でさえ三つの通貨があるわけですから、円も含めてもっと多極化しますよ。ですから、そこでちゃんとした方法論がなかったら、こんなことの見定めもできないんです。そのためにも「八千年の歴史」を踏まえる必要がある、とわたしは言ってるんです。

9 無意識の世界の重要性

わたしはマルクスの徒ですから、書いている方法論は、マルクスの経済学批判とフロイ

トの精神分析なんです。マルクスは一九世紀の人、フロイトは二〇世紀の人です。わたしは、この二人は最高に偉大な思想家だ、とっています。それは、社会と人間精神における「無意識の領域」を開拓する方法を、発見・実践して明らかにした人たちだからです。つまり、合理主義文明というのは、氷山の一角でしかないんですよ。冰山というのは見えているのはほんの1パーセントで、あとの99パーセントは水面下にあります。合理主義文明で見えているのは、まさにそれと同じで、ちょこっと水面に出ているところに陽が当たって、ヌースによって見えますから、垂鉛を深く下ろしてもいないのに、世界が全部わかると思っちゃうんです。しかし、垂鉛を深く下ろしてみれば、99パーセントは水面下で見えない。そこにこそ真実が在る。

前回でも触れましたが、メルロ・ポンティはわたしたちに『見えるものと見えないもの』を残してくれました。この本を読んで、わたしはかれの遺志を受け継がなければならない、と考えましたが、「見えるもの」というのはこの氷山の一角のことで、ギリシア時代以来見えてきたものなんです。それでもって、西洋中心主義文明をつくってきました。メルロ・ポンティは西洋人ですが、かれは「見えないもの」のほうが大事であり、西洋中心主義文明を内側から根本的に転倒させ克服しなければ人類文明はもうこれ以上は生きられない、と考えたわけです。

ついでに、ヴィトゲンシュタインにももう一度触れておきますが、ヴィトゲンシュタインは、或る面では一九世紀末の哲学的思考の特性である「言語論的転換」というものを踏まえた才能ある哲学者で、戦後にヨーロッパで大流行になりましたし、日本ではこれから流行る予感があって新しい「全集」なども出はじめていますし、かれについては実に汗牛充棟の書がありますけれども、わたしに言わせれば二〇世紀の大流行哲学であるヴィトゲンシュタインの論は、全部インチキです。前期に『論理的哲学論考』、後期に『哲学探求』があり、前期と後期ではヴィトゲンシュタインの論理は正反対だとよくいわれていますが、かれが後期で「言語論的大転換」をしたともし思っていたら、それは本当は大間違いです。通説に反して、後期のヴィトゲンシュタインは、完全な「独我論」になります。「我あり」なんです。よ。「我あり」もデカルトでもうだめなんですけれども、ヴィトゲンシュタインの場合にはそれがどんどんひどくなって行って、最後にはその「我」もなくなってしまいます。後期のかれは「言語ゲーム論」になり、言語というのはドッジボールの球遊びみたいなもので、ユース (use)、つまり使うことによって発達するものだ、と定義しましたが、それはたいへん正しいんです。そういう発想は非常にいいんですが、かれの言うドッジボールのコートには、かれ自身はたしかにそこに居るけれども、かれの相手をする人間は絶対に存在していない。相手がこのゲームには出てこない。つまり、一人遊びなんです、だからかれは、最後に論理的破綻を来たしてしまいます。

かれが秘密に書いたラテン語の日記も、翻訳されていて、それを読めばわかりますが、本当にかれは変な男です。ヨーロッパの大金持ちの息子ですから、とにかく世間離れし

ている。また、わたしはそういう趣味ではありませんが偏見はないつもりですけど、かれは同性愛者でもあった。朝から晩まで何をやっているかという、妻君がいないから1日3回くらいせんずりを搔いている。あるいは自分の男相手とやっている。ものすごく性欲旺盛な男でした。世間では正反対に貴公子のように思われていましたけれども。

言語というのは使われることで文脈的な意味が生じてくる。会話することによって文脈ができてきて、意味が通じるようになる。これはソシユールのいちばん大事な言語論的展開でもありますから、覚えておいておくといいますが、わたしたちは何万年もかけて自分たちの文法を無意識につくってきたわけです。そこで無意識の話にもどりますが、言語というのはみな意識的なものだ、と思っていませんか？ それこそが合理主義文明の氷山の一角しか見ないことであって、それはとんでもない誤りなんです。

わたしたちみな、三歳くらいから言葉を話すようになりますが、それは文法書を読んで覚えたものではなく、母親とのあどけないおしゃべりに始まるユース、会話によって身につけたものです。それは全部、無意識のうちにつくられたものです。つまり、文法の99パーセントは無意識なんです。その無意識を言語化することによって文法が現れてくるにすぎないわけです。これは、マルクスが経済学批判でやったこと、フロイトが精神分析でやったことと、同じなんです。

意識のうち99パーセントは無意識の領域にある。それを言表して意識化したときに、無意識の構造が法則性を持って現われるということです。合理主義文明のだめなところは、見えている100分の1にすぎない氷山の一角には法則性があるから、言語意識による科学が成り立つ、と考えているところです。それは正反対だと思ったほうがいい。無意識のほうが大事なんです。

レヴィ・ストロースは、神話を分析することによって、世界のどこであろうと神話というものは同じ構造を持っていることも、発見しました。さらに、それは「親族の構造」と同じであるということも、発見しました。

神話と親族の構造が、無意識の構造として同じ法則性を持って存在している。ですから、合理主義文明では神話が迷信だとされてしまいますが、その意味では神話ほど完全に構造化された法則でできあがっているものはないんです。ですから、「言語論的転換」のあと、つまり「現象学」が始まってからは、わたしたちは社会や人間精神が持っている無意識の領域というものを、そういうものとして受け取っていかなければならない。

そこで、猪野修治さんがこういう読書会という形で討論会をやってくださって気づいたことがあります。普通はこういう本を書いたら、あとはもう講釈すればすむんです。わたしはあまり暇がない人間だから、そうであればなおさら、余計に人の話を聞いたり会話したりする必要もない。しかし、こういう会にわたしが積極的に喜んで参加させていただくのは、自分の本の愛読者がいることを喜びたいのではなくて、もっと学びたいと思っているからです。自分の書いたことについて、人がいろいろと意見を言ってくれるのを聞いて

いると、自分がそういう意識でもって書いたんじゃないところがわかってくるんです。無責任に書いているということじゃありませんよ。自分で意識して書いていても、無意識の部分は膨大にある。しかし、自分ではそれはわからないんです。だから、わたしの無意識はこの本の99倍くらいあることになる(笑)。たいへんですよ、こんなに無意識があるんですから。この超マクラ本の実に九十九倍です(笑)。

皆さんの話を聞いていると、自分はそういうふうには思っていないと考えたいんだけど、無意識ではそんなふうを考えていたんだ、と気がつく。誰だってそうだと思います。そして、そのことは、新たに言語化された意識法則として定着し、さらに豊かに包括されることがわかる。ですから、あと二回でわたしの無意識の部分も、それなりに明らかになりますよ。それが、わたし自身とても楽しみなんです。

わたしたちが意識できるのは、ほんの一部分です。そして、わからない無意識の部分は、他者との会話によって明らかにされる。ヴィトゲンシュタインがだめなのは、会話を拒否するからなんです。球を投げないんだから。球を投げないでプレイしようなんていったって、そんなもの誰も相手にしませんよ。球は一つでもかまわない。ドッジボールでもサッカーでも、投げ方はいろいろあるんだから、ユースによってさまざまな法則ができる。点が入って勝ち負けが決まる。だから、人生は面白いんじゃないですか。だけど、一人遊びではどうしようもない。ゲームというものがそもそも相手があることですから。「言語ゲーム」をプレイして事柄を進めていくことを、「言語論的転換」というんです。

10 価値転換はこれから始まる

前回も言いましたが、二〇世紀の初めに、エドマンド・フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』という本が出ました。西欧哲学の中心にいるフッサールが、ヨーロッパの学問はだめだということを、言ったんですね。わたしたち非ヨーロッパ人は、そういうヨーロッパ人の最新の知覚を尊重すべきです。そして、その危機を超えるためには、現象学的な判断中止(エポケー)をして、今までのいっさいの既成概念を一度括弧に入れて根元的に考え直さなければならぬ。それが「超越論的現象学」であると、フッサールは言った。ですから、現代哲学では「超越論現象学」以外の哲学は、全部ひま人の与太なんです。先に挙げた、バナーの『黒いアテナ』がわからない歴史学が全部与太のと、同じことです。

そう考えると、フッサール、ニーチェ、ソシュールによって提唱された「価値の根本的転換」は始まったばかりですから、これからはよいよ本格的に転換されてゆくと思ったほうがいい。そこで注目しておきたいのは、一つには「ヨーロッパ中心主義」の旧来の誤りです。近藤節也さんをご指摘くださいましたが、バイブル以降のキリスト教文明がヨーロッパ中心主義の大本になっている、ということは、皆さんもご承知のことだと思います。それが古典古代ギリシアのソクラテスープラトンーアリストテレスのインチキ哲学史の

贗造とどういふふうにかぶさって、どういふふうに駄目の二乗になってきたのか。

中世ヨーロッパは神学大系で、その前半はアウグスティヌスで、後期はトマス・アクイナスです。アウグスティヌスの『神の国』は、面白くてわたしの愛読書の一つですし、トマス・アクイナスはスコラ哲学者ですから、論理的でとても難かしい。しかし、中世ヨーロッパの歴史や社会の大系は、哲学的にネオ・プラトニズムと習合したんです。つまり、アウグスティヌスの神学というのは、「プラトン-アウグスティヌス神学大系」なんです。これで中世ヨーロッパ世界の前期は統括される。後期は、イスラーム文明の中に保存されていたアリストテレスの学問がルネッサンスによって蘇ります。アリストテレスが復活したあとの神学は、「アリストテレス-トマス・アクイナス神学大系」になるんです。

おわかりでしょうか。古典古代ギリシア哲学がプラトンの偽造によって、ミレトスのタレス以来の自然哲学を全部否定してしまった。始原を論じたタレスの「水」という断片は、非常にいい断片ですよ。もし現在の哲学がミレトスの自然哲学から、プラトンの「ソクラテス曰く」からの体系的贗造によって放逐させられないで、もしまっすぐに今日まで来ていたら、人類文明史は今とはまったく違ったもの、素晴らしいものになっていたでしょう。

もう一つは、「ソフィスト」の哲学です。アテネ・ペリクレス時代の最高の哲学はソフィストの哲学でした。わたしはソフィストについて戦争中、田中美知太郎先生に教わりました。田中美知太郎先生は、日本における古典ギリシア哲学の最高の大家ですが、かれはずでに戦争中に、ギリシア哲学の最高はソフィストである、と喝破しておられます。今もってまったくそのとおりと、わたしは思います。その証拠に、プラトンとアリストテレスはわざわざソフィスト批判のために、それぞれ一冊づつ本を書いたくらいです。ソフィストはインチキで、かれらはお金を取ってくだらないことを教えている、というわけです。でも、ソフィストはアテネのど真ん中で生徒を教えて暮らしている哲学者ですから、お金を取るのは当たり前なんです。それにケチをつけるプラトンやアリストテレスの方が、よっぽどインチキ学者でオカネを稼ぎまくっていますよ。

三つめは、ヘレニズム時代の、いわゆるプラトン・アリストテレス哲学が滅びたあとの、エピキュロスとストア派とピュロンの三大哲学のことです。このことは、西洋では現在でもあまり教えないわけです。若いころのマルクスが慧眼にもそれに目を付けて大学の学位論文にしましたが、そのときにかれが集めた資料は『マルクス・エンゲルス全集』の第1巻全部を占めるくらい歴大なものです。そこに一八四八年の革命が起きて、『共産主義宣言』を書いたマルクスは、そのままその疾風怒涛の渦中に飛び込んで、それからあとはわたしと同じで六十年間席を暖めたことはありませんから、『資本論』は書いたけれども、若い時期に書こうと志したエピキュロス・ストア派・ピュロンについては全然まとめていない。そのあとは誰もそのことを書き継いでいけませんから、哲学史もその欠陥を惜しむべきですね。

けれども現在では、エピキュロスと、キケロに代表されるストア派と、ピュロンに代表される懐疑派の三つが、偉大な世界哲学の脈絡であることは、明々白々であって、それに比べれば、プラトンやアリストテレスの哲学などはほんの片田舎のおっさんの馬鹿話でしかない。この三つの哲学は、現代の心ある哲学者には繋がっているだろう、と思います。わたしのこの本は、若きマルクスの仕残した大哲学的総括の今日の実現のつもりでもあるわけです。

そうすると、〈9.11〉以降の世界を考えざるを得ない。〈9.11〉以降の世界でいちばんの問題は、アメリカ中心からくる擬似普遍性文明に対する、それでは生きていけない世界の民衆の無言の抵抗なんです。先ほどの無意識ということからいうと、それは意識化されているとは限らないけれども、意識化されるなら、それは「アメリカニズム」のようなきわめて寄生的な高度消費文明ではない、深い無意識の法則的な仔細があるんだということが、これから必ずや明らかになるはずです。その一つの言語化された表現というのが、現在における「イスラーム文明の再興」なんです。

どうですか。今の世界を見た場合に、この毎日のぶつかり合いを繙くカギというのは、アメリカニズムとイスラーム文明の相剋であることははっきりしているんじゃないですか。東洋文明、とくに明の「海禁政策」への転換以来の江戸時代の鎖国体制の中で育ってきたわたしたちの、それなり健全な常識から見れば、イスラーム文明でさえもが、やはり「バイブル」に属する一つの異端です。ユダヤ教とカトリックとプロテスタントとイスラームとギリシア正教は、わたしたち東洋文明の民から見れば、いずれも似たり寄ったり田舎イデオロギーなんです。けれども、イスラームが今、アメリカニズムに対抗する最大の文明原理を持っている。これは国家原理ではありません。「ウンマ」と呼ばれているイスラーム社会には、国境がない。だから、アラブから興ったイスラームは、インドネシアやマレーシアのほうまで広がってきました。そういう「ウンマ共同体」の文明が、アメリカニズムという怪奇なドル・核帝国と対立関係にあるわけです。社会主義諸国の方は、スターリン主義政権のソヴェト・ロシアが一九九一年に崩壊してから以後は、歴史から退場してしまっただけです。

このことの歴史的意味は、今まで縷々お話してきたような世界史観を持たなければ絶対にわかりません。わたしは、イスラーム文明の人ときちんと話したことはありませんが、そういう世界史観についての了解がありますから、それなりにその今日的意義についてわかりますし、とりわけ〈9・11〉事件以後の今日では、臨場感をもってよくわかる場所があります。「アメリカニズム批判」と「スターリニズム批判」という点では、完全に意見が一致するだろうと思います。

わたしは、今年中にはアメリカがイラクから撤退し、再来年あたりにドル本位変動相場制が世界史的に崩壊すると予想していますが、日本でも集团的自衛権の是非と憲法九条が問われ、小泉首相も花道に出ないで終わることがはっきりしていて、心からご同情にも堪

えません（笑）。しかしこれは継続審議の法案ですから、またポスト小泉の国会に「国民投票法案」や「共謀罪法案」も出てきます。わたしは、日本国憲法第九条については絶対死守でやってきましたが、NHKテレビの毎日の「百歳の男女特集」で百歳の方が頑張っていて自転車なんかを漕いでいるのと見ますと、八十二歳のわたしも、もっと頑張ってみようと、決心を固め直すわけです。

これからの世界は、非常に面白くなると思いますが、自分たちの世界史観がなければ、何が面白いのかもわからないし、何を選択していいのかもわからない。わたしはそれを知るために、皆さんにお世話になって、こうして懇談会に来させていただいております。ということをお願いしまして、今日は終わりにしたいと思います。どうも長時間ありがとうございました。

総合討論

猪野 時間の関係で、最初にまとめて質問をしていただきたい、と思います。どなたか発言されたい方がいらっしゃれば、お願いいたします。

宇佐見義尚 宇佐見と申します。いいださんにお聞きしたいのは、この『〈主体〉の世界遍歴』という書名についてです。よく「思想の遍歴」という言葉は使いますけれども、あえて「世界の遍歴」とした意味を説明してほしいのですが。

勝木渥 勝木と申します。いいださんとは1964年の秋か65年の5月か、名古屋大学の文化祭で小説家ならぬ「大説家 いいだもも、来る」という講演があったときに、野次馬で聞きに行き、お目にかかったことがあります。そのころぼくは、日本の戦後朝鮮戦争の問題として、朝鮮戦争に思いをいたしており、「定職について物理で飯が食えるようになってから、ときにビフテキを食べることもできるようになったが、そのときビフテキから流れ出てくる血は、朝鮮戦争で流された朝鮮人民の血であり、その肉は韓国民衆の肉である」などと思ってましたので、そのことを言いましたら、いいださんが「これはいいや。それいただき」とおっしゃった（笑）のを、覚えています。

もう一つ思い出すのは、ちょうどそのころコンピューターが入りかけて、最初は穴を空けたテープでデータを読み込ませることをやっていたので、ぼくはこれは高速ソロバンくらいに思っていたんです。そのとき確かいいださんが、コンピューターというのはどういふものなんだ、と言われましたので、自分の経験から、あれは高速ソロバンであって大したことはないと言っちゃったんですが、これは完全にぼくの予測が外れました。

さきほどのお話で、ぼくが興味深かったのは、「万里の長城」の外側は牧畜で、動き回る馬や牛なんかは主役で、内側は植物だったということなんです。ぼくは今、エントロピー

的な生命環境論というのを、考えています。地球には重力が働いていて、上から下へ養分は流れ落ちてきますから、もう1回循環が成り立つためには、下から上へ持ち上げなくてはならない。

そういう役割を、水は太陽が持ち上げてくれるわけですが、養分を持ち上げるのは動物なんです。牧畜の基礎となっている動物と、農耕の基礎となっている植物を比べますと、植物のほうは根を大地にはやして養分をとりますが、動物のほうは大地に相当するものを消化器として、自分の体に取り込んだから、自由に動き回ることができる。そういう特質を生かして、積極的に生態系に寄与しているはずだ、と思いました。

しかし、中学で習う食物連鎖の三角形で、植物は生産者、微生物は分解者、動物は消費者と位置づけられています。では、動物は生態系に何ら積極的な寄与をしていないのか。そうではなくて、養分の循環を成り立たせるためには、低いところから高いところに持ち上げなくてはならないわけですから、動物は物を運ぶという積極的な役を果たしているはずで、そういう動物の特性を生かした物質循環の三角形をきちんと考えなくてはならないのではないかと思っているものですから、非常に興味深くお聞きしました。

清水邦男 横須賀市から来ました清水と申します。フランスに長く住んでいました。政治・経済を中心とする国際関係の動きを主たる関心事とするジャーナリストですが、個人的な体験としても、フランス人との接触のなかで、いわゆるカルチャー・ショックを強く感じました。人間関係で、ふつう日本人同士なら予想される相手の出方や反応とまったく違うフランス人の反応と出会い、その理由がわからない、理解できないという経験です。はじめは個人的な人種差別とか好悪の感情かと思っていたのですが、そうではなくて、どんなフランス人にも共通するもので、日本人には理解できない反応に出会ったのです。

やがて、自分がフランス人の反応を理解できないのは、フランス人がおかしいのではなく、フランス人とは異なった人間関係のあり方のなかで、自分（日本人）が生きて来て、フランス人も同じだと思いこんでいたから、フランス人の反応に違和感を覚えたのだ、と気付いたのです。西欧と日本との文明的相違についての書物はたくさんありますが、住んでいる人々の毎日の生活感情に、どのような形で染みこんでいるかは、実際に異文化の国に住んで見ないと、その違いは体感できません。

逆に、体験的に違いを感じても、その違いとはいったい何であるのか、どこがどう違うのかを明確に概念化することは、とても困難です。それで、たいへん苦勞しました。ようやく自分なりの結論を出しましたが、世界史的な歴史的な知識が貧困なため、いまひとつ、明確にならない不満がありました。西洋文明の起源についての先生の極めて遠大なる歴史の話の伺って、非常に知的にすっきりさせていただいた気持であり、大変ありがとうございました。

わたしがフランスでの生活で得た西洋文明についての自分なりの結論とは、一言でいえ

ば、西欧（フランス）社会とは「理性の優位」という原理で構築されている社会だ、ということを知ったことです。「理性の優位」という西洋の価値観に、なぜ、わたしが強いカルチャー・ショックを受けたのかを考えていくうちに、それは日本人の社会が西洋とは全く正反対の方向性を持つ原理、つまり「情緒性の優位」で構築されており、そういう価値観で自分が生きてきたことに気付いたのです。

「理性の優位」の価値観と「情緒性の優位」の価値観とが、正反対の方向性を持っているということは、頭で理解するだけなら問題は起きませんが、現実には、欧米社会に暮らすとなると、たいへんな問題が起きます。自分のなかの体内時計（日本人の価値観）と実際に生活している空間（フランス）の時計が食い違っているようなものです。違いをはっきり理解して入れればよいのですが、自分の価値観（体内時計）がどういうシステムなのかふつうは意識していませんから、時計の食い違いが理解できないのです。これがカルチャー・ショックです。

外国に住んでいても、外交官のように特権的な環境の中で暮らしていたのでは、衝突は起きにくいので、価値観の相違、カルチャー・ショックを体験しないまま過ごしてしまうこともあります。あるいは、日本レストランやカラオケバーなど日本的な雰囲気の中に逃げ込んでしまうこともあります。最近では、世界中どこに行っても、日本的環境を見つけやすいのでなおさらです。

西欧社会での「理性の優位」というのは、現実には毎日の生活の中に生きているオキテ（掟）であり、観念的な知識ではないのです。「理性の優位」とは言い換えれば、「情緒性への軽蔑」という形であらわれます。言い方を変えれば、「情緒性は恋人、家族、友人」というプライベートのなかでだけ優位を認められていますが、社会的には公的にはあくまで「理性の優位」なのです。これがわからないと、西欧社会に於けるプライベートの重要性を理解できません。見知らぬ人や社会的公的な場で、「私の気持ちを察してください」という態度は、軽蔑されてしまうのです。わたしは、なんどか、そのような苦い経験を味わわれるなかで、ようやく、自分のなかでは（日本社会では）「相手の気持ちを察すること」がもっとも重要なこと、時には法律よりも大事だという「ものの考え方」（価値観）で生きてきたことに、気付いたのです。

日常生活はもちろん、わたしがジャーナリストとして接しているフランスの政治家、言論人、つまり政府や言論界、経済界という現実の社会を動かしている人たちは、本当に徹底しています。それは潜在意識にまで浸透しているのです、普段はあまり意識されていません。それは当然のこととして、潜在意識の奥底にまでしみこんでいますので、それと方向性が逆向きの社会的な情緒性の重要性をいくら指摘しても、結局は理解されないのです。

「情緒性の優位」はあくまでプライベートのなかでのことであり、社会的には「理性の優位」、つまり「法の支配」であるべきだ、と考えるのです。この西欧文明の根本的性格が構築されてきた歴史的背景が、先生のお話で理解できたと思ったのです。

日本についていいますと、西洋社会とはまったく逆で、「情緒性の優位」がいかに日本社会で根を張っているか、特に政治・経済、言論界も含めていえるのです。これは、まさに西洋社会では、「理性の優位」が無意識的にすべての前提に立って判断されているのと同じように、日本では「情緒性の優位」が潜在意識の奥深くにまで浸透しています。それが時によって、立ちほだかってくるのです。日本では理性的な原理原則が必要だ、とよく言われますが、結局は「理屈はさておき丸く収めよう」という潜在意識の中の大原則が出てきて、現実の社会を律してしまいがちです。

西洋の「理性の優位」の持つ欠陥というのは、先生が先ほどご指摘されたとおりでと思います。欧米人たちも自分たちの価値観には欠陥があることを自覚して修正しようと苦しんでいます。解決策は、情緒性をプライバシーのなかに閉じこめないうで、社会的連帯に導入することなのですが、それは「理性の優位」「法の支配」という大原則を破壊すると、かれらは恐れるのです。日本社会では、「理屈はさておき丸く収めるべし」という道義的権威に抵抗することは、なかなかむづかしい。

これが「なれあい」や談合を生み出します。これはまさに日本社会における「情緒性の優位」が持つ欠陥です。小泉首相はその「丸く収める」という自民党的体質を壊そうとしたんだと思います。先生は小泉批判をされてましたけれど、わたしはその意味での彼の価値があったと思います。

この日本文化における、あるいは非西洋文明における（これにはイスラムも入ると思うんですが）ネガティブな側面についてどうお考えか、お聞きしたいと思います。

猪野 それでは、ひとまずいいださんに、3名の方々の質問にそれぞれ答えていただきます。どうぞ、よろしく御願ひします。

いいだ 先ほどの休憩時間に宇佐見さんに名刺をいただいたんですが、それには「亜細亜大学経済学部の助教授」とありまして、経済学の先生を目の前にして経済の話をしたわけですからたいへん恐縮してしまつたんですが、それはさておき、『(主体)の世界遍歴(ユリシーズ)』という書名の含意、由来について、お答えいたします。わたしにとってそれは非常に大事なことです。わたしは、ジェイムス・ジョイスとフランツ・カフカが現代文学における偉大な作家だと思っています。かれらが詩的言語批評でもって何を表現しようとしたのかは、20世紀の最大の文学的な課題ですが、「ユリシーズ」というのはそこにあるんです。

ご存知のように、「ユリシーズ」というのはホメロスの『オデュッセイア』に出てくるギリシア伝説の英雄オデュッセウスのことですが、オデュッセウス自身がどうして人間の或る典型的な規範なのか、と考へてみますと、これは口承の英雄叙事詩ですから、ホメロスが属している地中海世界の共同体社会全体についての叙事詩なわけですから、見てきたよう

に書いていますけれども、それはわたしの取材しているホメロス時代の最大の人間類型、批判的な人間類型の造形であろうと、思います。いわゆるホメロスの属していた共同体を統合している根本的な価値なんですね。その価値をヘロス、英雄、ヒーローというものに人間形象化しながら、ホメロスは倦まず弛まず語っています。

地中海世界というのは、ご承知のように雨があまり降らないところですから、共同体に暮らす人々は、夕方になると軒先に出てきて、そこでおしゃべりを楽しまします。そのときに、「ホメーライ」と呼ばれているホメロスの吟遊詩人集団が必ずいて、その共同体の物語として飽きずに『オデュッセイア』を語ったんですね。人々がそれをどう受け取るかで、その後の文明のすべての下地が用意されるわけです。

『オデュッセイア』も『イリアス』も、トロイ戦争の話です。トロイ戦争は先ほど申し上げましたように、シュリーマンの発掘以来、7層まで発見されています。これから先は、わたしの想像ですが、約200年間にわたって7回の世界戦争があった。広島型原爆が7回落とされたというくらいに想像すればだいたいわかる、と思います。それによって、貢納制母系社会であった偉大なるミノア・ミュケーナイ文明が滅びたわけです。それがわたしのこの3巻本の主題中の主題になっています。

オデュッセウスはイタケーの王様で、トロイ戦争に従軍したわけですが、非常な知恵者で、皆さんご存知の「トロイの木馬」の詭計で、難攻不落だったトロイを内側から破壊して、アガ멤ノン指揮のギリシア軍を勝利へと導いた。トロイがなかなか落ちないので、知恵者のオデュッセウスが、木馬（神馬）を発案して、その城壁の前に置いたわけですが、トロイのほうも200年にわたってギリシアの侵入を防いできた強者ですから、何か計りごとがあるんじゃないかと思って、なかなか木馬に近寄らなかった。しかし、ギリシアの神馬を城内に鎮座させないことには必ず呪いがあるだろうと考えて、とうとうオデュッセウスの策略に引っかかってしまって、木馬を城内に引き入れてしまった。呪いというのは、先ほど申し上げた占いと同じで、古代の共同体社会では第一の政治思想的選択原理です。ところがよくよくご存知のように、その木馬の中には、百数十人のギリシア軍の精鋭が隠れていて、そのため堅牢を誇った城壁は内側から破壊され、とうとうトロイは落城します。

トロイ戦争に勝って、オデュッセウスは、帰国の途につきます。イタケーでは妻ペネロペが待ち侘びていますが、オデュッセウスの留守中に国は無秩序となり、たくさんの男たちがかのじょを自分のものにしようと、ありとあらゆる手練手管を弄していた。そのことをオデュッセウスも知っており、だから帰路を急ぎますが、そこで思いがけない世界遍歴に巻き込まれてしまいます。つまり、『オデュッセイア』は世界遍歴の物語であると同時に、世界戦争からの凱旋帰還の物語なんです。それはかれ個人の運命ではなくて、トロイ戦争にはあらゆる共同体から将兵が出征していましたから、かれらが皆同じ運命を背負っていた。全員が帰還を果たそうとしていて、それが当時の200年間の歴史の主題でした。それを経過しなければ、ミノア・ミュケーナイ文明が、そのあとの古典古代ギリシア文明

に世界史的に移行することはなかった。それは、必至の歴史的過渡期であり、歴史の媒介物であったわけです。そういう意味でオデュッセウスの世界遍歴の物語には普遍性がある、と言えると思います。

ですから、オデュッセウス（ユリシーズ）の物語のポイントは、三つあります。ひとつには、普遍的な時代の課題（凱旋帰還物語）であったことです。二つ目は、古代地中海世界（貢納制母系社会）が古典古代ギリシア文明（奴隷制社会のポリス国家）に移行する過渡期の物語であったこと、つまりオリエントからオクシデントへの世界史転換の物語であるということです。三つ目には、世界遍歴を通してオデュッセウス（英雄）が個性を持つにいたったことです。

その三つによって、現代のわたしたちは、かけがえのない個性（実存）を持つようになった。人類文明史の原点でこの三つの問題が、社会的、共同体的、個人的に出されて、その典型的な人物として「オデュッセウス」が生まれて、その人物像が世界遍歴を通して造形されていく、ということなんだと思います。オデュッセウスと歩みを共にした仲間たちは、遍歴の中ですべて死んでしまいます。オデュッセウスただ一人が奇跡的に生還する。ですから、時代の戦争から生き残った者が、それから後の時代の主人公の原型をつくった、と言えるわけです。

そこで、なぜわたしがこの本に『〈主体〉の世界遍歴』という題名をつけたのかということ。二一世紀に向かう今日は特にそうですが、現代資本主義システムにおいては、高度消費文明を軸にして人間が意識を完全に剥奪され、それによって人間の〈主体〉はなくなってしまった。日本の今日における、総評民同運動が全面崩壊した後に「連合」組合運動がとってかわってからの、労働者運動の低落などは、そのささやかな一例にしかすぎません。これだけの世界的な文明の危機があるにもかかわらず、それを超えるような抵抗は、今のところイスラーム文明以外からは出ていないことに、わたしは危機感を覚えます。つまり、現代の世界的危機の核心は〈主体〉の危機である、と言っているんです。現代マルクス主義者として、わたしはずっとこのことを唱え続けていますが、最近ではやっとな若い人たちの中にも賛同者が増えまして、わたしどもの政治グループの機関誌（『未来』）も出るようになりました。

世界史的危機の核心は、外側の物象的危機ではなくて、内側の〈主体〉自体の意識の剥奪からくる危機なんだということです。人々が無関心なのは、そこからきているんです。だから、わたし自身は〈主体〉の危機をきわめて深刻にとらえています。〈主体〉の危機は、現在の南北問題に通ずる南との連帯の問題とイラク戦争における反戦の問題で、「マルティチュード」と呼ばれている、全世界で1000万人を超えるような〈主体〉の再生が、ようやくここ四、五年で三十年ぶりに端緒につき始めた、という時代認識でいます。

日本は欧米よりもひと回り〈主体〉の再生状況は遅れています。例えば、わたしが労働組合運動などで関知しているのは、関西の労働組合運動の主要部隊で「関マナ」という関

西生コン労働組合です。そこにわたしの三十年来の同志である武健一という組合委員長がいて、そのかれは昨年、1年2ヶ月にわたって権力による不当逮捕され、収監在獄、たらい回しを続けられて、最近やっと釈放をかちとったばかりですけれども、例えばわたしたちは、「共謀罪法案」の国会通過を阻止するために、このあいだも国会で連日座り込みをやりましたが、そういうときには、東京労働組合などからは当時は最初は一人も国会前に出てこない。驚くべき〈主体〉の危機なんですよ。大阪の生コンからは、毎日10名ずつ交代でやってきましたが、そのうちにだんだん他の労働組合が合流して、最後は500名の座り込みになり、全国的な反対運動が盛り上がってきて、「共謀罪法案」を潰して継続審議へ移してしまうことができた。この運動成果によって関西の労働組合運動はこれからますます元気になるだろうと思いますが、逆にわたしはその部分の自覚も含めてますます〈主体〉の危機の深化に確信を深めています。

このように〈主体〉の危機が今日の日本の岐路の核心にあるので、〈主体〉を再生することが今日なにより非常に肝心なんです。それは必ずインターナショナルに再生されなければだめなんであって、世界遍歴の中で再生される以外に方法はないんです。イタリアに、スピノザの『エチカ』をマスターした人で、わたしの同志でもあるアントニオ・ネグリという人がいます。わたしと歳が同じで、経歴も一緒です。獄中から立候補して国会議員になりましたが、もともとはわたしと同じように、「赤い旅団」の活動家でした。かれのような人たちの中にあるハードな思想というのは、世界遍歴から出てくるのであって、いま無意識に蠢動しはじめている〈主体〉というのは、先ほどの意識と無意識の論理でいうと、必ずわたしたちのそういう活動を媒介にして、言語意識化されます。言語意識化されれば、たちまち100倍、1000倍にパワーアップするにちがいありません。

そういう展望のもとに、この本のタイトルに「主体のユリシーズ」を付けているわけです。それは、世界戦争危機から発している〈主体〉の遍歴によって、個性のある英雄が社会的に大量に生まれる、ということの比喩と言えます。このあとイラク戦争が終われば、マルチチュードというものの再生は、〈主体〉の遍歴として急速に活性化するであろう、と思います。近頃わたしの唱えている〈反転攻勢〉への転換が近い、という格言の根拠です。

二番目のご質問ですが、名古屋大学で1964年の秋か65年の5月かにお会いした方と、またこうしてお目にかかれるなんて、こういう会をやっていてこそその感無量なものがありますが、これもわたしの概念でいえば、世界遍歴です。

勝木さんが朝鮮戦争のことをおっしゃいましたが、戦後の日本社会は再建され、膨張して世界的な企業社会になり、高度経済成長の実現以来、わたしたちの生活もそれなりに潤っている。そのなかでわれわれが忘れてはならない問題は、日本は朝鮮戦争にアメリカの朝鮮・分割の戦争に間接荷担したことによって、アメリカのドル戦費のほとんどをせしめることができ、そのことが日本の資本主義が戦後の疲弊から復活した最大のきっかけに

なったということです。

のちにわたしたちが「ベ平連」をつくったときに、小田実くんが文学者として非常に鋭敏に形象化した概念ですが、わたしたちの持つべき反戦平和意識というのは、「被害者平和主義」ではなくて、「加害者平和主義」である、ということを確認にしました。現在の共産党代々木派をはじめとして、日本の反戦平和意識はことごとく「被害者平和主義」です。「被害者平和主義」というのは、第2次世界大戦で負けたという国民経験に根差していますから、情緒的で俚耳に入りやすい。だから「被害者平和主義者」は、戦争の被害に遭わないためには、戦争に巻き込まれないにかぎる、と言うわけです。しかし、自分のほうが中国に侵略しているじゃないか、ヴェトナム戦争に間接荷担しているじゃないか、イラク戦争でサマワに行っているじゃないか。そういうことについては、まったく無関心、無反省で、自分だけが戦争で儲けることだけを、あるいはまた損をしてしまう戦争からは逃亡することだけを考えているわけです。こんなものは、わたしは本当の意味での反戦平和主義だとは思いません。それどころかそんなものは、本当の反戦平和意識の足を引っばる最悪の民族主義的な内的な腐敗の産物にすぎないと思います。

日本の戦後の反戦主義者が朝鮮戦争からどういう教訓を引き出したのか。これは現在でも解決していないから、「歴史問題」になっているわけです。こういう問題は、徹底的な思想的反省がないかぎりには、解決しっこないんです。その中でわれわれは、朝鮮戦争が金日成側からの南進によって始まったという事実も知らなければなりません。金日成のあとには金正日と、親子で国を支配する家父長的な封建制そのものの国家ですが、そんな「社会主義」なんてありえません。あれは家産制国家で独裁君主が継続していく王朝国家なわけですから、そんなものは地球上の癌ですから、早くなくなっただけのほうがいいに決まっています。だけど現実にあるわけですから、あくまでも北朝鮮の人びとの自主的な再生に依拠して、金正日政権が暴発しないようにして社会変化させないといけません。

北朝鮮に拉致されて死んでしまったことが明らかな娘の両親が何回も何回もテレビに出てきますが、その方たちは気の毒だけれども、或る意味かれらは安倍晋三なんかよりもっとファシストですよ。そういう人たちがテレビを占領しているという事態は由々しいことです。それは、かれらが気の毒だということとはまったく別次元の問題です。ですから、わたしはかれらに同情を惜しみませんが、同時にかれらが超ファシストだということの批判もやめるつもりはありません。

かれらの言動を、韓国の人たちも迷惑がっています。韓国に押しかけていっても、韓国の大統領や首相は、面会しようとしません。それはなぜかというと、かれらが娘は生きているはずだと主張することをタネにして、自分たちの我意をショウ・アップしようとしている。まさにウソからでたマコトのやり口なんです。今度は、「その夫といわれているという人物」が出てくるわけです。そういうバカバカしい言い方自体が、テレビ放映でも平気でまかり通っているのは、〈主体〉の危機の最たるものとわたしは思っています。お

孫さんだって、そんなおじいちゃん、おばちゃんと一緒に暮らしたいとはつゆ思わないですよ。そりゃあ北朝鮮はひどい国ですけども、それでも向こうにいたほうがいい、と思っているから出てこない。「めぐみ」ちゃんが自殺してしまって生きていないことは、かのじょの御亭主やかのじょの娘さんには分り切ったことなわけですからね。それがイヤイヤ、必ず生きている、それを一日も早く取り戻さなければならない、というのがウルトラ・ファシストとして毎日テレビに登場してくる「めぐみ」の父母の政治資産を支えている唯一のタネなのですから。

直接お孫さんと娘の御亭主にインタビューをしてみれば、本当のことはすぐわかるはずですよ。それがいやだから、あのウルトラ・ファシストの両親はかんじんな娘の御亭主やお孫さんのところに、今にして行こうとは絶対にしない。

そここのところをどう乗り越えることができるかは、インターナショナルな世界遍歴を通す以外にはないと思います。ナショナリズムに集約されるような自分の個人体験で、夜郎自大的になって、めくら檻のようなことを、いつまでもやっていたはどうしようもない。ですから、わたしの言う〈主体〉の遍歴というのは、そんなに高尚なことではなくて、日々の生活の中に現われてくるんです。そういうことについてまったく無関心な人たちがいて、マスコミもそれを平気でキャンペーンして、片棒を担いでいるという意識さえもないのは、わたしから見れば意識を剥奪されているということなわけですよ。

それから、勝木さんがエントロピー的な観点から生態系環境を再検討するとおっしゃいましたが、なるほどと思いました。物質循環という点に着目しながら、世界を宇宙論的に構築するためには、雨が降るということを考慮しなければなりません。上から下へ、下から上への循環ということです。現在の常識では、地上の生産と生活で排出されたいろいろな汚物は、海の水蒸気とともに上にあがって行って、亜成層圏でドカーンという音がして全部清浄化されるということがわかっています。これがまた雨になって降ってくる。そうやって循環している。しかし、勝木さんがおっしゃっているように、養分は水のように下から上には自然のままではあがらない。それは勝木さんがおっしゃるように、動物が自分の養分を大地から摂取して歩き回ることによって養分の循環が成り立っている。そういう物質循環を包括的に明らかにすることがぜひ必要だと思います。それは地球論、ひいては宇宙論のわたしたち自身による自己形成の問題だと思います。勝木さんの研鑽作業に期待しています。

三番目のご質問ですが、清水さんとお会いするのは、今日で2回目になります。個人的なことですが、わたしの妹が最近亡くなりまして、葬儀に行きましたら、そこで、清水邦男さんにお会いしたんです。妹は浜松の清水という人のところへ嫁いだんですが、その人の従兄弟にあたる方が清水邦男さんでした。そのときに、この会のことをご案内申し上げましたら、さっそくいらしてくださいました、というわけです。ありがたい次第です。

清水さんのカルチャー・ショックの根元でもある西洋合理主義文明というものの相対化

と限界性についてのご発言は、その裏側にあるわたしたちにとって、非常に大事な問題を出されておられて、たいへん興味深いものでした。わたしの本の中でも繰り返し書いておりますが、西洋中心の合理主義文明がだめだということは、古典古代ギリシア文明を見てもはっきりしています。一つの中心でもって文明史を考えると、世界は崩壊する、ということです。わたしたちは、それをぜひとも相対化しなければならない。

ヨーロッパの学者で、マルクスとともに偉いのはマックス・ウェーバーだと思いますが、ウェーバーの概念というのは「世界合理化」の論理です。かれは西洋文明のトップにいた人ですから、そういう論を導き出すのは当然なんです。その考えではうまく行かなくなったというのが、二〇世紀的現代の最大の問題なんです。そのことを、かれマックス・ウェーバーは自覚して死んでいったんですね。

ウェーバーは、わたしの本に匹敵するくらいのスケールで、宗教倫理でもって世界史を再構成しました。「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」はどこから起きたのかということの世界史的経過をはっきりさせたことについては、わたしにとっても学ぶところが非常に多いのですが、やはりかれにもあまり時間がなくて、わたしが言っているゾロアスター教まで行かないで、キリスト教とユダヤ教のところで終わってしまいました。ユダヤ教の問題は、キリスト教を考えるうえでも大事なことです。それ以前のことをわからないと、ユダヤ教を相対化することはできません。

ウェーバーの限界も関係してきますが、かれ自身が最後に到達したのは、驚くべきことに、世界合理化がもたらしたペシミズムなんです。「合理化の檻」ということが、かれの今日の西洋文明の運命についての最終規定です。つまり、現代文明は世界合理化によって自ら檻をつくって、その檻の中に閉じこめられて出られなくなってしまった。これで人類文明は終わりであろう、とウェーバーは予感したんです。それにともなってもう一つ、かれが予感したのは、ヒトラーの出現です。これはウェーバーには全く責任はありませんが、まさにヒトラーの出現によって、ヨーロッパはかれの心配したとおりの世界になってしまいました。

そういうことを考えると、西洋合理主義文明の問題点は、一つには清水さんがおっしゃったように、情緒の欠落の問題です。もう一つは、われわれの得意とする実践の問題です。意識化されている合理的意識だけでは世の中は裁ききれない。1パーセントの合理的意識だけでさばこうとすると、あと99パーセントの無意識の領域では間違うわけですから。そこが非常に大事なところなんです。

逆に日本の場合、特に明治維新以降に近代大国に仲間入りしてから、われわれが非常に苦労したのは、清水さんがおっしゃったように、ものごとを情緒で一面化しすぎることです。わたしが子供のころに苦しんだ命題というのは、「理屈のクツは履けない」というものでした。子供というのは疑問の固まりですから、何で、何で、といつも質問します。あるとき両親に、道をどんどん行くと果てはあるのか、その果てを行くとどうなるの

か、としつこく訊いたら、うるさいって叱るわけですね。それで最後には、「理屈のクツは履けない」って言うんです（笑）。クツは履くんですよ。理屈がなかったら歩けないんです。要するに、理屈を立ててはいかん、情緒だということなんです。それはないですよ。封建制以前の問題です。こんなことを言っていたら、何事も成り立ちません。理屈は立てなければならぬんです。つまり、概念があるかどうか、ということですね。

概念は分割です。日本人は情緒的な一体化が好きですから、分割をいやがってしないわけですが、分割をしなければ、男も女もないし、牧畜と農耕も分けられないし、東と西もないんです。ですから、概念分割のないような話は、全部インチキです。情緒でもってややもやとさせてごまかそうとするわけです。この問題を超えなければ、わたしたちは、現代の普遍的人間にはなれません。人と会話することだってできません。2×2は西洋合理主義のインチキです、というようなわけには絶対にゆかない。これが近代化された日本の裏側にある問題です。わたしたちが近代化に、また、西洋文明に惹かれるのは、そこからくるんですね。2+2=4だと納得してもらわないと困る、ということもあるんです。情緒主義は古い日本人の悪いところであって、新しい日本人はそういうところを引きずってはいけない、と思います。

清水さんが、長いフランス生活の経験を裏打ちになさって、この面の合理主義と情緒主義の相互限界の問題を、過不足なくまとめてご発言くださったので、本日の議論は最終的にみごとなオチがついた、とわたしは思っています。

だいぶ長引いてしまいましたが、今日はこれで終わりにいたします。どうもありがとうございました。（終）

第 47 回*2006 年 7 月 2 日

パネラー：三木亘

リプライ講演：いいだもも

地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか？

—線文字 B 文書の発見によるクレタ島文化とギリシア文化の連続化

(それによる人類文明の地中海世界史的連続性)

はじめに

猪野修治 それでは、いいだももさんの「連続懇談会」第 3 回目を始めたいと思います。この懇談会を開くにあたって、その間この本と格闘し、頭から離れないでおりましたが、早いもので、本日で 3 回目になりました。事務局から 2、3 連絡をさせていただきます。

まず、5 月 7 日に第 1 回目の会合がありましたが、その次の日に、入江曜子先生が『東京新聞』にお書きになった記事がございますので、ご紹介したいと思います。この前、江ノ島の「岩本楼」で、いいださんの「出版を祝う会」がおこなわれたときに、司会をされた入江先生ですけれども、わたしは（掲載日の）翌日にそれを送っていただいて読み、たいへん感動いたしました。「『国を愛する』ということ—教育基本法改正をめぐって」という文章ですが、論点が明快です。今日、入江先生ご自身、コピーをお持ちいただき、数部ご用意しております。関心のある方はご覧いただきたいと思います。足りない場合は、恐れ入りますがコピーしてください。

それから、6 月 24 日（土曜日）に「History of Chemistry」という化学史の学会（和光大学）がありまして、わたしはそこに終日出ておりましたが、水俣病 40 年という歴史的節目に当たって、アカデミズムの化学史学会が開催したシンポジウムとしては、かなり意義深いものがあったと思いました。水俣病の水銀問題で化学的な発見をされた原田正純先生がおいでになられて講演をされましたが、その中で、わたしが特に印象的だったのは、原田先生が「学問のために水俣の問題を扱ってきたのではない」と明確に述べられたことでした。目の前に患者がいて、この事態をなんとかしなければいけないということで闘ってきた。それは、アカデミズムから見れば研究だといわれるかもしれませんが、そんなちゃんげな思考で、この問題に当たってきたわけじゃないんだ、ということ力を説かれました。非常に感銘したしだいです。

次に、渋谷にある日仏会館では、フランスと日本の「文化交流」を精力的にやっておりますが、そこで、1968～69 年問題の「シンポジウム」が立て続けにあり、わたしも出席しました。どちらも世界規模の思想的な大事件があった年ですが、その問題を日本とフランスの思想家たちが比較研究し、なおかつ 21 世紀のアメリカ帝国主義下におけるグローバ

リゼーションの中で、日本の学問状況、思想状況をどう位置づけるべきなのかについて、真摯な議論が交わされました。たいへんに興味深いものがありました。

しかるに、マスコミは団塊の世代は（定年退職後に）どうするのかということばかりを報道しています。わたしは1945年7月7日生まれで、まもなく61歳になりますけれども、一般的な言い方をすれば、団塊世代ではないんでしょうね。堺屋太一さんがつけたこの名前を使うのは嫌なんですけれども、わたしより2つ下の47年生まれが団塊の世代で、来年60歳で定年を迎えて、かれらがこれからどういう人生を歩んでいくのかということを考えてときに、この日仏のシンポジウムで語られたことをどういう方向にもっていくのか、もっていけるのか、あるいは、わたしたちの世代がどういう生き方を選択していくのかが、非常に大事なことだと思っています。

司会者の特権で（話が長くなり）恐縮ですが、いま労働運動がメチャクチャになっているということ、それから年間3万人という自殺者の発生、学校教育・親子関係の崩壊、凄惨な殺人事件の問題等々を考えますと、〈68年〉を闘ってきたわたしたちの世代が、これからどういうことを若者たちに示していくのか、どういう生き方をしていくのかということが、非常に問われているのではないかと思います。60年代後半、東京大学・日本大学をはじめとしたあのような闘いののちに何がきたかということなのです。

わたしたちの世代は子どもたちがだめになったと言われてはいますが、このシンポジウムに出てあらためて、この懇話会も含めて、わたしたちがこれからどういう社会的な発言をしていくかということが問われていると思いました。いいださんも講演でおっしゃっていますが、「独我論」ではなくて、他者との関係の中で主体的にどういうふうに見ていくのかということが本当に必要だと感じます。

ところで、いいださんが関係している『未来』編集部の恵浩司さんが、わざわざお出かけくださっているの、ひと言ピーアールをお願いいたします。では、どうぞご発言ください。

恵浩司 今日、こちらに新聞を置かせていただいておりますので、まだご覧になっておられない方はあとで見ていただきたいのです。猪野さんが、いまおっしゃったような、新しい社会運動には、ラテンアメリカを先頭とするキューバのゲバラの遺志を継ぐ運動が巨大なイデオロギーとしてあるんですが、そういったことやその背景について書かれています。（わたしたちの会の）ホームページの掲示板にも書いたんですが、労働運動もそういった新しい社会運動の系譜として考えておまして、この会自体も相模原の戦車闘争の流れの中にあると思っていますが、このたび、わたしたちは、関生の労働者運動について書いた『労働運動再生の地鳴りがきこえる』という本を出しました。この労働運動は韓国の労働運動とも連携しておまして、そういう新しい社会運動という意識でもってやっております。その出版記念会と集会を7月8日に教育会館でおこないます。

この新しい思想をもった労働理論を実践的な意味合いで追求していきたいと思っています。この間の耐震偽装問題に対比させるとよくわかりますが、たとえばシャブコンというのがありますが、生コンをつくる時に水で薄めると量が増えて、より安価で販売できるんです。しかし、シャブコンを生産すれば、逆に労働者自身の生活が貧困化して困るわけですから、それに反対する。シャブコンを生産させないという意識をもってやるということです。水俣の運動にしてもそうですが、そういう企業犯罪に対して労働者自身が抵抗できない、あるいは、個々人の動きはあっても労働組合として異議申し立てできないという歴史がずっとあったんですが、関生の運動はそれを告発していくという歴史的意義のあることをやっています。ぜひ皆さんにもこの出版記念シンポジウムに参加していただいて、そこのところをご確認いただければと思います。

猪野 どうもありがとうございました。『未来』の編集部には感謝を申し上げます。いつも懇話会の案内をタイムリーに掲載していただきましてありがとうございます。

では、いいださんの連続懇談会の本日のメインテーマ「地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか」に入ります。パネラーの三木亘さんをご紹介します。今日は「世界史の中におけるギリシア幻想」というタイトルで、いいださんのこの大著も含めたかたちで1時間ほどお話ししていただきたいと思います。

三木さんは1925年のお生まれで、東京大学西洋史学科卒業、中東歴史生態学がご専門だということです。慶應大学特選塾員でもあられ、著書には『これからの世界史 2 世界史の第二ラウンドは可能か—イスラム世界の視点から』（平凡社、1998年）、『イスラームとは何か—「世界史」の視点から』（共編著、別冊『環』4、藤原書店、2002年）、『江戸時代とオスマン帝国時代—農村の比較研究』、『中東の生薬と香料薬種商』（英文、6分冊）などがございます。これから皆さんに回しますのでご覧ください。わたしは最初の2冊を買い求めて一気に読ませていただきました。

話が長くなってすみませんが、前回のいいださんの話ではありませんが、いいだ本はいずれ社会の状況が変わってきたら、1000部どころじゃない、何部売れるかわからないとおっしゃいましたが、まさにそのとおりで、そのためにはささやかな努力をしないとけないと思うんですが、同じように三木さんの本も、もっと皆さんに読んでほしいと思います。イスラームの話題がこのところマスコミを賑わせておりますが、わたしは日本のメディアの報道でしかイスラームのことは知りませんが、三木さんのこの『世界史の第二ラウンドは可能か』は、現地を歩かれながらイスラームの人々と実際におつきあいをされておられます。その中から発言された講演録であり、非常に読みやすかったことを申し上げます。

それから、わたしは、いまはフリーの立場ですが、かつて物理の教員を34年ほどやっておりましたが、この本の最初に、こう書かれております、「東京都立科学高校、都立大

学付属高校、東京外語大学、慶應大学、その他出校した諸大学、朝日、NHK その他のカルチャーセンターなどで、わたしの講義を面白がり、あるいは反発し、あるいは総攻撃、時にドキリとする質問をしてくれた学生・生徒諸君に感謝をこめて」。つまり、そういう諸君に本を捧げるということを書いておられまして、非常にわたしは親しみをもちました。おそらく何十年も、いろんな学生たちを相手にしてこられた方なんだなと思いました。

別冊『環』のほうも、ひととおりの目を通しましたが、わたしには細かすぎてわかりません。今日はそのへんもわかりやすくお話しさせていただきたいと思っております。

いろいろご多忙なところを、わたしのお願いをお引き受けいただきまして、まことにありがとうございます。では三木さん、よろしく願いいたします。

世界史の中におけるギリシア幻想

三木亘

1 学問は遊び

ご紹介いただきました三木です。猪野さんの紹介に、ちょっと付け加えますと、わたしはいいださんと同じ齢で、大日本帝国が愚かな戦争に負けつつあるころ、旧制第一高等学校、いまの東京大学駒場校に、ももさんと同じ年に入っております。ももさんはそのころから筆が立っております、『向稜時報』という文芸部の出版物にどんどん書かれていました。わたしは理科だったものですから、一高時代には直接お話ししたことはなかったんですが、それからはるか半世紀以上たって、偶然の縁でいいださんがやっておられる会に招かれて、そのおかげでいまご紹介いただいた本を平凡社から出していただくことができました。奇しき縁だと思っております。

わたしは学問というのは遊びだと思っております。男と女の遊びと並ぶ世界最古の遊びで、どちらも坊主さんが関係しているというのが面白いですが。

わたしはこの20年くらい、京都の国際日本文化研究センター、梅原猛さんが中曾根康弘さんを騙してつくったあの共同利用研究所で、共同プロジェクトなるものを4つほどハシゴしております、ほぼ隔月に京都に通っていましたが、この3月でそれが終わりになりました。それをつくづく思ったんですが、学問なんていうのも最初はたいてい坊主さんが始めるもので、坊主さんはまた昔から今にいたるまで遊ぶのがたいへん上手で、金を集めるのも上手です。いまでもあの祇園を維持しているのは京都の坊さんですし、世界最古の大学はたぶん比叡山と高野山大学で、エジプトのカイロのズジハル大学よりもうひとつ古くて、ヨーロッパのオックスフォードやパリ大学よりもはるかに古い。そういう大学が日本にあたりする。学問などをやる人間は金を使って蕩尽するのが商売ですから、サル学を始めた今西錦司さんなんかは、生まれ育った西陣の機屋を1軒つぶしてしまいました。遊ぶなら人が思いつかないような面白い遊びをやったほうが得ですね。

2 終焉しつつあるアメリカ文明

今日、コピーを持ってくるのを忘れたんですが、平凡社の PR 誌で『月刊百科』というのがありまして、それに自分の本（『世界史の第二ラウンドは可能か』）の広告を書けというので、「人類滅亡観光協会」のことを2頁書きました。

都立大学付属高校の教師をやっていたときですから、1960年代のことですが、あそこはいわゆる受験校で、1月で授業をやめてしまってあとは自由聴講になるんです。そのときふと思いついて言ったんですが、「人類滅亡観光協会」と「日本国解散準備会」と「東京都破壊計画委員会」の3つを立ち上げるから、入りたいやつは入れと。この会は会費はとらない、役員もつからない、趣旨に賛同して活動すれば、それで会員だということ。言いだした以上、わたしも会員なんですが、平凡社の本を書いたころに、にわかになんか自分がそういう会の会員だったことを思い出したんです。

会員のやるべきことは何かというと、客観的に見て人類滅亡の可能性が無数にあるのは事実です。それで、そのうちどれが当たるかと考えて、いちばん早く実現するのがあったら、うまくすれば人類滅亡という、人類史上1回しかない事件を観光することができる。こんな楽しいことはないじゃないかと。そういうバクチをやったりすることも会員の仕事です。世界中を見渡して、人類滅亡にいちばん貢献しそうなのはアメリカ合衆国です。世界を汚す、海水面が上がって北極も南極も溶けるつつある、有害無用の人殺し戦争をはじめ、社会治安が米国よりはるかによかったイラクを血みどろの国に開発した。そういうのにアメリカ合衆国がいちばん貢献している。次いで日本だと思いますが。

ここ10年くらいで実際に核爆弾のスイッチを押しそうなのは、息子ブッシュだと思いますね。暗愚（暗くておろか）、愚昧（愚かで暗い）という権力者に対する形容詞があることは知っていたんですが、まさかそれに当たるような人間が実際に出てきて、テレビで顔をさらしたりするという楽しいことに出会えるとは、夢にも思わなかった。あの人は本当に愚かだと思いますね。9.11の直後、「復讐だ」みたいなことをつい口走ってしまって。政治家というのは自分の本音は言うもんじゃないんです。自分が何か言ったりしたりすることで人々がどう反応をするかを見定めてやるのが政治家だと思うんですが、つい本音を言ってしまった。これまさに愚昧か暗愚、ほんとに愚かな人だと思います。

アメリカはイラクへ軍隊を出して、そして結局はイラクだけじゃなくてアラブ全体から、近ごろではヨーロッパでも批判されています。数年前にも、息子ブッシュがドイツへ行ったときに、国会で喋ろうとしたら、国会議員の中に横断幕を広げて「ヤンキー・ゴー・ホーム」とやったりするのがいたり。それから、いま世界でいちばん危険なのはアメリカ合衆国だということを、ヨーロッパの人たちが公然と言うようになっていく。フランスの人口学研究所の所長をやっているエマニエル・トッドさんは、アメリカ帝国はもうお終いだと言っています。わたしは98年にそれと同じことを言っていますので、私のほうがちょっ

と早いんですが。

この『世界史の第二ラウンドは可能か』の終わりのほうに書いたんですが、シカゴから始まって世界中に広まったスカイスクレーパー（高層ビル）は、見渡したところ墓標だと。近代西洋文明とその破産管財人であるアメリカ文明の滅亡にふさわしいお墓です。今日お配りしたプリントにも書いてありますが、数年前に新宿住友ビルの朝日カルチャーセンターに3ラウンドくらい通ったことがあるんです。そこでつくづく感じたんですが、ようまあこんなひどいところで人間が働いたり暮らしたりしているなど。気持ちのいいことは全然ないですね。エアコンなどの人工機器というものは人を快適にさせる能力はもっていません。かつて毛利衛さんという方が宇宙飛行から戻ってきて、地球がどう見えたかと訊かれたときに、東京の上にはきのこ雲がかかっていたと言いました。つまり、東京の空気は全体が汚染されているわけです。エアコンなんてものは、ただそれを掻き回しているだけの話で、しかも冷やしすぎたり暖めすぎたりしている。都市は臭くて汚い無機質なものになってしまって、無機質な環境というのは、わたしのように年をとると体にこたえますね。世界中に、そういう人間が住むに耐えうるところじゃない高層ビルをつくってしまった。1930年代にフランスから出て日本にもはやった言葉を使えば、デラシネ（根こぎにされた人）収容所ですね。これはまさにお墓にふさわしいと思っています。

3 現代文明はいままさに更年期

先ほど、歴史生態学が専門とご紹介していただきましたが、これはわたしが勝手につくった学問です。学問というのは要するに遊びですから、好奇心のおもむくままにやればいいんで、これまでの学問の中にそれに当たるものがなければ、つくってしまえばいいわけです。それで、この平凡社の本を書くもう10年くらい前ですが、自分がやっていることは何学だろう、どういうレッテルにしようかと考えたんですね。わたしは歴史畑を出たんですが、人類学、民俗学、地理学、生物学、いろいろなものに興味をもって引っかき回して、それ全部を合わせたみたいなことを書いたり言ったりしている。それで「歴史生態学」としたんです。

生態というのは、生きている姿です。この世に現実に存在するのは、人間と自然しかありません。そしてもうちょっと言えば、それは動態としてあるんで、これは仏教の考え方と同じで、因縁なんていうのがそうですが、人と人とのつきあい、人と自然とのつきあいのことです。つきあいというのは、動いている姿としてあり、実際に存在するのはそれだけなんです。そして、人間も自然の一部でしかない。これがわたしの歴史生態学の公理、定義です。つきあい方にはいろいろあって、第二次世界大戦後のフランスのアラブ研究の大御所の一人、ジャック・ベルクさんがうまいことを言っております。ある時代、ある地域における人間観と社会観とは一対一の対応関係をもっていると。ジャック・ベルクさんはアラブ研究でいろいろ面白い仕事をやってこられた方ですが、息子のオーギュスト・ベ

ルクさんは日本研究者で、いま京都日文研の客員か何かをしておられます。

それから、お配りしたプリントのどこかに、イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』のことを書いていますが、これは岩波文庫で4冊本の翻訳が出ていますので、ぜひお読みいただくといいと思います。イブン・ハルドゥーンは14世紀のチュニジアの生まれ育ちで、晩年はカイロで過ごした人ですが、たとえばイギリスの人類学者で哲学者でもあるアーネスト・ゲルナーさんは、イブン・ハルドゥーンの考え方は現代世界の現実に対しても通用すると言っています。それはある意味での世界史の法則であり、これも生物モデルです。

これもプリントのどこかに書いていると思いますが、初代は若いときに青雲の志を抱いて、笈を負うて東都に上り、刻苦勉励して働いて身上を築く。二代目は可もなく不可もなく保守、三代目になるとお学問、お文学、男女の遊びその他よからぬことで遊んで蕩尽する。四代目くらいになると、売り家と唐様で書くと。いま近代西洋文明の末期の姿であるアメリカ文明は、その保護国あるいは属国である日本の住民としては悲しいことだと思うんですが、まさに三代目か四代目になりつつあるわけです（日本はアメリカの保護国であるというのは、エマニエル・トッドさんが『帝国以後』（藤原書店）という本で言っていることです）。そういうふうに、生物モデルで社会を見ていく。

70年代から80年代にかけて、わたしが東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所にいたときに、いわゆる海外調査をやりました。モロッコから中東を経てインド、タイにいたるまで十数カ国を6回くらいにわたって学術調査しました。1回出かけると半年くらいかかります。その研究対象が香料薬種商というもので、日本でも10年以上前からアロマセラピーの類がはやっていますが、香料薬種はそれのもとになるものです。と同時にそれは生薬でもあって、伝統的なアラブ医学の薬にもなります。漢方の薬と同じで動植物などの天然物を処方します。アラブ医学は、インドのアーユルヴェーダ、中国医学の漢方などと並ぶ、世界三大伝統医学のひとつです。

それで、日本でいうところの薬種商とつきあって、かれらの商っている生薬や香料のサンプルを集めて、それが何に効くのか、どういう病気に対してどういう処方をするのかなど、いろいろ聞き取ったんです。京都大学の薬学部でわたしの研究のパートナーをやってくれた人がいて、集めてきたサンプルがいまの生物学でいうとどういうものであるか、つまり同定（アイデンティファイケーション）をやってくれて、6冊くらいモノグラフ（研究書）を出したりしました。

このときに医学や薬学の人たちとつきあったり、自分でもアラブ医学を勉強したりしました。年をとってくると自分の体という他人がなかなか言うことを聞いてくれなくなりまして、それをつくづくわかったんですが、人間という生き物は25歳くらいが身体的には頂点なんだそうで、あとはダウン・ヒル・オンリー（down hill only）、下り方が階段を下りるみたいなんですね。

経験的に思うことですが、男女を問わず更年期とか厄とかいうものは、5年ないし10年く

らいごとにめぐってくるものですね。5年か10年は自分の体なんか気にしないでやっ
ける。それがどこか具合が悪くなると、あちこちおかしくなる。歯が悪くなる、冷える
とか故障が多くなって、そこをうまく突破できないと、そこで逝ってしまったたり
する。でも、そこで一段落つくことができると、また5年か10年くらい平らなところ
に出てきて、体のことを気にしないでやっける。これは、わたしが25歳くらいから
の経験から申し上げることで

人間の社会も、イブン・ハルドゥーンのように生物モデルでとらえられます。しよ
せん人間のやっていることですから。そうすると、文明とか帝国とかが後退して
いくときというのは、やはり更年期とか厄ではないのかと。集団的な更年期で、
そこをうまく突破できないと死んでしまう。事実、滅びて本当に消え去ってしま
った文明もあります。

わたしは、第二次世界大戦以後のアメリカを頂点とした世界文明は、いま更
年期にさしかかっているのではないかと実感しています。暗愚、愚昧としかいい
ようのない息子ブッシュのような人間が世界最大の国の大統領をやっている
こと自体が、まさに更年期にさしかかっている証拠です。

それから、芝居のパフォーマンスとしては少しは上手だったかもしれませんが、
知恵はゼロの小泉純一郎です。わたしは横浜の金沢文庫に住んでいるんですが、
横須賀は隣なんです、地元で飲んでますと、横須賀のニュースもいろいろ入っ
てくる。小泉純一郎がどういう育ちをしたか、ろくでもないやつと遊んでば
かりいたやつだとかということを知りたい。

その報いといいますか、わたしがこのごろ思うのは、日本列島というのは生
態学的にあまりにも条件がよすぎるので、それに甘えて、逆にわれわれ（日
本列島人）には世界の中で生きていく知恵の何かがあるものすごく欠けてい
る面があるのではないかと。20～30年前から日本の農山漁村では跡継ぎが
いない。ところが、人間の社会というのは、一次産業というものがなければ
存在していくことができない。その根っこが日本中でどんどん壊されつつ
ある。……すみません、これでやっとギリシアにたどりつきました（笑）。

4 緯度30度から見えてくる世界

アテネ・オリンピック（2002年）のときに、テレビでよくギリシアの街
の人々の様子を流していました。それで、飲み屋なんかで飲んでいる人たちに、
あんた元気かと聞くと、8、9割の人が元気だと答える。ところが、日本で
そういう質問をすると、半分以上の人がどこか悪いと答える。ギリシアのお
じさん、おばさんたちに、何でそんなに元気なんだと聞いたところ、われ
われは野菜や果物をたっぷり食べるからだと言うんです。これは事実です
ね。アラブやトルコ、イランなど、中東の人たちもそうです。

ついでに言うと、ギリシアとトルコというのは、いま国家としてはケンカ
ばかりしていますが、人間そのものは同じです。同じような顔立ち、体つき
をしていて、料理もほとんど

ど同じ。ところが、同じようなコーヒーを飲んでいるのに、断固としてギリシアはギリシア・コーヒー、トルコはトルコ・コーヒーと言う。同じような干しぶどうの焼酎を、ギリシアではウゾー、トルコではラキと言います。ついでに言えば、シリアではアラク、カイロではズビーブ、パリに行けばペルノで、同じものが場所によって名前が違うだけの話ですが、これはまさにいいださんが書かれている地中海世界なんです。地中海世界は同時に中東とつながっておりまして、だいたい似たり寄ったりです。

差し上げたプリントの最後の地図をご覧ください。横に 40 度、30 度、0 度と緯度を入れてあるのは、30 度を中心としたあたりのベルト地帯、東アジアの南のほうからインド、中東、地中海、大西洋を飛び越えてカリブ海の両側までのベルト地帯が、人間という生き物が住むのにいちばん適したところなんです。したがって、そのあたりで暮らしている人々は遊ぶのが好きです。そこから離れれば離れるほどよくないところになる。近代ヨーロッパ文明なるものは 1800 年ごろから展開していきませんが、その中心はどなたもご存じのようにイギリス、フランス、ドイツですよ。ロンドン、パリ、ベルリンが、日本でいうとどのへんか、考えたことはありますか？ 日本には入りません。〈樺太〉、〈サハリン〉あたりです。SF 作家の小松左京さんがスウェーデンのウプサラで冬を過ごしたことがあって、こんなひどいところによく人が住めるなと思ったそうですが、冬はほとんど薄暗くて、日が照ることがまずない。

40 度から上、つまりアルプス・ピレネー以北の近代ヨーロッパをつくりあげた地域の人々というのは、夏に裸になるのが好きですね。やたらに裸になります。バルト海沿岸なんかでは、短い夏の間にはしっかり紫外線を取りこんでおかないと冬がちゃんと過ごせないといつて、みんな裸になってしまう。そこで、バルト海を通る船からヌードを楽しむのにカール・ツァイスのレンズが発達したという話があります。本当がどうか知りませんが。

このへんの人たちは、金髪紅毛碧眼、ブロンドで青い目、色が白いですが、これは色素が足りないのであって、生物学的には弱いんですね。植物も動物も緯度の低いところから高いところへはけっこう移転ができます。稲のような熱帯ないし亜熱帯の植物でも、サハリン、〈樺太〉、中国では黒竜江省、ずいぶん緯度の高いところでも大丈夫です。夏に日照りがあって水がたっぷりあれば、稲はつくれます。ところが、緯度の高いところから低いところへ動植物を移すということは、ほとんど不可能に近い。人間もそうなんです。

帝国主義の報いで、いまブリテン諸島には、カリブ海沿岸やインド・パキスタンなどとも植民地からやってきた褐色の人々が 200～300 万くらい永住しています。かれらのような色素に富んだ南の人々は、北の果てに行っても体が悪くなることはありません。ところが、プリントにも書きましたが、イギリスはインドを 2 世紀にわたって征服支配しましたが、植民地官僚は夏になると、みなダーズリンかシムラに避暑に行く。海拔 2300～2400 メートルのヒマラヤの中腹に上がらないと、死亡率がやたらに高くなる。オーストラリアでも、クイーンズランドを上ってシドニーからもっと北のダーウィンのほうに行くと、白

人にはやたらに皮膚癌が多い。北のほうの人たちというのは、そういう点で広い地球を狭くしか生きていけない、たいへん気の毒な人たちです。

一高に入ったとき、山岳部に入るか水泳部に入るか迷って、山岳部に入りましたが、わたしは4つのときから海に入っていますから、夏にこんがり焼くと、冬をたいへん快適に過ごせることを知っています。その昔、わたしは医学も生物学もある程度かじりましたから、これは間違いございません。うんと紫外線を浴びて体に色素をつくっておくと、それが次の紫外線除けになる。だから、色が白いほど危険なんです。

5 置き薬からわかる東西日本の違い

中東の香料薬種商の調査をやるのと関連して、日本のそれと同じようなこと、つまり置き薬、昔は売薬さんといいましたが、その調査をやってみました。富山県がいちばん有名で、あと滋賀、奈良、佐賀の4県が置き薬の中心ですが、これはどうも昔の山岳仏教修験者、山伏と関連があるんですね。富山であれば、立山の登り口の岩倉（イワクラ）寺や芦倉（アシクラ）寺など、昔は山登りのガイドをいっぱい出したところですが、みんな修験者、山伏の住んでいる村です。伊賀、甲賀（こうが）は忍者の産地で、飯道（ハンドウ）山だったか、あの辺にも修験道の山があるわけです。ギリシアにもアトス山なんていう、ギリシア正教の修験にあたるような山があります。

鎌倉・室町・戦国くらいの時代ですが、修験者は全国を歩き回って、行った先々の村に経帷子を置いていくんです。次にそこに行ったときに、誰かが亡くなってそれを使っているとお布施がもらえる。そういう慣行上に乗っかって薬を置いていった。そして、次に行ったときに使った分だけ払っていただく。修験道からそういう面白い商業慣行が生まれたわけです。

滋賀県（甲賀）の野口信満さんという置き薬を長年やってこられた方の話によると、お得意に飛び地があるんです。500軒か1000軒見当を単位に掛け場（薬を置いて回るところ）というのがあって、ここ30～40年は団地がひとつの掛け場になったそうですが、そこを1年おきくらいに回って、使った分だけ代金をいただいて補充する。その掛け場の台帳も商品化しています。野口さんの掛け場は、尾道から今治にかけての瀬戸内海の島々と、濃尾平野のど真ん中の一宮あたりという具合にあちこち飛んでいるんですが、どうしてですかと聞くと、リスクの分散だと言うんです。たとえば、江戸時代に天明と天保に大飢饉がありました。これは圧倒的に東日本で起きたものです。西日本は大丈夫だった。さつまいもが早くから広まっていたからです。そういうときは、名古屋あたりは飢饉で使った薬の代金も集めることができなかつたけれども、四国のほうは大丈夫だった。そういうときのリスクを分散させるために飛び地を持っている。

その話をお聞きしたときに、野口さんが面白いことを言っていました。膏薬なんです。関西の人はトクホンだと効かなくて、サロンパスじゃないとだめだと言うんです。ところ

が、東日本の人はサロンパスだとかぶれたりするので、トクホンじゃないとだめだと。サロンパスの本社は田代（佐賀県の鳥栖）で九州から出ていますが、トクホンは埼玉から出ているんですね。もうおわかりだと思いますが、西と東で皮膚が違うわけです。網野善彦さんと宮本常一さんの共著で『日本の東西を語る』という本がありますが、東西日本の通婚率が現在でもせいぜい7、8パーセントだというデータを見て、驚きました。おそらく、糸魚川と天竜川の大構造線あたりを境にして、東日本と西日本では人種も違うのかもしれませんが。言葉も違いますし。これはかなり質的な違いです。日本列島は小さな島ですけども、けっこうそういう違いがあるわけですね。網野さんは、そういうところから、日本という国はずいぶん後になってできたんだと、それまで日本列島にはいろんな国があったんだということを、晩年になるほど言いつづけていましたが、そのとおりだと思います。

6 人間の言葉はバイリンガルが基本

わたしは、人間の言葉というのはバイリンガルが普通だと思います。少なくとも2つ。ひとつは母語です。誰に教えられたわけでもなく、生まれて、母親に育てられていく過程の中でおのずから喋るようになる。これまさしく母語、母の言葉です。これは場所によって違う。もうひとつは、何らかのレベルの共通語です。標準語とは違います。標準語というのは誰か権力者がこれを標準語にしろと押しつけるものですが、共通語というのは地域の人と交流したりするときに育った母語以上に役に立つものです。だから、共通語にはもっと広いレベルの共通語もあったりするかもしれない。すると、バイリンガルではなくトリリンガル、クワトリリンガルとなったりすることもある。

いつだったか中東あたりを歩いていて、ベイルートからタラーブルス（トリポリ）に行くのにセルビス（乗り合いタクシー）に乗ったら、ぎゅうぎゅう詰めで、隣の男と顔がぶつかりそうになって、その人にどこの人間だと聞いたら、アルメニア人でタラーブルスの港でムカーウィル（請負業者）をやっていると言うんです。いろいろ話していて、いくつくらい言葉を話せるのかと聞くと、ちょっと考えて、8つくらい喋れると。それで喋ってもらったんですが、見事でした。アルメニア語、クルド語、シリアですからアラビア語のシリア弁、それからロシア語、フランス語、ギリシア語……。そのときにつくづく思ったんですが、言葉というのは音楽ですね。かれに違う言葉で同じ意味のことを喋ってもらったんですが、すると表情ばかりか身振りまで違う。

小泉文夫さんという、世界中で音のフィールドワークをしまくった方がおります。青土社から10冊くらいフィールドワークの結果が出ていますが、すばらしくいい文章で、何の予備知識のない方でもすらすら読めてしまいます。小泉さんはわたしと同年輩ですが、還暦のころ亡くなりました。その小泉さんが、生まれつき喋っている言葉、つまり母語は、音楽だと言っています。童歌（わらべうた）というのが世界中どこにでもあって、どんな芸術的な音楽であろうと、ある言語に属する人がつくった音楽は、必ずその言語の童歌の

音楽の上に乗っかっているというんです。

わたしは中東からインドあたりまでを歩いてみて、そのとおりだと思いました。サンスクリットをもとにしたインドの言葉と、アラビア語、ペルシア語、トルコ語と、それから欧米人の言葉にも出会いますが、みんな性格が違うし、音楽も違います。日常話している会話自体が音楽ですが、その上に立って出てくる音楽はというと、インドは映画音楽が有名ですね（世界でいちばんたくさん映画を作っているのはインドです）。それからアラブ音楽。トルコ語とペルシア語の音楽にもアラブ音楽の理論が使われているんですが、小泉さん自身はこの3つをはっきり区別していて、アラビア語の上に乗った音楽、ペルシア語の上に乗った音楽、トルコ語の上に乗った音楽と分けています。

7 ギリシアは西洋ではない

またギリシアがどこかへ行ってしまいましたので、ギリシアに話をもどします。ギリシアとトルコは喧嘩ばかりしているけれど、じつは同じなんだという話でしたが、トルコの人類学者で、最後は大統領顧問か何かをやって引退した友人がおりまして、このあいだ家族連れで日本にやってきました。チャーさんというすてきな地中海美人の娘さんも一緒です。それで、九州に行くと言うので、わたしも片言のトルコ語でトルコを歩いたんだから、あんたも日本を片言の日本語で歩きなさい、と言って歩かせましたら、とてもよかったと言っていました。行った先々で何人と言われたかと聞くと、ときにはアメリカ人と言われたけれど、平均して多かったのはフランス人かスペイン人だそうです。やはり地中海なんですね。いろんなのが混じっている。

イスタンブールから南の地中海に下ったことがあるんですが、感じとしては、イスタンブールあたりはスラブくさい顔立ちや皮膚がかなりあって、トロス山脈を越えるとアラブくさくなる。連続して変化します。シリアとかエジプトあたりだと、酒を売っている店はだいたいギリシア人がやっていて、顔つきも雰囲気も違うのでわかります。

先ほど、ギリシア人は野菜や果物をもりもり食べているから元気だと言いましたが、ギリシアにしても中東にしても、肉食度は非常に低いです。中東はもともと遊牧の世界、ギリシアももとを質せば同じなので、わたしは肉食度は高いかと思っていたんですが、違うんですね。伝統的な牧畜や遊牧での毎年の家畜の自然増というのは高が知れたものです。ですから、毎日肉を食べるなんてことは伝統的な牧畜では不可能です。それが、アメリカでもヨーロッパでも、まねして日本でも（頻度ははるかに低いです）、やたらに肉を食べるといのは、家畜を人工的な機械にしているわけです。牧畜工業です。家畜にやたらに飼料を食わせて、やたらに子供を産ませて、肉の製造機械に変換してしまったんです。

伝統的な牧畜がおこなわれている社会で食べる肉の量なんて微々たるものです。では、脂肪やタンパク質をどうやって摂るかというと、乳類からです。チーズ、バター、ヨーグルトなどの乳製品をたくさん摂ります。伝統的な牧畜では家畜の乳を盗むことはやりませ

が、肉まで工業化することはないわけです。逆に、ギリシア料理には魚料理が非常に多いですし、トルコ料理も同じです。

トルコ人の友人の娘チャーさんは、たぶん自分たちはもとはギリシア人だと言っていました。トルコの海岸沿いに住んでいる人たちにはギリシア系が多い。イスタンブールのあるボスフォラス・ダーダネルス海峡は、黒海の水位が地中海より高いので海水がいつも川のように流れているんですが、そういうところは魚が湧きやすいので非常にいい漁場なんです。そのあたりで魚を獲っている連中は、遡ればギリシア系というのが圧倒的に多い。また、かれらはバイリングル、トリリングル、クワトリリングルがごく普通です。先ほども言いましたように、言葉によって表情や身振りまで違いますから、人間のあり方というのは言葉によって違ってくるといえます。もちろんそれは書かれた言葉ではなくて、話されている言葉です。

わたしは、横浜で「スパルタ」というギリシア・レストランを経営していたギリシア人と、30年くらいつきあってきました。レストランはもとの板東橋のあたり、伊勢佐木町の奥のほうの黄金町に近い、ちょっとやばいところにありました。かれはスパルタ出身で船乗りだったんですが、横浜が気に入って住み着いたんです。海の民には地域に拠る人種民族とは違ったレベルの問題があるようです。つまり船乗りというのは、定年になると、それまで渡り歩いたなかで気に入った港町に住み着いてしまうという習性があるようです。その点では横浜よりも神戸のほうはるかに多様で、いろんな種類の人々が住んでいて、インドのジャイナ教の寺院まであったりします。

スパルタ生まれの元船乗りは、徳島から出てきて生糸検査所で働いていた美人と結婚して、4人の娘ができました。かれはギリシア流儀を守って、出す料理がみんな盛りがよかったです。平均して少食の日本人よりも外国人がよく食べに来ていました。長女のイレーネはほっそりした美人で、彼女にいかれて見事なヌード写真集を出したりした写真家もいたんですが、よく店に来ていたアメリカ大使館の文化担当官と結婚してワシントンに行ってしまうしました。三女のソフィアだったかは、六本木あたりで遊んでいて田岡組長の息子と仲良くなって結婚したんですが、ひと月でもう嫌になって飛び出してしまった。その直後わたしは横浜のそごうで奥さんと三女にばったり出くわしまして、奥さんが言うには、田岡組のお母さんはよくできた人で、嫌なら嫌でいいけれどもきちんと挨拶をしてほしいと言われて、それくらいで済んだそうです。

元船乗りは奥さんに先立たれたんですが、80を過ぎてからギリシアに帰りまして、85歳でまた結婚しました。ヴェンダースがつくったキューバの音楽映画「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」にも八十何歳で結婚して子どもができたという話がありましたが、それと同じ話で、人生を楽しむ系統なんですね。

そういう点で、同じヨーロッパ大陸でも、アルプス・ピレネー以北の、ちょっとうっとりしい、やたらと理屈っぽいヨーロッパとは、ギリシアは全然違います。ギリシアは中東

です。人間も、その生活文化も。先ほどの戦後フランスのアラブ研究の大御所、ジャック・ベルクさんは、ギリシア文明としてはアラブ文明とものすごく似てると言っていますが、そのとおりだと思います。

プラトンは『ティマイオス』の対話編で、ペルシアは大人でギリシアはまだ子供だということを書いています。身の程を知っていると言うべきで、ペルシア戦争でギリシアが勝ったことを、西洋が東洋に勝ったなんて言っていますが、こういう考え方はまったくナンセンスです。ペルシア戦争の事実を思い出してください。あれは、ペルシア帝国が百いくつあったちっぽけなギリシアのポリスを支配下に押さえ込もうとしたのに失敗しただけの話なんです。ペルシア帝国自体は御安泰で、別に滅んだわけでもなんでもありません。

ギリシアというのは山がちな石灰質の土壌で、そういうきつい条件でも育つ二次植生のオリーブやぶどうの栽培はできますが、穀物に関してはおよそ貧しいところです。昔、社会思想社『教養人の東洋史』という文庫本に、ギリシアの民のことをフェニキア（レバノン）人などとならぶ「出稼ぎ民族」と書いたんですが、たとえばシーラーズの近所にあるペルシア帝国の大宮殿をつくったのは、ギリシア人の技術者たちです。

ペルシア戦争のときも、ヘロドトスの『歴史』の中にペルシア軍の軍隊揃えみたいなことが書いてあって、これはどこから来たどういう軍隊かということをやらずと並べているんですが、その中にもちゃんとギリシア傭兵軍はいるわけです。ペルシア戦争では、ギリシア本土に 100 以上あるポリスの中で、アテネ、スパルタを中心とした 30 くらいがペルシアに手向かっただけで、あと 70 くらいはすぐに降参してしまったわけですが、傭兵隊としてペルシア帝国に雇われている者も何十万といて、アテネの軍隊なんかと戦ったりしていた。ですから、ペルシア戦争は、産業革命・フランス革命以後の近代ヨーロッパの戦争とは性格がぜんぜん違うものです。要するに、大ペルシア帝国がちっぽけなギリシアにもっと言うことを聞かせようとして、しくじっただけの話です。そして、ギリシアは別に西洋ではありません。まさに東洋のど真ん中のものです。

8 アラブ経由で受け継がれたギリシア哲学

平凡社で出した『世界史の第二ラウンドは可能か』にも書いたことですが、古代ギリシアというのは古代オリエン特文明のスポークスマンでした。たとえば、タレーズの学問はバビロニアの天文台の記録をもとにして作りあげたものです。ある事柄をやった人たちが、それを客観化するのには難しいんです。ところが、古代オリエン特文明という巨大な文明に職人や商人あるいは傭兵として寄生していたギリシアの人々は、古代オリエン特の人々が作りあげたものを客観化して、それを理屈に仕上げることができた。古代ギリシアがやったことはそういうことです。

アルプス・ピレネー以北の西欧の人々が古代ギリシアの知的な遺産を引き継いだのはいつか、どなたか見当つきますか？ 18 世紀です。イタリアの場合は 14 世紀くらいに、『デ

カメロン』を書いたボッカチオなんかが古代ギリシアの文献をも対象とするようになったんですが、その後 18 世紀にいたるまで、古代ギリシアのいろんな文献がそのままヨーロッパに受け継がれることはありませんでした。それまでにアリストテレスやプラトンなどの名前が出てくるのは、すべてアラブ経由です。

先ほども申しあげましたアラブ医学というのは、古代ギリシア医学のピポクラテスや、古代ローマ時代のガレーノスの医学を、全面的に引き継いだものです。アラブ医学はそれらをより整ったものに仕上げ、12 世紀ごろ、十字軍が始まって 1 世紀くらい経ってから、やっとアルプス・ピレネー以北の人たちがそういうのを学び始めます。スコラ哲学も、古代ギリシア哲学をそのまま引き継いだのではありません。古代ギリシアの学問を全面的に引き継いだのはアラブで、イブン・シーナー（英語訛りでアヴィセンナ）、あるいはイブン・ルシュド（英語訛りでアヴェロエス）などのアラブの哲学者・医学者の仕事を西洋の人々は学んだんです。

ですから、イギリスのエジンバラ大学で長いことアラブ研究に携わった、特に思想的な面での研究の大御所の一人であるモンゴメリ・ウィリアム・ワットさんは、自著の中で、アラブ文明のベースがなければ近代西洋文明というのはいりえなかったろうと書いています。その本をわたしが翻訳しまして、『地中海世界のイスラム』というタイトルで筑摩叢書から出ています。大きな図書館に行けばあります。

12 世紀から 13 世紀ごろにかけて、シチリアやイベリア半島のトレードあたりでアラブの学問のほとんどの分野がラテン語に翻訳され、それをアルプス・ピレネー以北の人たちが受け継いでいった。ただ、それはまだ基礎的なものでしたから、それがヨーロッパの学問の表面に出てくるのは 18 世紀なんです。18 世紀ごろになって、やっとアルプス・ピレネー以北のヨーロッパは文明らしきものになった。

いま最後に申しましたことは、吉田健一さんという文芸評論家が言ったことです。吉田健一さんは、第二次世界大戦後の日本の国家システムをつくりあげたワンマン首相、吉田茂さんの息子ですが、なかなかできる方で、ヨーロッパというところは 8 世紀にもわたるくらいの戦国時代のあと、18 世紀ごろになってやっと文明の段階に達したというんです。わたしもそのとおりだと思います。わたしはかつて 21 年間高校の教師をやって、少なくとも 21 回、世界史を教えました。昔の世界史の教科書はヨーロッパにたくさん頁数をとっているんですが、中身があまりない。けっきょく戦争の話ばかりです。産業革命・フランス革命以後の近代ヨーロッパは、国際法というもののいちばん中心部分は戦争のルールですよね。交戦国や中立国の権利義務などです。国家というものは戦争するのが当然だとしています。だからわたしは、近代西欧文明を「戦争文明」と名づけたわけです。

それはともかくとして、近代以前のヨーロッパというのはおよそ日当たりが悪い、いちばんあとまで氷河がかぶさっていたために土壌も悪い。したがって、新大陸からジャガイモが入って定着する 16～17 世紀ごろまでは、ドイツやイギリスあたりの一般庶民はお腹

がいっぱいになったことはなかったんじゃないかと言っている食品学者がいました。恐ろしく悲惨な条件で文明らしきものがあまりなかった。それがやっと文明段階に入って、かれらも海外旅行なんかができるようになった。18世紀がかれらの言う大旅行時代で、行ったところはどこか。地中海世界から中東です。

いままでの話でおわかりになると思いますが、わたしはアルプス・ピレネー以北と以南をはっきりと分けます。以南、地中海世界はむしろ中東と同じような性格の世界で、以北はそれとは非常に違った条件のところですよ。18世紀は、アルプス・ピレネー以北の貴族などのお金持ちの「グランド・ツアー（大旅行）時代」といわれています。圧倒的に地中海や中東に出かけていくんです。ナポレオンがエジプト遠征をやったのもそういう波に乗っていた。そこで初めて、古代ギリシア文明—中東の文明を理論化したものが、正式に近代ヨーロッパに引き継がれていくんです。

結論的に申しますと、文明の系譜論から言って、古代ギリシア文明を全面的にひきつくだのはアラブ・イスラム文明で、12世紀以降、それにほとんどあらゆる面で学ぶことによって近代ヨーロッパ文明のもとが育まれていった。それが数世紀もかかって18世紀ごろにやっと熟して産業革命・フランス革命がおこり、近代ヨーロッパ文明なるものが世界を制覇してゆく。その過程で、西欧近代文明の母胎であったアラブ・イスラム文明があべこべに敵であったと偽造され、古代ギリシア文明は中世西欧をへて近代西欧にひきつがれてゆくとデッチあげられて幻想的な文明の系譜論がかたちづくられてゆく。古代ギリシアが近代西欧の母胎だという「世界史の中におけるギリシア幻想」がうまれたわけで、それはエドワード・サイードさんの言う近代西欧人のオリエンタリズムなるものの、いわばうらがわでありました。これで一応「世界史の中におけるギリシア幻想」なるものをお話ししました。

猪野 どうも三木さん、ありがとうございます。三木さんのお話は興味が尽きないのですが、申し訳ございません。時間の都合で終わりにさせていただきます。このあと討論をしようと思ったんですが、かなり、時間が延びておりますので、いったん、ここで15分間ほど休憩します。最後に、合わせて討論の時間を持ちたいと思います。今日は、アフリカを歩いてこられた方、インドを放浪されているお坊さんも、いらっしゃいますので、いろいろ、おっしゃりたいことがあると思います。ぜひ、皆さん、討論をお願いいたします。

第1回目のときに、針生さんがいいことをおっしゃっていました。いいださんの本に対して「何でもいいから質問すればよろしいんですよ」と。本当にそう思いまして、三木さんのお話に対しても、このあとの、いいださんのお話に対しても、皆さんに遠慮のないご質問やご意見をいただければと思います。これは学会のシンポジウムではありません。具体的な話でけっこうです。そういうことができる場にしていきたいと思っています。

（途中休憩）

それでは、いいださんにメイン・テーマのお話をさせていただきます。今回は、時間がかかり延びて討論の時間をあまりとれなくなりまして、参加者から「主宰者の趣旨と反するぞ」と言われてしまいました。やはり、何かひとこと言って帰るほうが面白いと思いますので、今日のお話は4時半までにさせていただきます、休憩を挟んで討論にしたいと思います。それから、第1回目から克明な記録をとっておりまして、いずれ雑誌にしますのでご了承ください。では、いいださん、どうぞよろしく願いいたします。

リプライ講演

いいだもも

今日もこんなに多彩な方々がいらっしゃって下さり、お互いに楽しい討論が終わったあとには、二次会に参加される方もいらっしゃいますから、4時半までに切り上げることにいたしまして、そういう流れでいきたいと思います。

前回、わたしは勘違いをしまして、2時から始まるとばかり思い込んでいて、そのためどころならずも、30分遅れてしまいました。申し訳ございませんでした。わたしは、NHKの「素人のど自慢」が大好きで、毎週見惚れておりますが、今日はゲストが細川たかしとわたしの大好きなキム・ヨンジャだったんですが、かのじょが歌うところまでいかないうちにここへ出て来ました(笑)。前回の失敗に猪野修治さんがすっかり懲りてしまって、わたしが遅れて来てはいけないというので、今日いらっしゃっている南さんご姉妹をわざわざ迎えによこしてくださいまして。ありがとうございます。次回も、また南さん姉妹がお迎えに来て下さると思っておりますので、間違いなく時間通りまいります(笑)。

今回は、金子務さんとなだいなださんが、コメントをしてくださることになっていますが、今日はその金子務さんがわざわざお見えになっていらっしゃいます。ありがたいことです。敵情偵察か、予行演習のような感じがしますが(笑)。金子務さんは、科学史家で、アインシュタインの有名な研究者で、ものすごい大学者です。最近、中公新書から、江戸時代のさまざまな人たちの群像を書いた『江戸人物科学史』というご本を、出されましたが、昨日、わたしは、それをめでたく読み終えました。これがまた、素晴らしいご本でして、方々を自分の足で歩き回って、緻密・周到に調べておられます。次回、お会いできるのを、たいへん楽しみにしております。

1 生態学的視点から歴史を見ると

今日は、わたしの朋友の三木亘さんにお出かけ願って、「世界史の中におけるギリシア幻想」ということを、お話いただきましたが、三木亘さんのお話は、要するに、「古代ギリシアの幻想」ということから、今日の西洋中心主義的な世界観ならびに世界像ができ

あがったことを、鋭く解き明かしているわけです。そうした、きわめて特異な世界像によって、極東のわたしたちの頭の中はすっかり、よくいえば教育、悪くいえば汚染されてしまっていますから、或る意味では、三木亘さんのお話は、それと真っ向からぶつかった上で、脱構築をしますから、これまでの歴史教育を受けた人びとにとっては、ちょっと受け付けにくいところもあったであろうとは思いますが、やはり、三木亘さんのお話は、縦横無尽で素晴らしかったのです、わたしは、それに多少補足させていただくかたちで、お応えしたい、と思っております。

何より素晴らしいのは、今日、三木亘さんがお配りになった「世界史の中でイラク戦争を考える」という論文です。あとでみなさんはお読みになるといいと思いますが、三木亘さんは、現代世界史の包括的な観点から、イラク戦争を読み解いておられることです。イラク戦争を論じるということは、非常にアクチュアルなこと、時事の問題、要するに新聞ダネのようなことですが、それを三木亘さんは、実にキチンキチンとブリリアントにやっておられる。三木亘さんのお話を聞いて、西部のカウボーイよろしくのブッシュという漢(笑)をテレビで見るのが、ますます楽しみになりました(笑)。

今年の初めからわたしは、ブッシュのイラク戦争は大失敗であって、年内にブッシュはイラク民衆に大敗北してしまって、イラクからの米兵の撤兵を余儀なくされ、世界は大いに変わることになるだろう、と言っているんですが、なかなか信じる人はいませんでした。しかし、現にイラクからの撤兵が雪崩れを打つように始まっています。イギリスのブレア首相もじきに居なくなって、日本の小泉純一郎なる者もいなくなって、もうブッシュは、これ以上は持ちませんよ(笑)。最初は、わたしの言うことを、ほとんど誰も信じませんでした。いまは半分くらいは、わたしの話に結構リアリティがあって、いいだの大ボラもたまには当たることがあるんだ(笑)とお思いの奇特な方も、たまにはいらっしゃる。年内には間違いなくイラク撤兵の開始です。ブッシュ米大統領とパクス・アメリカナの終わりです。これで、世界は、まちがいなく悦ばしい大動乱期(笑)に入るんです。

このような歴史を見る力がつくかどうかというのは、三木亘さんが今日おっしゃっているように、世界史の中で考える以外にないんです。その世界史というのは、通説では古典古代ギリシア以来の2600年間の世界史ということにされていますが、わたし流に言えば、それは8000年の地中海世界以来の世界史を踏まえていますから、人類史的に言えば、8000年の歴史の蓄積をどう了解するのか、ということになります。中学、高校、大学と、2600年間の世界史の了解の仕方を、西洋中心主義なり、日本中心主義なりの形で、すっかり刷り込まれてしまって、そのあとも毎日のように新聞などから偏見に満ちたヨタ記事を刷り込まれつづけているわけですから、それをひっくり返す話は、最初はアレルギーがあって、なかなか受け付けにくいものです(笑)。やはり、そここのところのブレーン・ストーミングがどうしても必要不可欠になる、と思えます。だからわたしの話も、思い切りみなさんのアタマを揺さぶります(笑)。

三木亘さんのお話、第一に補足したいことは、三木亘さんが作ってくださった「地図」についてです。それをもう一度、開いて見ていただきたい、と思います。二点ある「地図」のうちの一つ目は、重要な有用植物の分布図です。「地図」の中に植物名が並べられていますが、食うものと住むところというのは、歴史の基本ですから、わたしたちが食うものにはいったいどのような歴史的分布があるのか、ということです。また、食うものの世界的分布というのは、気候の違いによって三つくらいに大きく分かりますけれども、そういうことでこの「三木地図」が構造的にでき上がっている。それを踏まえて、わたしたちの食い方の問題がきわめて説得的に出されています。

二つ目の地図は、「西洋」、「東洋」、「南洋」、と三つに分かれています。文明史的に見ると、世界はどういうふうに分かれるのか、ということです。上から緯度40度、30度、0度と線が引かれています。三木亘理論によりますと、真ん中の30度の線が「天下の王道」と言いますか、文明の基準なんですね。30度から40度のあいだに、日本は入っている。ということは、日本というのは、世界文明を見る時に、かなり基準点になるわけです。

わたしたちの頭に刷り込まれているのは、40度の線のところ、三木亘さんがおっしゃるように、ピレネー山脈よりもっと北寄りのほうです。地中海世界はというと、古代ギリシアを含めて、ピレネー山脈より南です。ピレネー山脈を挟んで、北と南が区別されるということは、非常に大事なことです。緯度や気候が違うだけでなく、人の顔立ちさえも違っています。それを「ヨーロッパ」ということで大雑把に一括してしまうから、問題の線引きが本当にはできなくなってしまうんです。

その線より北のほうに居る人たちは、実は昔から満足に物を食べたことがなく（笑）、寒いところで痩せこけて震えて、白茶けた顔をして、長い間というもの暮らしてきました。15世紀から400年間くらい、そこで世界史が曲がってしまって、そこが世界の中心みたいにならないうちにわたしたちのアタマに刷り込まれてしまっているから、かれらは、昔も今も、肩で風を切って歩いておりますが（笑）、そんなことは、歴史の大勢から見れば、非常に例外的なことなんです。

北のほうでは、寒くてやることが何もありませんから、本を読みますから、多少は頭がよくなるんですが、それ以上は大して取り柄のない、文明の外れだと思います。そして、歴史というものは、うまく出来ているもので、北のほうは「一神教文明」なんです。二つ目の「地図」にも書かれてあるように、西洋世界は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の、バイブルに由来する一神教諸派の複合です。それぞれに多少の差異はありますが、大雑把に言えば、要するに「バイブル」文明です。「バイブル」というのは、非常にけつたいなもので、ああいうイカものを信じる馬鹿（笑）が、ヨーロッパ世界にはたくさんいるので、その一神教の迷信をやっと持っている文明です。

しかし、最近はやっている『ダ・ヴィンチ・コード』という映画を見ますと、それなりによくわかってきますが、内部から聖書を覆そうという動きは、ヨーロッパの中にもずっ

と久しくあったわけです。何千年というばかばかしいキリスト教神話に基づく歴史のヨタ話をそのままには信じない流れは、クリスチャン自身の中にもあったんですね。映画では、じつは、イエスとマグダラのマリアは夫婦であって、教会秩序は権威を守るために、その子供を次から次へと殺していくんですが、マリア修道会を中心にして、それに連綿と抵抗する流れが、「ダ・ヴィンチ・コード」として伝えられているというわけです。レオナルド・ダ・ヴィンチが「最後の晩餐」に描き込んだ暗号というのは、じつはイエスの横には女がいて、イエスと女がそこで親しげに食事をしていた、ということでした。その「共食」の絵解きの話です。そういうところに、今日、一神教の問題性があぶり出されています。

2 アクチュアルな時代の産物

カール・ヤスパースが、「融合の時代」ということを言っていますが、ヤスパースの史観は、人類文明史あるいは思想史として考えてみますと、非常に重要なものです。人類史がどこで、文明前史から文明史に成るかというところには当然「融合の時代」という歴史的切断線が入っており、中国でいうと孔子と老子、イランだとゾロアスター教、インドだと釈迦とジャイナ教が出てくる。西のほうでは、当時は東よりずっと野蛮なところでしたが、それにしてもやはり、キリスト教が出てくる。世界史的に見ても「融合の時代」というのは、大きな画期であるわけです。それは、言葉を変えていえば、「啓示宗教の時代」です。天から言葉としての啓示が降りてきて、「光あれ！」となるのですが、それに基づいて、人類が啓蒙的な文明史の領域に入ってくる。ですから、西洋が一神教であることは確かですが、それはいちばん西のほうの、当時でいうと、きわめて暗かった地方のローカルな流れなんです。

東洋における「融合の時代」の産物は、「地図」で三木亘さんが整理されているように、儒教と道教と仏教です。儒教は孔子、孟子、道教は老子、荘子、仏教は釈迦とジャイナですが、この三教が複合した古代東洋文明ができた。東洋に属しているわたしたちは、空海以来、三教の複合文化の中で育ってきた。弘法大師の謂う「三教指帰」ですね。その回想的伝統は、明治維新以来すっかり失われてきてしまいましたが、単なる「西洋化」「近代化」のために失われるには惜しい文明である、とわたしは思います。「三教一致」というのは、わたしたちの伝統の中にちゃんとあって、それは捨てるべきものではなくて、これから東西文明の最後の出会いが起きますから、そこでぜひとも活かすべきものであるわけです。

先ほど三木亘さんもおっしゃいましたが、たとえば大学というものを考えた場合に、西洋のパリ大学やケンブリッジ大学のほうが、極東の島国日本の高野山大学よりよほどずっと遅いわけです。高野山大学は弘法大師、つまり空海がつくった大学です。空海は、日本の最大の思想的巨人の一人です。司馬遼太郎の『空海の風景』も含めて、わたしたちはどれだけ空海に関する本を読んだかわかりませんが、やはり高野山大学は、世界最初のきわ

めて高度なアカデミーなのです。

空海の時代は、世界文明史でいうと、もうかなりディケイしている文明です。ディケイしているというのは、かれが唐土に渡って学んだときは、すでに「三教複合」の中の仏教は、そのそもその本貫の地であるインドでは、もうすっかり「タントラ仏教」になっていて、「ヒンドゥー教化」していた。仏教は、或る種の排外主義を帯びた基層の宗教文化であるヒンドゥー教と比べてみれば、その当時の古代ローマ世界帝国との世界交通に結びついた、それは、お釈迦様の普遍宗教です。世界的普遍性を固有していました。そして、インドは 30 度の線、つまり「天下の王道」のところに位置しておりますから、そこで出来た釈迦の仏教というのは、当然、バラモン的なカースト社会を超える普遍的な人間交通ですから、そのことによって、一時期、非常に力を得ますが、だんだんとローマと北京とのあいだのシルクロード的交通が衰えてきて、下部のほうからヒンドゥー教がもう一度抬頭してきます。今日のインドの右翼政権党「人民党」ですね。

ヒンドゥー教も、たいへん興味深いインド土着宗教であり、男と女が抱き合っているところを絶えず彫像にしたり、絵にしたりして、暮らしている文明です。男女和合の即身成仏の教説で、日本では、空海の「真言密教」から出た「立川流」が、その文化を引き継いでいます。文覚上人が始めた「立川流」は、のちに徳川幕府の大弾圧によって滅んでしまっていますが、これも非常に面白い文化です。文覚上人が開いた宗派で、即身成仏を説いて、男と女が抱き合った姿が、この世のすべてである、としています。これは或る意味では「性」の絶対的尊重として正しい、とわたしなりに思いますし、仏教としても正統を行っている、とわたしは思います。

セックスによる繁殖が無ければ、そもそも人間社会の再生産自体が成り立たない。しかし、「真言立川流」は、「不受不施派」の日蓮宗や天草の四郎時貞の「切支丹」＝キリスト教と同じで、江戸時代を通して厳密な国禁イデオロギーでしたから、その伝統も徳川時代三百年にわたった鎖国の中で、すっかり絶えてしまいました。そろそろ、わたしたちにとっては、それを復活すべき時がきている、と思うんですが。そういう意味では、日本には基本的に「開かれた文明」というのが、伝統的にチャンとあるんですね。

三木亘さんの「地図」によれば、南洋では仏教とヒンドゥー教ですが、これはいま申し上げた問題ですね。インドでは、下層のほうにヒンドゥー教で、上層のほうに以前は仏教です。仏教の変遷史で非常に不思議なことは、日本は、インドを本貫の地とした仏教の吹きだまりみたいなところでして、そこに正倉院があって、東大寺ができて、奈良の大仏が建立され、そのもとで生きている仏教の中でわたしたちは久しく暮らしてきている。たとえ徳川期に「宗門改メ」を担当していた権力の走狗的仏教であり、また世俗の日常生活では「葬式仏教」であっても、なんとも思わずに落とし切ったそうした通俗仏教文明を、わたしたちは久しく享受してきました。ところが、何度でもわたしは強調しますが、その本貫の地であるインドでは、仏教は無くなってしまいうんですね。

インドで、仏教がもう一度復興するのは、アンベードガルを待たなければなりません。かつてブラック・パンサーのインドの若い指導者が、わたしのところに遊びに来て、よく討論をしましたが、かれらが信奉しているのが、アンベードガルの「ニュー・ブディズム」です。アンベードガル博士は、マハトマ・ガンジーとともに現代インドをつくった偉い男で、初代法相として、インドの「新憲法」も作りました。かれが「ネオ・ブディズム」というものを開始して、現在はその信者が10万人くらいインドには居るんですかね。しかし、今のインド政府は、「人民党」というヒンドゥー教の右翼チックな政党が牛耳っていて、これがまたものすごく乱暴な右翼チックな政党でして、しょっちゅう「アヨーディア事件」のような事件を引き起こして、イスラーム教徒と疑われる人びとをぶっ殺すようなことを平気でやらかしています。事実上の一神教支配の「国家タントライズム仏教」です。

さらに、三木亘さんの「地図」では、新大陸アメリカは、ニューヨークかワシントンあたりが40度で、メキシコあたりが30度です。ピレネー以北と以南で分けると、先程も述べたように、西洋に属するところは（30度から40度のあいだに）ほとんど入らない。「ピレネー以南」は、地中海文明に属していて、地中海文明というのは、むしろ中近東の方に近い文明圏だというふうに考えますと、世界史の真相が非常にくっきりと見えてきます。

重要な有用植物の分布図のほうは、もう一度強調しておきますと、食う問題の図式化です。わたしたちは、単純に「小麦の文化」と「米の文化」に分けていますが、酪農牧畜の問題を抜きにすれば、粟が主食であった縄文文化、あるいはニシンが主食であったアイヌ文化の後を承けた「弥生文化」は、「米の文化」に属しており、全地球世界上では、人類の主食は、小麦と米とトウモロコシの三つに大きく分けられて、その分布には、文明的な必然性があります。こうして、わたしたちが食っているものの根元的なところが、頭にすっきりと入ってきます。これは、この「地図」を見てのわたしなりの感想ですから、訂正すべきところがあれば、あとで訂正していただきたいと思います。

3 「土曜の順序」ということ

前回の討論のさいにご発言をいただいた聴衆参加者の勝木渥さんから、司会の猪野修治さんを通じて、今日「古代天文学の布石 土曜の順序」というパンフレットをいただいたんですが、これが、三木亘さんのご発言との関係で、非常に面白いものです。日月火水木金土で七曜が出来ますが、東洋・西洋・南洋を問わず、この七曜が暦日の基準になっています。つまり、これは、或る種の文明の暦日的・天文的な基準である、ということです。

わたしは、よく「概念の分割」ということを言いますが、Begriff というのは「分割」ということです。これヌキに「文明」というものはありえない。東洋世界では、秦の始皇帝がつくった「万里の長城」というもので、概念の分割線が、東アジア・ロシアの大草原の広大な地帯に入ったことによって、その向こう側の、「農耕文明」には属さない草原の

民である匈奴や突厥、そしてモンゴル帝国にいたるまでの「牧畜文明」と、わたしたちが文明的な陶冶を受けた中華文明の大本になっている「農耕文明」とが、区別されました。このだいたいな区別がもしなければ、どこまで行っても、牧畜民は農耕民の中に攻め入ってきて、ぐちゃぐちゃになってしまう。それを目に見える形で食い止めたのが、この「万里の長城」という分割線ですから、秦の始皇帝というのは、「概念の分割者」だというのが、わたしの昔からの基本的な考え方です。これが「始」皇帝の 歴史的意味です。概念の分割線を構築したことで、「牧畜文明」と「農耕文明」とが、はっきりと区別されたわけです。

「土曜の順序」というものも、それと全く同じことです。これは、非常に面白い論文なので、ぜひ次回は、皆さんにも配られるといいと思いますが、ここで言われていることで、三木亘さんのお話と関係があるのは、一つは、イスラームの場合は、日曜日が休日ではない、ということです。日曜日が休日なのは、聖書によれば、神様のご都合（笑）で、神様が六日間ぶっ通しで働いて、七日目にはすっかりくたびれてしまって、休んだわけですよ（笑）、それが日曜日で、近世日本人がオランダ読みして「ドンタク」ですね。この日に日本人も休むようになった。

しかし、イスラームでは、いま世界人口の三分の一がイスラーム教徒ですが、かれらは、日曜日ではなく、金曜日が休みだと思っている。だから、「必要の順序」というのは、一様化している方向に行っているけれども、なおかつそこには、文明圈的にそれぞれすこぶる意味のある差異のあるアクセントがチャンとあって、日曜日を休みとしている文明圏と（日本は明治以来そうになっていますが）、金曜日を休みとしている文明圏とのあいだに、大きな区別が今でもある。なにしろ、現代人の三分の一が、金曜日をお休みにしているという単純なことを忘れてしまっただけで、現代世界のことは何一つ見当がつかなくなります（笑）。

要するに、暦でいえば、わたしたちも今では「西暦」を使っていますから、さしあたり、わたしたちは、西洋中心主義的文明ですが、と同時に、世界人口の三分の一という、決して少数派とはいえない人たちが、「ヒジュラ暦」という、キリスト教の西暦とはぜんぜん違う暦で、世界暦年を数えている。世界の三分の一の数の人たちが、毎日メッカの方向を向いてお辞儀をして、自分の位置とロケーションと暦とを絶えず再確認しているわけです。2006年とか、21世紀とか考えていない人たちが、現にそれだけ存在しているということ、ときどき思い出してみたほうがいい、とわたしは強く感じ、思います。

いわゆる「9.11事件」以後、ハンチントンの謂う「諸文明の衝突」が非常に重大な事実として論議されるようになってきていますが、それは、「ヒジュラ暦」と「キリスト暦＝西暦」との衝突なんですね。これが将来どうなるかは、これからの抗争と和解との長い長い歴史過程を経て、文明がもう一度東西混淆化する中で、恣意的にはなく、万人の経験として、だんだんに作られていって、或る普遍的な一義的な形を次第に取ってくるだろう

と思います。そういうことを、三木亘さんの教えにしたがって考えておくということは、いま非常に大事なことだと思います。

4 ペルシア帝国は、いつ滅んだのか？ 古代地中海ポリス国家は？

もう二点、三木亘さんのお話に補足させていただきます。

その一つは、「ペルシア戦争」に関する問題です。前回もお話ししましたが、わたしのこの三部作のうち、Ⅱ巻とⅢ巻の重要な主題の一つは、古代ギリシアが世界史の始原である、というのは、三木亘さん流に言うならば、全くの「幻想」である、ということです。その「幻想」のもとには、三木亘さんが強調されているように、「オリエント」のペルシア大帝国が、地中海のアテネやスパルタという「オクシデント」の小さなポリス国家を征服しようとして、サラミスの海戦とマラトンの戦いで逆に敗れてしまったことに、その発動の起点があります。前回くわしく申し上げたように、これが、ヘロドトスの『ヒストリアイ歴史』での大主題なわけです。

実際は、ペルシア大帝国は、そこで滅びたわけでも何でもないのに、西洋史では、東の家父長制的で貢納制的なオリエント文明の代表であるペルシア大帝国が、もっと開けたポリス国家である地中海文明によって撃退され、そこで「オリエント」から「オクシデント」への大転換が生じた、とされています。

マラトンの戦いでのエピソードは、現在オリンピックの競技名「マラソン」にもなっていますが、そういうかたちで、神話化された歴史を、わたしたちはずっと刷り込まれてきて、今日の西洋中心的な歴史を何ら疑うことなく、アンチ・フェミニズムが愛されたかたちで、とうとう今日のブッシュや小泉純一郎の「男性」型文明に行き着いてしまった(笑)。三木亘さんが、横須賀に近いところの居酒屋で聞いている小泉純一郎の評判なんかは、小泉首相がいかにもまったくバカバカしい人物であるとしか言いようがないものですね(笑)。このブッシュ・小泉型の文明を何ら疑うことがない、という奇妙な大錯覚の中で、今日のわたしたちは生きているわけです。もうそろそろ。そういう悪思考から目を覚まさないといけない(笑)。

この前もお話ししましたが、ペルシア大帝国の先遣隊が、ポリス国家に敗れたのは事実ですが、あれはそれ以来、ホンの二次的・副次的なことなだけでしてね。本体のペルシア大帝国は、実は、ほとんど無傷であったのですから、そのあとも、地中海世界をずっと操縦していたのは、ペルシア大帝国の方だということが、たいへん重要なんです。

サラミスとマラトンでは確かに負けましたが、別にダリウス大王が負けたわけでも、ペルシアの大陸軍・大海軍が負けたわけでも、何でもない。或る意味では、アテネ、スパルタのようなギリシアのポリス国家を操作していたのも、いぜんとしてペルシア大帝国なんです。だから、その操作の通りに、古代ギリシアの大内乱である、アテネとスパルタとの長い長い死闘の繰り返しである〈ペロポネソス戦争〉が起きてしまって、ポリス都市文明

の総体がこの内輪もめで衰退を余儀なくされてゆくことになったわけです。歴史的事実としてそうである、のです。そのことは、わたしのこの本に詳しく書いてありますから、もう一度、お確かめいただきたいと思います。

ペルシア戦争のあと、ペロポネソス戦争が起こります。古代ギリシア内のポリス国家同士の戦いですね。「市民戦争」のハシリです。ペルシア戦争のことを書いたのは、ヘロドトスで、ペロポネソス戦争のことを書いたのは、ツキディデスですが、両者の『歴史』は非常に面白いもので、一貫して読むと、この二つの戦争の違いと繋がりがよくわかります。

ペロポネソス戦争は、外敵との戦いではなくて、内乱なんです。シヴィル・ウォーです。今も申し上げた「市民戦争」です。アテネとスパルタとの死生を賭した戦いが、数十年にわたって続き、最後はアテネの敗北に終わります。したがって、東地中海世界に在って、海外へ大いに雄飛して国際貿易を最大限発展させていた、いわゆる「アテネ帝国主義」は、結局のところ「帝国」としては完成しないで、アテネのギリギリの大膨脹がいわば頭打ちになったところに、ギリシア全体の内戦における、スパルタとアテネとの抗争が重なる。この戦いの出血によって、ひとりアテネばかりでなく、全体的にポリス国家群が衰弱していくわけです。

わたしは、ペロポネソス戦争の帰結を見て、この戦争の糸を引いて叛乱を起こさせていたのは、間違いなくペルシアであって、その卓越したペルシア帝国の外交戦術の奏功によるものだと思います。ですから、ここがかんじんな点です。ペロポネソス戦争の正当な評価は、ペルシア大帝国の政治外交を抜きにしてはありえません。

ペルシア大帝国は、サラミスやマラトンでアテネに確かに一敗地に塗れた後でも、依然として健在で在り、実際はそういう間接操作を通じて、地中海世界を支配していました。しかし、ペルシア戦争のあとはもう、ペルシアがオリエントを代表しなくなったと早トチリして、ヘーゲルを含めてみなそのあとは敗者復活戦もなく、ペルシアはどこかに行ってしまった。それが今になって「ホメイニ革命」によるイランの復興となって、わたしたちの前にまた出てきているわけです。

しかし、そんなことは一切無視・黙殺して、みんなただただヘーゲルの歴史観をありがたがっていますが、ヘーゲルの歴史観はすこぶるけったいなものです。わたしたちに即してみてもいちばん変なのは、日本が全然出てこないことです（笑）。ヘーゲルの「世界史の哲学」は、ご承知の通り、モンゴルから始まるんです。モンゴルは、最初の「一人の専制帝国」ですから、ヘーゲルによれば、「自由の意識における進化」論によって、滅ぶべくして滅びますが、それから「数人の自由」であるインドに世界史は移って行って、そのあと、「万人の自由」であるヨーロッパに行く、という、幼稚と言えば幼稚きわまる一方通行の世界史の構成になる。最後は、「プロテスタントのプロイセン」が出てきて、万歳（！）となる。これは全くもってヘーゲルの自画自賛なわけでしょう（笑）。歴史はこれで成就して終わり、あとはまた神話があるだけ、というわけです。これは、本当のと

ころ迷信そのもののような世界観です。フランシス・フクヤマ式に言えば、これで「歴史は行き止り」となって、「歴史の終焉」となります（笑）。めでたし、めでたし（笑）、全くもっておめでたい噺です（笑）。

それから、ヘーゲルの「世界史」では、ヨーロッパはプロイセンで行き止まりになってしまいますから、アメリカは「未来の国」だということで、やはり出てこないんです（笑）。どうですか？ 20世紀になると、そこにはヘーゲルの「世界史の哲学」にはちっとも出てこない、ロシアとアメリカが、世界史の主人公になっていまして、世界的なコールド・ウォー（冷戦）がグローバルに出てくるわけですが、その米ソ超大国は、ヘーゲル的な世界史哲学では足がすっかりはみ出してしまう（笑）。というよりは、ヘーゲルの「世界史」の方がちっぽけな尾っぽみみたいなものなのです（笑）。現代世界史では、大事なものは米ソなんであって、それは誰でも知っているように冷戦期を通してずっと、そうであったわけです。

1979年にたって、スターリン主義の「一国社会主義体制」が滅んでしまった後も、〈パクス・アメリカーナ〉の一元的な新自由主義支配下にある現在でも、ドル・核帝国アメリカという超大国を抜きにして、世界史を語ることは絶対にできない。わたしのようアメリカ嫌いであろうと（笑）、歴史の捉え方としては、それ以外ではありえない。「ヘーゲルの世界史」は偉いものだと思いこんでいると、そういうことの初歩的な解さえまったく出来なくなるということがある。もちろんのこと、それではだめなんです。ですから、やはり、三木亘さんのような世界史観でもって、ものを考えるほかないわけです。古代のペルシア戦争の評価の問題も、そうです。

さて、ペルシア戦争後も、ペルシア帝国が相変わらず地中海世界を操作していて、ペロポネソス戦争を起こさせて、内争によるポリス国家の自己没落を図りましたが、それは実際に着々と成功を収めて、やがてペルシアは、エジプトを完全に併呑してしまいます。これで有史以来最大・最高の古代王朝史であったナイル河畔の古代文明の精華—あのスフィンクスとピラミッドの偉大な古代文明—が滅亡してしまうわけです。

何度も繰り返しますと、ペルシア大帝国が地中海世界のヘゲモニーを、ポリス国家群と争ってマラトンとサラミスで局地的には敗北しますが、いぜんとして、あの偉大なエジプト文明—何しろナイル河の例年の氾濫を処理してしまわなければ、あの文明は存続しえませんが、あのピラミッド文明は幾何学と測量術と天文観測によって、厳密に数学的に構築されていたわけです。それを併呑してしまっただけに、ペルシア大帝国は、オリエン特世界のなかでの一大帝国として、依然として健在であって、むしろ大隆盛期に在るわけです。そのところを、ヘロドトスの『ヒストリアイ』にならってポリス国家中心式に処理してしまうと、「地図」は本当には描けなくなってしまわざるをえない。

エジプトというのは、5000年に及ぶ王朝が続いていた、当時世界一の大河川文明ですから、気の遠くなるような話です。これはいうまでもなく、地中海文明の有機的一環にあっ

た、太陽とピラミッドとスフィンクスの文明ですが、太陽神の信仰も一種の啓示宗教であって、それでエジプトは一元化するわけです。エジプトは地理的に見ると、山脈があって、それを越え内側に囲まれた大地にナイル川が流れているのであって、ナイル川流域を中心として割合に自閉されていますから、こういう一元化した文明が、5000年ものあいだ、王朝が何代も代がわりしながら持つんです。しかし、とうとうその大文明が、ペルシア帝国によって併合されてしまいます。だから、サラミスの海戦とマラトンの陸戦の以後に、ペルシア大帝国と古代文明、エジプト大文明をも併呑して、地中海世界史的に出現してくるわけです。

ペルシアは自分では戦わずに、ヘーゲルの「世界史」の進行予定表では、とっくの昔に世界舞台から没落してしまって地球舞台から居なくなっているように処理されているにもかかわらず、大軍勢を擁しながら、5000年も続いてきた巨大なナイル河川文明を滅ぼしてしまっているわけですが、そここのところをチャンと看なければならぬ。ポリス都市文明国家といったって、その実態は、この地中海のヘゲモニー闘争の折りには、オリエントのペルシア大帝国がエジプト文明征服のために傭った「傭兵」にすぎないわけです（笑）。傭兵のポリス国家兵力—これは、戦士共同体としてのポリス都市国家に特有な小土地所有者の自前・自弁武装であるわけですね—を使って、ペルシア帝国はエジプトを征服して併呑してしまいます。その傭兵のほとんどは、ポリス諸国家のギリシア人なんです。ここがかんじんな目のつけ所です。

そして、三木亘さんもおっしゃっているように、古代ギリシア文明はもともと戦争文明でして、戦争を知らずしてギリシア文明は語れない、ということからも分かるように、そのころのギリシア人は、ペロポネソス戦争の内戦に上も下も総動員されているか、ペルシアの傭兵になってエジプトに行かされているか、のどちらかだったんです。それが非常に大事な点でして、その了解なしに、ギリシアは「叡智（ヌース）の文明」だなんていうのは、たわいのない話です。あの都市国家の「市民」とは、要するに「戦士」なのであって、その戦士が総力を挙げて戦った「市民戦争」は、ペロポネソス戦争という大内乱の主体であったわけですが、今度はそれが、ペルシア VS エジプトの国際戦争の「地球的傭兵」の主体となっているわけですね、今や「農耕地防衛」ではなくなっているわけです。

では、次に、どこでいったい、ペルシア帝国とポリス国家とが滅びるかということ、これもとても重要なことですので、わたし自身も、本書の第Ⅱ巻・第Ⅲ巻で、力を込めて書いていますけれども、それは、アレクサンドロス大王の大東征によって、です。かれアレクサンドロスが、マケドニアからインドにわたる「ヘレニズム時代」をつくりあげた時のことです。「ヘレニズム時代」というのは、一種の「世界帝国」の時代です。この過程的媒介をぬきにして、ポリス都市国家がどうやって、ローマ世界帝国へと歴史的に転化したのか、という古代の世界史の大きな筋書きは、全く見えてきません。ポリス国家が、ずっと言われ続けてきているように、ヘロドトス以来の「ギリシアびいき」の連中としては、そ

んなに簡単に滅びるはずがない、と思いたかったのもそれなりに無理ありませんが、やはりそこには、解き難い矛盾があったから、滅ぶべくして滅んだんですね。

5 アレクサンドロス大王の東方遠征

ポリス国家は、非常にいわば自意識過剰でして、膨張した自負心ばかりが強くて、ほとんど自己幻想と自己錯覚—三木亘さんのおっしゃる「ギリシア幻想」とは何よりも、古代ギリシア人的な「自己幻想」なわけのものです—の中で生きていますから、マケドニアに対して、この貧弱な山岳地帯の賤民めといったポリス都市国家の偽りの「文明幻想」をたくましくして、マケドニアのアレクサンドロス大王に対して、チョコザイな反乱を起こしました。その先頭に立ったのが、有名なデモステネスですが、アレクサンドロス大王の大東征の開始によって、デモステネスのポリス国家は、最後の一人にいたるまで完全に殲滅されてしまい、地中海世界史のヘレニズム世界帝国化は、怒濤の勢いで進行してゆきますから、無分別で高慢不遜な高ぶりのままに、反マケドニア・反アレクサンドロスの笑止千万ともいふべき反乱の尻馬に乗っていたアテネやスパルタは、それを見て、すっかり慌てふためいて（笑）、若きアレクサンドロス大王に降伏し、自己解体してしまいます。

東征に先立って、アレクサンドロス大王は、あらかじめ、その背後に在る煩いをこうしてすっかり取り除いてしまうべく、ポリス国家をこの際温存すべからずとして、ことごとくすべてトコトン壊滅してしまっただけです。そして、後顧の憂えがこうして消え去ると、いよいよ東へ向かいます。そこで、ペルシア大帝国との対決になるわけです。

このところの歴史の前後関係をあべこべに刷り込まれたままでは、この古代地中海文明の結末は、全くもって見えてきません。ここで大事なのは、オリエンとオクシデントの本当の対決は、ペルシア帝国とマケドニア帝国という、「オリエン世界帝国」と「オクシデント世界帝国」とのぶつかり合いだった、ということです。そして、この世界史的対決に、アレクサンドロス大王が率いる「マケドニア帝国」が勝って、ダレイオス大王が率いるペルシア帝国の側は無残な敗北を喫して世界舞台から亡くなってしまうわけです。

戦いは三回続発して、いずれも血湧き肉躍る壮大きわまるものでした。ヘロドトス『ヒストリアイ歴史』の「驚異の念」は、むしろここでこそ、感受されるべきでした。むろんのこと、ヘロドトスはとっくに亡くなってしまっていますから、『ヒストリアイ』のずっと後の出来事ではありますが。両軍とも、アレクサンドロス大王とダレイオス王との双方が、いずれも 50 万くらいの兵隊を擁して、大動員していますから、世界史上にそんな大戦争はまさに前古未曾有なわけです。現代の第二次世界大戦としての独ソ戦や米英連合 VS ヒトラーの第二次世界大戦にいたるまで、こんな大戦争は無いわけです。

上杉謙信と武田信玄ではないですが、一度はペルシア軍がアレクサンドロス大王の軍に斬り込んで、アレクサンドロス大王自身が負傷を蒙って、あわやというところまで行くんですが、かれはアキレウスを「憧れのヒーロー」にしている強烈なカリスマ性の持ち主で

すから、何とかその危機を切り抜けて盛り返します。それぞれ 50 万もの大兵力を総動員しての前代未聞の真の世界戦争であるわけですが、やはり最後は、率いている者のカリスマ性と気力の強さに依るんですね、勝敗の程は。それで、とうとうたまたまに、ペルシア帝国のダレイオス三世は戦場から逃げ出して、離脱してしまいます。これが三度の大会戦で、ペルシア帝国側が負けと出た転換点です。たとえ 50 万の大軍でも、昔は家父長制と神聖帝王朝とのもとに結束した軍隊のことですから、王様が居なくなってしまうと、全軍が総崩れになってしまいます。こうして、さしものオリエント帝国も、ついに滅びます。

アレクサンドロス大王というのは、非常に高度な政治テクニクを持った武将で、自分が滅ぼしたペルシア帝国の継承者に自らを擬します。多くの部下の将兵とちがって、かれはけっして「マケドニア主義」ではないんですね。どういうことかと言うと、ペルシア帝国の最後の王が逃げていくのを、アレクサンドロス大王は、どこまでも追及して行って、最後の場面は、僅か三十騎を引き連れて、巨大な敵陣よりもそのアレクサンドロス先駆騎兵隊が先行して、道端に遺棄されている馬車の中で、ペルシア帝国の最後の王が、息も絶え絶えになっているところに、行き着きます。敗走のペルシア大王は、身内の太守に裏切られて、刺されたんです。そのいまわの際に間に合ったアレクサンドロス大王は、これでペルシア帝国は終わりだ、と悟ったペルシア王に「後事」を託されるわけです。

アレクサンドロス大王は、そのダレイオス三世の末期の願いを聞き入れて、ダイオレス三世が遺した王妃や子どもたちに食俸を与えることを、約束します。それからあとのアレクサンドロス大王の戦いの大義名分は、ペルシア帝国の王を殺した太守を征伐することになります。王の遺志を自分が代行するというかたちで、ペルシア帝国を征服していくわけです。このところは、アレクサンドロス大王体制の性格を見るうえで、とても重要なことです。だから、アレクサンドロス大王は、このペルシア大帝国の正規な正統の王位継承者であるわけです。

こうして、ポリス国家群もペルシア帝国も平定してしまっていて、アレクサンドロス大王は、どんどんさらに東へと進んでゆきます。そして、インダス川を渡って、インド領内へと深く進攻し、パンジャブ地方の国家と戦争をします。当時のインド軍は精強を以ってよく知られていましたが、その理由は戦象、つまり、戦闘用の巨象を何十頭も駆使しているからなんですね。当時の資料によると、アレクサンドロス大王は、180 頭くらいの戦象を擁するインド辺境国の軍隊と激突します。ここでも、アレクサンドロス大王は、あわやというところまで行くんですが、最後は「アキレウスの勇気」をまたまた発揮して、インドの戦象軍隊を殲滅してしまっていて、その国王が帰順すると、また高度な政治テクニクを発揮して、パンジャブ王の本領の民を安堵させます。

アレクサンドロス大王は、さらにそこから先に進もうとしますが、マケドニアから引き連れてきた精鋭部隊が、長引く戦いですっかり不満をつのらせ、もう何が何でも郷里に帰りたい、と言って反乱寸前になります。それで、かれアレクサンドロス大王は、不承不承に兵

士たちとともに、バグダッドに引き返して、そこで死にます。その最後については、バグダッドに一日も早く帰りたかった側近の部下によって、一服盛られたという説もあります。

アレクサンドロス大王は、それまでも近従によって何度も、刺されたり、毒を盛られたりしていますから、それは必ずしも荒唐無稽な説ではありません。また、東征する地でアレクサンドロス大王は、かれの高度な政治的テクニックからペルシア方式を採用し、普遍性をつくることには成功しましたが、内部に反乱要因を抱えることになってしまったわけです。

要するに、アレクサンドロス大王の「普遍政治の概念」からいうと、マケドニアやギリシアが言っている「ヌースの普遍性」などというのは、実際には普遍でも何でもなくて、かれがよく熟知している「マケドニア主義」「ギリシア主義」の固陋きわまる墮落にしかすぎないわけです。やはりそれは、「ペルシア方式」を取り入れて、お互いに結婚をする通婚の形を取って自他交通を図らざるをえない。アレクサンドロス大王が催した、自分とペルシア王女との大結婚式というのは、東西を混淆する大宴会であって、それは「ヘレニズム帝国」の形成の生理的基礎になるんですね。

アレクサンドロス大王自身は、三人の王后をペルシアから迎えることによって、東西混淆を図っています。東西文明の混淆というのは、古代世界史の一大価値転換です。ヘロドトスの『ヒストリアイ』が「驚異の念」を以って、しかと見届けた東西相分れた後の、その後の価値再同化の通婚こそが、古代世界史のとどのつまりの価値同化なわけです。それは、今日の時代にいたるまで、連綿とつづいている大問題です。この本も、そのために書かれています、

「ヘレニズム世界帝国」に即して言うと、リアルな実際問題として、結婚や生殖の問題も含めて、人種的に混淆しなければ、本当の普遍帝国（世界帝国）はできっこない。アレクサンドロス大王は、それを実際にやろうとしましたが、かれの志は必ずしも旧弊で保守的なマケドニアの人たちに理解され、受容されたわけのものではなかった。それでひょっとすると、アレクサンドロス大王は近臣たちに一服盛られて頓死してしまい、「ヘレニズム世界」化はそこで、かれにとってはすこぶる不本意に終わらせられてしまいます。

マケドニアというのは山国で、元来がひどい固陋・旧弊の民なんです。「ヌース」でギリシア文明的に開けているどころの話ではない。アレクサンドロス大王の父親のフィリッポス二世は、残虐無比の王でして、有名なマケドニア溪で、腹が減っている部下に対して、飯が食いたければ、前へどんどん進んで行け、そうすればメシにありつける（笑）というわけです。山国の命知らずの軍隊が、飯のためだけに、次から次へと前へ前へと乱暴狼籍の限りをほしいままにしながら、進軍していく。いわゆる「進メ、進メ、イザ進メ」というわけでね。このフィリッポス戦法は、当時においては、前代未聞の革命的な戦法の発明であって、なにしろ兵士としては、メシにありつけるわけですから、次から次へと大々前進あるのみになります（笑）。

そういう軍隊の先頭に立っていたアレクサンドロス大王が、インドまで前へ前へと休みなく進んで行くわけです。マケドニアは、そういう山国の前進あるのみの文明ですから、アレクサンドロス大王の世界帝国が「ペルシア方式」をどしどし取り入れてゆくことに、かれの直属の部下であったマケドニアの傭兵は、とうてい耐えられなかった。そういう不満が内部を引っ張ったんです。このことは、きちんと記憶しておく必要があります。

わたしに言わせれば、「世界帝国論」としての古代の解析問題は、オリエントとオキシデントとの両方を含めて、この一点に集約されますから、ヘロドトス以来、西洋史学で一番重要視されてきた「ポリス国家」の問題というのは、歴史をちょっと浮かしてひん曲げてしまっているわけのものにしか過ぎません。そこからたまたま調子づいて、西洋中心主義文明は、現在のようにグローバルになり、ブッシュのイラク戦争まで来てしまいましたが、わたしは、この西洋中心主義文明は、ここで必ずや一巻の終わりになるだろう、と思っています。天下の本道のほうは、「世界帝国」だと思います。

6 マルクスの「ギリシア幻想」

アレクサンドロス大王の「ヘレニズム」帝国の次に来る世界帝国は、「ローマ世界帝国」です。くりかえして言えば、西洋史はすでに古代史のこのところで、「ヌースの文明」といわれたポリス都市国家のロジックでは全く訳が分からなくなっているけれども、古典古代文明が「明晰なヌースの文明」だなんていうのは、わたしに言わせれば、ただセンチメンタルなノスタルジアでしかありません。

この問題は、わたしの本の第Ⅲ巻の主題ですので、そこで詳しく書いています。どういうことかという、ポリス国家というのは、アテネで昔からみながその実態をよく心得ていたように、奴隷制で家父長制的な小規模なフェイス・トゥ・フェイスの政治的共同体国家ですから、このことを抜きにした古代ギリシア文明論というのは、バカバカしい「幻想」なんです。

今日の三木亘さんのお話で、その「幻想」を、みなさんが頭からすっかり振るい落としてくださるといいと思いますが、アテネ・ポリス民主主義では少なくとも成人男性だけが市民なんです。女性は市民ではありません。奴隷以下です。それは、これからお話するディオニューソスに関係している重要なことなんです。

市民権が男性だけに与えられていたのが、ポリス民主主義国家です。アレクサンドロス大王の「世界帝国」みたいな「普遍国家」というものを作る原理そのものを、ポリス国家はもともとから持ちあわせていないんです。アテネはいちばん大きいポリス国家ですが、その人口は 20 万人くらいです。ものすごく小さいんですよ。ここの藤沢市の人口だけでも 36 万人ですよ（笑）。ものごとはいつも具体的に論じなければならない。フェイス・トゥ・フェイスの社会ですね。みんな「ヤア」「ヤア」といったようなものです（笑）。そういう小さいポリス国家が、世界がどうだこうだというのは、他愛ないお伽噺です。ここ

の藤沢市が、藤沢市の中に全部世界があると言ったって、信じる者なんているはずないんですから。アテネ民主主義国家などよりもっと大規模な、地方自治体なんですよ。そういうレベルでの話です。そういう小さなポリス国家に、エーゲ海文明が入ってきます。

奴隷制の基礎というのは、小土地所有制度にあります。土地の地主さんがいるんです。耕作地主ですが。これがつまり、戦士の種になる「市民」なんですね。アテネというと、とても開かれた街のように思い勝ちですが、実は、その九割が農耕地帯です。そのアッチカ地方と呼ばれた農耕地帯で、地主さんが自耕作の農業を日々に営んでいた。一方では、アテネが、東地中海上の港町だということが、とても重要です。なぜかというと、エーゲ海で海上交易をやって、無敵の世界艦隊を持っていたのが、アテネの最大の自慢の種だったんです。ですから、アテネは、片方の足をアッチカの農耕地帯に置いています。地中海の覇権国家にアテネが昇り詰めていく時の前進力は、エーゲ海での海上交易に関わる方のものなんです。

海上交易ですから、そこには先ず、船を持っている「異国人」がいて、かれら「非ギリシア人」が、交易を全部取り仕切っていた。そのうちに、かれらはもっと街の中に入ってきて、今度は両替商が出てきます。「両替商」はみんな机を持っていて、その机を「バンマ」と言いますが、それが現在の銀行 (bank) の語源です。「両替商」をやっているのは、「ニグロ」でした。異国人は市民権を持っていません、まして黒人＝ニグロにおいておや。つまり、市民権を持たない異国人が、こうしてアテネが生きてゆく上での命の綱である外国交易を、すべて一手に取り仕切っていた。不可思議とも言える逆説的な構造で、ポリス都市国家は成していた。

市民権は、アッチカの小土地所有者である農民戦士が独り握りしめていて、絶対に手放そうとはしない。海上貿易の担い手である異国人や黒人に市民権を認めるようなことは、ポリス市民共同体国家にとっては、絶対にありえない。だけど、奴隷制の市民共同体なのだから、それが当たり前になるとは必ずしも言えない。現に、ローマ帝国は、征服した帝国内の異国人にもどしどし「ローマ市民権」を拡大・授与しています。これが、ローマ市民共同体が「世界帝国」へと拡張していった、最大の秘密です。

アテネ・デモクラシーというのは、「戦士共同体」の市民国家であったというのが、構造的理解のためのポイントです。しかし、生活は実際には、市民権を持っていない、多くの場合には裕福な異国人や黒人に全く依存していた。そういう独特な内的矛盾を、古典古代ギリシア・ポリス都市国家は深く抱え込んでいた。それが、アテネ国家の真相なんです。このことは、この本でも詳しく書いていますが、わたしは、マルクスができなかった古代ポリス国家に対する批判的分析をここで初めてやった、と生意気に自負しているわけです。だから、マルクスの欠を補うつもりで、この本を書いたのです。なにしろ、わたしから言わせれば、マルクスはこの点では、ヘーゲル的であって、かれヘーゲルの「ギリシア幻想」を無邪気にも共にして生きている。

三木亘さんもおっしゃっていましたが、マルクスは「古代のギリシア幻想」が大好きなんです。要するに、無垢なる少年期への止みがたいノスタルジアです。その気持ちは、わたしにもよく分かる。古代ギリシアは、雨があまり降らずに、いつも明るく、彫塑的なよく見えるかたちで、燦々たる太陽の下にくっきりと浮かび上がっている文明であり、ポリスと言っても、隣り近所と言っていいくらいに、海峡の狭い空間の上に「フェイス・トゥ・フェイス」の打てば響くお国柄ですから、それに憧れたマルクスの気持ちも、よくわかります。

今でも、パルテノンを一目見れば、無垢なる人類の時代があったんだと、東西を問わずに誰しも思わざるを得ないところがあります。ノスタルジーを強く感じると思います。マルクスは、かれの唯物史観なるものを、古代ギリシア社会の批判的分析には応用していませんから、本当のことをよくわかってないんですよ（笑）。ディオニューソスの声を天の声として一斉に（共同体幻想として）聞き取る否や、山へかけ上がって乱痴気しながら生肉を喰らうオンナの気持ちが、チットも分からない（笑）。女の気持ちが分からなけりゃ、世界史なんて絶対に分かりません（笑）。

マルクスの「世界史論」というのは、若い時代（1848年）の『共産党宣言』からしてそうですが、「ローマ帝国」から始まります。ローマ帝国が「両階級の共倒れ」の世界史的闘争の中で、いかにして消滅していったか、というところから、世界史の全部を考え始めるんです。

これは非常に大事な視点でして、わたしたちは、現代世界においても、この「両階級の共倒れ」の中において、三木亘さんのおっしゃるように、これで「人類史は終わり」というところにまで来ているわけです。しかし、たとえば、〈パクス・アメリカーナ〉の世界史的没落というかたちでイラク戦争は終わるだろう、とわたしがいくら言っても、去年は誰もそのことのリアリティを信じてくれませんでした。今はブッシュも罷めざるを得ない状況に立ちいたっているじゃないですか。そこに人類史の希望が、逆にあるわけです。しかし、〈主体〉が立たないということを、もしも前提にせざるをえないならば、これで、人類史は本当に終わりなんです。だから、この本のタイトルである〈主体のユリシーズ〉の絶対的必要性が出てくるのです。

七年くらい前に、三木亘さんや他の仲間と一緒に、三年間くらい共同研究をやって、〈これからの世界史〉というシリーズで、十三冊の叢書を平凡社から出しました（笑）。すべていい本ばかりでしたが、全く売れませんでした（笑）。なぜ売れないかというのと、〈これからの世界史〉というのは、そもそも世界史に明日はあるのかどうかということが問題なのでして、そんな面倒くさいことを考える人間は、たとえ歴史学者にしたって、今はあまり居なかったんですよ（笑）。シリーズでいちばん最後に出たのが、三木亘さんの書いた本で、先ほどもおっしゃっていた『世界史の第二ラウンドは可能か』（これからの世界史2）です。

自分たちの前途には、何の希望もチボウももうないヨ、ありえないヨ、という御詫言でから、お先真っ暗で、だれも読もうとしない(笑)。買おうとしない(笑)。わたしは、この共同研究の過程で、三木亘さんの長い、長いお話を、二回聞いていますが、今日の三木亘さんのお話なんて、ほんの短かい、短かい触りだけです(笑)。わたしたちが相手のときは、八時間休みなしでしゃべりまくりました(笑)。こちらもじっと我慢して聞いていなければならないわけですが(笑)、八時間を二回ですよ。ほんとに恐れ入っちゃったね、メモ一枚なしで、十六時間ぶっ通し(笑)。わたしにとって、高校の同級生の三木亘さんが、どれだけの学殖の持ち主かということは、さっきのお話でも、みなさんもよくおわかりのことと思いますが、三木亘さんは、わたしに言わせれば、世界有数のイスラーム学者です。けれども、日本であまりその名が聞こえないのは、論文を全部英語で書かれているからなんです。とにかく、メモ一枚なしでとうとうと十六時間話し続けられるのですから、恐れ入るほかない(笑)。だから、今日のお話なんて、ホンの簡単に短かい触りにしか過ぎない、ということをおし上げておきたいのです(笑)。

三木亘さんが、なぜ『世界史の第二ラウンドは可能か』なんていう、非常識な題名(笑)をつけたかという、それは「第一ラウンドは終わった」という共通の括りがわたしたちに出来ていて、「第二ラウンドはもう無いんだ」というのが、三木亘さんが本当に言いたいことだからです。だから、あれは売れなかったでしょ(笑)。さっきも言ったように、誰も買わないんですよ(笑)。シリーズ名は〈これからの世界史〉だけれども、明日はないんだ、第二ラウンドはもう無いんだという、お先真っ暗な物語だから。平凡社もやる気が出ないから、それで、平凡社シリーズは終わりにになりましたが、中身はとて面白い叢書なんだけどなあ(笑)。

ついでに自己宣伝しておきます。わたし自身が担当した巻は、『「日本」の原型—外ヶ浜から鬼界ヶ嶋まで』という本で、これもとてもいい本だったんだがなあ(笑)。三木亘さんの本のとんだ飛ばっちりをすっかりくらってしまって(笑)、いいだももの珍説によると、原日本の北の端は「外ヶ浜」という、ウソという名の鳥が鳴いている砂浜だったところで、それからがインコグニタの未知の土地だったというのも薄気味悪いが、そのことをよく知っている鳥が鳴いているのですからまだよいが、それもどうやらウソくさい(笑)。そして、南の端には、「鬼」の出てくる嶋の話だというんで(笑)、このいいだももという男、ひょっとすると、「日本」そのものを、この北の「外の浜」と「鬼が嶋」との間で、沈没させてしまうコンタンか、とすっかり見透されてしまって(笑)、しょうがないのかもしれないよ。わたしの本心から言えば、「原日本」が実際に沈没して亡んでしまえばいい、と昔も今も内心では思っているんですから(笑)。

いま世の中でしきりに論じられていることなんか、十年前のわたしたちの共同研究会でとっくに全部論じつくされているんですから、何もかもそこで語られ尽くされている先の話が実際に 1994 年にわかるわけですから、あの頃あれがベストセラーになっていたらな

あ（笑）と、苦勞して創った者としてはつくづく思いますね。マア、わたしたちに言わせていただければ、歴史を理解するのにぜひ必要なものは、わたしたちの秀抜きわまりない（笑）頭腦のひねりだした種明かしですよ。ウソとオニとの間に挟まれた薄いハムの一切れみたいなものなんです（笑）。そういう、三木亘さんのような歴史観を、改めてまた考えてみる必要が、今あります。

7 吉田健一の世界観

もう一つは、今日申し上げたいのは、わたしの死んだ友人の吉田健一の話です。吉田健一は、吉田茂の長男ですけれども、わたしは、かれとは文学仲間で、戦争中からの飲み友達でよく知っています。名だたる自民党総裁・首相の吉田茂は、わたしはもちろん嫌いですけれど、長男の健一は、それはそれは破天荒なすばらしい男でした。紅茶の話なんか書いていて、お好きな方も多いと思いますが、後年はだんだん練れてきて、非常に蘊蓄のある、まろやかななかにも深みのある話を幾つも書いた。

三木亘さんと同じで、学殖抜群な大学者です。かれは、ほとんどをイギリスで暮らした人ですから、英語ぺらぺら、紅茶、ブドウ酒サラサラの、向こうの大教養人なんです。彼は向こうでは、たいへんハッピーでした。それが戦時中の日本に帰らされてきて、わたしの飲み友達になった。

さっき三木亘さんがおっしゃったように、ヨーロッパが文明的になったのは、やっと18世紀になってからです。今日の日本では、浜林正夫さんがイギリス史についての最高権威ですが、代々木派に属しておられます。わたしたちの例の〈これからの世界史〉の共同研究の集まりに、お呼びしたら、ありがたいことに来てくださって、そのお話をお聞きしたことがあります。そのときにわたしは忌憚のない質問をさせていただいて、イギリスはいつ頃からいったい近代化したんですか、と聞いたら、ナントナントそれは18世紀からだ、と、浜林正夫さんはおっしゃるんです。わたしはすっかりびっくりしてしまして、14世紀あたりか、とわたしなんかは思っていたと言うと、そのころはまだ戦争の時代です、と浜林先生はシャラッとしていらっしゃる（笑）。そして見せてくださったのが、三木亘さんも挙げておられた、吉田健一の「ヨーロッパ史観（『ヨオロッパの世紀末』）」なんですよ。

14世紀というと、ヨーロッパは戦争ばかりしていました。三十年戦争では、ドイツなんか人っ子一人いなくなってしまう。そのあとにやっと、「ウェストファリア条約」ができて、それからヨーロッパ大陸から〈近代〉が始まるんですね。それまでは、戦争、戦争でお互いを殺しつくしていた。当時のヒトラーが何人も居て、とにかく殺しあいになるのがメシよりも好きなのだ、ヨーロッパ人というのは（笑）。それでは両方とも全部滅んでしまうというので（笑）、「ウェストファリア」でやっと和解をし、ヨーロッパ大陸で生きてゆくルールをお互いに取り決めた。それでやっと、「デモクラシー」と今日いわれてい

る平和な時代になった。ホントですよ、みなさん、キツネにつままれたような顔をしておられますが（笑）。

ですから、これまた、三木亘さんがおっしゃったように、「国際法」というのは、戦争のルールを決めたことが始まりなんですね。それが「平和のルール」の大元になる。この前後関係は、ゼツタイに逆にはならない。「ウェストファリア条約」以後は、ルールを決めて戦争をやろうじゃないか、ということになったんです。それだけ、と言ってよいのです（笑）が、それ一つだけでもヨーロッパとしてはタイヘンな進歩です。殺し合い好きのヨーロッパ人としては（笑）。未開民族にもよくある戦闘行為の「儀礼化」ですね。わたしに言わせれば、それはグロティウスの「海洋法」の陸上への適用なんです。

グロティウスの「国際法」が、どこで適用になるかということ、かれは陸地を越えてルールをつくった。海は、主権国家というものを作らない。作りようがない、なにしろ波の上だから（笑）。海というのは、それ自体がどこまでも陸の国境なしの「世界」だからです。グロティウスは、「海の自由」、「航行の自由」ということを言った。

日本ではそんなことは当たり前で、林子平という男がとっくの昔に居て、両国の下の水はずっと行くと、ロンドンのテムズ川まで続いている、と書いて、徳川幕府期の鎖国時代でしたから、それが、お上の怒りに触れて発禁になってしまって、版木も召し上げられてしまった。『開国始末』という本ですが、これは国を開いてゆく始末書きとしては、当然の世界観です。グロティウスと同じですよ。

グロティウスになって、「航行の自由」ということが言われ出して、世界が初めて自由になった。そうやって、戦争と平和の掟が、だんだんとグローバルなものになって、こんにちの「国際法」になってきた。そういう歴史を辿ってきている。わたしのポン友の吉田健一という人は、イギリス仕込のそういうことがよくわかっていたんです。

戦後直後、日本橋の橋の上にべたっと座って、「右や左の旦那様」とやっていた吉田健一について、そういうことを書いた人が居ないということが、わたしには不思議なんです。かれが戦後いかに解放されたかということですよ。当時すでに二十歳の徴兵適齢期にあったわたし自身も、戦争が終わって、とても解放感を感じて、すぐ『世代』という学生さんの文化運動を始めましたが、その解放感がほとぼしるんです。日本橋の上で乞食をやっていたかれには、とてもとても、わたしなんかは及びもつかなかった（笑）。

吉田首相に、おたくのご長男、日本橋で乞食やってますよ、と言うわけにもいかず、それをどういうふうにしたかの政府が収拾したか、わたしもよく覚えていないんですが、わたしが、戦争中に疎開した河上徹太郎が打ちちゃった「文学界」の揃いを全部貰い受けて、一高の国文学会の部室に収容していたのです。戦後、かれ吉田健一がやっていた文学研究の必要があって、それを吉田健坊が借りに来たりしているうちに、かれもだんだんまともになって（笑）文人に戻っていった。

吉田健一は、ヨーロッパの文化を本当にかいくぐって自分の世界観をかたちづかった。

たとえば、紅茶の飲み方ですが、お皿にこぼして飲むやり方が、どういうイギリスの女性の習慣から来ているのか、吉田健一の身にも付いているわけです。そういうふうには、自分に身に付いたところから考えるべきだろうと思います。わたしは勿体ないから、紅茶をわざわざ茶碗皿にこぼしたりすることは、絶対にしませんからね（笑）。いつまでたっても文化人になれない（笑）

今日、三木亘さんから改めて教えていただいたことを、三つの点から補足してお話しいたしましたが、そういうことを頭に入れて、また、わたしの三部作を読んでいただければ、と思います。ちょうど時間になりましたので、これで終わります。

全体討論

猪野 どうもありがとうございました。わたしのほうから、ひとこと、質問を差し上げて、休憩を挟んで討論に移りたいと思います。いいださんのこの3部作に関して、三木さんが今日どうして「世界史の中におけるギリシア幻想」というタイトルでお話くださったのか、その理由をお聞かせいただきたく思います。

三木 渡辺金一さんという一橋大学の先生で、しばらく前までは東ローマ（ビザンチン）帝国の研究を日本でただひとり国際レベルでやっていた人がおりますが、かれもわたしの考えには大賛成です。上原専禄さんのお弟子さんで、わたしよりも2つ3つ年上ですが、かれも若いときからリュックを担いで地中海あたりを歩き回っていて、実際のギリシア、東ローマの人々の暮らしやものの考え方、感じ方をよく知っています。

古代オリエント文明、ギリシア・ローマ文明、中世ヨーロッパ文明、近代ヨーロッパ文明という系譜は、19世紀産業革命以後の英独仏のヨーロッパ人が発明した世界史の理論です。そのヨーロッパが世界の覇権を握ったものですから、いつしか世界中がそれを普遍的な世界史理論として受け入れるようになってしまったわけです。日本の場合は、明治維新以後の世界史に当たるものは、ギボンだとかスウィントンだとか、ほとんどヨーロッパ人の書いたそういう理論の上に立ったもので、ヨーロッパの研究の先端をパクってきて、それをもっともらしそうに表現するのが西洋史学科の仕事だった。それは日本だけじゃなくて、世界中みんなそうだったと思います。

わたしがそういうことに気がついたのは、やはり高校の教師を長年やっておりまして、世界史なるものを自己流で教えていたからだだと思います。教えているうちに、なんかおかしいんじゃないかと思ひまして、アルプス・ピレネー以北のヨーロッパは、古代ギリシアの文献なども18世紀ごろまではおよそ知っていない。そのことから、19世紀のヨーロッパ人が世界史を偽造したと考えるようになったわけです。

先ほどの話の終わりごろに申し上げましたが、エディンバラ大学のモンゴメリ・ウィリ

アム・ワットさんの『地中海世界のイスラム』という本をご覧になれば一目瞭然です。12～13世紀頃のアラビア語からラテン語への翻訳が、ほとんどあらゆる学問の分野で行われて、それがベースになって、そのあと2、3世紀かかって、やっとその上にヨーロッパ独自のものが出せるようになった。それが産業革命、フランス革命のころです。それが実際の歴史の事実なんです。

ヨーロッパ人がそこで世界史を偽造したこと、それをひっくり返すことが、自分の仕事の中でも重要なのではないかと、ある時期から自覚的になっていったわけです。

いいだ いま、三木亘さんが、ビザンティン帝国の問題を出してくださったので、非常によかったと思います。ビザンティンのことは、わたしの本にも沢山出ていますが、今日はお話ししませんでした。要するに、ビザンティン帝国の問題というのは、「世界帝国」の概念に直して言いますと、「東ローマ帝国」の問題なんです。

わたしはマルクスの徒ですが、先ほども言いましたように、マルクス哲学の根幹は、ローマ世界帝国が両階級の闘争によって共倒れしてしまった、というところから、共倒れにならないような階級闘争におけるヘゲモニーは、世界のプロレタリアートに集約させる以外はないというところに、ポイントがあるわけです。その大筋において、わたしは今でも、マルクスを拳々服膺して（笑）やってきているわけです。

しかし、これは、マルクスの当時の知見の弱いところを含んでおりまして、マルクスがここで「ローマ帝国の没落」と言っている問題は、ギボンに倣っているわけです。ですがもっと歴史的事実に即して限定して言うと、それは「西ローマ帝国の没落」なんです。「西ローマ帝国」は、ゲルマン人オドアケルにローマを占領されて終わるんですが、ローマが占領されても、コンスタンチノーブルは占領されたわけではないんですから、マルクスが「西ローマ帝国の没落」でもって階級闘争論を組み立てたのは、大筋は外してはいないけれども、グローバルな普遍性としては、大きな欠落がある、片手落ちである、というのが、わたしの結論なんです。

「東ローマ帝国」は、三木さんもおっしゃったように、そのあとコンスタンチノーブルを中心に六百年続くわけですから、西ローマが高級で、東ローマ帝国は低級だ、というようなことは全く無いんです。逆に、東ローマ帝国が、西ローマ帝国よりも文明的にずっと高級だからローマの滅亡後も六百年間も持ったわけです。西ローマ帝国なんていうのは、フランスの内陸閉鎖型の固陋きわまる農耕国に、プラスしてけったいなキリスト教会秩序をか掛け合わせたものです。ロクなものじゃありませんよ（笑）。

先ほどの地中海世界論で言うと、地中海世界は西寄りではなくて、東寄りの文明の活力なんです。ですから、宗教的に言うと、最終的には、ギリシア正教に行くわけです。

三木亘さんの言うように、西洋は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の三教の複合で終わるわけですが、ツァーリスト・ロシアみたいなものを理解するためには、「ギリシ

ア正教」の問題を抜きにしては、語れないでしょう？ 「ギリシア正教」は、単に宗教の一分派ではなくて、世界帝国論として、西ローマが滅びたあとに、「第三帝国」という考え方が周知のように出て来る。それは、ツァーリスト・ロシア、それからトルコなんです。それを悪く運用したのが、ヒットラーの「第三帝国論」になるわけです。

「第三帝国」、つまり、西ローマ帝国が滅びたあとの世界帝国、ポリス国家とか資本制国家というように国家主義的には集約できないものをどうするのか、という問題は、わたしたちは現在まで引きずっています。〈パクス・アメリカナ〉、〈ドル・核世界帝国〉というかたちでやっているのが、今ではブッシュのイラク戦争になっているわけですから。それは、またもとの国民国家に戻ればいい、というわけには、2010年以降はなりませんから。何らかのかたちで、わたしたちは戻るところが無くなってしまっているわけですから、その時どうするのかということこそそろそろ考えなくてはならない。つまり、普遍的な世界帝国構造をどうするのか、ということこそ、考えざるを得ないんです、この今は。

現在の問題に引き直して言えば、それは、資本制世界経済というものを、イマニュエル・ウォーラーシュタイン学説として一度くぐらせたうえで、古代の世界帝国にはどういう普遍的可能性があるのかというのが、わたしの1960年代からの長い課題なんです。それには、ビザンティン帝国の問題を落とすわけにはいかない。ビザンティン帝国を滅ぼしたのは、言うまでもなくイスラーム文明なんです。そういうふうに考えれば、現在のイスラーム復興運動からもたらされている世界観的確執の問題には、深い世界史的根拠があり、たまたま近頃俄かにヒョイと出てきたものではないことが、よくわかると思います。それを付け足しておきます。

猪野 ありがとうございます。5分ほど休憩いたします。

(途中休憩)

今日はできるだけ多くの方に発言をしていただいて、講師の方に手短かに答えていただきたいと思います。私のほうから指名することはありませんので、自由にお願いいたします。

金子務 金子です。両先生のお話をたいへん面白くお聞きしました。

いわゆる世界史という概念をヨーロッパ人が考えるようになったのは、私は第一次世界大戦を契機としてだろうと思うんですが、それをお二人はどうお考えになるか、お聞きしたいと思います。つまり、H. G. ウェルズという有名なSF作家が『世界史概観』なんていう本を書いたのも第一次世界大戦のあとですし、新渡戸稲造が国際連盟の中にユネスコの前身になる知的交流委員会というのをつくって、その事務局長になりました。ご存じのとおり、新渡戸稲造は国際連盟事務局次長で、その知的交流委員会にはマリー・キュリーやアインシュタイン、さらにはギルバート・マレー、ベルクソンなど錚々たる知識人たちが

入っていて、そこで絶えず話題になっていたのが、シュペングラーの書いた『西欧の没落』のことと、これからは東洋だという話でした。

それから、H. G. ウェルズが書いた『世界史概観』の冒頭に日本のことが出てくるんです。火星のごとく遠くにある極東の国、日本の艦船が、日章旗を付けて地中海を遊弋している、という書き方をされている。つまり、アジアの果ての火星のごとく遠くにある日本という国の軍艦が、自分たちの中庭だと思っていた地中海を走航しているということに、ヨーロッパ人が動転して、世界観が変わる。そうして世界史という概念を自覚せざるを得なくなった、とわたしは思うのですが、その点をどう思われるでしょうか。

もう一つ、キリスト教とギリシア神話は、非常に折り合いが悪いですよ？ キリスト教にとってギリシア神話の神様はだいたい異端ですから、抹殺していますし、ほとんど入っていません。ところが、ぼくは先年アテネに行ったときに、世界遺産に指定されている「ダフネ教会」というところを訪ねました。ダフネというのはギリシア神話に出てくるニンフのダフネです。ご存じかもしれませんが、アポロンがダフネに恋慕した。アポロンはゼウスと同じで多情多恨ですから、ダフネを追いかけて自分のものにしようとした。しかしそれを嫌ったダフネは逃げ回って、最後には、自分の父である河の神に頼んで、月桂樹になってしまう。そのダフネの名前が教会に付いていて、向こうの人にも聞いてみたら、これは非常にまれなケースだと言っていました。

要するに、先ほどビザンチン帝国の話が出てきましたが、ビザンチン帝国というのはギリシア的な要素を持ったキリスト教文明ですよ。それが今のトルコ領、小アジアのほうにできてくるわけですが、ギリシア的なものが、キリスト教的なものの中に、どういうふうに取り込まれたがために、西ローマ帝国とは違ってビザンチン帝国は生き長らえたと言えるのか、言えないのか、ということ、いいだ先生にお伺いしたいと思います。

三澤昭 三澤と言います。非常に初歩的な質問ですが、私は若いころは歴史というものには興味がなかったんです。なぜかというと、歴史書というのは、だいたい勝った国が自分の国の都合のいいように書くものだと思っていましたから。ある年、仕事の関係でパキスタンや中国に何回か行くことがあったんですが、その時に思ったことですが、なぜ、三大文明と言われたような優れた文明が存在した国々が滅んでしまったのか、よく解らなかったんです。ああいう古代文明の栄えたところには、いろいろな文化があるわけですね。その食文化やら宗教やらが、いわゆるヨーロッパに伝わっていった。先生のお話によると、当時は後進国だったヨーロッパの諸国は、それらの文明から、知識と技術の恩恵を受けて発展してきた筈なのに、尊敬もされず、かつての文明の栄えた国が、エジプトもそうですし、インド、パキスタンもそうですし、中国もそうですが、一時的にヨーロッパの国の植民地になった。イラン、イラクあたりも、昔は植民地だったし、今でも、いろんな意味で虐げられている。昔は文化が発達していい国だったはずなのに、どうしてだめになったの

か、ヨーロッパに蹂躪されているのか、解らないのですが、そののちを教えてください。

猪野 お二人のご質問に手短かに答えていただいて、次の質問に移りたいと思います。

いいだ 金子務さんから、二つのご質問をいただきましたが、金子務さんは、ものすごく学識のある方ですから、わたしとしては、非常に悠長な、間延びのしたことしか答えられないのですが、最初の、ヨーロッパ人にとっての世界史意識というものが、いつ、どういうことを考えて設定されたのか、ということですが、金子務さんは、それは第一次世界大戦以後であろう、と言われましたが、わたしも全く同様に考えています。

もう少し敷衍して言いますと、これはつまり、20世紀的現代史の中心問題ですから、或る意味では、世界史意識がヨーロッパ人ならびにその影響下にあるわたしたちに出てきたのは、同時代意識であり、現代意識である、という側面を色濃く持っていると思います。そのときのモメントは、金子務さんがおっしゃったように、オズワルド・シュペングラーの『西欧の没落』だと思っんです。

シュペングラーについては、その後もいろいろコメントが出されていますが、わたしは相変わらず非常に高く買っています。ヨーロッパでは、『西洋の没落』ブームが去ったあとは、シュペングラーという素人の歴史家に対しては、比較的批判的な意見の学者が多いんですが、学者の言うことはあまり当てになりません（笑）。なにしろ、自分だけの狭い業界の都合のことばかりを言うのですから（笑）、西欧人は「西欧の没落」のことを、シュペングラーのように、朝から晩まで考えることに、とても堪えられないですよ（笑）。なにしろ自分が没落するヨ、という気味の悪い話ですからね（笑）。

シュペングラーというのは、マア、そういう意味では「雑学者」なんですが、かれの有名な「有機体説」というのは、先ほど三木亘さんがいみじくも触れられた、イブン・ハルドゥーンの「生物モデル」と同じことです。「生物有機体モデル」で世界史を考えるということは、「無機物モデル」とは違って、成長して、衰弱して、滅びるという、有機体の栄枯盛衰を歴史に当てはめますから、その長所は、栄枯盛衰というものが、有機体的循環として、歴史に入ってくることだ、と思います。わたしは、イブン・ハルドゥーンの本『歴史の研究』を何度読んだかわからないほどですが、現在はコンパクトに岩波文庫に入っていますから、みなさんもぜひご一読ください。

オズワルド・シュペングラーの『西欧の没落』が、第一次世界大戦直後の「荒地」と化した大地に住んでいるヨーロッパ人に熱狂的に読まれた、必ずしも歓迎されたわけではないけれどもよく読まれたというのは、ひとえに第一次世界大戦がもたらした西欧の荒地（ウエイスト・ランド）化のせいなのでして、それが読まれざるを得ないから読まれたということは、第一次世界大戦でヨーロッパ自体が戦場になって、今言ったいわゆるウエイ

スト・ランド（荒地）化した、ということが、やはり決定的だとわたしは強く思います。

自分が作った文明が、その絶頂のところで「荒地」化してしまったんですから、どうしてもそこにヨーロッパの歴史的な没落意識が起きてこざるをえない。これも一種の「自滅」であるわけですね。「自業自得」と言ったらいいかな（笑）。これは、世界史の「同時代的な意識」なんだけれども、特にそのことがアクセントが付いて尖鋭化したのは、自分の没落の自己探求が必然化したからだ、とわたしは思うんです。

ですから、H.G. ウェルズの『世界史概観』が当時出たということは、かなりまだオプティミスティックなところがあると思いますが、これもやはり危機における文明の再考意識の一種であったというふうに、大雑把には言えると思います。

二つ目のご質問ですが、金子務さんは、キリスト教と古代ギリシア神話（三木亘さんの言われる「ギリシアの幻想」を含めた「ギリシア神話」）との着きが必ずしもよくないということ、珍しい例として「ダフネ教会」のことをおっしゃいましたが、わたしは、ビザンティン文明というのは、西ローマ帝国よりも強力に生き延びた、地中海世界の東の方の偉大な文明であって、その基軸は「ギリシア正教」ですから、ギリシアとは着きが悪いどころか、「ギリシア」と「キリスト教」との文明的混和・混淆で歴史的な生命力を持っている、とかねてから思いますから、これは着きをよくしたほうの好例と言える、と思います。

もう一つの事例として、挙げられるのは、中世ヨーロッパにおけるキリスト教世界の統合のことです。前半と後半で、キリスト教世界を統合するイデオロギーは、若干違っていますけれども、前半には、アウグスティヌスの神学を軸にして、キリスト教世界を統合したときに取り入れたのが、プラトニズムなんです。ネオ・プラトニズムです。世俗世界のこととは言えないので、形而上学的・神学的にだけ天上世界を統合するわけにはいきませんから、アウグスティヌスは、プラトニズムを取り入れたんだ、と思うんです。ネオ・プラトニズムとアウグスティヌス神学とが習合関係にあるというのは、非常に大きなことです。それは、或る意味で、キリスト教神学の要めのところと、ギリシア哲学・ギリシア神話とが入った習合形態なわけですから、それはやはり文明的に大交合であった、と考えられます。

後半は、神学的にはトーマス・アクィナスなんです。アクィナスがその時くっつけたのは、かれ自身の選択ですが、「アリストテレス哲学」なんです。ギリシア哲学というのは、わたしの本でも書いておりますように、プラトニズムが古代ギリシア哲学を横奪したインチキ哲学でして、なにしろ、ニーチェの言うソクラテス以後の墮落形態ですから、それ自体が歴史の贗造なのであって、そのプラトニズム的な偽造のポイントは、タレス以来の〈ミレトス派自然哲学〉の排除・没却であるわけですが、それにしても、アリストテレス哲学は、腹のなかでは、師匠のプラトニズムのイデア主義については、それこそ片腹痛く思っていますから、かれの「フュジカ」＝「自然学」で、完全にプラトンが排除・追放したタレス以来の「ミレトス派自然哲学」を、完全に復権させてしまった。その自然学

=フュジカと「メタ・タ・フュジカ」つまり「形而上学」としてアマルガンしたのが「アリストテレス哲学」であるので、それとトーマス・アクィナス神学とが、中世ヨーロッパの後期にくっついて、高級なイデオロギーで統一した習合がなされた。このように、近代へと転形してゆく時が近づいてくると、オッカムの「ノミナリズム（唯名論）」が出てきて、「オッカムの剃刀」で切断が入るんだらう、とわたしは思います。これで、近代哲学の普遍的イデオロギーの歴史的大前提が出揃ったわけです。

プラトン、アリストテレスの哲学と、アウグスティヌス、アクィナスの神学とのあいだに、習合的結合関係があった。むしろそうした習合的結合関係のほうが、中世世界では全統合的なイデオロギーとして作用したのではないか、と思うわけです。とにかく、この習合で世界史の古代と中世とが不可分に結合して、近代世界の思想的な大前提が出来上がるわけです。付け加えますと、そのことを可能にした力というのは、西ローマ帝国の没落、ルネッサンスという周知の歴史過程において、一度滅びた古代ギリシア文明を、古典性と幻想性とをともに含めたかたちで保存した「アラブ世界」であった、ということが大事なところですよ。

ここで「三木亘史観」がもののみごとに生きてくるわけですが、やはり 30 度線というのは歴史の本道であり、ピレネー以南でヨーロッパを区切れば、ヨーロッパは地中海世界に属する。そして、地中海世界における伝統は、まさに「アラブ」ですから、アラブと一緒にになったギリシア、というかたちの中で、アラブがずっとプラトン・アリストテレス哲学を保存した。特にアリストテレス体系の保存の方はそうですが、そのことの世界思想史的寄与は絶大なものです。ですから、後にルネッサンスで蘇ってきた「アリストテレス主義」というのは、「アラブ化したアリストテレス」なんです。これはとても大事な点ですよ。

アラブの学識というのは、単にアラブ的に訛ったというのではなくて、先ほど三木亘さんが二人のアラブ学者の名前を挙げられましたが、そのアラブ学者たちの古典古代的なアリストテレス哲学のエッセンスの保存のしかた、時代の新機軸を出したその思考法に、類い稀なものがありますから、アラブ経由でもって、ヨーロッパ中世におけるギリシア思想とキリスト教思想の統合が可能になった、と総括できるだらう、と思います。

金子 ギリシア的思想とキリスト教的思想の癒着の問題というのは、今、いいだ先生が説明してくださったとおりだと思いますが、私が言いたいのは、ギリシア神話的なもの、つまり民衆のあいだで広まっているいろいろな信仰があって、例えばデルフォイの神託もそうですが、そういうものがキリスト教が入ってきてから没落していくわけです。神託は許されないと行って。そういったところで、非常に相性が悪い。

確かに、アウグスティヌスのプラトニズムであるとか、トマス・アクィナスのアリストテリズムであるとかは、むしろ今まで巷談哲学の中でも言われてきたことですよし、正統的な解釈としても、12 世紀ルネッサンスにヨーロッパが、トレドとかパレルモとかイスタン

ブルでもって、イスラーム思想を介してギリシア的思想あるいはギリシア的文献を再発掘していくということは、ここ 20 年くらいやられてきているわけです。

そういうことはあるにしても、いいだ先生もおっしゃっていたダヴィンチ・コードでも話題になっている問題は、キリスト教文明に抹殺されたものの中にはかなり深い豊かなものがあつたのではないかということです。例えば地母神の信仰ですとか。そういったものの中からギリシア神話だって出てきているわけですから、いろんな問題に全部関係があるわけで、そういうものが全部キリスト教文明の中で消されていった、あるいは非常に整理されてしまったという問題について、ダヴィンチ・コードの話に触れて喚起しておいたほうがいいんじゃないかなというふうに思ったものですから、申し上げました。

いいだ いま金子務さんのおっしゃたことに、まったく異論は、わたしとしては無いのですが、それに便乗して、少し補足させていただきますと、中世のキリスト教のイデオロギー支配で、或る意味では隠匿されるし、抹殺されるし、真っ白に漂白されてしまうなかで、キリスト教イデオロギーに染め抜かれなくて、差し当たりは、そこからはみ出るかたちで、深いものを、民衆が「ダヴィンチ・コード」的に代々保持している。イエスは人間であつて、マグダラのマリアがそのかみさんで、二人はどこかに移り住んで幸福に暮らしましたトサ、というレジェンドが続く。そういう問題が一つある、と思います。

もう一つ、やはりわたしが、この 8000 年の歴史叙述の中でいちばん強調して書いておりますように、「古代ギリシアの幻想」が出てくる以前に、ミノア・ミュケーナイ文明の 6000 年というのが在ったわけです。そこは「母系社会」ですから、どうしたって、その神様は女の神様で、地母神または海母神だった、と思うんです。そういった女神たちはいったい、古典古代ギリシ文明の「ヌースの制覇」とともに、どこへ行ってしまったのか。古代ヨーロッパ文明も、もともとは母権制で女神の世界ですから、地中海だけでなく、はるかに古いプレ文明は全部、地母神、女神信仰です。その問題は、わたしはとても大事なことだと思ひます。

古代日本で言えば、伊勢神宮の天照女神信仰の問題です。それも女神礼拝と太陽仰礼拝とのアマルガムです。毎朝、柏手をバンバンバンと三度打つ（笑）。

それから、三澤昭さんがご質問のなかで非常にポイントを突いた問題を、出されましたが、わたしたちは、西暦で数えての 2006 年にいま住んでおりますが、ちょっと歴史の尺度を変えると、明治維新以来のヨーロッパから輸入された近代化過程の中で、もちろんのこと利口になった面も、開けた面も、あるけれども、同時にそうした「文明開化」の中で失ってしまった面も当然あるわけです。それは、三澤昭さんの言いかたで言えば、そういう古い文明が幾つも在って、しかも、それがかつては非常に栄えたのに、ヨーロッパ文明に続く世界植民地化の中で全部滅ぼされていってしまった、という大問題です。

事実確認は、三澤昭さんのおっしゃる通りですが、それはなぜなのか、とその原因を問

われると、わたしも簡単には答えられません、「ヨーロッパ文明」というのは、根本の性格において、「戦争の文明」、「殺戮の文明」である、ということが言えます。

それはけっして、並大抵の殺戮ではない。ヒトラー・ナチズムのファシズムというのは、ヨーロッパの歴史の「鬼っ子」ではけっして無くて、わたしは、あれはヨーロッパ文明の正嫡だと思っています。本当の秘訣だと考えれば、やはり、「アウシュヴィッツの問題」に行き着きます。「アウシュヴィッツ」は、ユダヤ人の完全な大量虐殺、ジェノサイドですからね。

だから、わたしは、ヨーロッパ文明の世界支配のイデオロギーというのは、「ジェノサイド」だ、と強く思います。ユダヤ人というかたちで、ヒトラー的な変称で勝利をたまたま得た場合には、非常に奇形的で奇妙に見えるけれども、イラク戦争のやり方なんかを見ていると、やはり「ジェノサイド文明」なんじゃないですかね。そして、それについて、いまだに何の痛みも反省も感じないというのは、ブッシュは単に西部のカウボーイ式に暗愚・愚鈍・偏見そのものなだけではなくて、非常に卑劣きわまりない西洋文明人なんだ、と思いますよ。わたしは本当に、あの人たちは「人類の敵」だ、と本気で思って憎んでいますから、それにべったりと追随している小泉純一郎なんかも、そいつらのサンチョ・パンサだと思っから、激烈に大嫌いなんですけど（笑）。

「ヨーロッパ文明」がそういうふうになるのは、基本的にそれが「ジェノサイド思想の文明」だからなんだ、と思います。わたしたちは、かれらから、「基本的人権」も「民主主義」も教わったし、「科学・技術」も教わったし、いろんな美味しいものも知りましたが、そういうものを頭から否定するのではなく、かれらが人類文明史に貢献した面を認めることにわたしはやぶさかでは全くありませんが、基本的には「大量殺戮」に価値意識をもった得意満面の「高慢文明」なのではないのか、と強く今でも思っています。人類文明史の観点からみると、この〈近代〉の五世紀間は、最悪な五世紀間だった、と強く思っています。

三木 今のいいださんの話に続けて、三澤さんのおっしゃった問題に対する考えを申し述べます。これは今日お配りしたプリントのどこかに書いてありますが、マクロに申しまして、18世紀までは世界は商業社会でした。商業社会というのは、ウィン・ウィンでお互いに得をする社会です。しかし、産業革命以降は商品化社会、別な言い方で工業社会です。これは、不特定多数に対して商品売りつける。大量生産すれば、その原料を暴力的に買いつけるという、ひどく攻撃的な経済のあり方が、いわゆる産業革命以後、いまに至るまで展開しているわけです。これは、ウィン・ウィンの有無相通じてお互いに得するんじゃないで、どこかが豊かになって、どこかを貧乏にする。

大雑把に言って、世界における商業のあり方が、いわゆる先進国がいつも買い手市場であり、同時に工業生産物に関しては売り手市場であると。不均衡なんです。どちらも先進

国が得をし、後進国が損をする。客観的には世界的に搾取が行われている。それで、かつて非常に文明の栄えた地域の人たちが貧乏にさせられていった。今もさせられている。第二次世界大戦後のアジア・アフリカ・ラテンアメリカの解放運動は、それに対する抵抗であって、いまだ課題は果たし終わっていない。

いわゆる産業革命が起こった 1800 年ごろの、ヨーロッパと中東の人口の都市化率を、プリンストン大学の教授だったレバノン系キリスト教徒のイーサウィさんが調べていたのを、むかし読んだ記憶がありますが、中東の都市化率が人口の 10%程度、ヨーロッパが 7%程度で、中東のほうがより都市化した豊かな商業社会だった。

ハミルトン・ギブさんがどこかに書いたことですが、17 世紀ごろまでは、オスマン帝国に境を接しているウィーンを都としたハプスブルグ帝国では、ヨーロッパ人キリスト教徒の住民がオスマン帝国へ移住することが非常に多かった。オスマン帝国のほうが文明度が高いので、住み心地がよかったわけです。

近代以前の世界の地域の中で一番豊かだったのは、わたしはインドだと思います。あるいはインドと東南アジアです。生態学的条件も世界でズバ抜けていいんです。古代から 18 世紀ごろまでは、地域間貿易などは工業社会、商品化社会とは違った意味で不均衡でした。なぜかという、インド東南アジア方面はとにかく豊かなので、西の古代ローマ帝国のインド洋方面との貿易はつねに入超で、プトレマイオスがどこかに書いていますが、5000 万セステルティくらい赤字になって、けっきょく貨幣で支払うしかない。

それから、中世くらいになると、胡椒をはじめとする香辛料貿易が始まりますが、これも当然西の方が入超です。そのころヨーロッパが輸出できるものは毛織物くらいで、そんなものをインドに持っていっても誰も買いませんから、どうしたかという、アウグスブルクの近所に銀の鉱山が開発されたので、けっきょく銀で支払ったわけです。インドから東の方は貨幣は銀本位ですから。

これは別にインド方面が搾取したわけではなく、とにかくヨーロッパがあまりに貧しくて、インド方面から輸入したいものがいっぱいあるから、結果的にそうなっただけです。それに対する反撃が、16 世紀にコロンブス以降に起きるわけですが、それはエマニエル・トッドさんがどこかで書いていますが、失敗します。それでヨーロッパでは、改めて植民地化やもっと暴力的手段を使うことによって巻き返していく。それから産業革命以後のあり方になっていくわけです。

三澤さんの問題に関して、わたしはそう考えます。

それから、金子さんのいわれた、キリスト教以前のギリシアの神々や守護神の問題ですが、18 世紀以後にヨーロッパが古代ギリシアを問題にするようになったのは、古代ギリシア思想は科学思想のもとであるという考えからです。

ところが、金子さんもたぶんよくご存じの科学史家の村上陽一郎さんが紹介していますが、コペルニクスの理論も、ケプラーの理論もニュートンのプリンピキアでさえ、みんな

神学理論であるというのが、今のヨーロッパの科学史の認識のようです。いわばキリスト教が科学理論を生み出したということです。従来のヨーロッパ史だと、キリスト教が科学を弾圧したという理解が多かったわけですが、村上さんが紹介している話は、むしろ神学理論がけっきょくは一種の科学理論として受け入れられたとしている。

それから、ギリシアの地母神に関しては、一つには、ヨーロッパキリスト教の地域では地母神信仰がマリア崇拝に化けたということがあると思います。中東のキリスト教は、インド洋貿易の中心である南インド南端西岸のケーララにも非常に早い時期から広まっていますが、ケーララにいくと、マリア像がいたるところにあります。これはもともとは中東を中心とした地母神信仰の一種の変換形態だと思います。

地母神に限らず、地中海にしても中東にしてもいろいろな神々があったわけで、それに対してキリスト教もイスラム教も、言ってみれば上から降りかかっていったという面があります。キリスト教に関して言えば、一番はっきりしているのは、コンスタンティヌスがキリスト教を初めて公認して、テオドシウスの代になるとキリスト教を国教化した。ローマ帝国という国家が民衆にキリスト教を上から押しつけていった。そのことが、それまで存在していたさまざまな神々を押し殺すか、あるいはどこか見えないところに追いやられるかしたんだと思います。イスラム教も、正統カリフの時代からウマイヤ朝、アッバース朝時代と、大征服によってアラブの大帝国が成立するわけで、征服者たちの宗教がイスラム教だったわけですから、これもいわば上から降りそそいできたものです。

ただ、キリスト教とイスラム教に関する大きな違いは、キリスト教には布教という制度がありますが、イスラム教にはありません。今もわたしの家に性懲りもなくパンフレットを送りつけてくるキリスト教会の人がいますが、キリスト教はある意味でたいへん押しつけがましい。

ところがイスラム教は、いま中東を中心として世界中に12億か13億のイスラム教徒がいますが、これは宣教師みたいな人がいて広めていったわけではなく、自然に広まっていったんです。でも、イスラム教にしても大帝国の支配層の宗教ですから、上から下々へ広まっていったことには変わりはありません。そのことによって、ちまたに存在していたさまざまな神々が隠されたり消えていったりしました。

しかし、11世紀ごろになると、イスラム教が広がっていった地域では、それまでの上から広がっていったイスラム教に対して、スーフィズム、神秘主義教団などが出てきて、いわば下からの巻き返しのようなことが起こり、各地のいろいろな聖者みたいなものが設定されていった。たとえば、エジプトのカイロからアレキサンドリアに行く途中にあるタンターという町は、神秘主義教団の拠点ですが、調べてみると、そこはイスラム教が広がる以前はある宗教の聖地だった。

日本の場合でも、高野山なんかはもともと死者を葬る聖地でした。空海はそういうところを見つけて、そこに金剛峯寺を建てた。そういうふうには、大宗教以前に人々のあいだに

自ずと存在した聖地を、上から降りかかっていった大宗教がとらえていったりすることもある。

このことに関連した話ですが、ポール・ヴァレリーが、ヘレニズムとヘブライズムを経験したのがヨーロッパだ、と有名な格言めいたことをどこかで書いていますが、わたしは漠然とヘレニズムはギリシア科学思想みたいなもので、ヘブライズムは端的にキリスト教のことだと思っていました。かつてアラブ医学についてなにがしか勉強して書いたことがあります。アラブ医学には、アラビア語でいう「ルーフ（息）」が生き物の生命を一番争うという考え方、一種の生命理論のようなものがありまして、アリストテレスが動物論か何かで同じような意味のことを書いていまして、東地中海の根っこのほうを取り上げてみると、ヘレニズムもヘブライズムも同じものじゃないかと感じたことがありまして、それを書いたんですが、今日はその資料は持ってきていません。

それから、世界史という概念をヨーロッパ人が持ったのは第一次世界大戦後ではないか、という金子さんの最初の質問についてですが、先ほどいいださんがおっしゃいましたが、やはり第一次世界大戦後にヨーロッパが廃墟になったということが大きく影響していると思います。

今日申し上げたモンゴメリ・ウィリアム・ワットさんの『地中海世界のイスラム』（筑摩叢書）という本に、わたしは 20～30 頁くらい長々と解説を書いております。その中でも言っていますが、シュペングラー以後、ドーソン、サザーン、トインビー、それからアンリ・ピレンヌなどの一種の世界史理論みたいなものがヨーロッパでは出てきます。

ジャネット・アブー・ルゴドさんが『13 世紀の世界史』（岩波書店）という本の中で書いていて、非常に実感がありましたが、第二次世界大戦後に日本が廃墟になって、ヨーロッパも廃墟になって、アメリカだけが一人でがっちり儲けたと。それで、アメリカの物質文明が世界中の人間にとって輝いて見えた。そのことが、第二次世界大戦後のアメリカの覇権を存在させた幻想を生んだという論です。

第一次世界大戦のあと、気がついてみるとヨーロッパは廃墟になっていた。わたしは平凡社から出した本『世界史の第二ラウンドは可能か』で、「ヨーロッパが自殺した」と書きました。ヨーロッパ近代文明は自己崩壊したと書いたんですが、それまでは、ヨーロッパ文明の繁栄を疑う者は、ヨーロッパ人の中にはほとんどいませんでした。

エジプトを 1880 年代に占領して、最初の植民地官僚になったイヴェリン・ベアリング（クローマー卿）は、自著『近代エジプト史』の中で、「文明と言え、それはヨーロッパである」。ヨーロッパ以外に文明はないんだと言っています。同じことを経済学者のスタンリー・ジェヴォンズもどこかに書いています。産業革命から第一次世界大戦までは、ヨーロッパ自体が世界文明であって、それ以外には文明はないと、非常に奢り高ぶったものの考え方です。それを裏づけるものが、近代ヨーロッパの場合は中世ヨーロッパで、その前はギリシア・ローマで、その前は古代オリエントだと、遡っていく世界史像なんです。

ところが、半年くらいで終わるだろうと思っていた第一次世界大戦が四年間かかって、やっと戦争が終わって気がついてみたら、ヨーロッパ全土が廃墟になっていた。ヨーロッパは自殺したわけです。そこでショックを受けて、初めてヨーロッパの人たちが自分自身を客体化していく。そういう世界史の中から、アンヌ・ピレンヌのようにイスラムの役割を強調する人なんかが出てきて、そこから始まっていくということだと思います。このことは、さっき申し上げたワットの本の解説の中に書いています。

いいだ 三澤昭さんのご質問に対するわたしの答えを、すこし補足させていただきます。ヨーロッパ文明の本質の一つに、「ジェノサイド」という絶滅戦争的思想がある、と言いたいことは、相変わらずなんですけど、いまの三木亘さんのお話を伺っていて、単に「戦争様式」だけではなく、「生産様式」にも、近代ヨーロッパの特色があるな、とつくづく思いました。それを付け加える必要がありますね。18世紀の産業革命以降の近代資本制社会における、何て言いますか、「工業化」「産業化」「合理化」社会が持っているもの、われわれの最近の経験から言えば、「フォード・システム」という問題になりますね。このことについては、今日いらしている片桐薫さんがご専門です。

「フォード・システム」の問題というのは、要するに、大量生産・大量廃棄という問題です。わたしたちは、まさにその問題の中で、現在アップアップしているわけですし、それはいわゆる「過剰な豊かさ」の問題だと思います。「過剰な豊かさ」の裏面には、AALの極度の貧困化という「二極化」の構造的問題があるわけですし、やはり、ヨーロッパ文明には、「大量虐殺」という戦争様式の問題と、プラス、「大量生産・大量廃棄」という独特の生産様式の特色がある、ということをご理解いただければ、と思います。

もう一つ、ニュートンの力学についてです。みなさんはあまり、ニュートンの本なんて読まないから、中学生の教科書に書いてあることくらいしかご存知ないだろう、と失礼ながらわたしは思いますが、わたしはわたしなりに、ニュートンをよく読んでいますので、驚くべき光景をわたしなりによく心得ております。ニュートンの自己意識そのものに即して、ありのままに見ていくと、ニュートンがやった仕事というのは、キリスト教神学の力学的証明である、と逆に考えた方がいいくらいです。また、わたしは、ニュートンの力学に、単に神学というよりは、「錬金術」と一体化した技術文明を強く感じます。

わたしのこの本の欠陥はいくつかありますが、最大の欠陥の一つは、「錬金術」について総括していないということです。そのことはもともと気がついていたんですが、これ以上は厚くできないこともあって諦めました。あとで別の本にしようと思って、研究しつづけているんですが(笑)。ご期待ください。またまた、とても分厚い本になりますよ(笑)。

バビロニア以来の「錬金術」の問題は、ケミストリー、化学の問題です。これは科学じゃないとは言えないわけですから。「錬金術」で何をつくるかということ、要するに、他の卑金属から貴金属である金をつくる。だから、「錬金術」というのは、大思想から言うと、

卑近なものを高級なものへと転化させる〈グノーシス〉の偉大な理想なのです。それが、大航海時代以降の当時の「重金主義」思想と結びついていますから、近代思想でもあるんですけれども、そういう意味でも、やはり、「錬金術」は、バビロニア以来の歴史を背負っているものとしてあるわけですし、「錬金術」については、必ず近く本を千ページくらいごく短かく書きますので、ぜひそれをみなさんはお読みください（笑）。

猪野 もう質問にリプライする時間がないので、このへんで終わりにしたいのですが、まだ発言されたい方もいらっしゃるようですので、言いたいことを言って帰るということにしてはどうでしょうか。批判でもなんでもかまいませんので、2分くらいでお願いします。

清水邦男 いいだ先生の、西欧文明はジェノサイド（大量虐殺）を引き起こすような性格を本質として持っているのではないかという見方には、わたしも、まったく同感です。欧米人たちは自身は、こういう見方を認めたがりません。ヒトラーも西欧文明が生み出したものであることには間違いのないわけですが、ドイツ人だけでなく、欧米人は一般的に「ヒトラーは突然変異の例外的産物であり、西欧文明の本質とは無関係」と考えたがっています。ジェノサイドを引き起こす精神（心理）は欧米の基本的な思考形式である二分論と深く通底していることを認めたくないからだと思います。二分論的思考は、科学を生み、技術を発展させ、強大な経済力と軍事力を発展させ、西欧諸国が世界に覇権的地位を確立することを可能にしてくれた根源的な原動力だからです。欧米人の非欧米人に対する優越意識の基盤でもあるわけですから、それがジェノサイドやヒトラーと通底していると認めることは、欧米人の優越意識、自尊心を根底からゆるがすことになるからだろうと考えています。

先ほどキリスト教と近代科学の相関性についてのお話がありましたが、キリスト教的な善悪の二分論が、近代科学の二分論的思考を生み出したのか、それとも、二分論的思考から善悪二分論にいたったのか、わたしにはわかりませんが、理性的な二分論的思考が西欧の近代科学技術を生み出した根元的な思想であることは間違いありません。対象を二分するという思考は、真実と虚偽という分け方となり、虚偽は否定されなければなりません。これが、現実の人間社会の中では善悪論になり、善人悪人論になり、悪人と断定した以上は悪は潰さなくてはならないと考えてしまう。これがジェノサイドをやむを得ないことと、無意識的に考えてしまうことにつながるのではないかと思います。ジェノサイドと二分論的思考の共通性を認めたくないのは、西欧文明の文化的盲点だと思います。

なぜならば、理性的な二分論的思考が素晴らしい世界史的な科学文明を生み出したという誇りが強いので、どうしても二分論的思考が持つ欠陥（ジェノサイド的断罪）に直面しても、じゃあ、近代科学の二分論的思考を否定するのか、捨てるのか、となると、それは考えられない。ジェノサイドは「例外的な悪人の犯行」ということにして、自ら納得し、目

をつぶってしまうのだらうと思います。欧米人としては、二分論的思考が悪意に満ちたものだと考えられません。一方、ジェノサイドは悪意そのものにほかならないから、両者は無関係だと考えたくないのでしょう。

だから、ベトナム戦争で起こしたような同じ間違いをイラクでも引き起こすことになってしまう。しかし、だからと言って、欧米人は、ジェノサイドと通底する“邪悪な者”と決めつけてしまう言い方は、わたしは大きな間違いだと思います。それは、ある男が悪いことをしたから、あいつは悪だと断定するのと、まったく同じ二分論的思考だと思うからです。欧米人は、自らが誇りとする二分論的思考の成功体験がじゃまをして、二分論的思考に内在する欠陥を理解しにくいだけだと思うのです。情緒性（気持のつながり）を重視する日本人は理性的な二分論的思考を嫌います。一億国民が一つになって、無謀な「先の戦争」に突っ走り、中国などの占領地での虐殺などを引き起こし、やがては敗北した歴史は、日本人が理性的思考、善悪を二分する判断、「対立する精神」を軽蔑し押しつぶしてきたことに根源的な理由があるとわたしは考えています。日本の美しい伝統（「和の社会」）が暴走と虐殺も引き起こしたわけです。しかし、日本人は、「和の精神」と「無謀な戦争」が通底しているとは認めたくありません。これが日本人が戦後六十年経っても、いまだに戦争責任問題に決着を着けられない理由だと考えています。欧米の理性がジェノサイドを引き起こすことを認めたくないのと同じ人間性のメカニズムだと言えます。

人間には理性と情緒性という両面があって、両者はえてして矛盾しがちです。人間性の本質は、相反する性質を内蔵する矛盾的存在だという理解が大切だと思います。どちらも自己に内在するものである以上、どちらかを無視したり、押しつぶしたりすることは自滅行為です。そこから「文明の衝突」が起きます。それは人間の宿命ではなく、たんにまだ人間が自己の根源的矛盾性を十分に自覚していないこと、したがって、その矛盾性を克服する知恵がないだけだと思います。そこから起きる「文化の死角」、「文明の盲点」だと思います。理性と情緒性だけでなく、男女という異質性の存在も矛盾を引き起こしがちですが、この異質性、矛盾こそ人間にとってのすばらしい発展の、生の原動力です。自らの「文明の盲点」を越えることは、ほとんど不可能だと思えるほど難しいことですが、本質的に人間とは矛盾的存在であると腹をくくって理解すれば、他者、異文明への寛容と理解が生まれてくるし、この盲点を克服していくがいかに人類の未来は無いという覚悟が出来てくると思います。

吉岡秀祐 吉岡です。わたしも今の方の考えにまったく賛成です。ヨーロッパをピレネー以北と以南で二分するというのは、かなり乱暴な議論だと思います。また、キリスト教の一神教としての性格を強調しすぎるのも、ヨーロッパ文明はキリスト教をベースにしていると言い切るのも、乱暴な一般化だと思います。例えばアイルランドですが、ケルトの民間信仰が混ざり込んだアイルランドのキリスト教は、地中海地方のそれとはまるで様相を

異にしています。いまその地域色の強いケルト文化、音楽やダンスや冒険物語を中心に全世界的に人気ですが、その魅力は、他の地域ではなかなか味わえないものです。

あるいは、日本を糸魚川で東西に分けてしまうというのも、とても乱暴だと思います。じゃあ、琉球人は西の人ですか？ 北海道のアイヌは東の人ですか？ 政治・行政のはなしだけでなく、彼らも含めての「ニッポン全体」の姿はイメージできないでしょうか？ 東北の文化も、西日本に対する東日本文化の括りでいっしょくたにしてしまっているのかどうか。

なぜ今こういうことを言うかという、次の時代のことを考えるときに、今までの鍵カッコ付きの歴史学のあり方に拘りすぎていると、未来はないとぼくは思うんです。確かに、世界は絶望的な状況にあると思いますし、悲観的な要素で満ち満ちていて、希望なんて持ちがたいと思いますけど、ぼくはやはり希望は捨てたくない。それには世界を少ない色数で乱暴に塗り分けるのではなく、もっと各地域各地域の価値＝カラーを、互いに認め合うことから始めなくてはならない。だとすると、ものを二分して、二項対立的に考える思考法そのものが、反省されなければならない。

地中海の話が出ましたけれども、地中海の人だったら、そんなに悲観的にならないと思います。恋をして、お酒を飲んで、歌って踊ればいいじゃないかと。それはかなり無責任な態度ですが、そういった態度も一つには可能です。地域的・地方的世界の色を life (いのち／くらし／人生) の基本色に置く考えです。世界をそれらの色の混ざり合いとして把握するやり方です。

権力としての大きな文明の対立の歴史というかたちで歴史学を叙述していくことは、それはそれで価値を否定しません。でも棲み分けの理論を識る現代の我々にとって、その方法論は、手塚治虫の漫画のように、あまりに無邪気で素朴で大雑把に映ります。圧倒的な少数派であるところの人類が持っている、文化なり価値なり、生きる意味なりが抱える、もしかすると人類存続のための大きなヒントが、ふっと忘れられてしまうことにもなるんじゃないか。

『ダ・ヴィンチ・コード』がずいぶん持てはやされていますが、あれなんかも、地中海の地域から遥か離れた別地域に住む、無邪気なアメリカ人と日本人ばかりが騒いでいるような感じを持ちます。地中海沿岸の人たちにとっちゃ珍しい話でもありますまい。この作品は漫画やエンターテインメントの類としては充分、アメリカ人も日本人も、生真面目で過剰な反応をしたのかなとも思いました。

田邊好美 今のお話に続けまして、三木先生のプリントの地図に引かれている緯度 40 度の線が、何かおかしいなという気がするんです。私事ですが、今日は眠くてしかたがない。というのは、朝の 6 時までサッカーの試合を見ていたからなんです。世界 4 強になったのは、ポルトガル、フランス、ドイツ、イタリアでした。これで見ると、40 度の線

の南に入っている国はイタリアだけで、あとは北の国なわけです。しかし、そのチームでプレイしている選手は、フランスの場合だと、ジダン。ドイツだと、ヒットラーが抹殺しようとしたユダヤ人はいないけれども、ドイツとは違うところから入ってきた選手がいるし、ポルトガルにもアンゴラ系と思われる選手がいます。いろんな人が混ざっていて、かつ、かれらもそのチームの国歌を歌う。

TVで観戦していて思ったのは、いわゆるヨーロッパの場合、ブロンドで紅毛碧眼ばかりがヨーロッパ人ではない。金髪はイタリアにはほとんどいませんし、スペインは北のほうに少しいるだけです。そればかりではなく、これまでステレオタイプに見てきたヨーロッパと、現在のヨーロッパはかなり違ってきているんじゃないか思うのです。従って北緯40度線に意味を持たせるのは意味がなくなっていると存じます。

次に歴史ということについて少し考えを述べます。パトリス・エミリー・ルムンバという名を今回も出してしまいましたが、かれが暗殺される前に、キンシャサの牢獄で奥さんに書いた長い手紙があるんです。そこにはこういうことが書かれています。「われわれコンゴ人はこれからコンゴの歴史を書こう。これは、ベルギーが書いた歴史でもない。ヨーロッパ人が書いた歴史でもない。ぼくたちが書く歴史なんだ」そして「Vive le Congo ! Vive l'Afrique !」と締めて手紙を終えています。

ここで僕が考えるのは、この手紙が書かれた言語はなんだったのかということですね。フランス語ですね。そうすると、それは植民地主義者側の言葉ではないかなと考えて、極めて複雑になるわけです。かつ、かれが1961年に暗殺されてから、コンゴはいったいどうなったかという、モブツであり、そのあとのカビラであって、まったく救われない状態が延々と続いています。ルムンバの理想と未来予測は完全に裏切られています。その現実を見ずに、帝国主義が終焉したとか、崩壊寸前であるとかいって見たところで未来への希望を照らすことにもなりません。繰り返しますが、現実世界ではアメリカ帝国主義はもうすぐ終わるといようなことはほとんど考えられない、ということです。グローバリズムの波はアフリカの最貧国にも影を落としているのです。歴史的にもまた地理的な広がりにおいても米帝国主義が終わる兆しは全く見えません。

時代の認識が甘すぎるということを僕の第二の印象として申し上げたいと思います。

猪野 時間ですので、これで終わりといいたします。ちょっと予告をさせていただきます。どうにか3回目を終えました。最終回4回目のパネラーは金子務さんとなだいなださんです。最初に申し上げたことですが、三木先生のお話ではありませんが、わたしは遊びとして科学史会のようなことをやってきましたけれども、1968年にわたしたちは学び方そのものを問われたわけですし、おまえはアカデミックな論文を書かないじゃないとか、学会で発表しないじゃないとか、いろいろ批判されました。それにはわれ関せずで、こういうシンポジウムを開くことによって、自分の関心事を皆さんとともに共有して、知的な媒

介をさせていくという活動自体に、知的な営みを感じてきています。その矢先に、大思想家のいいださんがギリシアの本を書かれた。これほど思っ飛ばつたわけですね。これだと思っしたのは事実です。そこからいろいろ勉強をしていこうと思っまして、でも独学ではなく、皆さんのお知恵をお借りしながら一緒に勉強していこうというのが、この4回の連続懇談会だったわけですね。

本当にわたしは毎回「清水の舞台」から落ちるような気持ちで、先生方にお越しいただきました。今日も三木先生においでいただきました。と申しますのは、一面識もない方もいらっしやいましたし、三木先生にもおそろおそろ電話を差し上げたんですが、本当にお呼びしてよかつたと思っます。1回目は片桐薫さんと針生一郎さん、2回目は近藤節也さん、これらの大先輩方が真剣に議論してくださり、非常に感動しておるところです。

パネラーの方から、御著書を送っていただければ、すかさず読まざるを得ないので、たいへん忙しい日々を送っております。次から次に送ってくださるので、たいへんですが、主宰者冥利に尽きます。最後まで初志貫徹で頑張ろうと思っます。これは今年1年続くとと思っますが、克明な記録をとっております、雑誌『湘南科学史懇話会通信』に特集で掲載する予定です。ご期待、お楽しみください。

もう一つ申し上げておきたいのは、ここは市民の学問所ですので、今日は金子務先生にも合流していただいて一緒にやらせていただきましたが、その金子先生が河出書房新社から出された『アインシュタイン』上・下は、ものすごく面白い本です。アインシュタインが日本に来て、何をして、どんな影響を与えたかを書いた小説です。わたしは金子先生のファンですが、改めてその博識さと明晰さに感動いたしました。

いいださんの世界と金子さんの世界がどうつながるのかなあと思ったときに、以前この「湘南科学史懇話会」で〈星の話〉をやっていたことを思い出しました。「星は五角形か六角形か」という話なんですが、それ以来、放送大学その他で長い間教えておられますので、最終回には科学史家の視点から総括的な話をバシッとやっていただけましたら幸いに思っます。今日は金子さんにいらしていただいて、この場の様子をわかつていただけたので、本当によかつたと思っます。次回も楽しみです。最終回は8月6日ですので、皆さん、ぜひ宣伝していただいて、たくさんご参加ください。若い人にもっと来ていただきたいと、そして、いいださんをびっくりさせたいと思っています。(終)

第 48 回*2006 年 8 月 6 日

パネラー：なだいなだ

金子務

リプライ講演：いいだもも

古代ローマ世界帝国の興隆と没落

—ギボン以来の古代ローマ興亡の西洋世界史的意味

今日のパクス・アメリカーナの前途は？

はじめに

猪野修治 本日は 8 月 6 日です。わたしたちにとっては歴史的な重大な日であります。1945 年生まれのわたしは、この数十年、広島市長の平和宣言の内実を思想的機軸として生きてまいりました。人類に対する無差別殺戮という重大な国家犯罪を許すことなく、絶対悪の核兵器を完全廃棄する全世界の無数の諸運動団体と連動・連帯して行かねばなりません。しかし、現実の国際的な政治状況はまったく好転しておりません。ここではその具体的現実を述べる場面ではありませんが、今日の秋葉広島市長の平和宣言を聞く限り、一歩後退の感をもたらざるを得ません。

さて、本日のパネラーは、作家のなだいなださんと科学史家の金子務さんに御願いしました。これまで同様、先ずパネラーの方々にお話を頂き、それに対するリプライ講演をいいださんをお願いすることにします。

まず、なだいなださんを御紹介します。有名な作家で精神科のお医者さんです。またヴァーチャル老人党の党首でもあられます。これは余談ですが、この連続講演の案内を各方面に差し上げましたら、「なださん」と「いいださん」をまちがえておられる方がおられます。金子務さんは有名な科学史研究者で、アインシュタインの研究者として知られ、また放送大学でも教鞭をとられております。本日は、このお二人に、あまり本日のテーマにこだわらずに忌憚のないご意見をいただきながら、議論を深めて行きたいと思っております。

なだいなだ いいだももさんと間違えられたのはかなり昔からなんです。わたしが「カペー氏はレジスタンスをした」という題のアルコール中毒の患者さんの話を書いた。それに対する批評が「群像」という雑誌に出た。中野重治ら三人の鼎談の形の書評です。表紙をあけてみたら「いいだもも」作、と書いてあるんです。レジスタンスの話をあまりにも神話化しすぎることに、ちょっと水をさすような小説だったもんですから、いいださんに迷惑がかかるのではないかと思いました。ぼくには「だ」が二つ、「い」が一つ。ももさ

んの方は「だ」が一つで「い」が二つ。でも、全体とすれば間違いようがない。両方ともひらがなの名前で重複するところがあるんですね。世の中にはおっちょこちょいな人がいて、しかもそれも冊子の編集者なのですから驚きました。ひらがなの名前は共通していますが、いいださんは、ぼくとは似ても似つかない大変な人です。ご一緒に早稲田で講演したことがあります、いいださんが講演をされたあと、似たような話をしても目立たない。もうやぶれかぶれで馬鹿でいこうと決心したんです。

そのときに話をしたのは、アルコール中毒・アルコール依存の研究をやってきたのだけれども、どういうわけか日本では「イズム」という言葉の訳に三種類もある。マルキズムのときは主義、アルコーリズムのときには中毒、そしてクリティニズムのときにはキリスト教です。なんでみんな中毒と訳さないのか（笑）。マルクス中毒、キリスト中毒など、いいではないかと。これが学生には受けたので、ぼくは人生、こういう馬鹿を言い続けてきたのです。いま重要なことは馬鹿を言う人がいなくて、利口な人ばかり多くなったことです。利口な人は利口な人を尊敬し神格化する。例えばフロイトというとフロイトを神格化する人が多くて、フロイトを尊敬するあまり、フロイト先生がこういったというと、議論が進まない。いかに尊敬したところで、フロイトは過去の人。フロイトが見ることが出来なかったことを、わたしたちは見ているということです。例えば、歴史研究に、古い時代に書かれたギボンの『ローマ帝国衰亡史』があります。なぜ、この時代にギボンが書いたかということ、18世紀というのは面白い時代だったんです。いってみれば理性依存みたいなところがあるんです。理性的にもものを見ようとしていた。18世紀のヴォルテールもモンテスキューも、みんなそうなんです。かれがフランスで出会ったダランベールだとかディドロだとか、そういう連中はみな神秘化しないものを見ようとするところがあったわけです。いまでも、わたしは18世紀に興味をもっていますが、科学的な歴史研究みたいなものも始まり、ローマをどう見るかということも始まった。わたしは精神科の医者で、そっちの勉強をくわしくやるわけにはいかないので、百科事典的知識で間に合わせているのです。この百科という考え方も18世紀から始まった。

さて、精神科的な話になりますが、一番古い病名がヒステリーです。ギリシア時代にヒステリーという病気の名前がつくられた。子宮という意味からつくられた言葉です。女性だけに起きるから子宮に関係すると思われてきました。子宮が体の中を動き回って、さまざまな症状をおこすのだというふうにギリシア時代の科学者は説明したのだけれど、今からみると子宮が体の中を動くなんで、馬鹿くさいこと言っていたとお思いになるだろうけれども、しかし、その当時、同じような病気を他の民族はどうみていたかです。悪魔がついたというような見方が中近東では多かったのです。ですから、福音書の中に、ガラダの豚の話がありますが、その悪魔は豚につくまえに人間についているのです。病気になった人間が、イエスのところにやってくると、悪魔に人間の肉体から外に出ていけと命令するわけ。すると、豚に移り、豚は群れをなして海の中に飛び込んでいったという話がある。

そういうふうに悪魔がついたという考え方が支配的であった。

日本では悪事をした報いで病気になるというような説明がありましたが、身体に原因があると考えたのはギリシア人が始めなのですね。子宮に原因があるという考えが間違いであっても、後になると選別が行われ、子宮は解剖的にみて動くものではないから、子宮が原因であるはずがないというような意見がでてくる。そしてそれで子宮が原因でなければどこであろうということになり、おそらく脳に原因があるであろうことは、すでに中世の終わり頃には考えられていたわけです。ルネッサンスの始まりのころですけれども、ダ・ヴィンチたちは死体を解剖したわけですね。人間の筋肉はどうなっているかという筋肉の図譜を書くために、ダ・ヴィンチは墓場に行って埋められたばかりの死体を掘り返して解剖している。かれら画家たちはローマ法王の庇護を受けていた人たちが多かった。ローマ法王の仕事の請け負っていて、かれらのお墓を建設したりしていたので、まあ、タブーであった死体の解剖をやっていいと認められなかったのです。医学の研究をしている人、人間の病気を研究していた人たちは、どうであったかという、なかなか死体を解剖することなどできなかった。でも、ダ・ヴィンチたちが夜な夜なやっているように、自分たちもやろうとして死体の解剖を100体ばかりそろえた人がいたのです。最近、筑摩書房から出した本『こころの庭に見えたもの』の中に書いてありますから参照してください。これがパトロジー（病理学）という学問のはじまりです。病気の原因を人間の身体の中に求めるようになった。そして肝臓にブツブツがあるから、生きていたときにあった。これこれの症状は肝臓のせいであろうとか説明するようになった。それがまとめられ本として出たのは、日本で解体新書がでる10年くらいまえなんです。そういう研究は西洋医学だと言っているけれども、西洋では18世紀までなかったのです。実証精神に充ちた人々が解剖して調べてみようということになり、実際に調べていったのです。その時代からはじめて人間の病気が、はっきりイメージされるものになってきた。体のどこが悪いからどういう病気だということがわかってきた。18世紀の終わりから顕微鏡がうまく使われるようになってきて、19世紀のはじめころには、肝臓の細胞がどういうふうに変化していたらこういう病気が出るとか、すい臓のどこの細胞が変性していたらこういう病気になるとか。例えばすい臓の中のランゲルハンス氏島は、悪くなると糖尿病になる。こういう実証的精神というのが、すべての学問に影響を与えてきた。そのことを知りながら振り返ってみると、先人の中に、意義のあるあやまちをしてくれた人が見つかる。ヒポクラテスなんか、ヒステリーを間違えたけれども、しかし近代と同じパラダイムの中での間違いであったということです。例えば、今回のいいださんのユリシーズの本の題名をくれたギリシアの詩人ホーマーですが、人間が馬鹿で起こした戦争もみんな天上の神様のせいにしてしまい人間が責任を取らないのは困ったことだというふうなつぶやきをもらしています。ヨーロッパばかりではなくて中国の古い思想家たちも非常に明晰で、18世紀の啓蒙哲学者の言い出したことを、二千年も前に言っている。ローマ時代のセネカなんかも、人間は老いて死ぬように

国だって必ず老いて死ぬ、それが運命だ、などということを言っているわけです。非常に透徹した目を持っていた人が二千年も前にいた。そういう人たち、18世紀の人たち、そして現代のわたしたちとくらべて、ほとんど変わらない。では、なにも進化していないではないかと思うけれど、やはり大きな進歩がある。というのは2000年前にはたった一人のセネカが、18世紀の終わりにはたくさんのセネカがいた。

こうして自分の責任で行動することが出来るようになった。そのことをしみじみと感じるんです。わたしはおばあさんのことを思い出します。無学文盲で文字が読めず書けなかった。情報はなにかというと、全部、耳から入ってきた。しかし、耳から聞いて覚えた情報というのは、非常に保持力があつた。だから民族学者たちがそれを書き留めると非常に古い時代のものが出てくるのです。私はその保存力をしみじみと感じたことがあります。驚くときに「おきょ」とおどろくのです。変なおどろきと思ったが、柳田國男の文章を読んでいるうちに、「おこの文学」というのがあって、かれはそこで推定している。

万葉時代の人々はどのように驚いているんだろう。「おこ」という言葉が驚きの言葉であつたと。かれの勘は鋭かつた。わたしのおばあさんの、「おきょ」は、「おこ」だったのでね。わたしたちの明治以降の日本語では、夕方（ゆうがた）と覚えさせられたけれど、おばあさんたちは「ゆうさり」でした。「ゆうさり」のほうが、万葉の言葉で優雅でうつくしい言葉です。そういう言葉を使う人間のこころと、こころの病気とどんなつながりがあるかを私は考えてきたんです。いいだももさんの書かれている世界は、ひかり輝いた世界です。理性という精神を私も科学者として持っているんですが、しかし、病気の世界は陰の部分です。そのままの形で出てきていたのが、私たちのおばあさんたちの病気です。「狐つき」というのは2000年前ずっと続いていていたのですが、その狐つきが日本で消えたのが20世紀の真ん中頃です。1950年頃です。なんで消えたかということ、理性の光によって消えたのです。狸がひとを化かすとか、狐がひとを化かすとか、そういうのは迷信だということを知り尽くすようになってから、こういう病気は自然に消えて、次にヒステリーという病気が出てきた。病気の交代が起こる。そしてそのヒステリーが消えてしまいます。20世紀の後半でヒステリーという病気が消えてしまい、不安神経症という不安を主体とする病気に移っていく。それは、人間の暗黒面です。いままでの大衆運動の挫折の一番重要なことは、マルクス主義がマルクス依存になってしまったり、マルクス中毒になってしまったところにある。大衆はどうしてもそういう傾向がある。それに気付かなかつたために個人崇拜になってしまった。そしてわたしたちに、労働運動で一番大切なことは主体をけつして失わないということであることを忘れさせたのは、大衆の中にあるそういう古いものを忘れていたからだと思うのです。

話はこの辺で終わりますが、歳をとるとだんだんまとめられなくなる。無理にまとめようとすると、どこまでも時間が延びていってしまう。そのために、わたしは一番よい方法を、浪曲の広澤虎造から学んでいるんです。「ちょうど時間となりました」と（笑）。これ

はい知恵だと思います。そして最近、どうもまとめられなくなったときには、この虎造をつかうのです。ちょうど時間となりました。次に交代ということにします。

猪野 ありがとうございます。では次に、金子務さんに御願います。

金子務 お手元に資料をお配りしてあります。このテーマに直接に関係する資料ではないが、でも、ギリシアには関係があります。まあ、なにかの参考になるのではないかと思います、お配りしました。私の友人から頼まれて公明新聞の文化欄に毎週日曜日にコラム（「科学史の街角」）を書いているものです。最後のものは、アポロン信仰と関係するものです。

今日来た人にこれだけはぜひ頭に刻んでお帰りになってほしいなあと思います。つまり、ギリシア文明について、ある誤解がこびりついているんです。日本人、特に東洋では、地中海文明についての基本的な誤解がある。それは、月桂冠の問題であります。オリンピック競技でも何でも優勝者は月桂冠をかぶると考えているひとが多いのですが、オリンピックは月桂冠ではなくてオリーブ冠なんです。もちろん月桂冠をかぶるときもあるのです。月桂冠はアポロンの木、月桂樹の木で、アポロンは詩神でもありますから、実際に現地のオリンピアに行かれた人はわかると思いますが、オリーブ冠をつかって観光客をつかまえて写真をとらせる。つまりそこではアポロンの父であるゼウスの聖樹であるオリーブに意味がある。地中海文明の基本になっている樹種は、オリーブと月桂樹なんです。これが基本的な木です。両方ともいたるところに見られる。月桂冠とオリーブ、これは区別しなくてはいけない。月桂樹というのは明治の日露戦争のときに戦勝記念でフランスから贈られ日本に入ってきた。明治 38 年頃です。これは『牧野植物図鑑』に出ています。牧野さんのそのときの説明を読んでいると、オリンピック競技のあとにも月桂冠を使うと書いてある。牧野さんあたりでも間違えるのですから、当時の多くの日本人も間違えるのもしょうがない。長野オリンピックのときにつくられた有名な彫刻家の彫像に女神が出てくる。これは月桂樹の小枝をもっている彫像なんです。ほんとうは月桂樹であってはまずいんです。オリーブの枝でなければならない。しかし、詩人たちが詩作の競技をしてもらう月桂冠は正しい。それからノーベル賞受賞者はノーベル・ローリエイトというでしょう。ローリエイトというのは月桂冠を冠る人という意味ですけれども、そういう学問とか詩人とか、あるいは将軍とか、そういう人たちの名誉をたたえるために、月桂冠をかぶせるのですが、けれども、神学的・神話的伝統の世界とのつながりを考えると、オリンピックでは月桂冠はまずいのです。だから、オリンピック委員会はその辺は誤解していないのです。ただ、日本人があれを見て、あれは月桂冠だと思っているだけ、実際はオリーブ冠です。

この間のトリノでも授賞式の時にもよく見るとやはりオリーブ冠です。そういった誤解を解いていただくための資料です。つまり僕が言いたいのは、われわれは、日本みたいな照葉樹林帯文化といわれる地帯にいます。地中海文明というのは植生学的に言うと硬葉樹

林帯文化で、硬葉樹林帯の植物の代表的植物がオリーブと月桂樹です。ですから、日本人や中国人はそれについて区別はほとんど出来なかった。

例えば近代明治になって聖書が翻訳されてきますが、聖書の中にオリーブというのがたくさん出てきます。それを「かんらん」(橄欖)と訳したのですが、これも間違いです。「かんらん」(橄欖)は別の植物の名前です。中国の南部にあると誤解した。例えばオリーブを「かんらん」と訳したりしています。旧約聖書の訳を見ると、だいたい「かんらん」と書いてある。要するに、自分たちがよく知らないほかの文明を理解することはいかに難しいことか、という典型的なひとつのケースだと考えていただいて、ほんとうに勉強するというのはかなり大変なことだと思います。これは私自身にとっても自己反省の材料でもあるのです。

実は本日、なだ・いなださんと40年ぶりくらいで再会しました。私は1960年代後半にかけて新聞社の週刊誌の記者をやっていて、あのころは学生運動の全盛期で佐世保闘争とか成田闘争とかがありましたが、ちょうどその直前にビートルズが日本にやってきて、僕がいた新聞社が招聘したもんだから、ビートルズを取材して彼らの音楽を私は一番最初に日本武道館で聴いています。頭が痛いだけだったですけれどね(笑)。だいぶたって新聞社をやめてからあれはいいもんだったなあ、と思いました。それ以降の大学紛争期は60年代後半ですが、東奔西走していて、そのさなかで、なだ先生とお会いしました。実は、佐世保闘争のときエンタープライズに乗り込んでルポを書いていましたが、同時に、御用係として、なだ先生にも現地ルポを御願ひしていたんですよ。要するに、なだ先生と話が出来そうなのはお前ぐらいしかいないだろうから、先生の面倒を見てくれというわけです。それ以降、私は鎌倉に住んでいて、なだ先生のご活躍は紙上では拝見していましたが、懐かしい思いです。今日、こういう機会を与えていただき再会できてうれしい思いです。なだ先生から取材の合間に教えていただいたレヴィー・ストロースの話をきかされて印象深かった思い出があります。

それから、いいだもさんの本は、毎回、分厚い本をお書きになっているのですが、今回も分厚い本が何冊もあって、初めはしり込みし、コメントする立場にないから無理だとお断りしようと思ったのですけれど、猪野修治さんから熱心に要請され、一番最後にまわってもいいからといわれ、引き受けました。それでも正直いいまして、2巻まで読み、あとはひろい読みしているだけです。ですから、とても義務を果たさないで、ここへ出てこざるを得なかったものですから、内心、忸怩たる思いがあります。ほんとうにあれは枕頭の書で時には枕にさせていただいたりしました。これは冗談です。僕も70を過ぎましたけれども、いいだ先生は僕より10歳上です。これだけのヴァイタリティをお持ちになっていて、それで内容は濃く文献も豊富で深く教えられることがいっぱいあります。私ごときがいいださんの本を論評する立場にはないのです。

さきほど煙に巻くようなお話をされましたが、私も煙に巻いて逃げるしかないなあと
思っております。ただ読んでいてですね、いいださんはたぶん、書物の世界を発掘されて
いらいますが、先ほど申しましたように、私は新聞記者、雑誌記者、編集者、そして学
者、そういった経歴でして、考えてみたらみな「者」がつくんです。「者」というのは、
柳田國男の有名な話があるのですが、「者」がつく商売というのは漂泊者なんです。医者
にしても芸者にしても、学者同様、本来、はぐれもの「マージナル」な存在で、要するに、
支配者と被支配者の間で、その隙間をうろうろしている。そういうものがみな「者」なん
です。だから学者というのは、大学なんか勤めて給料をもらうなんていうのは本当はお
かしいんです。いいださんみたいな立場でやっている人がほんとうの学者なんです。給料
をもらっている学者なんていうのはほんとうはダメなのです。わたしは今は無職になりま
したが、ようやく「者」が抜けた感じです。そういうわけで、いいださんのご本からは得
るところが大であって、とても私のほうでコメントする立場ではない。

先ほど、なださんのヒステリーのお話を聞きながら、ああ、そうだなあと思っていたの
ですが、私は科学史の分野におりますが、当然、医学史も関心の対象になっております。
ヒステリーは不安神経症と呼ばれるとおっしゃっていましたが、第一次世界大戦時までヒ
ステリーというのは女の病気だ、男はヒステリーなんかにならないぞ、という、偏見にみ
ちた世界だったわけです。ぼくらは女性差別というか、今日、わたしが見直したいと思っ
ているのは女性原理の問題、女性差別に関係する問題について後でふれさせてもらいます。

実は男もヒステリーになるというのが明らかになるのは第一次世界大戦のときです。こ
れはシェル・ショックといって、砲弾が飛び交うとき、異常をきたすんです。戦場からも
どってもその状況はおさまらない。震えが止まらない。子宮をもたない男もヒステリーに
なるんだということが明確になったのです。精神医学のレベルでも大変に画期的な発見
だったのです。フロイトの神経症対策の問題などがでてくるのは、それからです。精神分
析学の手法が開発され精神病を薬で治すとか、いろんな動きがでてくるのは第一次世界大
戦以降なのです。ですからこれはあたらしい問題で、つい最近まで、暗黙のうちに男性支
配の下で、女性にたいする偏見を臆面もなくやっていた時代が続いてきたのです。ヒステ
リーなんかはその例のほんのひとつに過ぎないと思います。

いいだ先生と私なんか、どこがちがうかなあと考えると、私は基本的に現場主義なんで
す。歴史家ですから、もちろんいろいろな文献やいろんなものも読みます。ただ、なんと
言っても現場に行き現場に立って考えないと気がすまない。お前は新聞記者だからそう
なんだろうといわれるが、ばかいうな、新聞記者だっていろんなやつがいて、記事を書か
ない人間はいくらでもいると言っているのです。ただそういうことが私の性分であること
もあるが、やはり、なるべく予断を持たずにある程度の知識を積んだあとは、自分の目と
自分の肌でその場の空気を感じ取りながら考えて行きたい。そういうふうには思っています。

実はギリシアの文明の問題というのにはある意味では科学技術の一番の原点の問題ですから、われわれは避けては通れない。だけど、多くはギリシアというとギリシア本土のことになる。ここに地図を持ってきましたが、これがギリシアの地図です【編集部注：地図を示しながら説明】。一説によるとギリシアは5つの海に囲まれている、といます。ほんとうに5つの海があるのか、と聞いたことがある。エーゲ海、イオニア海は有名だからだれでもわかるが、トラキヤ海、ミルトア海、クレタ海、これで確かに5つになるんです。地中海のクレタ島などの島々もギリシアですから。こちらが現在のトルコです。このギリシア本土とわずかにコリント海峡でつながっている南の部分が、ペルポネソス半島です。スパルタなんかもこのなかにある。アテネは本土南部の辺にある。だからギリシア全体の地理からいうとかなり南によったところに、アテネとスパルタがある。アレキサンダー大王がでてくるのはずっと北の方です。ペラスというアレキサンダー大王が生まれた町がある。その西方にスタゲイラというところがある。アリストテレスはこの町に生まれている。もっと東のアブデラからは原子論のデモクリトスが生まれていて、そこからもっと東へ行けば、すぐトルコ領のイスタンブールで、昔のコンスタンチノポリスです。だから、ギリシアの主要な偉人の多くは、いわば僻地から出てきているということです。

アレキサンダー大王が出てくるのはマケドニア地方です。現在のギリシアへ行ってみてわかったことは、ギリシアというのは岩だらけで木は何も生えない国というイメージが強いですが、海はとてもきれいです。そのイメージは南のほうにはあっているんです。しかし、北の方へ行くと森林だってあるし、緑がゆたかで必ずしもそのイメージではない。だから、統計的にみても、鳥とか爬虫類の種類からいっても、ギリシアなんかより遙に面積が大きいヨーロッパ大陸のフランスやイタリアといった大国と比べても、ギリシアの方が種類が多いのです。植物も動物も豊かなのです。ですから、岩山のイメージでギリシアを見ると、どうも、間違いではないかと、ひとつは思います。それから、戦後30年くらいギリシアに住んでいる日本人に聞いてみると、この方はアテネに住んでいるのですが、ギリシアでは断水なんか一回もない、という。降雨量は多くないが地下水は豊富だと言っていた。地下水が豊富だから水は贅沢にとれる。だから水の制限を受けたことは30年間に1回くらいしかなかったという。ですから、そういうところでもわれわれのイメージと違う。冒頭、オリーブ冠と月桂冠のちがいの話をしましたがけれども、よその国、自分のよく知らない国を知ることはずいぶんむずかしいものだ、と感じました。

それでギリシア本土をよく見たいのだけれども、その前に、周辺を見てみたいとかねがね思っていた。念願がかないまして、エーゲ海クルーズをしたり、小アジアを回ったりしました。こちらはトルコなんですけど、エーゲ海に面したこの辺はトロイの遺跡があるトロイアですね。その近くにダーダネルス海峡がありますが、ここは第一次大戦のときの激戦地です。トロイ戦争のときの激戦地でもあった。こちらに黒海がありますが、黒海の物産をダーダネルス海峡を渡って持ってきて、アテネとかに運ぶんです。その海峡を抑えていた

トロイが全部貿易をコントロールしていたんです。軍事力でもって出入り口を支配していた。トロイがお金を巻き上げてけしからんというのが、トロイ戦争です。極端な話をする
と、トロイ戦争というのは、ギリシア以来の第0次世界大戦だったという気がします。と
いうのはトロイ側についてのはみなアジア側、トルコ側にあるポリスの連中がみなトロイ
を応援しているんです。実態は経済戦争なんです。それで、ギリシア語いがいの言葉が、
トロイ側の陣営で飛び交っていたということが残っているんです。ですから対アジアと
ヨーロッパとはいわないまでも、こちら側との激しい戦争であった。だからトロイ戦争は
10年もつづいたのです。一ポリス同士との戦争で10年も続く戦争などは考えられない。そ
れだけ大規模な組織的対立があった。トロイに行って感じたことです。それから、いまの
トルコ側に、いわゆるイオニア文化圏というギリシア文明発祥地の母胎があります。

ここに、ボドルムというすばらしい保養地があるが、その北のミレトスとエフェソス
とかサモス島とかまで含めてエーゲ海側にある地域が、イオニア地方と呼ばれるところに、
ギリシア人植民のポリスが集結していました。これはギリシア本土のポリスと同じといっ
てよい。ギリシア人たちが北のほうのマケドニア地方から異邦人の南下・移動してくる勢
力におされて自分たちの植民地を作る。これが実態だと思うが、そこにはまた先住民族が
いたわけです。

エフェソスというところが一番、わたしが話をしたい場所なんです。その前に、ギリシ
ア文明はいいだ先生の本のなかにもくわしく書かれています。例えばクレタ文明、クノッ
ソス文明。クノッソス宮殿、いわゆる迷宮という語源になったところですが、それが1900
年に発見され、それ以降、ギリシア古典文明のもっと先に古いミノア文明があったのだと。
さらにミノア文明と関係しているペロポネソス半島のミケーネに、クレタ文明の後期相当
の文物が発掘されている。それで、トロイ戦争に出かけるギリシアのアガメンノンがいた
のはミケーネです。例のシュリーマンがトロイの遺跡を発見します。トロイの発掘をやっ
てからミケーネの発掘にかかり、アガメンノンの黄金のマスクなるものを発見した。本当
にアガメンノンの黄金のマスクだったかどうか、知りませんが、しかし、アガメンノンが
あそこから出発してトロイに向かったことはまちがいない。こういう古代文明が20世紀
に入ってから続々と発見されてきたのです。それで、ギリシア文明を理解しようとする
と、ものすごく複雑怪奇で非常に多層構造をしている。私たちがむかし、ギリシア哲学を習
ったときに、まずソクラテス以前の哲学があって、ソクラテス以降の哲学は自然哲学から人
間の原理とか人間の生き方に関わっていく、そういう一種の講座主義的な説明を受けてき
たのです。そのときには自然環境は関係ないわけです。しかし、自然哲学を唱えたタレス、
アナクサメネスを育てたイオニア文化圏というのは、実は小アジアにあるのです。ギリシ
ア本土ではないのです。こちらへくれば、根っことしては、今のイラク、イラン、インド
などのアジアにつながるわけですし、いわゆる当時のイオニア地方というのはいわゆる
ヒッタイト帝国やフェリギア王国の支配下に一時期はあったわけです。

ヒッタイトというのは、BC13世紀に出現し、人類史上はじめて鉄を使い出した民族です。いわゆる鉄文明ですね。それがアナトリア地方、現在のトルコのある半島ですが、小アジアに展開し現在の中近東と全部くっついている。アナトリアだけに着目してみてもヒッタイト帝国は理解できない。やがてこのヒッタイト帝国もBC7世紀にはフリュギア王国にのっとられます。フリュギア王国の時代にイオニア文化圏はその支配を受けている。フリュギア王国には有名なミダス王、「王様の耳はロバの耳」の王がいた。この父とも祖先ともいわれる初代の伝説的王がゴルディオスで、いわゆる「ゴルディオスの結び目」を神殿の牛車に残した。これを一刀両断して、アジアの王になったのが、マケドニアのアレクサンドロス大王でしたね。

私が言いたいのは、エフェソスですけれども、エフェソスというのは、エーゲ海をぐるっとまわったアナトリア半島の沿岸地帯のイオニア文化圏で、ここに、クシャダスという港がありますが、そこから内陸に少し入ったところにある。やはりイオニア文化圏のミレトスとならぶ中心都市です。例の新約聖書に出てくる聖パウロは、現在でいうトルコの地中海に面したタルソスの出身ですが、アナトリア半島、つまり小アジアにおいてユダヤ人以外の民族にキリスト教を布教することによって、はじめてキリスト教が世界宗教になるわけで、だから、アナトリア半島におけるパウロの布教は重大な意味があったのです。しかし、大部分は成功するがエフェソスでは失敗するのです。パウロはエフェソスに3年もいて布教していたのですが、そこの人々は言うことをきかなかった。というのは、ここにアルテミスという女神が古代からいて、その信仰が根強かったからです。その話が私の主題なんです。これで時間がきてしまいましたね（笑）。

あと5分くらいいいですか。

エフェソスのアルテミス神殿は、古代世界における七不思議のひとつなんです。ご存知でしょう。ピラミットとか、バビロンの空中庭園とかありますが、おそらく、七不思議のなかのもっとも重要な神殿がアルテミス神殿だろうと思います。それがこのエフェソスにあって、この土着信仰が強いものだから、パウロも失敗する。

ヘラクレイトスという有名な自然哲学者がおりますが、エフェソスの人です。ヘラクレイトスは要するに万物は「火」であると唱えました。「水」だと唱えたのはタレス。「空気」と唱えたのはアナクシメネス。万物を種にたとえたのはアナクサゴラス。バーに行って酒を飲んでいると、「水をくれ」というでしょう。あるいは煙るから「窓をあけてくれ、空気をいれろ」とか、「ちょっと寒くなったから石油ストーブの火をつけて」とか、「おつまみに柿の種ないかなあ」とか。要するに、ギリシア自然哲学の原点のすべてがここにある（笑）。ヘラクレイトスは貴族で祭司階級にいてへそ曲がりできむずかしく非常に難解な文章を書いている。エフェソスのアルテミス神殿なんかに行って、子供たちと遊んでいるんです。どうしてかという、「お前たちと政治論議をやるより子供と遊ぶほうがましだよ」と。ヘラクレイトスは例えばギリシア悲劇を書いたホメロスなんかもけちょんけちょ

んに言っているわけです。あんなやつは死刑、はりつけにすべきだ、と平気で言ったり、それから、ピタゴラスについても、あんな児戯に等しいことをやって、知の大発見をしたようなことを言っているけれども、ちゃんちゃらおかしいなどと、せせら笑っている。今ここにいたら、いやなやつかも知れない。でも、大変な人物ですよ。弁証法の原点はヘラクレイトスです。「すべてのものは流動する」(パン・タ・レー)など。そういう高名な哲学者でもアルテミス神殿に行って遊んでいた。ヘラクレイトスは自分の本をアルテミス神殿に奉納しています。だから、例えばギリシア哲学を勉強するときには読まなければならない有名な基本書を書いたバーネットに言わせると、ミレトスとかエフェソスとかのイオニア人には宗教心なんかはぜんぜんない、脱神話的な世界を書いた、というのですが、いまはそんなことは簡単にはいえない。アナトリア半島の地形からいっても、大変重要な問題がいろいろある。

それから地母神というのは日本でも縄文土器の中にもありますが、地中海世界でもいたるところで見られます。マルタ島で紀元前 2700 年、いわゆるマルタのヴィーナスといわれるものすごく太った石の像があるんです。私も見てきましたが、マルタ文明には、エジプトよりも古い遺跡がマルタ、あるいはマルタの近くのゴゾ島という島にある。要するにわからないことがいっぱいある。その地母神信仰というのは古代から実は世界的に流布している。アナトリア地方、つまり、小アジアに限っても、先ほど言ったヒッタイトには、クババ、フリュギアにはキベレ、という地母神つまり女神がいたんです。

そのつぎのヘレニズム時代に出てくる女神、地母神がアルテミスなんです。アポロンと一緒に双子として生まれた。ギリシア神話においては、アポロンがデルフォイの神託の地を守っていた大蛇を強弓で射止めて退治しその予言力を奪う。アポロンもアルテミスもギリシア神話でいうとよそもので、もともとオリンポスの正当な系譜のなかでなくて、小アジアの方から入っていった神様です。アポロンはどんどん出世するけれども、アルテミスはだんだんマイナーな存在になるんです。ギリシア神話でも、例えば美の女神アフロディティ、学問の女神アテナなどの活躍ぶりに比してアルテミスの役割は、単なる狩猟の神となっている。獣たちの神様、あるいはアポロンをたたえる女神群のひとりになっている。だから地位を貶められていくんです。ローマ神話のダイアナがギリシア神話のアルテミスです。これはやはり父権性社会である。ギリシアのポリスにおいて、女性は人間扱いはされていない。選挙権もない。市民の中に勘定されていない。奴隷・女性は市民ではない。ギリシアを理解するとき基本的には父権性社会です。オリンポスの神々もまったくそれと同じ。ですからアルテミス信仰がどういうふうに変容され、どういうふうには矮小化され、どういうふうには消えていったのか、が問題になるのです。

しかし、エフェソスで紀元 400 年代、キリスト教会がいわゆるエフェソス公会議を開き、ここで、聖母マリアが「神の母」(テオコトス)であるという認定をはじめて下すんです。

つまりカソリックのなかで聖母マリア信仰が生き続けられているのは、そのエフェソス公会議以降です。エフェソスというところは、重要なことに、先にいったアルテミス神殿があると同時に、ここに、マリアが 12 使徒のひとりで一番わかいヨハネに連れられてイエス・キリストの死刑執行後、エフェソスに逃げていったのです。エフェソスの郊外に聖母マリアの家が現在でもある。そこは教会になっている。ヨハネもエフェソスの郊外で死んでいる。

エフェソスのアルテミス神殿はいまは石柱が一本たっているだけです。かつては 120 何本の高さが 18m もある大きな石柱で巨大神殿が出来ていた。その近くに聖ヨハネの教会があり今もヨハネのお墓がある。うそかほんとか知りませんが、使徒ヨハネの聖腕というのが、イスタンブールのトプカプ宮殿の宝物館に飾ってある。

そういうことで、要するに、私が言いたいのは、地母神信仰がクババ（ヒッタイト）、キベレ（フリュギア）、アルテミス（ギリシア）、ダイアナ（ローマ）、とギリシア文明以降、女神たちの一員におとしめられていくが、キリスト教は聖母マリアの形で古い地母神の信仰形態を取り込んで世界宗教化していく。

ところで中世以降の西欧では、男性中心社会になっていって、そのなかで、いわゆる近代科学が生まれてくる。私は近代科学の成立というとき、ふたつの系統があったと、前から問題提起しているんです。なかなか私の真意は分かってもらえないのですが。たとえば、ガリレオ、ニュートン、あるいはアインシュタインまで行くような一つの流れがある。これは世界は書物である、神が書き込んだ書物である、つまり自然は神の作品という立場です。

だから、神が書き込んだその記号と数式を読み取ることによって、神の被造物であっても神にもまさる理性の持ち主である人間には、自然の秘密は最終的にはわかる、理解可能である。これを書物の記号論的な自然観に裏打ちされた科学とっておきます。

もうひとつの流れがあるのです。いやあ、そんなもんじゃないよ、世の中、わからないことだらけだ。いや、森の中を手探りで進むのだから、自然は迷宮だ森だ、という考え方です。迷宮だ、森だということを、強く唱えたのは実は 17 世紀イギリスのフランシス・ベーコンなんです。ベーコンは 19 世紀以降、特に帝国主義的活動が盛んな時代になって以降の学者たちは誤解している。

要するに自然を収奪・征服する原理を最初に唱えたのがベーコンであると考えている。ということで、ベーコンは自然征服的史観の元祖と槍玉に挙げられてきた。現代でも多く人、学者でもそう思っているひとが多い。だけど、そうじゃないよと私は言うのです。ほんとうにベーコンを読んでいるかと聞くのです。「森の森」（シルヴァ・シルヴァールム）という世界観、体系をベーコンは打ち立てる、この体系は未完成で、その一部として、オルガノンという論理学の本を書いている。要するに世界は森であり迷宮だ。本当のことは理解不能かもしれない。だからといってまったく自然がわからないとはいえない。自然と

いう森に入って、手に当たるものを一本一本をみなで手分けして記載していこうではないか。そうすれば少しずつでもわかっていくだろう。だから博物学というのは、実はベーコンが全学問の基礎においたのです。これを忘れてもらっては困る。

全学問の基礎に博物学をおき、その上に自然学をおいたのです。さらに自然学の上にメタフィジカル、形而上学を据えた。ですからこのベーコン的精神にのっとして 17 世紀にロンドン王立協会がスタートしたのです。その初期の事業は、手分けして、いろんな人に呼びかけていろんな博物学的な報告を集めるという方向を持っていた。現代にまでつづいている王立協会誌『ロイヤル・トランザクションズ』誌にそれらは記載されています。自然というのはそんなに簡単にわかるものではない。ひとつひとつ記載していきながら、帰納的に当面、真であると思われるものをとりあげ、また、あらたな事実が見つかったら、またそれを修正していけばいいじゃないか。ですから、ベーコンの学問の方法は修正帰納法である、といわれます。事実と思われるものを記載し、そうした事実群に共通して見られるものを当面の真理として、のちに新たな事実が出てきたら、その帰納的真理を修正すればよい、という立場です。

ガリレオ、ニュートン、アインシュタイン的世界というのは、そうじゃありません。ユークリッド的世界の側にある。まずだれしも疑えない真理である公理から出発して、それが正しければ、演繹的に公理から定理を、上から下に導くように、理論を導き出す。そういう立場です。それができなければ数学や物理学は満足しない。だから、ハイゼンベルクがすべての自然法則を導く母胎になる最高法則、宇宙方程式なるものを自分が発見したと、一時期、唱えたことがある。物理学者にはそういうものを見つけ出したいという心情がある。だけどそういう物理学者の信念はゲーデル以降、消えたのではないのでしょうか。ゲーデルが樹立した不完全性定理というのがあって、実はどんな精緻な理論体系を創っても、その理論体系のなかで、説明されないことがかならず発見される、つまり不完全であるということを定理として述べたのが不完全性定理なんです。だからもっとも完全な理論というのは、成立し得ないということをゲーデルは数学的に証明してしまったのです。とはいっても、これは理論構築の上では逆に勇気付けられる結果にもなった、ともいえます。先行理論には必ず不備が見つかるだろうからです。

これは 20 世紀以降、現代に至るまでのひとつの流れです。自然のイメージとして迷宮、森であるという流れは、現代の博物学やエコロジーでも注目を浴びています。これは当然のことだと思います。これはさきほどの女性原理、女神が貶められていく過程の裏返しとして、現代でも再考せざるを得ない問題です。だから、そういう意味で、ギリシア文明を再考するにあたって、アルテミス信仰というものに私は目をつけている。これはいわば、ギリシア文明を考えるときの、私にとってのキーワードなのです。以上です。

リプライ講演

いいだもも

1 今日秋葉広島市長の平和宣言

今日は日曜日で、しかも酷暑の中を、こんなにも40名をこえる参加者がございまして、著者としてのわたくしとしては、大変に恐縮に存じております。正直に言って、さきほど、なだいなださんから、いいだももとよく間違えられるといわれていますが、それはいつもわたしのほうが得しているんです（笑）。

今日は、広島の日（8月6日）なんですが、先ほど、司会者の猪野修治さんのいつものながら周到きわまるご挨拶の中に、今日の秋葉市長の宣言について、「原水爆禁止運動が後退している」というご発言がありました。ぼくもそれを聞いてからここに、今日、来たんです。秋葉さんというのは、わたしにとっては、永年のポン友なんですが、猪野修治さんが、かれが今「後退」「あいまい」になっていると、おっしゃったのですが、かれの印象は、わたしが今日、聞いた限りではむしろ、「沈痛」になっている、という印象を間違いないく受けました。

これは、時代により深く沈潜しているところがある、との感じをわたしとしては持ちました。単に印象ですが、現実問題としては、広島の当事者の市長としては、或る意味では当然のこのようにわたしとしては思います。広島・長崎以来の「原子力の世紀」「原子力の時代」が呈していることは、戦後が、いわば欺瞞的な偽りのなかで「平和」とされていることとは別にして、わたしどもはどうにか生きながらえてきておりますけれども、本質的には問題の根本は何一つ解決していない、とおたがい痛感させられているわけです。

その一つめは、「原発」という核の問題が、現に全く解決していない。核世界戦争が勃発しない世界平和が維持されているのは、非常に逆説的なことですが、米ソ冷戦以来の核の「過剰蓄積」による相互循環なんです。いわば相互緊張の「死の均衡」のなかで、この欺瞞的な「世界平和」は保たれているのであって、わたしたちはまだ、完全軍縮とは非常に遠いところで「平和」を貪ぼっているにしか過ぎない。もうひとつは、原子力時代という「偽りの平和」が、われわれ自身の或る意味での、貪ぼりと或る程度の納得を得ている、ということです。

日本はやはり、ヒロシマ・ナガサキの当事者ですから、世界的に言っても、日本の認識は、それなりに非常に高度なものです。「原発」「原子力の平和的利用」とは、原子力そのものの「商業的」利用、産物なのであって、ですから、それはやはり、放射能は、こうして明るくしている限り、どうしたって、日本列島・世界上に累積してこざるをえない。それは、処理の方法が根本的にはない、というところで、核燃料サイクルも現にみるように、フランスへツケをまわして、六ヶ所村へ最後のシリを持って来つつあるだけのことでして、

その実態は、ほとんどパンク状態にあるわけです。そういうような状況証拠を通じて考えてみますと、秋葉市長ならずとも、「沈痛」にならざるを得ない、ということがあるのではないかとわたしは強く思います。

前は、イスラーム学者の三木亘さんにご登場していただきましたが、そのかれが懇親会の後、カラオケに行きたいというのです。かれにカラオケの趣味があるとは、わたしは全く知らなかった（笑）。じゃあということで、みんなでカラオケに行ったのです。実に七十年来のわたしの友人ですが、驚いたことに、三木亘という男は、今の若い人の新しい歌を全部そらでやるんですよ。カラオケ好きのわたしも、これにはすっかり負けちゃいまして、やはりイスラームというのは非常に新しいものに関心があるのだ（笑）、とわたしのようなマルクス主義者としては（笑）強く思いますね。今日も、後でのカラオケを、大変楽しみにしております（笑）。みなさんも一ついかがですか（笑）。

2 ギリシア哲学の始まり

さて、なだいなださんと金子務さんのおふたりのお話について、わたしとしては、ふたつのことを付け足してお話したいことがあります。お二人のお話に詳細にコメントすることは、とうていわたしごときには出来ませんが、その前には、金子務さんが前回、「アルキメデスの墓」を探して廻られた、ということ承わり、実にすばらしかったなあと思いました。金子務さんのお話では、「アルキメデスの墓」が発見されて、そこに彫られていた文字がほうぼう消されていて、それを読むのがなかなか困難で困った、というのですが、それを苦心して解読された結果、アルキメデスの原文が完全に解読された、と。これは本当に、何世紀にも無い朗報でして、わたしたちは、アルキメデスの原本を手にして、恐らく近くその訳が近く出るのだろう、といとも楽しみに期待していますが、非常に楽しみで、それを読んで、もしかしたら、この超枕本の第4巻を書けるのではないかと（笑）と、心待ちにしているのです。

要するに、アルキメデスというのは、やはり古典古代ギリシア文明を考える上できわめて大事な人物であることは、何度も強調されてきておりますが、金子務さんがおっしゃったイオニアです。エフェソスが大事なんです。プレ・ソクラテスなわけなんですね。ギリシア哲学というのは、このイオニアの大地から始まるわけでしょう。

要するに、タレス流に言えば「万物は水」だということですね。それから、アナクシマンドロスが「空気」だと言っている、それから始まってアナクサゴラスあたりの自然哲学が、として大事なんですね。これが、ギリシア哲学の始原である〈ミレトス自然哲学〉のエッセンスです。これが、人間的な哲学的思考の最初の原点、ほんとうの「アルケー」ですから。

それが、ソクラテス、プラトン、アリストテレスというところに付け替えられてしまったというのが、古代ギリシア思想史のプラトニズムによる贗造の始まりなんですね。プラ

トンの〈イデア論〉などというあんなものは、まったくのイデオロギッシュな迷信ですよ。偉大なる古典ギリシア哲学はやはり、〈イオニア自然哲学〉から始まった。ソクラテスというのは、要するに、自分の家のなかでまんじりともせず、個人がどういうふうにより算段して生きるかということですから、「私小説」でして、高級な哲学的思考などでは、もともと無いですよ。ですから、プラトンの最後の高弟で、その継承者である、ということになっているアリストテレスは、その実は、プラトンの〈イデア論〉には全く承服していないで、かれの論である〈フュジカ＝自然学〉は、その内実は、タレス以来の〈ミレトス派自然哲学〉の完全な復権なのであって、この〈フュジカ〉がなければ、もう一つのかれの主著である〈メタ・フュジカ〉つまり〈形而上学〉もまた、ありえない。

もう一つは、イオニアのあと、アテネのプリクレスの民主主義の最盛期の時代ですが、その時代には、プラトンとアリストテレスが極端にその時代の賢者である〈ソフィスト〉をけなしてしまうために、それぞれに、一冊の本を作ったくらいですから、それは実に大変な贗造・歪曲の理論的作為ですけども、当時のアテネの全盛時代、ペリネネス時代には、別の本格的流派が「ソフィスト」でして、その太祖はアルキメデスですから、だからアルキメデスの思想は、ほんとうに重要で、いくら学んでも学びきれないくらいに巨大な思想だと思えます。

その以上三つの点が、思想史的な転換点として大事なんです。金子務さんがおっしゃったように【編集部注：地図を示しながら】、この上が小アジアですから、だから、実はギリシアという西のほうではなくて、東のほうなんです。わたしたちが〈オリエント〉と呼んでいる、「光は東方より」というように、東から歴史の光は射してくるんであって、これをもっとこっちの方向にどんどんいけば、インドに行き着くわけですよ。アレクサンドロス大王の大東征ですね。そのインドからさらに中国へ行けば、その先は最後にはわが正倉院に辿り着くわけですよ（笑）。こちらのほうから、ずっと来ているのです。

3 ヘーゲル『世界史の哲学』の問題性

みなさん、ヘーゲルの『世界史の哲学』というのは、前回も申し上げた通り、あれはおどろくべきヨタ哲学本でして、そもそもの世界史の始めは、いきなりモンゴルからはじめさせられている。いわゆる「一人だけの自由」の神聖な絶対王権国家文明です。つまり、チンギス・ハーンだけが自由な人だ、とかれヘーゲルは言うわけです。これは、かれら西ヨーロッパ人は、大蒙古帝国の西漸の力によって一度征服されかけた、という、かれらなりの世界史観をその時の「トラウマ」から自分の史観を組み立ててきている。

モンゴルの侵略で凌駕されかけたということが、非常に怖かったわけですね。だから、ヘーゲルの「世界史」は、モンゴルからいきなり始まるんですよ。それですうーと来て、ペルシア、ヨーロッパまで来る。マア、わたしの日本史で言えば、「元寇」です。わたしのあそこで「モングラッタ」（笑）。

ヨーロッパまで来ると、そのとどのつまりは、ヘーゲル自身が自画自賛して書いているプロテスタントのプロイセンでして、そこで「万人の自由」が実現され、そのところで、「一人の自由」のモンゴルとは対照的な、最近フランシス・フクヤマが強調しているように、「歴史そのものの終焉」が宣言される。ざっとこういう世界史の行程が構成されているわけです。これで、ヘーゲルの「世界史」は終わりなんです。そこで、ヘーゲルは、コロンブスが〈大航海の時代〉に発見した新大陸のアメリカというものを、アメリカは「未来の国」だから分からないと行って、かれの「世界史の哲学」から先送りしてしまっている。

21 世紀の現在、よかれあしかれ、世界の中心はアメリカでしょう。それからこれでは、ロシアというのも「始まりのモンゴル」の以前に置かれていますから、当然出てこないわけですよ。ところが皮肉なことに、米ソ両超大国の冷戦時代こそが、わたしたちの時代であったわけですから、そんなことは、ヘーゲルの「世界史の哲学」では全く何一つ理解できなくなってしまう（笑）。

そもそも、たとえば、日本のわたしたちなんかは、なにしろモンゴル以前の「現人神」御一人の自由しかない（笑）お国柄で、人類史の舞台にただの一度も登場しないで、そのまま、虚空に消えさせられてしまっております（笑）。

こういう偏りが、なんでヨーロッパのどまんなかでヘーゲルの世界史に生じたのかというのを、この本で明らかにしたのです。それは、つまらないことを言っているようだけれども、非常に大事なことです。

だって、文明の光はもともと東から来るわけでしょう？ それで、ギリシアから二千数百年、今日まで来るわけです。古典古代ギリシアは、ここから歴史が始まったというが、そんなことはないんだ、その前に六千年間のミノア・ミケーナイ地中海文明があったじゃないか、とこの本は声を大にして実証しているわけです。

金子務さんのお話に倣って、小アジアのほうへ話を持って行って、エフェソスはもちろんのこと、そっちのほうからアテネへと、アポロンにしても、ディオニューソスにしても、アテネのパンテオンに鎮座して居る神はみんな渡海してやってきた。そして、金子務さんがおっしゃったように、ピュルトンというデルフォイの守護神と結びついている大蛇ですが、これを退治して、そのもともとの縄張りのところに、アポロンの神を主神として鎮座させて、デルフォイのご神託を発したところから、歴史が始まる、というでっち上げなのです。

これからもっと西へ行くと、今度は、イタリア半島がありますから、ここでローマという世界帝国ができるわけでしょう。きょうもその話をして、そういった西欧伝来のヨタ話（笑）の一切を、打ち止めにしなくてはならないのです。

大まかにいうと、東から西へときて、そのどんづまりが 21 世紀の今の西欧中心的世界史観というのであって、そのように再吟味してみますと、アメリカ大統領のカーボーイ

じゃないが（笑）、今、イラクに戦争に行こうとか、イランに戦争に行こうとか、そういうばかばかしい猿知恵しかでてこないわけで、それに乗っかる人が、今日の日本の自民党さんなどにワンサと居るわけです（笑）。

男のヒステリーというのもあるということですが、現代、だいぶ解放されているというのに、男のヒステリーというのは、どうなんでしょうかね（笑）、ますますその病症が亢進してきて、いつも弓なりになって引き付けの発作を起こしているんじゃないかな（笑）。歴史的にそうなんではないですか。あのあと出てくるのが、今度はですね、あれは顔を見ているとよくわかりますよ、「不安神経症」でしかありませんよ。あれは、ヒステリー症の最たるもの。男のヒステリー（笑）。だから、今の世界と日本は、男のヒステリーが全盛時代だと考えると、精神衛生上、なだいなだ先生の診断をぜひとも受けたほうがいいだろう（笑）と、わたしは思っております。

馬鹿ばかしいことを言っているようだけれども、ここはなかなか大事なことです。ヒステリーというのはまあ、子宮の病気だということは、なだいなださんがおっしゃったようなことですが、ヒステリーをあげつらった、当時のいかさま師たちが、女のヒステリーをタネにして金もうけを盛んにやらかしていた。これはつまり、神様に触れたんだ、というふうに物事を持っていったが、実はそうでは全くなくて、これは人間の病気なんだということを、ヒポクラテス先生が明らかにした。いわゆるヒポクラテスの〈神聖病〉論ですね。

これを明らかにしたヒポクラテスが着眼したことは、岩波文庫で今は誰でも気楽に読めますし、みなさんもぜひともお読みになってみてください。ものすごく重要なところですよ。だから、何でも神様のせいにして、靖国神社に行ったりなんかする者が今でも居る。小泉なにがしとか今でも居るわけです（笑）。ヒステリーであれば（笑）。そういうことをタネにして、人間から起因している問題を、何でもかんでも神様のせいにして、人々を脅しつけて、これでケッコウ商売にしているわけです（笑）。

ですから、そういう欺瞞から解放されるのは、ヒポクラテスというのはまだ、古代ギリシアのお医者さんですから、それ以前に、すでにすこぶる健全な時代が人類にはあったわけですね。そういうふうに歴史をわざわざひっくり返す悪い趣味は、わたしには全くありませんけれども、淡々とありのままの歴史を踏まえて、ものごとを素直に考えてみる必要が、どうしてもあります。

4 人類文明の暗黒面の重要性

なだいなださんと金子務さんのお二人のお話で、なるほどなと思ったことがあります。お二人とも、同じことをおっしゃった。なだいなださん流に言うと、人類の文明というのは、暗黒面の続きなのです。やはりこの暗黒面というのが非常に大事だ、ということ。金子務さん流にいうと、なんですからね、大地母神ですから、女神が抱えていた暗いところ

のハデス＝地獄の地下の世界、そういう真暗な地下のところに、やはり人類の根源というのが在る。まったくその通りだ、とわたしは思っているのです。

古典古代ギリシア文明というものが、現在の西洋中心主義的な世界像・世界観が出てくる発端だということは、要するに、西洋中心主義のエッセンスが、そのアポロンの明晰性のなかにある、ということです。

それを明らかにしているのは、これで第1巻をつぶして第2巻にですが、古典古代ギリシア文明の、特にアテネの文明の社会構成体的な勢力の根本は、第一に、奴隷制の文明であること、第二に、男権制的・家父長制的な文明であること—これです。だから、アテネの女性は、奴隷以下的な非市民とされている。そういう虐げられた境遇にあった。つまり、アテネの民主主義の市民というのは、20歳以上の成人男性に限られておったということに、人びとがこれまで避けて通ってきている決定的な問題があるのです。

ニーチェが、二〇世紀的現代が開幕した初頭に、自らの狂気を賭して明らかにしたように、古典古代ギリシア文明というものが、「音楽の精神」を以ってするトラジェディーニ、つまり「悲劇」の文脈を述べつつ、そこにおいても、アポロンではなくて、もう一人のデルフォイの洞窟の方へうずくまっているディオニューソスの幽暗を初源として、古代ギリシア文明は在る。そして、かれディオニューソスが、年の暮れに呼ばわると、アテネの女という女が、亭主も投げ棄て、家庭も投げ棄てて、みんな市中から一斉に飛び出して来てしまっ、山へと走り、一晩中、飛び跳ねたり、踊ったり、生肉を喰ったりするのです。自己回復です。

2500年前で切らないで、その前に8000年間に亙る地中海世界史があつて、そこは「貢納性の文明」であり、「母系制の文明」であり、古典古代ギリシアの家父長的・男権文明では全く無かった。そのことを、第三巻で書いたわけです。だから、ディオニューソスはたしかに男の神ですけれども、これは時代に即して言えば、アテネの一人の市民であつて、デルフォイの神殿に鎮座していますけれども、これは共同幻想ですから、共同幻想という、万人の耳に一斉に響いてきた「共同幻聴」です。共同幻聴というのは、ぜんぜんばらばらに音が発せられても、それが意味としては同じ言葉になっている。

それを聞くと、アテネのポリス国家の民主主義的だというふうに一般に盲信されているアテネ・デモクラシーという、非常に非民主主義的な日常生活のなかで暮らさせられている女たちはみな、完全にヒステリーになっているわけです。女のほうにヒステリーが多いというのは、社会構造上、当然のことです。きちっと分析してそれを認めておく必要があります。そうすると、共同幻想でディオニューソスの天から喚ばれる声を耳にしたアテネの女たちは、いっせいに、亭主と子供たちとをほったらかして、アテネと周辺の都市から山に飛び出して、いわゆる「マイナス」の女に化してしまうわけです。

そのことを教えないギリシア史というのは、そもそもがインチキなんです。生活的には非常に大きな日常なのですから。山谷に走って行って、そこで、女たちは小アジアからさ

すらってアテネへと渡海してきたディオニューソスに従って、八千年以前からの母系制であったミノア・ミュケーナイ地中海文明の歴史復活のドラマを開始するのです。

ほんとうの話ですけれども、長く書いてありますからぜひお読みいただきたいのですが、山へ走って行って乱痴気騒ぎをするアテネ民主主義下の女たちは、そこで出会う人間は、子供も含めて、みんな殺してしまいます。そして、その生肉をバリバリと啖うのです。生肉を啖うことによって、ヒステリーから解放されて、蘇生するわけです。歌ったりはねたり踊ったり、狂乱の踊りをやり、これでもって近代悲劇を瀟過する。瀟過するのは、ディオニューソスに尽くしたがる女どもですから、そういう「バックス」「マイナスの女」というかたちで、文明的に絶えず蘇生しながら、この世に女たちは実在している。

これは、一九世紀にフリードリッヒ・エンゲルスが言った、「世界史において女性はいちど世界史的な敗北をこうむった」ということが、関係してくるわけです。それからあとは、わたしたちの問題というのは、一度、世界史的な敗北を蒙った女性たちは、「敗者復活戦」としての復権というものをやっているか、やっていないのか。やっているとすれば、どういうかたちでやっているのか。今日にまで延々とつながっている問題ですけれども、それはディオニューソスの「バックス」の徒にさかのぼって、亭主をほったらかして家から飛び出していく、あの形式です。まことに髪を振り乱して壮烈きわまるものだったろう、と思います（笑）。

「ギリシア悲劇」が伝えているのを見ると、女たちの反乱を観察しようとして、テーバイの若い王様が出てきて、女装して松の木に登って、バックスの女神たちの挙動を逐一見届けているわけです。ホレ、あそこにこちらを伺っているものがあるぞと、かの若き王の母親と叔母さんが先頭になって、叫び出し、その若い王様を松の木から引きずり下ろして、ズタズタに切り裂いて、その遺体を担いで、意気揚々とアテネの町に帰ってきているわけです。かれの母親と叔母たちが先頭に立って、若い王様の首をチョン切ってしまうわけです。イギリスの王様の首をチョン切ったピューリタン革命、フランスの王様と王妃の首をチョン切ったフランス大革命なんかよりも、もっともっと壮烈至極のものでした（笑）。

人間の外に自然があって、人間が生まれる前にもおそらく自然は在るでしょう。自然史と人間史との関係についての非常に初歩的だけれども深遠な問題は、古典古代ギリシア以来、実は考え抜かれているのですから、そのときに、パルメニデイスという最初のギリシア哲学者がいて、これはぼくの整理によれば、存在論的・認識論的にトータルな把握の仕方というものを、人類史上、最初に提起した大思想家なんです。

かれパルメニデイスの哲学は、「哲学＝存在」という一元論であった、とされています。このアイデンティティーそのもの、つまり自己内の同一性からは、一切の動態＝ダイナミズムは出てきようがないように、一見見えます。それがそういう、パルメニデイスの哲学の、「一の多」「多の一」という動態的なダイナミズムを、「一と多」との弁証法として展開・展示されています。それはなぜなのか？　つまり、人間の意識によって存在が存在と

して自覚されることによって、存在＝思想という、アイデンティティーの自己同一性が、「一の多」として歴史的な全ダイナミズムを展開してゆく、という弁証法論理が明らかになったわけです。

存在が客観的に在るというのだけれども、それを掴んで知るものがなければ、有るも無いもわからない。だから、存在は非常に悩ましい。いつもそれを知覚する認識するものとワン・セットになって生ずる。それで、近代のルネ・デカルトの『方法序説』でいうと、延長としての存在があつて、心としての自我の認識があつて、〈コギト・エルゴ・スム〉と、あいなる。延長と思惟というのは二元論なんです、二元論に別けてみたところで、それがワン・セットに成って、認識論的にかつ存在論的に存在が存在する、ということにならざるをえない。

これは、現代のマルティン・ハイデッカーという哲学者の意見なんですけれども、そういう存在論的存在の構造というのが、やはり認識されなければ存在しない。その面を極端にまで考え詰めるのであつて、そういうものが有るか無いか分からないが、考えてから有るよ、ということにあいなる。そういうことでなければ、根本的に言って、わたしたちは、存在論的・認識論的な〈有〉はありえない、という悩ましい問題にぶつかるだろう、と思います。

5 文字に記録された歴史の構造と意味

この問題は、文字による記録による歴史の発生の確認という問題と、重なり合うのです。エンゲルスが、マルクスと一緒に『共産主義宣言』を書いてからあと、〈注〉をつけて、**「原始共産主義」**を歴史の始まりに据えたんですが、その**「共産主義」**というのは、文字による記録が始まって以来、歴史における共産主義ということ、かれエンゲルスは、明らかにしたのです。

これはなんでもないようなことなだけども、ものすごく深遠な問題です。つまり、歴史の端緒とは、共産主義の一番もとにあるものではなくて、文字に記録された歴史の端緒なのです。文字がそこに在るということに、すでにそこに自分史的な啓蒙による文明開化支配があり、そこに権力がある、ということになります。そうで有る以上、「原始共産制」というのは、むしろこの藤沢市の片瀬山に住んでおられた中村吉治博士が喝破されたように、「身分制文字社会」として、すでに「無階級社会」を解体して出てきているわけです。そこでは、それからわたしたちの階級の歴史が始まるわけです。本来の原始共産制は、まだ認識されていない歴史なんです。つまり、「先史」社会です。

認識論的・存在論的な歴史の捕まえ方をしますと、個人が共同体になっていないのはまだ歴史になっていない、ということになり、歴史ということ自体が、或る種の不合理性なのです。にもかかわらず、現代では、人間がそこに介入する余地のない自然史とか宇宙史だとか、というものもまた、歴史的な構造を持っているということが、判明されてきてい

る。これもよく考えると、アタマがグルグル廻りまわってクシャクシャしてまとまらないくらいです（笑）。大変な問題なんです（笑）。

どういふわけか。宇宙とか、自然とか、地球とか、そういうものは、歴史的な構造を持っていますから、人間は、そこには、本来的には関わりが全くないんです。人間なんか一人も居なくたって、それらはちゃんと回転している。だから、弁証法は、人間史から始まる、〈自然弁証法〉というのは、エンゲルスの論考だと、20世紀現代のマルクス主義ルカーチ・ジョルジュ先生ですが、かれはそんなエンゲルスの〈自然弁証法〉なんてものはどこにも無い、自然はまさに人間がそこに居ないにもかかわらず、ちゃんと運動・展開しておいて、〈自然弁証法〉とは、エンゲルスが概念化して ひねり出したものであって、弁証法は本来、人間の意識から始まる、としたわけです。もちろん、そういうルカーチの考え方は、上下顛倒した間違いなのです。

むしろ、そこから今度、逆算して考えてみますと、人間の文字によって記録された歴史というものも、そういう自然史が歴史的構造を持っているということの、或る種の延長というのも、ちょっとおかしいけれども、「アナロジー」と言ったらいいかな、アナログアでもって、そういう構造を持って現在に至っている、そういうふうに考えるのがいいだろう、とわたしは考えています。

ルカーチ・ジョルジュの〈自然弁証法〉否定に反して、それが果たしてエンゲルス式定式化の形をとるかどうかは、また別問題としても、自然とか宇宙とか原子とかいった物質には、人間が地球上に発生した以前から、自然と歴史はちゃんと弁証法運動を不断に展開しているわけです。

だから、マア、わたしたちの存在論的・認識論的に生きているとさえ言える〈狭義の歴史〉を看とって、このような三巻本を、わたしは書いたわけですがけれども、歴史を見たり、見出ししたりするというのは、認識の力が要るわけです。或る種の人間の認識力をもっている概念・範疇・カテゴリーというものがあってはじめて、歴史というものも視えてくる。言い方は非常に気をつけなければならないのですが、少なくとも歴史の意味がそこでつかみとられてくる、という構造を持っているのは、確かなことです。

だから、「観念論」というのは、世界観の歴史観を先ず大事に、そういう概念とかカテゴリーとかの「観」というものがなければ、歴史は視えてこない。すべての歴史に意味が出てこれない。視点があってこそ、物事ははじめて視えてくるわけです。要するに、時代を総括的に把握するさい、主要な概念とか範疇がどこにあるのか、というテオーリヤ「観」が、どこにあるかを、よく考えてみる必要がある。だから、わたしは、「念力」だ、というわけです（笑）

そういう観点から観ると、まず、最初にこの本を総括的に考える場合には、世界史的な近・現代を考えなければならない。それから世界史的な近代を考えなければならない。世界史的な近代というのは、わたしたちが生きている、〈大航海時代〉以来、あるいは18世

紀の「産業革命」いらい、わたしたちは「市民概念」としての資本主義という歴史的、経済的な極めて特異な時代の裡で「生きている」のでありますからして、それ以前のさまざまな共同体の世界史が先行・先在して有るわけでしょう。世界史的なプログラムというのは、範疇とか、概念として、どう違うかというところを、ちゃんと観なければならぬ。

そこには先ずもって、もろもろ・さまざまな多種・多元・多様・多変な共同体国家社会があって、それと対比してみて、世界史的近代というのは、いかなる意味でも共同性市民社会なわけのものです。

「市民社会」というのは、要するに、商品・貨幣経済が支配することによって、あらゆる共同体性がそこでは解体してゆく。解体された近代のなかにも、たとえば、「家族」といった最古の共同体は、「最後の共同体」として残存している。家族の解体というのも、さまざまな形で近代化・現代化過程で解体させられてゆくわけですがけれども、市民社会というのは、明るいだけ一方の啓蒙性のものでなくて、つまり、共同体というものを、商品・貨幣経済の発達によって物象化するために、いかに非人間的な「合理化」社会になってゆくか。マックス・ウェーバーが、「世界合理化」という人類史の宿命を見届けて、「合理化の檻」と名付けた問題です。そこで再び、世界史は「ヌース」＝「理性」による物象化の檻という形に捲き戻るわけです。

聖なる宗教的価値によって価値統合・社会統合されている、もろもろ・さまざまな共同体が、商品・貨幣経済の発展によって崩壊を遂げてゆく最後の場面に、わたしたちはいつも三面記事的につき合って生きておりますが、それは結局は、「世界帝国」へと行く。先ほども述べた〈オリエント世界帝国〉〈ヘレニズム帝国〉〈ローマ帝国〉〈ドル・核世界帝国〉の問題です。

これは、ものすごく大事な問題点なんです。前近代の共同体と世界帝国、そしてそれから、イマニュエル・ウォーラースタインのいう「世界経済」です。

したがって、未来の「高次共産主義」という将来展望は、資本制世界の発展を「世界経済」として濾過した上での「世界帝国」共同体の高次復活という形にならざるをえない。まあ、「高次共産主義」の時代というのは、もろもろの多数の小さい共同体国家社会とそれを自由・平等に連結した世界帝国なんでしょう。

これは、例えば、西ヨーロッパ人が「トラウマ」になるほど把握するのが難かしい、12世紀にユーラシア大陸を一元化したチンギス・ハーンの「世界帝国」の問題です。「モンゴル大帝国」です。三代目の「元」をフビライ・ハーンによって作られた、それは「元」と位置づけられた、まったく一元的にして始源的な帝国です。

そこでは、モンゴル人がキャップであるけれども、中央アジアのあらゆる人種の「色目人」が、北京に集結して、非常にインターナショナルな「世界帝国」が出来上がった。そのことによって、ユーラシア大陸は、「シルク・ロード」と「南海航路」に沿って、一元的・普遍的な交通＝フェアケールが安全に確保されるにいたった。

マルコ・ポーロの『世界遊覧記』や、三蔵法師玄奘の『大唐西域記』や、イブン・ハルドゥーンの『歴史研究序説』などを観れば、そのことがよく分かります。これはつまり、人類文明史的な〈近世〉というものの典型を作ったわけです。〈近世〉がなければ〈近代〉もありえませんから。〈近世〉というのは、共同体のギリギリのところ、近代の商品・貨幣経済社会を呼び起こす時代概念規範です。

6 「近世」の歴史的規範概念

この〈近世〉という歴史的な規範概念は、「元」に滅ぼされるにいたる「南宋」を専門的に攻究した、わが湖南・内藤虎次郎先生が先駆的に創造した歴史概念であり、これをマスターすれば、マルクスが「中央集権的封建制」と形容矛盾的にアナロジーした江戸時代の「近世」的性格も明瞭になり、ひいては西洋史を含めて、世界史的な〈近世〉概念が、西洋的〈近代〉の前史として、明確に位置づけられてゆきます。

わたしたちは、ヨーロッパ人とちがって、古代ギリシアが、世界帝国を経験するのは、アレクサンドロス大王の「ヘレニズム帝国」であるということが、パッと分かるのは、内藤湖南の〈近世〉概念の念力があるからです。それが世界史的に滅亡したのは、今日の主題である「古代ローマ世界帝国」の衰亡史によってです。

しかも、ヨーロッパ人にとって、なんで、ギボンの『ローマ衰亡史』が、ベスト・セラーになったのか？ 今の話で塩野七生さんが膨大なローマ帝国の歴史を書いていますけれども、それは、あまりインパクトが無いのです。なぜかというと、彼女には、このことのかんじんなモチーフがよく解っていないからです。

ヨーロッパ人にとって、ギボンのそれがどれだけ大変であるかという、何と言っても、ローマは「永遠の都」なのです。「永遠の都」だから、きわめて安気に国家的に、すべての道が通ずるように歴史が地理学的に出来上がっているわけです。そう思って、西ヨーロッパ人は久しく暮らしてきた。それが滅んじゃったわけですから、これは大変ですよ。それも第三巻で書いてありますから、読んでいただきたいが、「西ヨーロッパ帝国」が滅んだことを、西ヨーロッパに暮らしている人自体がびっくりして、世界が滅んだ、滅んだ、と騒ぎ出した。

こちらのほうに行くと、ビザンティンの方はどうなんだ、あそこにはちゃんと「ギリシア帝国文明」と言って、「ローマ世界帝国」がチャンと継承されていたではないか、ということが出てくる。西ローマ帝国の狭いところでは大騒ぎをしているけれども、「東ローマ帝国」として歴大にかつ高度なローマ世界文明が残っているわけです。なにしろ、「東ローマ帝国」はヨーロッパ人によって大騒ぎされた「西ヨーロッパ帝国」の滅亡から、さらに千年間近くも生き延びたわけですからね。

ビザンティン文明が、西ローマ帝国文明よりも蒙昧であるなんてことはまったくありません。そういう通説は、西ヨーロッパ中心主義がでっちあげた迷信的虚構です。「トルコ

帝国」にまで残っているビザンティン文明というのは、そこにも、キリスト教、ギリシア正教、ロシア正教があって、また、ロシアやトルコに生きている人びとを含めて、世界の唯一神教は、ローマ・カトリックの方にだけ在るだけではなくて、ロシア正教の方にも在ると、信じていたのです。イスラームにしたって、ギリシア正教、ロシア正教、ビザンティン正教ともども、したがって、これはやはり、西ヨーロッパのカソリック主義からは、はみだしてしまっていたのです。

それは、西ヨーロッパ人にとっては、大変なことなんです。東ローマ帝国は、西ローマ帝国よりも千年間近く長く持った。つまり、コンスタンチノーブルがイスラームによって占領されるまでは持ったわけです。このビザンティン文明は、非常に偉大なものです。そういうふうに、今日の高校式アンチョコ的歴史教育の物事を習っていることを、あまり鵜呑みにしないことが必要であろう、とわたしは強く思うんです。

7 東アジア文明と中華文明

それで、世界史における〈前近代〉というのは、さっき言った、文字に記録されたのが歴史だ、ということから言うと、東のほうは、司馬遷が書いた『史記』なんです。司馬遷の『史記』は、とても面白い史書なので、ぜひみなさんお読みいただければいいと思います。これはどういう世界史観かという、要するに、秦の始皇帝で言いますと、「万里の長城」を築くんです。「万里の長城」という長大極まる大建造物、つまり、その向こう側の外の方は、大草原で遊牧する匈奴以下、突厥、そして、大蒙古へと続く、偉大な遊牧文明民族です。

もちろんのこと、秦の始皇帝がはじめたほうの中国文明というのは、これもまた、世界の五大河川大文明の中で唯一現在にまで残っている、非常に偉大な農耕文明ですけれども、基本的にこれは農耕文明であって、小麦とか高粱とかの文明ですから、いつもその農作物を狙って大草原の遊牧の民が入ってくる。それに悩まされ続けたのが、2000年を超える東アジア文明＝中華文明であったわけです。

そこに「認識上の識別線」をキチンと引いて、中国の偉大な王朝国家というものの原理を明らかにしたのが、始皇帝の「天下草創」であって、これが、司馬遷の『史記』の認識論的な解釈だろう、とわたしは思います。具体的に言えば、漢の武帝が、始皇帝の「秦」の遺産を承け継いで、中央アジアの方向まで中華帝国を一元的に血統的人脈を含めて、歴史上、統計的に解明した、というものです。

日本という、東アジア唯一の帝国主義国にまで上昇した、勢力東漸下での近代化に接続されたことで、2000年生きてきた偉大な中華冊封朝貢体制が、明治維新以来あるいは辛亥革命以後は、無くなってしまうわけであって、この現代へと接近する勢力東漸下でのアジアの近代化過程を、セポイの乱→太平天国の乱→明治維新として、不可分にアプローチしてゆかなければならない。

そのように考えてみますと、例えば、隋の煬帝というのがあります。この隋は、秦同様な「世界帝国」かというのと、大運河を作るでしょう。大運河を作るというのは、中国の北と南とを、つまり、江北と江南とをつなげる。江北文明であった古い中国を、揚子江文明である新しい江南文化につなげて一元化したから、これで、東アジアにおける「世界帝国」の大中原が出来るわけです。

煬帝がそういう作り方をするから、煬帝は、日本と琉球に使いを遣わして、自分の領分にしようともする。琉球がどこにあるかは、かれらにはちゃんとわかっている。こちらの南西諸島の方では、大清国との対外関係では中華の側からの呼称のままに「琉球」と呼び、島津のお国入り以降の対内関係に即しては、「沖繩」あるいは「ウチナー」と呼ぶ。

台湾は「蓬莱島」という島であった、と観られている。かれ隋の煬帝は、多分、琉球なり、フィリピンなり、台湾なり、そういう自分の帝国の範囲を広げた「世界帝国」を構想しており、だから「世界帝国」を表象するためには、秦の始皇帝のことを思い浮かべなければならない。こうした中華冊封朝貢体制としての農耕文明、中華世界帝国であって、それが、明治維新と辛亥革命とより以後の「脱亜入欧」「富国強兵」「殖産興業」の近代化過程で「日韓併合」「琉球処分」「台湾征伐」へと続いて行ったわけです。

西のほうは、金子務さんがおっしゃったように、ヘロドトスの〈歴史〉から始まります。ヘロドトスの〈歴史＝ヒストリアイ〉というのが、なぜ世界最初の歴史書かということがあります。かれは、文字化されていない小アジアのことをまとめていますけれども、圧倒的に、古典古代アテネに代表される、地中海世界の都市ポリス国家が、ペルシア大帝国を打ち負かした「驚異」のことをヒストリー化したわけですが、そういうことで、主題は何かということを知りきったうえで、オリエントやエジプトやペルシアの方のことを、みな失念しちゃっている。

さっきの概念範疇でいうと、ペルシア世界帝国と地中海の世界帝国の覇権を争ったアテネが、今度はスパルタとのギリシア都市ポリス文明内の「内乱」の出来（しゅったい）です。ペロポネソス戦争の長期慢性化へと突入してゆく。ここにヘロドトス、ツキジデスの〈ヒストリアイ〉に収斂されてゆくわけです。

ヘロドトス的地中海世界史では、その歴史の初源は、ポリス諸国家、だということになるわけです。この地中海世界の覇権戦争は古代の「世界戦争」です。そこでもって、歴史が東西に分かれたでしょう。歴史はそこから生起した、とヘロドトスの〈ヒストリアイ〉が謂うわけですから、なんでそれがかれにとって「驚異」になったのか？ ペルシアが負けてアテネが勝った、だから、かれヘロドトスは、それが驚天動地の「驚異」だとして、〈ヒストリアイ〉を書いたのです。ペルシア大帝国が敗れて、眇たるアテネ・ポリス国家が勝った、ということに、「ヒストリー」信仰というのが認められる。その「ヒストリー信仰」が、貢納制や奴隷制や男権制であったことが、ヘロドトス〈ヒストリアイ〉以前の大主題でした。或るテオーリア「観」を据えたときに、歴史はそういうふうにはしか見えて

こない。そこからそのまま、とうとう 21 世紀の今日まで来てしまったわけです。

文字化されたものから歴史がはじまる、というエンゲルスの根本規定を踏まえながら、なおかつ、ほんとうに考えれば、二千数百年の古典古代ギリシアらしいの人類文明でもって、人類文明史を語るのは、思いもつかない矮小化になってしまいますよ、ということをおわたしは言いたいわけです。

今日も、金子務さんが、エヴァンスのことをお話になったことに尽きるのですが、今度の第二次世界大戦の前後のことだと思うのですが、だから、最近も最近のことなのでして、そんなエヴァンスの発見が出ようとは、西ヨーロッパ人も、日本人も、世界中のだれもが、思いもかけなかったのですから。

イギリスのエヴァンスが、クレタ島へ行って、以前から見当はつけていたのですが、クレタ島の、文字をもった古代文明の遺跡を発掘した。

エヴァンスがクレタ島を掘ったら、例のわたしの言う「念力」で出てきた（笑）。これは、クレタ独特の文字だったのです。エヴァンスは、「クレタ学者」ですから、かれは、クレタが地中海文明の中心であって、この古典古代ギリシア文明というのは、このクレタ文明が第二次的に波及したものだ、と信じていたのです。

それを信じるとどうということになるか、というと、クレタ文字がギリシア文字であることを、解読できた。アルファベットではない別のギリシア文字が、クレタ文字なんです。

だから、クレタ文字がギリシア文字のアルファベットよりも前の文字ですから、地中海文明の歴史には、アルファベットで記されていない以前のところに、すでに文字があったのだから、私に言わせれば、記録されたものとしての歴史がそこにはすでに在った、という新たな筋書になるわけです。エンゲルスの言う文字＝歴史という観点から見て、歴史はその分だけ遡る筈なのです。

地中海世界には、たくさんの島々があつて、そこにはそれぞれ、各々の島の城砦国家があつて、そこで使われていたエヴァンスが発掘して整理したクレタ文字の解析を見ると、城砦家産国家ですから、なんといいですか、これは、一国家族「経済経常収支」表というか、羊が何頭、牛が何頭、と出入りが細々と記入されている。一種の家政経済＝オイコノミーですが、それが解読されたのです。この「オイコノミー」から、「エコノミー」と「エコロジー」も出てくる。

その解読によって、2500 年以前の古代ギリシア文明の、そのまた以前の 5500 年間の地中海貢納制・母権制国家の在り方というのが、あぶりだされてきたのです。だから、わたしは、どうしてもこれを書かなければならない、と決心したのです。高校で教わる世界史は、全部が全部インチキとまではわたしは言わないが、根本的にそれは嘘である。それは今や、エヴァンスのクレタ文字の発見が為されて、その国クレタの歴史が明らかになったのだから、人類の起源の歴史は、8000 年遡ると言う新しい見地に立って、その解明に取り掛かなければならない。その念力で見ると、いろいろと見えてくることがある（笑）。

8 甲骨文字解読の歴史的意味

東の方のことも、西の方との対照均衡上、もうすこし言い足します。東の方では、司馬遷の『史記』以降の歴史も、甲骨文字が清末に羅振玉によって発見された以上、書き改めなければならない、とわたしは思っています。東西その軌を一にする。東西軌を一にすることは、全長ですから、東に脊髄があるんで、わたしたちは多くのことを、以前よりも今はよくわかっているわけです。

甲骨文字による卜占による歴史の意味の解読は、殷の時代のことですから、殷の文明の在り方では、文字の卜占ということが非常に発達していますから、その殷の時代に「甲骨文」という焼き卜占というのを発明したのです。

いま、甲骨文は分かりきったことですがけれども、分かりきるまではだれも分かっていない。北京で薬屋が、甲骨というものを、どこからか持ってきて、これを砕いたものを風邪薬として売っていたんです。北京にいた羅振玉という人は、非常に優れた敏感な歴史考証家で、それがどこで手に入れたかが気になって、そこで、とある村から北京の薬屋に持ち込まれたことを知り、その持ち込んできた百姓たちを辿って、その湖南省の村まで行って殷時代の甲骨を買い集めだした。すると、村人たちが金になるので、それをたくさん羅振玉のところへ売り込みにやってきました。その甲骨に占いの文字が書いてあった。これで「甲骨文」が明らかになったわけで、古代国家というのは、神聖な卜占国家ですから、そこにおける政治的行為、経済的行為のパターンというのは、国家・国王の占いによって一切やるのですから、朝から晩まで殷人は酒をくらは、甲骨文字の国家卜占による解読で、日常の大事のすべてを決定していた。

つまり、甲骨文字は殷の国家の文字であって、殷というのは、だいたい「酔っ払い国家」ですから、そこで、羅振玉の甲骨文研究が出てきたんです。これの解読によって、漢字の由来というのが分かってきた。だいたい、1889年の発見以後、殷王朝の實在の司馬遷の『史記』の記述がもっと遡りうるとされたわけです。

日本の京都帝国大学系統の貝塚茂樹博士以下の学者はみな、清朝末の考証学者羅振玉の親友ですから、ここに殷の甲骨文字の研究が隆盛になり、これまで、白川静博士にいたるまで盛んに続けられてきた。司馬遷はもちろんのこと、甲骨文のことを知らなかったわけですが、この大歴史家が『史記』で記していた〈殷周革命〉が実は實在していたということが、完全に実証されるにいたった。この「殷」は「商」ともいう、牧畜・商業・交易文明であり、その歴史的 content が次第に解明されてきたわけです。

羅振玉の甲骨文の発見と解読とで、孔子以来の「周」以前のところが次第に分かってきた。現在もまだ掘っているのです。これからも何がいったい出てくるか、それで歴史がどんどん遡って分かって、変わるんです、東洋史も。改めて、そこから考え直してみる必要がある。だから、東西軌を一にするというのは、羅振玉が、甲骨文字を発見して、甲骨

文字を解読した、そうすると、不思議に思うんですが、そういう〈観〉を持っていると、こんどは、石に彫ってある文字などが見えてくるのです。これは恐ろしいもので、やはり〈観〉という念力がないと、見えないのです。「金石文」の発見です。これもわが国の白川静博士が、「甲骨文」と同じで、世界一に強い。

先にも触れたように、清末の考証学者羅振玉の日本での親友が、京都帝国大学時代の貝塚茂樹博士らで、それが京大を中心に学問的に大発展しますから、甲骨文研究、金石文研究でも、日本は世界無比に強いんです。現代日本では、わたしが一番尊敬している白川静博士という独学者は、「金石文」を見つけ解読した。こういう人の文章を読むと、漢字の古来の大本は全部、明らかになる。それが、東洋史の全体の書き換えにつながってくる。そこからのヒントで、アナログカルに考えれば、エヴァンスの発見したギリシア文字に匹敵する原古文字発見が、東洋史の方でもあった、ということになります。

あと10分です(笑)。さきほど、金子務さんも指摘されましたが、わたしは、念力でもってエヴァンスがクレタ文字の発掘から地中海世界史が世界史である、と考えたことに鑑みて、その地中海世界史というものを、ミノア・ミケーナイ地中海文明である、と規定したわけです。これは、場所はちゃんと判っているし、ギリシア文明と地理的に重層しているけれども、歴史的な由来は、「ミノア・ミケーナイ文明」という、古代ギリシア文明の前段の文明であって、それは、金子務さんのおっしゃる「女権制の文明」であり、「貢納制の文明」であって、それは絶対に、奴隷制と家父長制の古典古代ギリシアの文明では無い。これは、非常に大事なところなんです。

そこが重層しているところから、非常に問題が見えづらくなっている。だから、この由来とパターンとを切り離して、相互分離のうえに世界観・世界像を立てなければ、今日の世界をほんとうには把握できない。地中海世界には、いまはミュケーナイ文明、バツハホーヘンが発見した母権制的で貢納制的な城砦王朝文明というものが、5500年間にわたって先駆けてあった。そのことを抜きにして、古典古代ギリシア文明 2500年以降の世界史で、間に合わせるなどというような横着なことは今ではもうできっこない。

9 「トロイ戦争」の歴史的位罫

もうひとつ大事なことは、さきほど、金子務さんが「トロイ」というのはこの辺だ、この地図の上でと言われましたが、要するに、当時の「トロイ戦争」というものの位置づけが、根本的に大事なことです。

「トロイ戦争」は、シュリーマンというすばらしい感性をもった男が、子供の頃、「トロイ戦争」の話を読んで感動していたのです。あとは、お金が溜ったらトロイ遺跡を掘りに行こうということで、かれは生きてる間に幸いにその時がやって来て、これも念力をもって掘ったから、驚くべきことに七層にもわたって、「トロイ遺跡」が出てきたんです。最後の「トロイ戦争」は、十年間戦われましたが、「トロイ」という地中海世界の生死を

決した世界戦争というのは、総体として百年以上戦われたのです。二〇世紀的現代の文明がウェスト・ランド（荒地）化してしまった世界大戦だって僅か二回ですからね。七回もの世界戦争の繰り返しで、完全に完膚なきまでに滅亡してしまった古代トロイ文明が、七回も不死鳥のごとく再建を果たした上で、ついに力尽きてしまって、地中海世界文明のミノア・ミュケーナイ文明は古典ポリス国家都市文明のアテネへと移行した、ということも当然なことであったわけです。

七回にわたって戦われ、滅ぼされては建て直したところをまたシュリーマンが掘り、滅ぼされては建て、建てては掘り、ということは、当時、「トロイ」は地中海世界の文明の一番の中心ですから、金子務さんがみごとにおっしゃたように、トロイを通じて黒海地方の多くが押さえられているわけですから、そこを通してギリシアの田舎のほうに配分されるというだけの話なんで、トロイを制するものは地中海世界を制するから、その戦争というのは、きわめて大規模で長期に渡って、百年間以上にわたって実に七回も戦われた古代の「世界戦争」だったんです。

トロイがいかにかに地中海交易の中心として繁栄する自由権を持っていたか、そして、七回滅ぼされて七回蘇がえってきたことが一例えば、ハンニバルの故郷フェニキアの文明というのは、古代ローマ帝国の世界一の軍事力によって完膚なきまで徹底的に滅ぼされて湮滅させられてしまったわけですが、一度滅ぼされたら最後、焦土の上に塩まで撒かれてしまって、文明の中心としてはもはや蘇えり得なかった。だから、文明の復元力というのは、地中海世界の中心でなければありえないことなのです。

それが、百年以上も戦われたトロイ戦争によって、「ミノア・ミュケーナイ地中海文明」はついに、回復不可能に滅ぼされてしまったのです。そのいわれが、ヘロドトスの〈ヒストリアイ〉が驚異の念をもって描出した、古典古代ギリシアのポリス都市国家の出現につながるわけです。

さて、ところで、少年時代の夢が叶って、トロイを発掘して七層ものその遺跡を発掘することができたことで味をしめてしまった、かのシュリーマンは、ここ掘ってワンワンで出てきたから、今度はミケーナイ文明を読んだことがやはり昔あって感動したことがあったので、今度はミュケーナイを掘ればまた何か必ず出てくるぞ、ということで、また掘ったら、これが念力でありまして、今度もまたまた、本当に出てきたのです。だから、絶対に念力ですよ（笑）。

そのように、トロイ戦争を位置づけると、『イリアス』や『オデュッセイ』というホメロスの叙事詩がよくわかってくるのです。ホメロスの叙事詩というのは、ホメロスは、古典古代ギリシア文明の曙の直前のところで、古典古代の「ユリシーズ」を書いた。マア、このわたしの『主体のユリシーズ』三巻本の古代版といったところですが、それをホメロスが書いたというよりは、それでもって地中海世界の村人たちに『イリアス』や『オデュッセイ』を朗唱して、同時代の歴史として語り聞かせたところ、聴衆の村人たちとしては、

地中海世界の自分たちの由緒を聞きたいので、夕方になるとみんな集まってきますから、そこでホメーリダイたちは、『イリアス』と『オデッセイ』の歌物語をしたわけです。だから、地中海世界の民というのは全部、トロイという世界戦争によって、地中海世界が滅びたということの、世界的ノスタルジアの裡で生きていて、自分たちが、どこからきて、いまどこにいて、これからさらにどこへ行くのか、ということ、みごとに心得ていて、健全きわまる歴史観をもって生きていたわけです。

そこから逸脱することは、人間が生きるためのポイントを失なってしまうことですから、そのことを毎晩、毎晩、ホメーリダイたちの高らかに朗唱する叙事詩を聞きに集まってきた。ホメロスの末期のときに、フェニキア文字からアルファベットが出てきて、ホメロスは、それによって、書き文字によって歴史を綴ることが出来たのです。だから、ヘロドトスが文字にした歴史を書いたという前に、わたしはかねがね疑問をもってきていましたが、ホメロスの時代、つまり、地中海世界の「暗黒時代」といわれておった時代に、その末期ではあるけれども、かれホメロスはすでにアルファベットを知っておって、その歴史をチャンと口承から文字記録に起こしたのではないかと。そう思うと、ヘロドトスの〈ヒストリアイ〉の歴史時代に、さらに一時代遡って、歴史を論じなければならない。ですから、この〈古代のユリシーズ〉ということにあいなるわけのものです。

だから、中世における西ヨーロッパにおける学問のほとんどは、イスラーム文明がアラブ世界で温存していた古代ギリシア時代の文献に依拠しながら、ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイ』の整理、それとアリストテレス哲学のアラビア語記本の整理に、全部費やしたと言っている、ともわたしは思いますので、これも立派な文字記録された歴史なわけです。

これだけでも、わたしたち人類は、どれだけの恩恵をアラブ世界に蒙っているか、計り知れないものがあると思います。だから、トロイ戦争についてはっきりさせたということは、ホメロスの位置づけをはっきりさせたということでもあって、その時には、すでに歴史の黎明期というのが始まりだしていた、ということです。そのうえに、戦後にエヴァンスのクレタ文字の発見があったんで、これで歴史が 5500 年前にはねあがったのです。それによって、8000 年の世界史の本論というものが、明らかになった、と思うわけです。

10 ローマ帝国の形成と滅亡

これで、あと 5 分です (笑)。簡単に、5 分間で、ローマ世界帝国まで行きます (笑)。先ず、古典古代ギリシアのポリス国家がいつ滅びたか、という問題があります。これも、こんな簡単なことも、明らかにしている歴史書は、残念ながら、これまでどうしても無いのです、そこを見ていただきたい。

これは、普通に言われていることは、まったくインチキで、本当は、前回は申し上げたように、アレクサンドロス大王の大東征によって、「ヘレニズム世界帝国」を作ったとい

うことが、古代ギリシア都市国家文明と古代ローマ帝国文明との間に入る。そのことによって、つまり、その世界帝国の原理の反対だから、当然、テーバイとアテネを中心にする最後のポリス都市国家は、アレクサンドロス大王の遠征開始中、原理が全く違うから、大王に対する身の程知らない、小さい「自己幻想」的な叛乱を起こすわけです。例の「ギリシアという幻想」が、自己幻想として為せる業でした。アレクサンドロス大王は偉大な大王ですから、最初に叛乱を起こした例のデモステイス先生のテーバイのことは、見せしめのために完全に殲滅したのです。皆殺しです。これに震え上がって、アテネはじめポリス国家は全部、アレクサンドロスの前に屈服して、自己解体してしまうわけです。

だから、世界史の真相としては、アレクサンドロス大王の東征にやられて、この時はじめて、最後のポリス国家が全部、息を引き取るのです。そんなことさえも確認しない「世界史」なんて、インチキもいいところじゃないですかね（笑）。

その次に、前回も申し上げた通り、アレクサンドロス大王は、その軍を直ちにそのまま率いて、ダレイオス大王の偉大なるペルシア帝国の制圧にかかるのです。三回にわたる大世界戦争があって、それぞれ 50 万からの大軍勢を擁して、三回ともその大戦闘でアレクサンドロス大王の方が勝つわけです。それで最後、ペルシア帝国の最後の王ダレイオスは、逃げる途中で身内のものに暗殺されて、路上の馬車の中で息を引き取る。このところで、ペルシア大帝の運命は、はじめて終わるのです。ペルシア帝国史というのは、今の歴史書に記されているよりも、ずっとあとに下げて考えなければならないわけです。ここで〈歴史は東より〉と言われた、オリエン特時代は決定的に終焉させられるわけです。

つまり、ペルシア大帝は、〈ヘレニズム時代〉に、アレクサンドロス大王の大東征によってはじめて滅ぼされてしまった世界帝国なわけです。だから、そこは、「世界帝国論」としてはきわめて面白いところです。〈ヘレニズム〉という新しい世界原理にもとづく世界帝国が、ペルシア帝国という古い世界原理にもとづく古い世界帝国を滅ぼしたのです。その違いがどこにあるのか？ そのヘレニズム帝国を経ますと、古代ローマ帝国が「市民原理」にのっとなって作られてくる、つまり、ポリス的な古典古代ギリシア原理によって作られている、「新しい世界帝国」の形成なんだということの再検討が、これで可能になるのです。

それは結局、原理的にはどうということかと言いますと、原理としてギリシアからローマへの古代ぎりぎりのところまでゆくでしょう。自分の足元の創立原理である「市民」権利は、「市民派」の異域・異族へと世界的規模へとローマ世界的規模で極限にまで拡大してゆき、一種のマッチ・ポンプをそこではやっているわけですよ。そういう時に、マッチ・ポンプやりながら、古典古代ギリシアのポリス原理が、後の古代ローマ世界帝国のローマと違う点は、自分の論理の「市民権」というものを厳格にそういう小土地所有者の古い市民資格に極度・厳格に限定してゆくのか、それとも、どこの異国・異域・異族の征服でもジャンジャン、ローマ市民として拡大しながらやってゆくのか、ということの歴史的選択

になるわけです。

ペリクレスのアテネは、そういう小土地所有者イコール市民イコール戦士、ということなのです。だから、あれだけ広大な海上交流と船舶業を実現し、そこで外資を貸してくれる人や両替をやってくれる人にも、一切市民権を与えないで、「エトランジェ」として取り扱い、外人扱い、客扱いにしていたのです。これが、アテネ的なポリス都市国家に特有な限界をとっぴらって乗り越えた古代ローマ帝国は、それまでは首都ローマにだけ限定された「市民権」を、ローマ帝国が世界帝国として世界的大規模に広がってゆくにつれて、世界帝国の版図内のあらゆる人々に、市民権を惜しげもなくジャンジャン付与して、ブリテン島からゲルマーニアへと世界帝国化してゆくのです。

これが、世界ローマ帝国の巨大な発明です。ローマは政治と行政を発明した、とよく言われますが、その中味を直ちに問わなければならない。その中味の核心は、ローマの世界帝国が、古典古代ギリシア・ポリス国家のなかでは市民権の制限と限定と自衛をやっていたのを、権益の世界的拡大と共に完全に取っ払ってしまって、それを世界大に拡大したところにこそあるわけです。

世界ローマ帝国の滅びた原因とは、あれだけの歴大な古代ローマ帝国の在り方の秘密を、いまの塩野七生女史はまったくよくわかっていないところなのですけれども、いま言ったことでどこに原因が出てくるか、すぐに分かる。拡大した「市民権」のブリタニアとゲルマーニアという根源的にローマとは異民族であって、本質的にローマ市民たりえない「バルバロイ」とがぶつかって、古代ローマ帝国に大動揺が生じ、ローマ市民そのものを自滅させてしまったわけのものです。

これで、古代ローマ世界帝国は滅びたのです。わたしが思うに、そのことを一番よく書いているのは、ヘロドトスとツキジデスの〈歴史＝ヒストリアイ〉を意識的に継承しようとした、タキトゥスの〈同時代史〉なのです。タキトゥスの着眼点は一かれは、ゲルマーニアの出身者でありますから、「市民権」を世界化してしまった大元のローマ市と、バルバロイのゲルマーニアとの激突が始まると、かれ自身は、ローマの元老院の急進的な共和派の議員ですから、差しあたり政治上の憚りかたが在って明言はしなかったけれども、タキトゥスのその二つの偉大な史書には、どちらもバルバロイによるローマ市への侵入が近いだろう、という強烈な予感のもとで、ペンそのものを止めざるを得なくなって、そこで、かれ畢生の史書は文字通り二度ともふつんと中絶されておりますけれども、それで滅びるという話が、その後に完証されていったのです。

その滅び方は、どういうことかということ、ネロが滅びたという形で現われたのです。これは、タキトゥスの歴史家としての並々ならない力量です。ネロのああいう苦悶というものを、個人的な変わった人だ、とエピソード化する塩野七生女史は、私小説的・通俗小説的で面白くはありますものの、その、基本的には、歴史のそういう道理のなかで、かれネロの狂乱の原因もはじめてきちんと理解できる、という風にこれを切り離さなければな

らないわけです。

ローマの元老院議員であったタキトゥスが、「パンとサーカス」に明け暮れているローマ市民の裡に在って、〈バルバロイ〉とされているゲルマーニアのほうに、世界史の未来への胎動がある、と見てとった。非常に文明的頹廢の極致に達していた「狂帝」詩人のネロの問題です。

だからこそ、かれネロはローマの大火に際会して、その高尚な(!) 文人趣味そのものを発揮して、夜をあげて古代都市の滅亡の詩を吟誦して喜ぶネロが、「暴君」である所以なのです。それもけっして、塩野女史が出しているようなメロドラマでは決してないわけです。そういうものが、そこで、滅びるべくして滅び去った。これは、古代ローマ帝国が滅び去った歴史的必然性の問題です。こうして、わたしのこの本の第三巻を、書き収めているわけです。

11 世界帝国の世界史的推移

だから、その通り理解することによって、古くから「東と西」という大問題があり、近くは今言ったような「世界帝国の世界史的推移」の問題がある、ということ念頭に置くならば、現在の、例えば小泉純一郎首相が、なぜサアークに自衛隊を派遣して、集団的自衛権で来年憲法九条との矛盾を乗り切ってゆこうとするようなこと、まもなく自衛隊は撤退しなくてはなくなるだろうというようなこと、ブッシュも最後にはイラクから撤退せざるを得ないというようなこと、そうなれば、「二一世紀型戦争」と言われた「アフガン・イラク戦争」の完全敗北による土崩瓦解と総撤退がやってくる、そうしたもろもろの事柄の由来というものが、世界史的に本当に明らかにされてゆく。これで、わたしたちの眼前で、来年か再来年に、アメリカ侵略・征服軍敗退以後の直接選択として、〈パックス・アメリカーナ秩序の大没落〉の世界史的大事業が顕在化し、それと同時に「変動相場制」という、覇権通貨ドルを基軸とした国際通貨体制が必ず解体してしまうことになりますから、それから先、世界守護神はどこへ行くのか。これは全くもって次回のお楽しみ(笑)です。そこで、また三巻分くらい(笑) また、短く(笑) 書かなければならない、と思っていますので、その時にはまた、わたしが息があつたら、みなさんにもう一度是非お会いしたいものだ、と思います(笑)。では、これにてお終まい、みなさん、さようなら。

全体討論

猪野 連続懇談(全4回)の最後の討論になりました。時間も差し迫っておりますので、数名の方々にまとめてご質問・ご所感・ご提言をいただき、そのそれぞれについて、なださん、金子さん、いいださんにお答えいただくということにしたいと思います。では、どうぞ。

来栖宗孝 来栖（くるす）と申します。実は、いいださんの本を3冊読むのに大変でございまして、全部で4回の研究会がございましたけれど、読まずに出てきて読まずに質問するというのは大変に失礼な話でございます。今日は最後でありますし、今回は目を通してきたということで発言をさせていただきます。ふたつのことを申し上げます。ひとつは簡単なことです。最後にいいださんがローマ帝国の興亡、つまり興隆してきたということより、むしろ、没落し滅亡してきた歴史的なものはなにか、というのが、一番大きなテーマであったと思います。ここで質問と反対意見です。その都市国家ローマが市民権を安売りをして滅んだ。その象徴として暴君ネロの自殺ということではありますが、どうも歴史的には合いません。例えば、典拠を明らかにするために、具体的にきちんと頁数を申し上げます。第3巻の2225頁、2251頁、2253頁、2266頁。それ以上にわたって、ローマ帝国の最盛期は、ギボンもいいださんもお書きになっていますが、例の5人の賢帝です。ネルウァ、トライヤヌス、ハドリアヌス、アントニウス・ピウス、マルクス・アウレリウス。この5人がローマの全盛期であったといわれます。ところがネロはその前に死んでいるんです。だからネロが死んだあとのローマ帝国は本来の市民国家を誇示していたかは別としても、少なくとも5賢帝の時代までは、領土の広さという点では、5賢帝時代が最高の発展段階であったということで、ネロによって、ローマ帝国の滅亡が指示されたということは無理ではないか。「ローマ帝国全巻の終わりである」というのは早すぎるではないか（2322頁）。これがひとつでございます。これは議論をしたいと思います。

それから、もうひとつ、なだ先生、金子先生、いいだ先生のお三方が、なんとまあ、ミケーナイ文明のギリシア文字の解読からはじまり8000年の歴史を2時間半くらいで論じ来たり論じ去っては、これはとても問題であるので、意見もだしようもないという感想を受けたのですが、ひとつだけ、申し上げます。結論から言いますと、わたくしは東洋の一人の日本人として、たえずやるせないという感じを抱いております。と、申しますのは、確かに3人の先生がおっしゃったように、歴史をよく調べれば調べるほど、西洋中心史観を訂正しなければならないのは明らかです。明らかではありますけれども、それなら、なんでいままで、すくなくとも、われわれが知っている二千数百年の歴史で、常に、文化・文明発祥の地とされているアジア、エジプト、バビロン、インド、中国、というような東の文化文明が滅んで、そして古典古代ギリシア・ローマ、さらには、キリスト教圏になりますが、西ヨーロッパ、これが世界史を支配してしまったのは、これはどうしてですか、ということです。ですから、昔はそうではなかったんだと。特にローマではガリア（今のフランス）、ゲルマーニア（今のドイツ）、ブリタニア（いまのイギリス）は、昔はほんとうは野蛮国であります。その野蛮国が2000年の後に世界を逆に制覇して、文明の端緒を開いた東洋がかくも無残にやられっぱなしになってきた、というやるせなさを、わたくしはずっと抱いています。これは、ヘーゲルが特に強調するのですが、これは、あそこに（黒

板を指す) 地図が掲げられてありますが、ギリシアの半島からエーゲ海の東にむかってぶつかると、小アジア、今のトルコです。ギリシアでは、アーシア、アジアといっている大陸が始まる、アーシアというのは、結局、神秘である。なぜか。要するに、エーゲ海の岸から東の中国大陸から日本にいたるまで、東洋においては本来、自由、平等、特に人格、人権などの観念がなかった。観念がなかったから、言葉がなかった。これはヘーゲルやマルクスらの偉大な人々が東洋人を侮辱する言葉なのですが、事実、そうなのであります。事実、そうであるとすると、どうも、いいださんの大著作を拝見して教えられるところがたくさんありますけれども、同時にわたくしども、明治以降も、我が家は、世が世ならば、七代にわたって徳川家の御家人であった。明治以降、没落してしがたいサラリーマンになった。どうも、何かあるたびに、世が世ならば、わが家は、桓武天皇いらい 14 世の末で平清盛であるとか、清和天皇何世来の源義家の子孫であるとか聞かされて、昔はアジアが進んでいた、豊かだったと自慢して、まことにごもつともだけれども、といて、わたくしどもが習ったのは実はドイツの学問だったのです。その意味で、歴史を書き換えなくてはならないことはわかるけれども、それから先はどうなるのだろうか。なだ先生の言葉を引用して終わります。つまり、マルクス中毒、これはだめなのです。しからば、マルクスの思考方法を日本の歴史、日本の現状を分析して、そして、われわれはどうすべきか、という、このことについては、実はどなたもよく書いてくださらない。ことマルクスについては、わたくしもそうでありますけれども、マルクスの方法をもって、日本の現実を分析し運動を起こして成功した例はあまりないんです。別に絶望しているわけではありませんけれども、こういうことです。知性のペシミズムと意思のオプテミズム。これはアントニオ・グラムシの言葉です。「魅せられた魂」を書いたロマン・ローランの言葉です。それにしても、「知性のペシミズムと意思のオプテミズム」、これまた、ロマン・ローランでもアントニオ・グラムシでもいいですが、外国人の引用なんです。自分で自分を怒っていて、やるせないと思っています。世が世なら桓武天皇 16 世の平清盛なるぞと言われても、それはそうなのだけれども、今はどうなんだろうという学生時代から思っております。以上です。

いいだ 本日の二つのご質問ですが、ご質問というより、ご意見ですけれども、来栖宗孝先生が先程おっしゃっているように、ギボンが、『ローマ帝国衰亡史』で、人類史の再構築と規定しておいて、当然、「永遠の都」ローマが思いがけず過ぎ去ってしまったあとの、ローマ皇帝の辿った歴史的運命との関連であるわけですし、それと「暴君ネロ」との関係の問題は、時間的な前後関係だけの話です。

二番目のご意見ですが、これはすこし、金子務さんや、なだいなださんを含めて、もっと議論したほうがよい、と思っておりますけれども、つまり、東は東、西は西にあって、或る意味では、ヘロドトスの『ヒストリアイ』いらい、オリエントのペルシア大帝国が思わざる敗

北を、眇々たるアテネ都市とポリス国家の死闘によって喫してしまって、地中海世界のヘゲモニーをポリス民主主義のギリシア国家が握り占めて古代世界史が大転換してしまったということから、念力を働かして行って、世界史を整理して、今日の西洋中心主義的な世界像の原点が出来てきたわけですし、それを覆すための力点としては、光は東から西へ行ったように歴史は書き添えられていくけれども、もしかしたら、また西から東に行くような時代にこれから成るかもしれない、とわたしとしては、大雑把に申し上げたいわけです。

いま、休憩のときに、なだいなださんと楽しいおしゃべりをしておりまして、その時の話を別にみなさんに押しつけるつもりはさらさらないのでありますが、そういう歴史の念力から新しい二〇世紀的現代の方から見ると、ローマ世界帝国の交流史というのは、古典古代ギリシア文明のポリス都市国家のもっていた小土地所有者の市民権の権利の専有を、ローマ世界帝国の拡大が征服した異国・異族のすべてに、ブリタニアからゲルマーニアも含めて「ローマ市民権」をどしどし拡大付与して「世界帝国化」していったところに、その原動力がある、とわたしとしては考えています。

それはそれとして、とにかく「永遠の都」と観念されていたローマ世界帝国も滅びましたよ、と。だが、それをモデリングされた念力の産物である現在の西洋中心主義史観というのは、ブッシュ大統領のイラク侵攻の今日の大失敗の事例にも端的に見られるように、近く、その終わりが来ますよ、ということにあいなる。それに対比してみますと、前近代の中国の王朝文明というのは、現在、もちろん、辛亥革命を経て、さらに毛沢東革命を経ておりますから、形態は王朝国家ではありませんけれども、殷とか秦の始皇帝とか隋の煬帝らしいのモデル遺産を、中央アジアにいたるまで継承した漢の武帝の建造した中国王朝文明というのは、明治維新以来の近代天皇制日本の日清戦争以来、日本の「脱亜入欧」の大久保利通政権が中国の李鴻章の「開化派」政権を打ち破って以来の、近・現代日本人の優位化以後「チャンコロ」主義的な「侮辱・差別」に変わり、そういうすこぶる歪曲された形となった次第です。しかし、中国王朝史は、一見きわめて停滞的にただ回転しているだけのように見えて、実はけっして一刻も淀み滞ることなく、実にダイナミックに歴史過程化して、未来に向けて展開していったと言えるだろうと思います。現在で言えば、滞っているのはむしろ、種々の社会的諸矛盾をすっかり治めてしまっているこの企業大国日本の方ではないですか？

わたしは、中国王朝文明よりももっと古いのは、実に三千年間にわたった古王国→中王国→新王国と辿られたエジプト王朝文明だ、と思っています。地中海文明のヘゲモニー闘争をめぐって、ペルシア文明がエジプト文明を亡ぼして併合し去ったことを、古代地中海世界の画期として、わたしは見定めているわけです。

古代エジプト文明については、実は、「ヒエログラム」と呼ばれる文字の解読が、もっと進捗して、遡ってもっと広く確定することが出来るならば、中国の甲骨文字よりももっ

と遡ったところにまで、人類史が発生した以前のところまで突き抜けるだろう、とわたしは秘かに思っています。もちろん、エジプト王朝国家がそのまま今にあるわけではありませんけれども、いわゆるナセル独立革命以来、今もって非常に脈々として生きているわけです。こうして、すべてが「現代史」として、同時代史の有機的一環へと大包摂されてゆくわけです。

それから、チグリス・ユーフラテス両河流域のメソポタミア文明ですが、これは要するに、イラン文明ですけれど、今日イランが核武装してアメリカに対峙しようとしている現状を見るならば、イランもまた衰亡するどころか、新しい復興のパワーを「ホメイニ革命」以来排出しつつあるのであって、最近、世界のドル・核帝国としてのアメリカとの激突過程に入ってきているわけのものなのでしょう。

それからもう一つ、七世紀いらいのイスラーム文明があります。今日の世界の諸文明のなかで、現代資本主義システムの後に、一番生き残りそうなのは、イスラーム文明であり、また、コンスタンチノーブルの「東ローマ帝国」のビザンティン文明を受け継いでいるギリシア正教、ロシア正教的な宗教文明のほうもまた、生き残る確率がある、とわたしは判断しています。

そう区分けすることができるのではないかとわたしは強く思っています。とりわけ、イスラーム復興運動のパワーが、ドル・核帝国の金融的・軍事的中枢を直撃した〈9.11事件〉以来、その現代世界史的兆候がはっきり現出しているでしょう。やはり大まかにいえば、西によって捻じ曲げられた人類史が歩まされてきた今日の世界舞台において、東の文明の舞い戻りと東西文明の抗争を含めた再融合過程の進展をベースとして、わたしもこの超マクラ本の全三巻を書いたわけです。

9.11事件以来のイスラーム復興文明のパワーに、今もキャッチ・アップしつつあるのは、ラテン・アメリカのチャベス革命以来のマルクス主義再生のパワーです。このイスラーム復興とマルクス主義再生との今日の出会いが、現代世界における東西文明の再会の最先端的領導力である、とわたしは考えています。

そこでひとつ、来栖宗孝さんがおっしゃったことに非常に啓発される点があるのは、にもかかわらず、わたし本来の問題意識に立ち返るのですけれども、近代の資本制で特性づけられる現代世界文明が、わたしたち、つまり、今日のグローバルな世界の人類に遺してくれたものとして、「基本的人権」「民主主義」という概念、あるいはまた「人類」「人間」「人間性」といった一連の価値概念があるだろう、と思います。これは概念、観ですから、念力なんです。やはり、「基本的人権」「民主主義」「人間性」というのは、二一世紀を通じて当然、将来の文明が受け継ぐべきだ、とわたしは思っております。このことは、西洋中心主義史観の根底的克服と十二分に両立しうるし、その歴史的進展が、人間社会の「基本的人権」「民主主義」「人間性」を本来的に具現化してゆくのです。そこで来栖宗孝さんが出された問題を、もうすこしわたしなりに反芻しておく、という東側の復権という

問題にもかかわらず、東側が必ずしもなじまない「個人の基本的人権」というものの、継承的發展というものとの結合関係を、わたしたちは、二一世紀に向けての構想力として求められていることは、間違いない、ということになります。それをどういう形にしていくか、ということは、わたしたちの二一世紀がどう生きていくか、という生き方の構想力のポイントだろう、とわたしは思います。

瀬川嘉之 瀬川と申します。今の続きのようなことでお聞きします。古典ギリシアには奴隷制と家父長制があるというのが前提だと思いますが、それでは東ではどうだったのか、今の「基本的人権」という概念や言葉は、いいださんがおっしゃったように無い。しかし、それでは奴隷制や家父長制であったのかという点については、どうなのでしょう

なだ 奴隷制はずうと、東洋にもありましたね。わたしは、いつもわたしの家系をさかのぼって考えるけれども、わたしのおばあさんたちは無学文盲で、そして、自由がなかった。ドレイと呼ばれないけれどもヨーロッパの農奴に近かった。こどもの12か13歳くらいで親の命令で結婚して、10人のこども産んで若死をして死んでいった。そういう生活をする農民でした。しかし、そのつぎ、3世代の間に、わたしの父親・母親の世代はその土地から離れることが出来たのです。新潟から出て東京に来た。こうして、なんていうか、生きる場所を、自分で主体的に選択することが出来るようになったのです。そして、わたしの時代になると、

わたしの家内はフランス人なのですが、わたしは外国に行くとき、「青い目の嫁さんは絶対につれてくるな」といわれたのですが、かみさんをフランスからつれてくることになって、親の意見を排して自分の意見を通すことができたわけです。こういう冗談でうまく切り抜けたのです。「わたしの家内の目をよく見てください。青い目ではないから、みどり色だから」と（笑）。それで相手は話の腰を折られて納得しましたけれど、しかし、そういう変化があるんです。わたしは歴史問題を考えるときに、すばらしい壮大な歴史、8000年前からさがってくる歴史という見方もあってよろしい。そういう歴史は聞いていて、勉強になって非常に楽しい。しかし、問題はなぜ日本に小泉のような人間が出てくるかです。それはなぜか。はっきりしていることは、現代史に対する知識の欠如です。ついこの前の戦争のことでも、わたしたちが覚えているようなことを、いっさい、覚えていない。そして発言をする。例えば、戦没者という言葉は、わたしたち個人の感覚としたら、戦争の被害にあって死んだという、そういう人間のことです。ところが小泉の戦没者というのは、国のために命をささげた人ということになってしまう。220万の靖国の御霊と称するものは、どこで死んだか。みんな外国で死んでいるんです。しかも、外地で死んだ人間以外を、つまり、内地で死んだ兵隊を、靖国に合祀させるな、と東條なんかははっきりいっていたわけです。そういうことをかれが知っていて靖国にまいったかどうか。つまりそうい

う現代からさかのぼる歴史観として、もつ必要があると思うのです。

これは世界のどこの歴史でもいい。現代からさかのぼって歴史を見る。実践的に、今の小学校・中学校からそういうかたちで教えられていくことが、とても重要なことだと思います。これはなにも現代の歴史教科書がどうのこうのというような問題は横においても、先生がどんな歴史教科書を使おうと、現代から教える気持ちになれば、いまからできることなのです。それから先はさかのぼって昔を知ろうとする情熱を教えることによって、今日の話のような壮大な物語も面白く聞ける日もくるのではないと思うのです。わたしは、今のイスラエルの問題、小泉の問題、イラクの問題などが頭の中を渦巻いていて、これを何とかしないで現代人といえるのか、というイライラした気持ちがあるので、その点を強調しておきたいと思います。昔からの歴史観と対抗するには、現代からさかのぼっていく。現代の 50 年がいい。戦争が終わってから 50 年、さらに、日本が戦争を起こすまでの 50 年、それから日本が国を開いて世界に目を向けてからの 50 年とさかのぼっていけばいいのではないかと思います。

金子 これね、郭沫若（かくまつじゃく）が、殷の時代の甲骨文字で「臣民」という文字について、奴隷の文字だといっている。「臣」という文字のコの字は目を表わしている。これは屈服したあとで、目をつぶされてつきさして奴隷にされているのです。「民」は、立って抵抗している人を表わす。でも、やはり目を突き刺されて奴隷にされる。ですから、臣民という言葉には血と汗と嘆息がにじんでいるのです。

それから、なぜ、東洋の巨大帝国が滅びて西欧にやられたのかという話ですが、これはもう簡単です。要するに、西欧では 17 世紀の科学革命があつて、18・19 世紀の産業革命とつづき、一番最初に走る走者は、それだけの利益を得るのです。だから、遅れてきたレイト・カマーは、日本でもそうあつたし、日本のすこし前を走っていたドイツもそうでしたが、帝国主義戦争では割を食った。科学革命、産業革命そして帝国主義で先陣を切ったのは西洋文明ですが、古代中国、古代インドなどに科学がなかったのかといえば、科学はあつたのです。だって、ルネサンスのころ、フランシス・ベーコンが、ルネサンスの 3 大革命だと威張ったのは、火薬であり、印刷であり、磁石でした。これは実は三つとも古代中国で漢の時代に発明されているわけです。

また、18 世紀後半のギボンによってローマ帝国がなぜ滅びたかの議論がありますが、しかし、ギボンよりも 50 年ほど前に、モンテスキューという人がいて、これも「ローマ人の盛衰原因論」を書いています。あのほうがもっとコンパクトにしかも要領よく書いています。あの時代、モンテスキューは、「ペルシア人の手紙」という書簡文学を書いています。あの時代、つまり 17 世紀末から 18 世紀前半にかけて、アジアのほうがはるかに文明が上なんです。文明的な国家というのは、オスマン帝国を模範とするトルコとペルシアなのです。それで、西洋のほうが野蛮なのです。だから、ペルシア人たちに見習え、というよう

なことが「ペルシア人の手紙」の趣旨なんです。かれらから学ぼうということなのです。

ですから、産業革命によって初めて東西の地位が逆転したのです。だけど、文明というものが科学技術だけで律されるはずはありませんから、もっとトータルに見ていけば、どっちが勝った、どっちが負けた、とは簡単には言えないと思います。

いいだ 瀬川さんからいま非常に大事な問題を出されましたので、わたしもあと1分だけ(笑)、このことについて、わたしなりにお答えします。わたしとして先ほど言い足りないところがあったので、きっと瀬川さんに、うまく全体のことが伝わっていなかった点が残ったのではないかと、思います。瀬川さんがおっしゃった、古典古代ギリシア文明以来の西側の文明は、奴隷制であり、父権制であるということは、歴史上の事実なんで、わたしはあいかわらずそう思っているのです。

それで、瀬川さんのおっしゃりたいことの中には、東のほうはどうだったのか、ということですけども、東のほうは、今日は詳しくは述べられませんでした。経済的社会構成体としては、当然、「貢納制」でありまして、地中海世界の古い形は、女神が軸になっているので、言葉の真の意味で、バッハフォーヘンが首唱したような「母権制的・地方分権的な社会」の型だったので、そこでなんらかの世界史的な復権ということが今日も求められている。その場合には、古代ギリシア文明以来の「西ヨーロッパ文明」というのは、普遍的規範にはならない、ということ自体は、疑いないということだろうと思います。

わたしは、そういう問題の裡には、じゃあ、古オリエントの「貢納制」はどうなったのか、ということが、世界史のかんどころなのでありまして、やはり、これまで学校や出版物で教え込まれてきていることとほぼ正反対なことなのですけれど、奴隷制、農奴制、封建制とかの文明の在り方というのは、人類史の大道ではない、というのがわたしの意見なのです。これは、東洋の問題とはまた自ら質のちがう問題系列に属していて、東洋では、基本的には貢納制の国家であって、西洋的な意味では、異質なものであろう、と思います。だから、そここのところの違いを、初歩的にでも突き留めなければならない。

現在、世界的に普遍的になっている「グローバリズム」の世界的進出というのは、まさに西側の奴隷制的で農奴制的なそういう古い階級文明の実情をいまだに色濃くもっていることは、はっきりさせることが必要だろうと、そうわたしは強く感じます。

猪野 いいださん、なださん、金子さん、どうもありがとうございました。非常に中味の濃い発言・講演であったと思います。あらためて感謝を申し上げます。すくなくとも、私にとりましては、この全三巻の読み込みと勉強には、この連続講演だけでは終わることはできません。リアルに現前する現代史と格闘しつつ、今後も歴史研究に当たらなければならないと再認識しました。これで毎月1回、全4回の連続懇談を終了しますが、この間、主役のいいださんには、わたくしの勝手に無謀な要請に完璧に応えていただきました。あらためて感謝と御礼を申し上げます。いずれこの連続懇談の記録は何らかの形で刊行する予

定です。また、最後になり恐縮ですが、この連続懇談に参加されたすべての方々に御礼を申し上げます。(終)

編集後記

「湘南科学史懇話会」が発足したのは1998年5月8日（第1回）です。それ以来、連続4回のシンポを開催したのも、今号のような大部な『通信』を刊行するのも始めてのことです。それだけに編集作業は難航をきわめました。何よりも、連続懇談の記録をテープから再現する作業に、まるまる1年という大変な時間と神経を要しました。その原因は主にわたしの個人的な編集作業の不手際によるものですが、これまでに経験したことの無い心労もありました。表面にはでない編集者の仕事の「困難さ」と「厳しさ」を身をもって体験するはめになりました。備忘録として記しておきたいと思います。

連続懇談の開催中および編集・校正作業中、主役で講演者の、いいだ・ももさんから格別なるご激励・ご支援をいただきました。言うまでもないことですが、いいださんのさまざまなご支援・ご助言がなければ何も出来ませんでした。パネラーをお引き受けいただいた、片桐薫さん、針生一郎さん、近藤節也さん、三木亘さん、なだ・いなださん、金子務さんには大変な労をおかけしました。

また、困難をきわめた編集作業中、何よりも個人的に親身にご相談にのってくださったのは藪玲子さんと徳宮峻さんでした。お二人のご支援・ご助言がなければこの「通信」はほんとうに刊行できませんでした。上記の方々に、心から感謝と御礼を申し上げます。

なにはともあれ、ことあるごとに、本「通信」刊行を公言してきたものとして、先生方と呼ぶべき大先輩の講師とパネラーの方々、および、連続懇談に参加されたすべての方々に、ささやかな責任を果せるのではないかと願っております。（猪野修治）

湘南科学史懇話会通信第14号

2007年8月31日発行

発行所—湘南科学史懇話会（事務局：猪野修治）

〒242-0023 神奈川県大和市渋谷3-4-1

TEL/FAX 046-269-8210

e-mail ; shujiino@js6.so-net.ne.jp

<http://008.upp.so-net.ne.jp/shonan/home.htm>

制作—有限会社閏月社

〒113-0033 東京都文京区本郷3-28-9-201

TEL 03-3816-2273 / FAX 03-3816-2274

e-mail ; query@jungetsusha.com